

とある少女の救済神話 【完結】

カリーシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは、ある少女の始まりの物語。

憎悪と狂気に溺れた少女が、這い上がり、

後に奇跡を起こす、

その、第一歩となった物語。

裏ルート↓基本キュウベえ視点。 一応こつちが本編。

表ルート↓基本ほむら視点。

むかしむかし、あるところに、ひとりのこころやさしいおんなのこがいました。

おんなのこは、いじわるでわるいかみさまのせいで、すきなひとを、たいせつなものを、こわしてしまいました。

かなしんだそのおんなのこは、ひーろーさんたちに、たすけてと、さげびました。ひーろーさんたちは、わるいかみさまを、こらしめようとしました。

そこでわるいかみさまは、そのおんなのこをつかつて、ひーろーさんたちをみなごろしにしてみました。

そのおんなのこは、――

——
今も、幾千万のセカイを彷徨い続ける

目次

裏ルート：一章 最弱の魔法少女

| | |
|-----------|-----|
| 裏ルート：第1話 | 1 |
| 裏ルート：第2話 | 18 |
| 裏ルート：第3話 | 27 |
| 裏ルート：第4話 | 46 |
| 裏ルート：第5話 | 70 |
| 裏ルート：第6話 | 86 |
| 裏ルート：第7話 | 111 |
| 裏ルート：第8話 | 126 |
| 裏ルート：第9話 | 148 |
| 裏ルート：第10話 | 169 |
| 裏ルート：第11話 | 188 |

表ルート：一章 最強の魔法少女

| | |
|----------------|-----|
| 表ルート：第1話 | 205 |
| 表ルート：第2話 | 222 |
| 表ルート：第3話 | 243 |
| 表ルート：第4話 | 259 |
| 表ルート：第5話 | 274 |
| 裏ルート：二章 穢された正義 | |
| 裏ルート：第12話 | 315 |
| 裏ルート：第13話 | 324 |
| 裏ルート：第14話 | 343 |
| 裏ルート：第15話 | 355 |
| 裏ルート：第16話 | 373 |
| 裏ルート：第17話 | 387 |

表ルート：二章 歪んだ悪

表ルート：第6話

表ルート：第7話

表ルート：第8話

表ルート：第9話

表ルート：第10話

『夢見るままに待ちいたり』

共通ルート：第1話

共通ルート：第2話

共通ルート：第3話

共通ルート：第4話

共通ルート：第5話

共通ルート：第6話

411

445

466

482

498

528

559

575

593

606

623

共通ルート：第7話

共通ルート：第8話

共通ルート：第9話

” Story to the ” Hero

”

ルート：第1話

ルート：第2話

ルート：第3話

『とある少女の救済神話』

636

650

670

688

702

730

754

裏ルート：一章 最弱の魔法少女

裏ルート：第1話

—見滝原市

sideキユウベえ

「……確かに、それだけの『因果』がある存在なら、一度で十分なエネルギーが確保出来るね」

とあるビルの屋上—

他の個体からの『連絡』—異常に高い魔法少女の素質を持った少女を発見した、と言う内容が共有される。

不幸な事にその少女を確認した個体は殺されたようで、距離の関係で、バママからグリーフシードを回収する役割を担っていたボクが次の観測手として指定された。

「この町は『ワルプルギスの夜』の進行ルート上にある。その少女に対する情報が少ないのは問題だけれど、一般的な第二次性徴期の少女の感性なら簡単に誘導出来る……」
『連絡』している最中だというのに、それを途絶えさせる程の異常な光景が目に入る。

——星が、落ちてきていた。

——『上位存在』の計算では、この惑星に墮星が起きるのは数百年後の筈——

計算違い？ あり得ない。

急な軌道変化？ 可能性は少ない。

「……ま、関係無いか。この惑星が減んだとしても、精神疾患^{感情を}を患った種族は他にも存在する」

わざわざこの惑星を守ることで消費するエネルギーを考慮すれば、行動を起こす事は無駄にしかならない。

先ほど確認された『鹿目まどか』を利用するにしても、計測可能な限りでの落下速度を考慮すれば、時間が足りない。

ならばボクらがすべき事は、あの星の観測でしかない。

——観測すればする程、異常な隕石だった。

「……直径、質量、共に非常に小さい。だと言うのに、大気圏で燃え尽きない……？」
既存の科学的視点から、『未確認物質』の可能性が発生する。
他の個体との視覚共通を利用して、『上位存在』にデータを転送——

「いや速過ぎないかい?!」

さつきまでは夜空の点だったのに対して、今ではハッキリとした落下地点を計算が可能な程接近している。

ちなみに計算結果は——

見滝原市
「ここ」。しかも、丁度このビル。

発生する被害は、速度が光速を超えている時点で計算不可能。

こうしている間にも、さらに近づいて………? ?

「…………卵？」

肉眼での視認が可能な程接近した事で、明確な形状を観察することが出来る。
その形状は正しく、楕円形の、卵のような形だった。

—ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!!

「キュっつっ?!?!」

その『卵』が、ボクがいるビルの屋上に着弾した。

爆発音や衝撃波が周りにある物を薙ぎ払い、鉄筋コンクリートに深いヒビを刻む。

—が、それだけだ。想定していたような大破壊は起きない。

「……………一体、何がどうなっているんだい？ 訳が分からないよ」

コロンブスの卵のように、少し斜めっこしているが直立する物体に近づくと、どう

いった原理なのか、空気熱から計算すれば、その物体の表面温度は非常に低かった。

——この時、もし、『ソレ』に近づかなければ——
良くも悪くも、未来は大きく変わっていただろう。

何故なら、『ソレ』の中身は、

ボク達ですら知ることが出来なかった、外宇宙からの異物だったのだから――

――ピ、シ

「……キユ？」

物体の表面に、一筋のヒビが入る。

それにつき、滑らかだった表面が、部分的に、線状に凹み――

ピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシ

—まるで、翼で包んだような形に変わり—

—ズ、ズズズ—

ゆつくりと、『殻』がズレる。

『殻』は、正しく『翼』で、内包されていた『ソレ』が、確認出来る様になる。

深い緑色の髪。

病的なまでに白い肌。

黒いワンピース。

第二次性徴期前の小学生の様な華奢な体型。

——一条の光すら無いほど、濁った瞳だった。

あの『目』は、見たことがある。

魔法少女が魔女に変わる寸前。

ソウルジェムが、グリーンフィードへと切り替わる直前の——それを更に酷くしたものの。

更に、ボクらに付随された能力が、ハッキリとした結果を出す。

——魔法少女としての高い適性。それも、『鹿目まどか』すら超えるほどの。

優先順位が切り替わる。

目の前の『コレ』を魔法少女にして、これ程までの『絶望』のエネルギーを回収出来れば、それだけでノルマを軽々と上回る程のエネルギーを入手出来る。

そうと決まれば、先ずは相手を探らないと。

「……君は、一体——？」

「…………… a a ?」

濁った瞳が、ボクを見据える。

何故か、それだけで、

「……………キユウベえ？」

「?!?!」

瞳に、光が射した。

深海の様な色の瞳はそのままに、歳相応の『目』でボクを見つめ返してくる。

「……………て事は、ここはまどマギントコか。つかビルヤバ。どーなっとるんコレ？」

どーなっとるん？ はボクの台詞だ。

翼を何度かはためかせ、細かな砂利を払う様な仕草をしたあと、ビルの縁まで歩いて行く。

——ボクが『キユウベえ』だと知っている以上、恐らく魔法少女のシステムを知って

いるだろう。問題はどこまでかということだk

「おいその詐欺師の鑑」

「全部知ってるって台詞だよ、それ」

「？ ま、いいや。ここどこだい？」

……明確に狙って落ちて来た訳じゃなさそうだね。

「……ここは地球、日本の見滝原市。 と言ってもキミに意味が理解出来r」

……あれ？」

一瞬目を離したら、消えていた。

慌てて少女の立っていた縁から下を覗くと――

――ガシツ

……がしつ？

「はい確保――」

「……え？ 飛ん、ええええ?!」

翼を羽ばたかせて飛んでいた。

その形状骨の塊でどうやって揚力を得ているんだい!?

「気合と根性とその他諸々」

「アバウト過ぎる!?!」

「—ところでキュウベえや?」

ボクを両手でしっかりとホルドしたまま、更にも上昇する。

少女の態度と行動に、感情が存在しないハズのボクの中に、漠然とした嫌不なモノが広がる。

「—絶叫系、特にフリーフォールって好きかい?」

「……………はい?」

言うのが早い、ゴウツツ!! と凄まじい音を立てながら急降下……………っ!?!?

「シ〇キ・ウ〇ウンドウの目がああああああああああ!!」

「それ絶対駄目なヤツううううう!?! ていうかそれ言いたかっただけだよね!?!」

しかもこれの何処自由落がフリーフォール?! 思いつきり地表に向けて飛ばたいてるよね

!?!?

「ボケーっとしてると舌噛むぞー」

「はいっつイダア!?!?」

今度は急上昇。まるで向きだけ180度変えた様に急に切り替わった所為で、思いつきり舌を噛んでしまう。

「か・ら・の〜——」

急降下あつ!!!」

「ぎゅっぶいいいいいいいい!!!」

今度は螺旋状に回りながらの急降下あ——

もう辞めてえ………!

「フハハハハハ！ あなたが吐くまでっ！ タ〇テラごっこを辞めない！

逝くぞ、急・上・昇!!」

「きゅっぶいいいいいいいいいいいいいい………——

「はー、楽しかった!」

」

……ボクが解放されたのは、あれから10分後の事だった。

人間で言う半規管と前庭に相当する部分を思いつき揺さぶられ、けれど取り込んだ物体と言えればグリーンフシードくらいしか無く、それが原因で戻すことも出来ず、失神してようやく止まったらしい。

けれど、未だその犯人はボクの腹部の下にいる。

……正確に言えば、ボクが彼女の頭上に乗せられている、だけど。

「……ね、ねえ、キミ。一体何の為にあんな事を――」

「へ? さつきキュウベえ答え言つてたじゃん」

「ホントにさつきの台詞を言いたいが為にボクは巻き込まれたのかい!」

「いや、絶叫系なんだから悲鳴を上げてくれるいけ、じゃ無くて客がいないと」

「今完全に生贄って言いかけたよね?」

「気にするな！」

「気にするよおおお!!」

アハハハハハ、と歳相応の笑い声を上げて、深夜の街を歩く。

こんな外見の少女がこんな時間帯に歩けば、当然下心のある人間が近づいてくるのは当然――

「ねえk

『ドゴオツツ!!』

——つつつ!!
???!」

………当然なんだけど、こっちの方が異常者だったね。

「話しかけられた瞬間に股間に向かって蹴り上げは酷いと思うよ?」

「一撃で昇天させたんだから、まだ慈悲深い方じゃん」

「まあ、確かに一撃で気絶してはいたけど——」

「感触的に多分片方潰れたケド」

「鬼!?! 悪魔!?! 鬼畜過ぎる!?!」

「いやさ、こんなか弱い幼女をこんな大人数で囲う方が鬼畜だと思うケド?」

「キュ?」

言われてやっと気がつくれた。

近くの物陰から、さつきこの少女に瞬殺されたヒトと似た様な人種が、十人単位で屯ろしていた。

……全員、青い顔をして股間部を抑えていたのは、言うまでもないだろう。

「さて、さあて」

ボキバキと指の関節を鳴らしながら、そんな一団に近づく少女。

何をする気だい？ 想像は簡単だけれど。

「妖怪『首置いてけ』改め『タマ置いてけ』が猛威を振るうだけジャント」

「……慈悲は？」

「ナイ」

うん知ってた。

裏ルート：第2話

side キュウベえ

少女の『タマ置^カいて^ツけ^ア』がひと段落ついた所で、ボクらはネカフエに転がり込んだ。
ちなみに代金は、少女が狩ってきたタマ^財からである。

「……ところでさーキューベー。アンタ、私と一緒にグータラしてていいワケ？」
「おかしいな、ボクはキミに無理矢理連れまわされた記憶があるよ？」

「タワ〇ラごっこの後は捕まえてた覚えが無いよ？」

ジュースをストローでちうーと飲みながら器用に喋る少女。

「いやさ、キュウベえって、脅迫同然の迫り方で女の子を魔法少女にする契約を結ばせて
いとも容易く行われるえげつない奇跡の代償で絶望させて感情エネルギーを貪るのが
お仕事っしょ？」

「そっだよ」

「ワオ即答」

実際、『騙した』だとか『裏切った』とか言われるけれど、キミたちの確認不足が招い

た事態だよな？　ボクらは聞かれた事には正直に答えているというのに。

「……いやいや、故意の不告知でキュウベえの方が罪に問われるからな？　クーリング
オフ期間作れよ」

「それだとエネルギー回収効率落ちるんだよ。

そうだ、ねえキミ。　キミには叶えたい夢とか、無いのかい？

あるのなら――

ボクとk「いーよー」

最後まで言わせてえええ!?

………へ?」

あっさり肯定の返事が返ってくる。

「………本当にいいのかい？　そこまで魔法少女について知っていて、それでも契約を
結んでくれるなんて、初めてのケースなのだけれど？

それほど、キミはその『願い』を叶えたいのかい？」

「あー………その願いの件なんだけどさ。

………キープって出来る？」

『『キープ』………?』

「先送りってこと。

実は記憶の——エピソード記憶ってヤツ？　が一部吹っ飛んでるっぽくてね」
言いながら、指先で頭をトントンと叩く少女。

「その吹っ飛んだ範囲で、何か、強烈に、『忘れちゃいけないハズのナニカ』がある筈なんだよ。」

アンタの『奇跡』は、その『ナニカ』を思い出した時の為に取っておきたいんだ」

「……………まあ、そういうことならいいよ」

「言ったな？　言質とったからな？　奇跡は契約の時限定とか後から言うなよ？」

「言わない。ボクは正直だからね」

「正直モンは自分でンなこと言わないよ」

言ってる間に『契約』を完了させる。

彼女の魂を『ソウルジェム』と呼ばれる宝石状の物に置き換え、将来的に魔女になる少女——

『魔法少女』へと変えていく。

「——はい。契約は完了したよ」

「……………あり？　煌びやかな変身シーンとかは？」

「魔法少女の個体的特徴は叶えた奇跡に影響される。だから、キミの場合は『魔法少女のタマゴ』という状態に近いね。魔法そのものは使えても、あらゆる面で通常の魔法少女に劣るし、固有能力も存在しない」

「それが『先送り』の代償ってか？

ま、いいか」

そして、ボクに向かって手を伸ばして――

「言い忘れてたけど、私は『クト』。これから宜しく頼むよ」

「こちらこそ。キミからグリーンフィードを回収する係に決定された訳だしね」

その手に、前足を乗せる。

……………後から考えてみれば、この『契約』は、ボクにとっての悪魔――いや、『邪神の

契約』になった訳だけれど……………

このタイミングで気づけという方が無理だろう。

「ところでさーキューベー」

「なんdきゅっぷいいいい!？」

ゴスツ!!

いきなり頭部に手刀が炸裂する。

「何するのさ!？」

「……………なんとなく? アハハハハハハ!」

……結局その後、スイッチが切れた様にミノムシ状態で爆睡したクトに付き合つて、ネカフェの個室で一夜を明かした。

その朝。

「——ふあくあ。オハヨーキュウベえ」

「ハイハイおはよう。女の子がそんなだらしな顔したら駄目だよ？」

「うるへーアンタは私の妹か？ マジでカワイイからな!？」

「その妹さんと契y」

「殺す」

まさかのガチトーン!？」

ネカフエを後にして、公園の水飲み場で濡らしたハンカチで顔を拭う少女に、ふと気になった事を問う。

「……そう言えばキミ、昨日宇宙から落ちて来てたよね？　なのに順応早過ぎないかい？」

「え？　宇宙？」

「……あ、そういう事か。色々あつたつて事で」

意味の分からない事を呟きつつ、ボクを肩に乗せたまま昨晩の様に街を歩くクト。

スタイル的には、某電気ネズミを連れたトレーナーに近い。

「んー……なーなーキュウベえ？　そっちの情報網で良い具合の場所ってある？」

「良い具合の場所……？」

「流石に毎日ネカフエ泊まりは確実に補導されるしさ。早い話アジトが欲しい」

「ふむ……」

良い具合の場所、か……

「……隣町の廃教会はどうだ」

「無理心中からのバーニング^{炎上}やらかしたヤバイリストトップクラスの事故物件なら無し

の方向で」

ワガママだなあ」

「んな所に住むとか幾ら残機とS A N値があっても足りんわ」

「ざんき？　ざんち？」

「気にするな！」

結局、魔女を探すついでにいい感じの所があれば、そこを拠点にする、ということ
で落ち着いた。

……………のだけれど。

「…魔女、居なくね？　キュウベエの言ってたソウルジェムの反応リーダー以外にも、私の方でも気配探つ
てるけど一体もヒットしないとかあり得るの？」

拠点には廃アパートの一室を選び（無断）、クトがまた『タマ置いてけ』で小遣いを荒
稼ぎして、細々とした雑貨を買い込んで——と、大分動き回っているのに、一度も魔女

と遭遇しない。

「……元々、この辺り一帯はマミの縄張りだからね。オマケに最近この街にやって来た正体不明の魔法少女もいるし。粗方狩り尽くされているのかもしれない」

「oh、マジすか」

その場で綺麗なorzポーズを決めるクト。

「……しようがない。明日また出直すか。部屋の掃除とかしたいし」

「それもそうだね。ソウルジェムの穢れは、普通に生活する分にはあまり溜まらないし」

「それな」

他愛も無い会話が続けながら、ボクらは帰路に着くのだった。

裏ルート：第3話

sideキユベえ

「では、今日は部屋の内装を決めたいと思う」

「如何したんだい藪から棒に」

部屋に放置されていたポロテーブルに両肘^ゲを突き組^ンんだ手^ドで口元^ウを隠^ホした格好^スのクトが、そう切り出してきた。

「そうだ、デパートに行こう」

「頼むからマトモな言語を喋^ツってもらえないかな」

「大丈夫だ、問題無い」

「もう嫌だこのヒトおおお!!!」

同行を拒否したら強制連行された。 解せぬ。

少女(?) 移動中

—ミタキハラデパート

「さて、さて。」

「……ぶっちゃけノープランで来たんだけど、なんか欲しいモンある？」

「濁りきったキミのソウルジエム、或いはグリーンフィード」

「ドストレートだなオイ」

相変わらずの電気ネズミスタイルでデパートを散策する。

ボクらは普通の人には見えないから、独り言を呟いている様に見えるクトに怪訝な眼が向けられる事はあれど、実際なら衛生上の理由で確実に呼び止められるだろう生鮮食品コーナーにも平気で入れる。

……最も、スーパーで買ったのは全て冷凍食品だったけど。

「……ねえクト、ここには家具を買いに来たんだよね？」

「やるよ」

「なんにも分かってないいいいい!!?!?」

トイレ砂だけでなく、何故かマタタビの袋まで手に取ってレジに向かい始める少女。

これはマズイ、何とかしてクトを止めないと、数時間後にはマタタビまみれになる未来しか——

「……………キユウベえ、行くよ」

「ま、待ってくれ、マタタビは——」

「え？」

…………クトが袋を元の棚に戻した後、早歩きで店を出る。

「ちよ、ちよ、ちよっと!?!」

「一体何が——」

話しかけて、顔を見て、

後悔した。

——何故ならそこにいたのは、夢と希望を振りまく少女などでは無く、

歪みきつた嘲笑の表情の、

「——ミイイイイツウーケタアアアア♪」

——悪魔クトだったのだから。

—つつドウンつつつ!!!

「キュつつ?!?!?」

少女の皮を被った『ナニカ』が、地面を踏みつける。

それだけの動作で、周りの景色が線に見える程のスピードに到達する。

「み、みつ、見つけたって、何を!?!」

逆風が口腔を蹂躪して非常に喋りにくいというのに、平然と答えが返ってくる。

「何をもって、魔女以外あのかねえ！ オマケにすぐ近くに人の気配まである！ 数は

4!」

「!? ど、どうやって—」

見ていた限り、デパートに到着してから、クトは一度たりともソウルジエムを見ていない。

なのに一体、どうやって、それも周りにいる人数まで把握したんだ!?!

咄嗟に、付近にいる同族と同調する。

——見つけた。 って、

「クト、人間の方は大丈夫！ こっちで魔女を確認したら、他の魔法少女と会敵する直前だよ！」

「その魔法少女はバママミか?!」

「なんでそれを気にするんだい?! ちなみに答えはイエス——きゅぶいいいいいい!?!」

ボクの返事を聞くと同時に、さらに加速……?!

あれでまだトップスピードじゃ無かったのかい!?

『立ち入り禁止』の張り紙がされたドアをスピードを落とさないよう跳び膝蹴りで破壊して侵入、そのまま薄暗い空間を数瞬の間突き進み、突然急上昇して天井付近の鉄骨に着地する。

「お、おえええ……」

「おいおい大丈夫けー?」

急発進、急加速、急上昇、急停止という、平衡感に全く優しく無い4点セットを受けて気持ち悪くなったボクを労わるクト——

…………キミは平気そうだね。　考えてみれば、自分の出せるスピードに自分が重大な影響を受ける筈が無いか。

吐き気が少し楽になった所で聞く。

「…………どうして、魔女の結界にとび込まなかったんだい？　入り口が分からないわけでは無いだろう？」

「ん？　あー、えつと……………」

キュウベえ、あんさん逃げといた方がいいかも」

「？」

これまでの彼女じゃ考えられないほど、肩に乗ったボクをゆっくりと降ろす、と—

バツつっつっ!!

冷食の袋を一つ、音速すら超える速度であらぬ方向に投げ飛ばす。

当然ビニールパッケージは剥がれ、こぼれ出た食品が散弾のように鉄骨を打ち据える。

「……………」

「クト？　一体何を—」

—チャキツ

僅かな金属音が、背後で鳴る。

「動かないで」

「……………銃口突きつけられちゃ、動きたくても動けんがな」

ノロノロと両手を挙げたクトの両足の隙間から見ると、1人の少女が拳銃を押し付けていた。

—キミは、確か、

「曉美ほむら？ こんな所で何をしているんだい？」

「—ああ、あなたもいたわね」

空いていた片手に銃器が現れ、ボクに狙いをつけ—

「ナイスじゃんキュウベえ！」

「!? くっ」

集中が逸れた瞬間、クトが足払いでほむらの体勢を崩す。

無理矢理向けられた2つの銃口に対し、首を絞める様に正面から腕を伸ばすも、バツクステップで回避される。

「チツ、引っ込んでなさい、この素人——っ?!」

「ハッ！ どつちがトーションロジャン!!」

再度銃口が向けられるも、銃弾が発射されることは無い。

「—な、何で、」

魔女狩り

対人戦

「PVCばかりかしていてPVPは能力頼みのゴリ押しってか?! ンなんじゃ勝てるモンも勝てないわなあ!!」

一瞬で距離を詰め、左手を素早く振り抜いて拳銃を弾き飛ばすと、そのまま右手で首を掴み、拘束する。

この間、約5秒。

「!! グッ—」

「おおっと危ない」

悪あがきの蹴りが放たれるも、少し姿勢を変える—具体的に言えば、ほむらの首から下が、足場の鉄骨よりも下にくる様、首を掴んだまま座り込んだ。

「あんま抵抗しない方がいいぞ。この高さからただ落ちただけなら兎も角、無理に逃げようとすれば叩き落とす。」

ま、その前に、このまま握力全開にすりやそれで片がつくな」

「……なにが、目的よ」

首を、特に気管を掴まれている影響からか、苦しそうに問う。

「なーに。ただ質問に答えてくれりやいいのさ。別に嘘ついても構わんから何かしら反応プリーズ」

「……さつさと、聞けば」

「おおうツンツンしてますなー。」

んじや質問。

「今、何回目？」

「——つつつ?!?!?! 一体、何のこと」

「あ、おkおk察した。じゃ、色々事情がメンドいモン同士、お茶でもいかが？」

「向こうも手遅れっばいし」

クトがチラリと見た先では——

結界の内側の対象を撃破した金髪の魔法少女が連れた生物が、2人の少女に、こう言った所だった。

「あのね、僕と契約して——」

魔法少女になってほしいんだ！」

「……………チツ」

引つ張り上げられたほむらが、小さく舌打ちをする。

「客観的に見て、ドーよキユウベえ？」

「……………あれで即決する子もいるんだよねえ」

「ま、良くも悪くも中二つつーこったな。」

で、デートの誘いの返事は？ 暁美ほむらちちゃん？」

「……………分かったわよ」

く少女移動中く

場所は変わって、同デパートのファストフードコーナー。

ほむらがよくあるセツトを注文したのに対して、クトはフライドポテトばかり大量に注文して一気飲みしていた。

「ポテトはのどごしっ!!」

「普通に食べなさい、意地汚いわよ」

「ふえひふ^出ふ^ぬ!!」

「……………はあ」

お互い自己紹介すらしていないのに、もう溜息が出ていた。

「……………それで。貴女一体何者よ? 私がこれまでやり直してきた時間軸に、貴女は影も形も無かったわ。だと言うのに、貴女は私を知っている」

「神です」

「馬鹿にしているのかしら?」

クトのボケにノータイムで切り返すほむら。

「ボクとしても、真面目に答えて欲しいな。キミは余りにも異質過ぎる」

「異質?」

首を傾げるほむらに、彼女の異常性を伝える。

宇宙から物理法則を無視して落下してきたこと。

失った記憶にあるらしい絶望を祓うために、奇跡を『先送り』にした、最弱の魔法少女であること。

完全に人間の域を超えた身体能力に、出処が不明の情報を持っていること。

「……さっぱり分からない、ということが分かったわ」

「それで、キミは一体何者なんだい？」

じつと、ポテト飲料化計画を進行させるクトを見つめる。

「……………私が何者か、ねえ。」

——ンなもん、私の方が知りたい」

「はっ？」

予想外の答えに、目が点になる。

「いや、答えだけなら幾らでも用意出来るさ。」

人間、神、出来損ないの魔法少女、宇宙人、タマ置いてけ、旧支配者—

ま、敢えて自己評価するなら、

1 泊空けて、紡ぎ出された答えは、

「私は『クト』だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「……………結局、答えになってないじゃない」

「なら話を超シンプルにしようか、『時間遡行者』」

ほむらの身体が一瞬震える。

時間遡行者……………成る程、彼女の情報元は過去の時間軸なのか。

「……………貴女、何処まで、」

「メンドいから答えん。先ずは目的をスッキリさせよおか。

あんたは『鹿目まどかを助きたい』。

私は『記憶を取り戻したい』。

ここまではおk？ おkなら思考パートに入るけど」

「……………続けて」

「現状、やり方が分かってんのは『鹿目まどかを助ける』方法だ。連中につきまとうイ

ンキュベーターと魔女を皆殺しにすりゃいいんだからよ」

「ボクの目の前でそれを言うかい？」

「アンタは殺さねえよ。どうせグリーンフィード回収の為の個体は残しておかないとだ

からな」

「そのやり方には問題があるわ。インキュベーターは無限に湧くし、魔女だって『ワルプルギスの夜』がいる」

一瞬、クトが考え込むような仕草をする。

「……………ほむら。命大事にで、バマミと佐倉杏子、場合によつては美樹さやかも込みで、悪プリンのヨーグルト相手にどれ位保つ？」

「悪プリンのヨーグルトじゃなくて『ワルプルギスの夜』よ。」

……………そうね、ひたすら防御と回避に徹すれば——1時間弱は保つわね」

「上々。それだけありや充分だ。」

……………あと、ダメ元で聞いておく。ソウルジェムの方は？」

「……………これまでの経験から言つて、最後まで保つた事は一度も無いわ」

「…………………………、か」ボソッ

「? 何か言つたかい？」

き……………だの……………り——

ダメだ、聴き取れなかった。

「なんでも無い。じゃあ次に考えるのは、味方の脱落防止だな。魔女の出現ポイン

トつて抑えてんの？」

「……………いいえ。絞り込む事は出来ても、具体的な場所までは」

「じゃあ『お菓子の魔女』を先制で潰すのは無理か……………」

まあそつちは、まどかに交代で張り付くなりなんなりするとして、問題は美樹さやかと佐倉杏子だな」

「……………佐倉杏子はバمامィが死なないと、この町を訪れる意味が無くなる。美樹さやかは、」

「何処ぞのヘタレ相手に奇跡を——

……………あ、ええこと考えた」

ニヤアと、クトが歪んだ笑みを浮かべる。

「……………嫌な予感がするのだけけど?」

「嫌な事思いついたからね。フフフ……………」

——『鳴かぬなら 殺してしまえ ホトトギス』

「……………?!?! ま、まさか貴女——」

ほむらの顔が驚愕に染まるが、クトは、止まらない。

「佐倉杏子はバمامィが死なないと表れない。

美樹さやかはヘタレの怪我を治す為に奇跡を使う。

だつたらよお——

——2人ともブツ殺しちまえばよくね？

「マミとそのヘタレ」

裏ルート：第4話

sideキユウベえ

—ジャキイツ!!

マグナム弾を発射可能なリボルバーの銃口が、クトの額を狙う。

「オイオイ、魔法少女を一撃で仕留めるなら、ソウルジエムを狙わなアカンよ」

「……………貴女、今自分が何を言ったか、分かっているの?!」

「モチのロンで」

「ツツ!!」

ほむらの表情も変わる。

驚愕から、失望に。

「……………ソウルジエムを出しなさい。貴女は、危険過ぎる」

「実力的にも性格的にも、大人しく従うと思うか？ ぶっちゃけ今現在ほむらの生殺与

奪権は私の手の中なんだけど？ あ、ジューズもーらいー」

「……………クツ」

銃を収めたほむらが、眼光だけでヒトを殺せる程睨みつける。

「……………何が目的よ？」

「都合の良い手駒の入手。安心しな。鹿目まどかは魔法少女にさせないし、ワルビアルのヨットもキツチリ潰すから。それならいいしょよ？」

「……………ワルとヨしか合っていないわよ。ワルプルギスの夜、よ」

「さいで。行くよ、キュウベえ」

いつの間にかポテトを完食していたクトが、席を立つ。

「指示はテレパシーで送る。」

……………オマケだ。いい言葉を教えておくよ」

「……………何よ」

クトが立ち止まって、それでも振り返らずに言う。

「『常識に囚われてはいけない』。私たちと付き合うなら、あらゆるモノを疑え。だが、探るな。理解するな」

そして――

今度こそ、クトはほむらから離れていった。

少女(?) 移動中

— 廃アパート クトの部屋

「クト。 一体何のつもりだい？」

「? 何が？」

暁美ほむらとの接触後、道中立ち寄った古本屋で買った小説を読み始める直前のクツに声をかける。

「さっきの暁美ほむらとの会話だよ」

「ああ、最後の台詞？」

「それに関しては聞かないでおくよ。探るな、と言っていたしね。」

ボクが聞きたいのは、キミの目的さ。

さっきの会話で、キミは暁美ほむらの得になることしか口にしていない。

鹿目まどかの救済についてばかり話し、キミは、キミ自身のメリットについては一言も口にしないばかりか、むしろ彼女の道しるべに成りきっていた」

具体的には、バマミの存命と上条恭介の手の治療。

「魔法少女には、魔女と闘うという目的の為、自分だけでなく他者の身体を治す魔法は多かれ少なかれ存在する。手の治療に関しては、程度にもよるだろうけど、わざわざ奇妙な跡を使うまでも無い。」

バマミは、わざわざ死なせずとも、強引な方法で何処かへ捕えておいて死んだという噂を流せばいい。その為に『殺す』なんて過激な表現をしたのだろうか？ 結界の内側で死亡すれば死体が残らないから、確かめようも無いしね。

ワルプルギスの夜に対しては、おそらく、キミ自身が単独撃破するつもりだろう。

方法は想像もつかないけれど」

「……………」

「沈黙は肯定と見なすよ。」

更に、キミの目的である、記憶の復活。

これについては、ハッキリ言ってウソなんじゃないかい？

キミの本当の目的は分からないけれど、その話が始まる前に、キミはほむらに憎悪、或いは警戒される相手になった。嫌う相手の為になる行動を意図的にする人間は少ないからね」

「……………世の中つーのは、理不尽だよな」

「? クト?」

ヒビの入ったガラスの外を見る少女。

「本当に、本気で叶えたい夢があるのに、実現する能力の無い奴の横を、能力があっても夢を持たない奴が平然と追い抜き、他人の夢や希望を潰す。

……………私だって、昔は——」

「……………クト。今のキミには、全能の神になれる程の才能がある。ボクらなら、

それを叶えr

「ならやってみろよ」

……………クト?」

こちらを見ずに、異常なまでの憎悪が含まれた声が響く。

「気安く『全能』を名乗るな

気安く『奇跡』を口にするな

気安く『命』を扱うな

気安く『理解者ツラ』するな

「インキュベーター。貴様に一体、何が分かる？
この宇宙の、何を理解している？」
ここまで言っ、クトはこちらを横目で見た。

その瞳には、

絶望が

悲嘆が

狂気が

後悔が

負の感情がごちや混ぜになり、渦巻き、最初の夜に比べればマシという程度には濁った目だった。

「……………キミ自身が呪いを振りまく存在になっている。なのに、どうしてキミは、「魔女になつていないか?」

理由は2つ。

さつきはギャグとして流されたけど、私は神だ。元人間やら前に『邪』がつくやら、余計なモンは色々あるけどな。

もう1つは、私は、赦されてないからだ。

赦されるまでは、私は、私でなければならぬ」

「……………赦されてない、から……………？」

クトが、また窓の外を見る。

「……………誰に、どんな理由で赦されればいいのか。

ソイツを思い出せないのは本当だ。

先送りの奇跡は、その為の手段の1つでしか無い。

魔法少女の救済は、それまでの『暇潰し』。

——結局私は、どうしようも無い『悪者』ってワケよ」

また振り返ったクトは、目こそ何時も通りだったが――

——自虐的な笑みを浮かべていた。

そして、何故か、ボクは、

そんな表情は似合わない、見たく無いと思った。

結局、「やる気失せた。夜になったら起こしてー」と何時もの調子で言ったクトが、毛布に包まってさっさと寝入ってしまい、その後昼寝が日課となるのであった。
……いやなんでさ?!

―数日後

いつも通り(?)、クトが昼寝している最中に、ボクと同族――別個体のインキュベ―

ターが部屋を訪ねて来た。それも、複数。

「……………何をしに来たんだい？」

「簡単な事さ」

そして、その内の一匹が。

ボクとクトの関係を、永遠に決める言葉を放った。

「——不要となった個体の処分と、膨大なエネルギーの入手さ」

「……………え？」

理解出来ない。

処分？ 一体何故？

「君は、精神疾患を患っている」

「僕らの目的は、エントロピーを凌駕する人間の感情エネルギー」

「彼女のソウルジェムは既に限界だ。 放置するだけで、何時決壊してもおかしくない」

「最凶の魔女となる可能性を孕む存在は、さっさと魔女にさせればいい」

「僕らの体内には、宇宙延命とする為のエネルギーに変換する前のグリーンフィードがある」

「そして、何も穢れの移行は、ソウルジェムからグリーンフィードの一方通行では無い」

「この先、敵対行動をとる可能性を持つ個体の処分と、簡単に手に入るエネルギーの入手」

「これ程までの好機を逃すなんて、狂っているとしか言いようが無いよ」

「……………ボクは、」

彼らの言い分は理解出来る。

確かに、最短で、最小の労力で、ノルマを軽々と上回る程のエネルギーを入手出来る。

だけど、それは正しい事なのか？

呆然と、周りを見る。

何体かは、クトからソウルジェム——既にドス黒く染まった、彼女自身の魂——に、穢れきったグリーンフィードを近付け。

残りは、エネルギーを無駄にしない為か、ボクを捕食しようと間合いを取っている。

「……………ボクは、」

効率を考えるだけなら、彼らは圧倒的に正しい。

ワルプルギスの夜を待つまでもなく、同等かそれ以上の魔女が解き放たれば、近隣の魔法少女は戦って死ぬか、逃げることにしか出来なくなる。

この街を、場合によっては惑星を守る為には、鹿目まどかが魔法少女になるしか無く、高確率でそのまま魔女化するだろう。

更に、予測でしかないが、初期の宇宙に存在していたエネルギーの総量、さらにソレを大幅に上回る程のものが手に入る。

頭では分かっている。

なのに。

それは間違っていると、思ってしまうボクがいる。

「——ダメだ!!」

気がついたら、クト側にいた個体を弾き、ソウルジェムを確保していた。

「……………正気かい？ 一体何の為に人間を守るのさ？」

「……………彼女は、『この宇宙の、何を理解している？』と言った。

ボクらには、まだ知らない事がある。

それを知る前に、彼女を殺すことは出来ない」

「訳が分からないよ。 所詮、それは彼女の妄想でしか無い」

「仮に事実だとしても、余りあるエネルギーを解明に回せば、確実に真実に辿り着ける」

「それすら分からないなら、君は完全に狂っている」

「……………ならもう、それでいい。

ボクは、狂った。 それでいい」

ボクは、この数日の事を思い出していた。

— 『ところでさーキューバー』

『なんdきゆつぷいいいい!』

ゴスツ!!

いきなり頭部に手刀が炸裂する。

『何するのさ!?!』

『……なんとなく? アハハハハハハ!』—

……今にして思えば、あれ以来、妙な感覚が時々あった。

それに、最初のフリーフォールごっこ。

あれも、ボクの反応を見ていたような気がする。

付け加えれば、暁美ほむらとの戦闘時、そして会話。

戦闘時は、ただ集中が逸れただけでなく、撃った際の反動に対処している時に襲えばもつと確実だったし、

会話時も、ボク経由で情報が漏れるにも関わらず、ボクを処分することも遠ざけることもなかった。

その時は『グリーンフシード回収の為』と言っていたけれど、それならボクに拘る必要

は無かったのに。

「……………クト。」

もしかしたら、キミは本物の神様で、ボクに心を作ってくれたのかい？
ボクに、チャンスをくれたのかい？」

インキュベーターの群れが飛びかかってくる。

アツサリとソウルジエムを奪われてしまう。

「つークト!? 起きてくれ!!」

まだ、キミの答えを聞いていない!!」

ソウルジエムに、グリーンフシードがコツンと当てられ、

「クト!?! つ——」

穢れが、ソウルジエムに吸収され、

絶望の使者が、

「——オイオイ、こりや一体どーゆー状況ジャン？」

ガシツ！

懐かしい感覚が、ボクの頭を鷲掴む。

「……………キュ？」

!?!? 馬鹿な、どうして—

どうしてソウルジエムが濁りきっているのに自己を保っていられる?!?!
そのまま定位置——肩の上に乗せられる。

「——クト?!?!」

「…………一口に『神』つつても、色々あんだよ。

創る事に特化した『創造神』。

壊す事に特化した『破壊神』。

それとは別に、調和に特化した神、戦いの神、命の神、運命の神——

——そして、私は、」

収納していた骨翼を広げ、宣言する。

「絶望と狂気を司る『邪神』、『cthuulhu』。

ンなモノホンのバケモノが、今更魂が穢れきつた程度で別モノになるか？

——舐めるなよ、下等種族。

答えは『否』だ」

インキュベーターが確保していたソウルジェムが虚空に消え、クトの一部——右胸部に現れる。

それに続いて、彼女の服装にも変換が現れる。

踝まで届くほど長い裾のワンピースは縮み、ミニスカートになり。

靴は安物のスニーカーから、小洒落た、けれど何故か、寂れた港町を連想させる色のローファーに。

腰には、ベルトのように、髪と同じ深緑色のリボンが巻き付き。

肩からは、足首まで届く、彼女のソウルジエム黒の様な色のロングコートを羽織り。

首元には、水のようなマフラーが巻かれ、その長い両端は羽衣の様に漂う。

「——さて、さて、さて。」

こつから先は、希望狂気をばら撒く撲殺少女。クト☆マジカによるR—18虐殺タイムだ。
………教えてやるよ。

魔女なんつう紛い物じゃねえ、ホンモノの『バケモノ』ってヤツをなあつつ!!!」

そういつて、飛び出す少女の横顔は——

やはり、何処か自虐的に見えた。

全力で目を逸らされた。 キミの中で魔法ってどんなイメージなのかな？

「さ、さーて結界のヌシでもシバきに行くかね！」

「あからさまに話題をそらせたね」

「気にするな！」

「もうそれ何回目だい？ いい加減飽きたよ」

「(・ω・)」シヨボン

「無駄に器用だね?! どうやって発音したのさ?!」

「εー(・▽・)へ」フツ、ヤレヤレ

「殴りたいこのドヤ顔!!」

尻尾で叩いたらアツサリ吹っ飛んでった。 戦闘力乱高下し過ぎじゃないかな!?

そんなこんなで
閑話休題。

それだけ強いから、道中襲ってくる使い魔やら狩り損ねのインキュベーターを問題も躊躇いも無く撲殺しながら、テクテクと結界の最深部まで進んでいく。

「そーいやキュウベえさ、一応同族の連中片っ端からブラッドフィーバーしてんだけど、止めないの?」

「ブラッド…ああ、血祭りね。」

……正直、気持ち悪さはある。

ボクらインキュベーターは、多様な環境に適應する為にワザと一部の遺伝子配列を変えてあるとはいえ、星にいる本体のクローンなんだよ」

「……無双すんの辞めるか?」

クトが、ボクの顔を覗き込んで「心配して、聞いてくる。」

「……いや、いいんだ。ノルマが達成されれば、ボくらクローンは処分される。感情エネルギーに依存するボくらは、魔法少女のシステムが無ければ、飢死する。どちらにせよ、ボくらの命はとも軽い」

「……あんまそういうこと言うなって。一応どうにかする考えはあるからよ」
「……ありがとう。気持ちは受け取っておくよ」

そうこうしているうちに、魔女のいる場所まで辿り着く。

見上げれば、縫いぐるみのようなソレが、こちらを見下ろしていた。

「——さて、さて。」

切り替えていきますかあ!!」

ギチィィイツツ!! と、クトの両手に恐ろしい程の力が込められているのを確認して、慌てて飛び降りる。

直後――

魔女が、地面に叩きつけられてバウンドした。

「……………相変わらず規格外だね」

「フアツヒヤツヒヤヒヤツヒエツホオオオオオオウウウウウウ W W W W W W W W W W!!!」

クトちゃんオリジナル!! 必殺!! ルナティッククリバースラムウウウウウ!!!」

跳ね返ってきた魔女を再度殴り飛ばし、今度は壁に叩きつける。

跳ね返る。 逆の壁に叩きつける。

跳ね返る。 天井に叩きつける。

跳ね返る。 別方向の壁に叩きつける。

跳ね返る。 漂っていた巨大なお菓子に叩きつける。

……途中無理矢理脱皮させて本体をフルボッコにする等、この一方的かつ徹底的な蹂躪は、魔女の空間に存在するもの全て（ボクとクトを除く）を破壊するまで続いた。きつとこういうのを、いとも容易く行われるエゲツない行為って言うんだろな。

「ちつがあああう！ 特に理由も無い暇を持て余した神の遊び暴カがシャルロッテを襲う!! が正解じゃああああああん!!」

「どーでもいいよおおおおおおお!!」

—ズドオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

トドメに頭頂部（多分）が殴られ、地面に派手に叩きつけられる。

それと同時に、クトによる暴力の音が止んだからか、魔女の空間の外側から複数の人間の足音が聞こえる。

メンバーは……暁美ほむら、バمامィ、鹿目まどか、美樹さやか、インキュベーター。そんな5人組を見たクトの感想は、

「—あり？ お揃い……って訳でも無いけど、どうした？」

—と、想像していたより普通だった。絶対嬉々として襲いかかると思ってたのに。

『オイ待て酷くね?』

『アレ? キミ、テレパシー使えたの?』

『ノリと勢いで。それより、ちよつち隠れてな。ほむほむ除く3名の殺気パネエ。』

道中の愉快なオブジェがお気に召さなかつたらしい。オマケに嫌な予感もする』

『……あー、ハイハイ』

魔女（過去形）に隠れて、様子を伺うことにする。

……アレ? この挽肉魔女、ギリギリで生きてるね。手加減上手なこと。

「……えっと、その貴女? これはどういふことかしら?」

頬を引きつらせながら、マミがクトに問う。

……まあ、気持ちは良く分かるけど。

「……………私にもことの顛末が教えてくれないかしら?」

次いで、警戒心MAXの暁美ほむらも話しかける。

「お? ほむらちゃん、久しぶり。ことの顛末つつても、私も成り行きでこうなったんだけど……………」

訳が分からないと肩を竦めるクト。確信犯の間違いだろう。

「実は――」

「マミィ！ ほむら！ そいつの言葉に耳を貸しちゃ駄目だ!!」

……淫獣、まだ生き残ったんかい」

彼女たちと行動を共にしていたインキュベーターが声をはりあげる。

……ここまで来れば、クトの感じた『嫌な予感』を、ボクも感じ取れる。

「……キュウベえ？ それって、どういうう――」

「――彼女は魔女だ！ 胸元のグリーンフシードを見て!!」

「「「なっ!」」」

「……………ファッ?」

思い出してみる。

彼女のソウルジェムは真っ黒け。

濁ったソウルジェムは、形状もグリーンフィードに似てくる。

さらに言えば、クトの今の格好は、インキュベーター、使い魔、魔法の返り血で真っ赤っか。

結論。

確かに魔法に見えなくもない。　　と言うかヒト型の魔法が居たら、間違い無くあんなんだ。

「騙したわね!!」

「さっさと斃させて貰うわよ!!」

「あゝあゝ!!」

リボルバーの銃口2つに、大量のマスケット銃を向けられ、流石のクトも驚く。

ドオンドオンドオンドオンドオンドオンドオン!!

ドツグオオオオオオオオン!!

「ちよ、お待ち、ノオオオオオオオオオオ?!?!」

即発砲。 44マグナム弾と魔力弾が雨霰とクトに降り注ぐ。

「っおい待てほむらあ?! マミは兎も角、そっちまでインキュベーターの台詞をさらっ
と信じんのかよ?!?!」

「うるさい! 最初から怪しいと思っていたのよ!!」

「デスヨネーコンチキショー!!」

弾幕の嵐をひたすら避け続ける。

そりやもう、後ろに目が付いてるんじゃないかっていう程避ける。

「つさつさと当たりなさい！ 貴女に勝ち目は無いわ！」

「だが断る!! そもそもこの程度の密度の弾幕に当たつとつたら恥ずくてウチの妹に会えんわあ!! リアル弾幕ごっこ経験者舐めんなよーギラスつつ!!?!」

言つたそばから弾が直撃する。

ヒトは今みたいなのをフラグと言うのか。

「えつと、ほむらちゃん? 今の人? 話しかけてたけど、良かったの?」

「……それは、」

「気にするには無いさ。おそらくあの魔女は、そうやって油断を誘つて不意打ちするのが目的だろう」

「いやアンタが言うなよ淫獣」

インキュベーターの解説に、ロングコートの少女がツッコー

「ーなっ?!」

「へーいお嬢さんs、今ブツ放すと中々に悲惨なことになるぜ痛い痛い?!」

「このつ、離れろつ!!」ドコドコ

いつの間にか復帰したクトが美樹さやかなの隣に立つて腕に絡みついていた。で、当然バットで殴られていた。

「さやかさん!! 今助けるわ！」

「早めにお願ひしますコイツマジで離れない!! 蛸か何かか!」ゲシゲシ

「……え? なしてバレたし?」

「……はえ?? 蛸?」

「イエス! アイム、オクトパス!!」

「……………ごめんね、ちよつと頭叩き過ぎたみたい」

「ちよつと待てその憐れむ様な視線は何?!?! なんか心にクルものがあるんですケド?!?!」

「——いい加減にしなさい!!」

ドウンツツ!

さやかがツツコミ、クトは絡みつき、マミがりボンで引つ張る、gdgdになった場に、1発の銃声が響く。

「今度はなんじやい? 私は今ピッチピチ女子中学生のJCの柔肌を堪能するのに忙s

「離れろ変態つ!?!」

「ありがとうございますつ?!?!」

今度はバットがアッパー気味にアゴにキマリ、流石のクトも吹っ飛んだ。

すかさずマミがりボンで拘束、口径が完全に大砲のソレと無反動砲の砲門が突きつけられる。

「……何か言い残すことは？」

「君たちは騙されている。具体的には私は私は魔女じゃ無いっ」

「処刑することには変わら無いわよ女の敵」

「詰んだっつ?!?!? 待て、話をしよう！ 話せば分k

『『ティロ・ファイナーレ』!!』

「死に晒しなさい」

いやな感じいいいいいいいいいいいい……—」

魔法少女2人による大火力の攻撃で、空の彼方まで吹き飛ばされていくクト。

ご丁寧に、フェードアウトして逝った場所には、1つの星が煌いた。

……

『おーい、無事かい?』

『割と』

予想通り、アツサリ答えが返ってくる。

マミの最高火力に平然と耐えてることに今更ながら軽く驚きながら、魔女の影から状況を窺う。

マミたちは何時までも解除されない結界に警戒して、ほむらは何やら考え込んでいる。

「……魔女は斃したのに、どうして―」

「さっきの魔女がまだ生きてるか―別の魔女に結界を張らせているか、ね」

……クトが普通に魔女扱いされているね。どちらかと言えば、確かに魔女に似ているけども。

『――キュウベえ、聞こえるー?』

『今度は何だい?』

『丸くなつといてー。言い直せば対ショック姿勢ー』

『?』

取り敢えず、言われた通りに丸くなる。

次の瞬間、

傷1つ無いお菓子の魔女が、

「—バマミっ！ 魔女の残骸の注意しなさい—」

「—え？」

グチャアアツツ!!

—バマミを、頭から丸呑みにした。

同時に、パアンっつと音と共に結界が消えたと思うと、手が死角からボクの身体を掬い上げて、急激なGがのしかかってくる。

「—キユぶっつっ?!?!」

Gに押し潰されないようにしながら、視線を上げていくと—

気絶したバマミを担いだクトが、骨翼と自在に動くマフラーで、まるでトンボの様に空中を駆けていた。

—っつて、

「バマミ?! ど、どうして—」

「んなもん私が回収したからに決まってんジャン—」

「でもさっき魔女に吞まれてたよね?!」

「その辺の説明は後でする! 遠視出来そうな淫獣^目は潰しておいたとはいえ、ほむほむとガチの追いかけてこは分が悪過ぎる!」

翼が2対あることで、スピードを維持したままの方向転換を連発するクト。ふと見上げた空は、いつの間にか暗くなっていて、

あまりの超スピードに、全ての星が流れ星に見えた。

「オロロロロロロ」

「前フリ無しでキュウベえが汚い虹作った?!」

裏ルート：第6話

sideキユウベえ

—何処かの廃屋

「—で？ キミは一体、どんなカラクリを使っただんない？」

気絶中のマミとボクを抱えたクトが、あの超スピードのまま駆け込んだ廃屋で—

足が腐りかけている椅子にマミを座らせ、手早く屋内の安全確認を済ませてきたクトに真っ先に聞いたのは、あの結界のなかでの事について。

「おり？ 理由を聞かれると思っただけど？」

「もう『クトだから』で納得することにしたよ」

「ふは、そりゃ助かる。」

—で、カラクリ、ねえ」

クトが片手で椅子を引き寄せ—それも足が痛んでいたのか、背もたれ側の足が2本ともバツキリと折れ、渋々といった具合に背もたれ部分を下敷きに座った。

「……そもそも、根本的な話として、私が人間じゃないのは分かってる？　魔法少女って意味じゃなくて」

「ただの人間に航空力学を無視出来る骨の翼が生えているとは思わないさ」
「分かってるならおk。」

「じゃあ私の種族——神だ何だと言ったけど、正確には『cthulthu』、宇宙人の一種だな。この種族の特性つつうか特徴——」

「ごめん、く——なんだって？　それに、ボクらインキュベーター以外の地球外生命がこの惑星に降り立った記録はあれど、その中にキミの様な存在はいなかったよ?!」

「そりやそうだ。基本的に c t h u l t h u は一体しか居ないか、そもそも存在しないんだから。」

「ついでに言えば、居ると仮定しても地球に降り立ったのはざっと数億年前の話だし、余程のキチガイでも現れない限り奴さんは海の底で夢の中だ」

「?!?! わけがわからないよ！　キミの話には矛盾が多過ぎる!!」
「発音不可能な種族名。」

「正体不明の、一体しか居ない筈の種族。」

「そんな存在が、居るわけがない！　一体しか居ないなら、それは最早種族では無い！　それに、彼女は『その種族は海底で眠っている』と言った。」

なら、ボクの目の前にいる——宇宙から落ちてきた、この少女は一体何だというんだ?!?
 「だから私は『クト』なんだよ。他の『c t h u l t h u』との線引。境界線。見
 分ける為の目印みたいなもんだ。

2体いることについては、まあ、一時的な例外みたいなモンだと思ってくれ。

……そろそろ話を戻していいか?」

「……………分かった。頼むよ」

髪を指先で弄んでいるクトに、話の続きを促す。

『c t h u l t h u』には、種族的特徴として『精神干渉能力』が備わってるんだ。
 そいつを応用すれば、幻影の1つや2つ、簡単に生み出せる。

——こんな風にな」

クトが指を鳴らした瞬間——

突然現れたライオンが、ボクに向かって突進してきていた!

「ゴガオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「う——うわあああああああああああああ?!?!?」

思わず目を瞑ってしまおう。

が、衝撃や痛みは、何時までたつても来ない。

恐る恐る、目を開けると――

ライオンが、ボクらの周りを前回り、後回りで駆け回っていた。

「……………なにこれえ??？」

「だから言ったじゃん。幻影だって」

クトのセリフが区切りだったかの様に、ライオンの幻影が消え去る。

「つまり、あん時起こったことは簡単。」

1、キュウベえたちがお菓子の魔女の幻影に気を取られているスキに、向こうのインキュベーターを始末。

2、ママが丸呑みにされる幻影に合わせて当身で気絶させて攫って、キュウベえも抱える。

3、本物のお菓子の魔女のグリーンフィードを搔つ攫って結界を破壊。

以上、死の運命にあった魔法少女を救う為の3ステップでしたー」

「……………」

呆れてモノも言えない、というのは、きつとこういう感情なのだろう。

さも簡単そうに言った手順は、原理としては幻影系の能力さえあれば可能だろうけど、実行するのに必要な能力が尋常じゃ無い。

1秒にも満たないうちに、離れた場所にいるインキュベーターを殺し、ベテランの魔法少女に気づかれずに接近、気絶させ、更に魔女からピンポイントでグリーンフィードを挟り取る。

予め瀕死だったり、幻影に気を取られていて無抵抗とはいえ、これだけの事を一瞬でやってのけたのだ。

それにあの魔女の幻影だって、ただ単純にそう見えただけでなく、行動によって発生する音と、大質量の移動に伴う風圧触覚まで再現されていた。

「……………キミみたいな存在を『理不尽チートが服着て歩いている』って言うんだろかね」

「褒め言葉だな。」

それよか、これからの事を考えるぞ。なんせ魔女呼ばわりされたからな。対話だけで上手くいくとは思えんし、ほむほむとの話もただの確認作業になっちまったし」

言われてみて、クトの格好を見直してみる。

魔法少女の変身を解いた少女(?)の服装は、黒のワンピースにスニーカー。

黒尽くめなお陰で返り血はそこまで目立たないけれど……

血生臭い。 すつつごく臭い。

それに、ソウルジェムのこともどうにかしないと。

心が読める訳じゃ無いから正確な精神状態は分からないとはいえ、ソウルジェムそのものは、いつ本当に魔女になっても可笑しく無いほど黒く染まり、形状も完全にそれだ。視線で気がついたのか、クトがさっきの魔女のグリーンフシードで穢れを取ったけれど……

ソウルジェムが、すぐさま限界まで濁った。

「……………キュウベえ、これって、」

「グリーンフシードによる浄化が追い付いていないという事は、その穢れはやはり精神的なものだね。 キミの不思議そうな顔を見る限り、失われた記憶が関係しているようだけれど。

ボクとしては、ヒヤヒヤするからどうにかして欲しいのだけれど？」

「と言われてもねえ……………」

「そーいやキュウベえ、このグリーフシードに穢れじゃなくて、綺麗な魔力を注いだらどうなるんかね？」

「それは根本的に不可能だよ。魔法少女の魔法は、形を持って初めて顕現出来る奇跡。純粋な魔力そのものとして取り出すことは出来ない」

「ふーん………」

手の中でグリーフシードを弄るクト。

『「キュウベえ、一芝居打つから、話を合わせろ」
「??」

クトがチラリとマミの方を見る。

「成る程、意識が戻ったけれど、状況から判断して気絶したフリをしている、といった所かな？」

『把握した。何時でもいいよ』

『そーじゃ。』

3、2、1、』

s i d e マミ

……う、ん……??

——ここは、？

確か、私は……

目が覚めると、そこは何時もの部屋じゃ無い——見知らぬ場所だった。

ボヤけた頭で、記憶を辿っていくと――

……そうだ。私、魔女に負けちゃったのね……じゃあ、ここはあの世……？

その割には埃っぽいっていうか、薄汚れているような気が――

「――とし――ない――」

「――ん……」

妙に聞き覚えのある声が聞こえ、ふとそちらを見ると――

肩まで伸びた深緑の髪に、黒尽くめの服装。

服装こそ違うけど、間違い無い。私と曉美さんで斃した魔女だ。

魔女は、未だ私が近くに居る事にも気がつかずに、何故か居るキュウベえと会話をしていた。

なんとなく気になったから、耳を澄ませて聞くと――

「折角回収したこのグリーンフシード、どうせならなんか有効活用したいな。そうい

やキュウベえ、ソウルジェムの濁りって、ほっといたらどうなるんだ？」

これは、あの魔女の声。

魔女にしては珍しい、マトモな会話が可能なのね。

思考もーグリーンフシードが魔法少女にとつて重要なものと分かって奪ったのかしら？

「まず第一に、使用する魔法が弱くなるね。この時点で普通の魔法少女にとつては致命的な問題だからその先を知るとは少ないのだけれど、ソウルジェムが濁りきるとグリーンフシードに変化、絶望の感情エネルギーを放出して魔女になるのさ」

え???

あんまりな内容に、頭の中が白くなる。

ーキュウベえ、今言ったのって、ウソ……………よね……………??

そんな私の願いも虚しく、恐るべき事実が次々と明らかになっていく。

「じゃあ何か。魔法少女は揃いも揃って魔法のタマゴってか。なにそれこわい」

「この国では、成長途中の女のことを少女って、呼ぶんだらう？」

なら、やがて魔女になる存在は、『魔法少女』と呼ぶべきだと思うけど？」

……………

「……………あー、うん、ソウデスネ。流石（？）インキュベーター^器。

なんでそんな事を？」

「ふむ。キミはエントロピーという単語を知っているかい？」

「後日談とかその手の奴か？」

「それはエピソード。」

エントロピーと言うのは、エネルギー変換時に於けるロスのことさ。例えば、木を1本育てるのに必要なエネルギーと、その木を燃やして得られるエネルギーでは、育てる方に圧倒的なエネルギーが必要なんだ。

この宇宙のエネルギーが尽きれば、文字通り世界が滅んでしまう。そこでボクらが

目をつけたのは、そんなアントロピーの法則すら凌駕する、感情エネルギー――

特に、第二次性徴期の少女の希望と絶望のエネルギーが、最も適しているんだ。

幾ら宇宙の為とはいえ、人類の数が無駄に減るのも困るだろう？　だから、最少の犠牲で済むように、該当対象にのみ、本人の同意を得たうえで宇宙の礎となってもらっているのさ」

……………よ。

「本人の同意つつうと……………」

魔法少女の契約か。でも契約する前にんな話は聞かなかったぞ？」

「第二次性徴期くらい少女は昔から、大の為に小を切り捨てる事を嫌ったからね。だからと言って、こっちははいそうですかと引き下がる訳にはいかない。魔女という分かりやすい悪役を用意して、それを狩る『正義の味方』という設定で上手くいつて以来、そのまま続けているのさ」

……………そよ。

「成る程ねえ。」

「そういうやキユウベえ、契約の時の奇跡って、何かしら誘導してたりすんのか？ このグリーンフシードがソウルジェムの時の記憶をチョイと覗いてみたら、最悪のタイミングで契約を持ち掛けられてたんだけど？」

「ある程度はね。彼女たちの願いを叶える為にもエネルギーは必要だし。それに、歪んだ奇跡の対価――」

「必ず訪れる絶望の事も考えると、こちらが巻き込まれないよう、さらに他の魔法少女も絶望に追い込めるよう調整出来るようにしたいからね」

「……………うそよ、」

「うわあ、エグ。」

「じゃあ、ソウルジェムって何？」

「契約の時は魔力庫みたいな扱いだけど」

「変異させたキミたちの魂そのものさ。魔力を使って磨耗したり、絶望すると濁っていく。」

「キミも大切にしておくれよ？ 100メートル以上離れると肉体を操作出来なくな

る」

……うそよ！ 早くウソだと言って！！

「つまり——

魔法少女は、最終的には魔法絶望になるってことか」

「その通りさ。希望と絶望はバランスを取り合う。来てるよ」

運命というのは、本当によく出

……
ふふふ。ふふふ。

即絶望て』

ほぼマミに聞かせるのが目的の確認作業——途中でも分かりやすい反応があったけれど……………

終わったら、マミの気配がスゴイことになってましたマル。

『……………よしキュウベえ。 ちょつちと言わずソコソコ離れてろ。

つうか——

逃げろ』

—パァンツツ!

フラリと、幽鬼のような動きで立ち上がったマミが神速で変身、一瞬で顕現させたマスケット銃をクトに向けて撃った。

「っ—

……む？」

ギシッ！

着弾した弾丸から伸びたリボンがクトに巻きつき、その行動を阻害していく。

パァンパァンパァンパァンパァン！！

更に至近距離で弾丸が喰い込み、リボンによる拘束が完成やいなや、大砲クラスのマスケット銃が召喚される。

「—これで、終わりよ!!」

『ティロ・ファイナーレ』っ!!」

—ドツツゴオオオオオオン!!

零距离で、凄まじい威力の砲撃が炸裂し、爆煙が視界を覆う。

—煙が晴れば、当たり前のように、

「……………うう……………」

「……………」

疲労からか、それとも効果の無さに諦めたのか、その場に座り込んでしまう。そうなる前から、初めてクトは、行動をおこした。

(彼女にしては) 優しく、マミの頭を抱いた。

「っ?! 離しなさいよ、このっ、魔女!」

当然拒絶し、クトが突き飛ばされる。

その時に見えた、マミの顔は――

――涙目で、嗤っていた。

「……………マミ、」

「黙りなさい！ 私は、みんなを、魔女から守る魔法少女で、――

――でも、魔法少女は、魔女を生み出す存在でしかなくて、――

――なら、こんな魔法少女[□]、みんな死ぬしかないじゃないっ!!」

――ブワツツ！

通常サイズのマスケット銃が召喚され、それが頭に――

マミのソウルジェムに突き付けられる。

トリガーが引かれ、撃ち出された弾丸は、――

グジュツツツ！

——強引に銃口をひったくったクトの手にめり込んだ。

「……………で。なんで。」

「なんで助けたのよ?! 貴女は魔女でしょう?!」

「あの時も言ったけど、私は魔女じゃない」

「じゃあ貴女の胸にあったグリーンフシードは何よ?!」

「アレが私のソウルジェムだ。ベテランさんや、今まで斃してきた魔女で、表皮にグリーンフシードが露出してた個体っていたか?」

「っ」

言葉につまり

すぐに笑みが浮かんだ。

「……………そうよ。——そうよ! 貴女たちがウソをついて」

「じゃあ試してみるか? そっちのソウルジェムも限界っぽいからな。5分もしないで真実を実体験出来るぞ」

そして、その笑みも凍りつく。

「……………冗談、よね？」

「グリーンシード、使うか？ さっき私の奴から吸ったから割とギリギリだけど」

クトが、血塗れの手とは逆の右手の上でグリーンシード——通常なら、インキュベーターが回収するレベルで穢れが溜まっているモノ——を転がすと、それをひったくったママが変身を解いて、急いでソウルジエムから穢れを取る。

取れた穢れは五分^{五パーセント}程度が限界だったようで、直ぐに『パキッパキ』という音が響き出す。

「——つ、魔女が——」

「ハイハイ下がつてなつと。今度は遊ばずに1発で仕留めるよ」

「……………は？ 貴女、何言つて、」

パキンッ！

『!!』

グリーンシードから、見覚えのある魔女が孵化s

「乙。次回に期待だな。」

『バスターインパクト』 ツツ!!」

ドゴオツツツツ!!!

「.....」

「はえ??」

「ママがポカンとした顔をする。」

「ま、気持ちは分かるよ。 魔女が現れたと認識した頃には、たった一発の正拳突きで撃破されてるんだから。」

「おくい、ママさんや? グリーフシールドもつかい入手出来たけど使うか?」

「..... 貴女の方は?」

「変身してないし、魔法使って無いし、結界張る前に潰したから、その辺の魔力使用もゼ口。 というか私の場合根本的に使う意味が無い」

「.....使わせてもらおうね。」

「.....っ?!—」

グリーンフシードを拾ったママが、驚愕の表情をする。

「? どうした?」

「……………分かったわよ。 貴女は魔女じゃない。 信じるわ」

「? そりゃドーモ?」

ママの手元には、――

綺麗なグリーンフシードと、グリーンフシードに見えるソウルジエムがあった。

……………成る程。 自身のソウルジエムもクトと近い状態になったから、信じざるを得なくなつたのか。

なお、ソウルジエムの穢れが完全に取れた後、隙を見て逃げ出そうとしていたけれど、「どうせならクリーンな状態で持ち運ぶか!」

と、クトが再度魔女を孵化させ、今度は一撃死させず、掴んだ状態で地面に押し付けたまま、

「回転はあああああつ！ ロマンだあああああ！」

『ローリングドライブ！』 アアアアア!!」

と、ゴリゴリと死ぬまで回転し続けたのを見て、何を思ったか若干目を輝かせていた
ママがいた。 わけがわからないよ。

裏ルート：第7話

sideキュウベえ

—マミの部屋

「……それで？ 話ってなにかしら？」

クトが三度目の虐殺を済ませた後—

取り敢えず安全だと判断したのか、ボクを呼び寄せてから、「ちよつち話があるんだけど、いいか？」

と交渉（？）したことで、マミの部屋まで戻って、第一声がそれだった。

「うむ、その前に—っ。」

マミは魔法少女のシステムを、どれ位理解してる？」

「………貴女たちの、さっきの会話の内容程度よ」

「じゃあ話は早い。

マミ、」

クトは、とびっきりの笑顔で、

「——私と組契約してんで、ダークヒーローになってよ！」

「……………はい？」

「こんなことをのたまうのであった。」

「……………つて、いうか、

「本来のボクのセリフをパクらないでほしいな」

「ツツコミ所違くね？」

「まあいいや。ならば言い換えよう。」

「——変身！」

「ビシッ！つと、足を肩幅に開き、左手は突きの溜めのように握り込んで腰の部分に。」

そして右手は、指先まで伸ばしきった状態で、身体の中心線をクロスするようにしていた。

分かり易く言えば——アレだ。

いつかの昼過ぎに、ボクがクトの心の闇の一部を見る前。

その時にクトが読もうとしていた小説ラノベの表紙に描かれていた、銀髪アホ毛のキャラのとつていたポーズそのものだ。

そのポーズのまま、右手の薬指にはまった指輪形態のソウルジエムから、暗い碧と深緑の光（というか、質量を持った闇？）が溢れ出し、クトを覆い隠す。ソレが内側から弾け飛ぶと——

ロングコート魔法少女にマフラーの姿を巻いたクトが、ドヤ顔で立っていた。

「——邪教に染まりし撲殺少女　クト☆マギカ、只今降臨！」

星辰が揃いし夜に深淵の闇は封印から解き放たれ、中途半端な暗闇は狂気にまみれた断末魔をあげながらのたうち回る他なくなるだろう！クククツ！」

「……………」

ああ、マミもポカーンとしちゃって。

それよりキミ、やっつて辛くないかい？　とつてもイト『ア?』ハイ黙ってます。

「では、再度問おう。　死の運命にあった光の魔法少女

　　バマミ！」

運命に抗いし道無き道を踏破するため、私の元へ――

共に窮極ダイククの混沌ネビュラの中心へと行かぬかね?!

ビシィッ！ つと、これまた何処かで見えたことあるポーズを決めながら、更には精神

干渉を応用した能力で天井にプラネタリウムを――

それも、地球からでは絶対に観測出来ないの星空が、投影されていた。

「……………幾つか、いいかしら?」

「なんなりと答えよう、選ばれしヒトよ」

「……………貴女の言う『闇』は、一般人に対してどういった対応をするのかしら?」

「私の存在は、決して万人に受けわせぬ。世の中には無知は罪とほざく愚か者も居る

が、同時に知らぬが仏という諺もある」

ふむふむと頷くマミ。なんでこれで会話が成立するんだい? わけがわからない

よ。

「……………貴女の目的は?」

「ククッ！ 邪神の気紛れに理由を求めるか、ヒトよ。

強いて挙げるならば、お前の友が、私に救いを求めた。故、私はその範囲は確実に

救うと決めた。それまでの事だ」

「そう、分かったわ。」

——それで？ 私は何をすればいいのかしら？」

「了承した!？」

突然クトがイタイ言動を始めたと思ったら、気がついたらママが仲間になっていた。な、何を言っているのかわからないと思うけど、ボクにもわからない。

ただあれは、幻覚とか、催眠術とか、そんなちやちなものじゃない。

もつと恐ろしい、邪神の力の片鱗を味わった気分だよ……!!

「……そつちも大概ネタに走るようになったな」

「誰のせいだと思ってるんだい？」

それにしてもママ、もうちよつと熟考してもいいんじゃないや——」

「いいのよ。彼女が魔女でも、敵対する魔法少女でもないなら、それだけで共闘する理由としては充分よ。何より、クトは私と同じ匂いを感じるわ」

匂い………

ああ、テイロ^中フィナ^二仲^b m^y

タアン！

「……………キューベークューベークュー、女の子の読心術舐めないほうがいいぞ？ 特定分野

限定とはいえ、お辞儀さんの開心術を平然と上回るからな」

……………短銃が出てくる前に聞きたかった事実だね。

それとクト、お辞儀さんって誰だい？

「ま、匂い云々は1度水平線の彼方まで投げ飛ばすとして、組むメリットはそれだけじゃないからな」

「？」

「……………オイ待てベテラン、まさかそれだけの理由で決めたんじゃないだろうな？」

「し、失礼ね！ それ以外にもちゃんとした理由があるわよ！」

「あーハイハイ『正義の味方』ね。

……………話を戻すぞ」

変身を解き、座り直してから改めて話し始める。

「まずこの街の魔法少女全体の問題として、ハッキリいって数が多過ぎる。2週間しない内に襲来する『ワルプルギスの夜』相手には寧ろ足りないが、それとこれとは話が

別だ」

「多過ぎる？ 私と貴女、曉美さんの3人だけじゃないかしら？」

それに『ワルプルギスの夜』？

どうしてそんな大物がこの街に現れるって分かるのかしら？」

「魔法少女の数は、ママが死んだと誤認したインキュベーターが呼ぶ佐倉杏子と、美樹さやかも参加するだろうからな。計5人になる。」

ワルプルギスは、——すまん、信じてくれとしか言いようがない」

「5人の魔法少女……グリーンフィードの供給、足りるかしら？」

それに、誤認したインキュベーターって、じゃあそこにいるキュウベえは？」

「あれは特別。ちよつち事情があつてな。」

で、問題は、やつぱりグリーンフィードの量だ。譲り合いになつても奪い合いになつ

ても、どちらにせよロクなことにならない。一応手は考えて無い訳じゃ無いけど

……」

クトが珍しく言い淀む。どうしたんだい？

「……解決策は2つ。」

1つ目は、根本的に魔法少女の数を増やさない。美樹さやかの契約を全力で妨害す

る。佐倉杏子には盛大に遅刻してもらう。

ただ、ただでさえ戦力不足だったのに、そこから更に戦力を削るような行為はなあ………」

「……何で美樹さん限定の話をしているのかしら？ 鹿目さんや、それ以外の子が魔法少女になる可能性は？」

「鹿目まどかが魔法少女になった時点で負け確だから。何せまどかを助ける為だけに時間遡行やらかしてる人がいるしな。それ以外は……」

「キュウベえ？」

「エントロピーを凌駕する程の因果が絡んだ人材は、この街にはもうその2人しかいない。遠方の魔法少女が現れない限り、追加は無いと考えていいだろう」

「ま、来たとしても、そっちまで面倒見る余裕は無いな。」

「で、2つ目だけど………」

「私のソウルジェムをグリーンフィードとして扱う」

「……………は？ それじゃあ、貴女が魔女に——」

「それなら大丈夫だ。なんでかよく分からんけど、限界極つきわでキープするよう出てくるっばいから。」

「——それに、仮にヤバくなったとしても、私は『邪神』だぞ？ この程度の呪いなら幾らでも抑え込めるわ」

ケラケラと笑うクト。

「……………えっと、クト？ 流石にそれは冗談じゃ、」

「こればかりは冗談じゃないんだなあ」

バサツと、普段は収納しておけるらしい骨翼を展開する。

「……………へ？」

「言い忘れてたけど、私、魔法少女になる前から人間じゃ無いから。 ガチのバケモノだ

から」

「

フリーズするマミ。

骨翼でゆつたりと部屋の空気を掻き混ぜるクト。

うん、こう言うのを未知との遭遇って言うんだな。

「……………くあ w s e d r f t g y ふじこー p . ☆ ♪ € Σ @ € ♡
 ???

「人間の言葉でおk？」

「そもそもどうやって発音したのさ？」

テンションがハイになったのか、泡を吹きながら両腕で机をバンバン叩き始めるマ

!?!?!?!?!?

ミ。

これには流石のクトも若干引いていた。

「……………おくいママさんや……………？」

—ガシツ！

「……………嫌な予感」

「デジャビュだね」

テンションの上限が壊れたままのママに両肩をガツチリホールドされたクト。

今更のように冷や汗が出るけど、もう遅い。

ゆっくりりと、深く息を吸ったママの口から飛び出したのは——

「—人型宇宙人って実在したのね！

いつどうやってどうして地球に言語はどうやって習得したのかしらそもそも基本的な外見は人間そっくりね環境が似た星から来たのかしらそれとも変身憑依ねえ種族は

なんて言うの母星はなにか特殊な能力とかあるのかしらそっちの言語はどんな感じ他の個体は食文化はしかもその翼骨っぽい何かで出来てるけど軟骨部分は何も無いのに繋がっているかのように浮いてるわねどうやってるのかしら?!?!」

「ひっ!?!」

?!?!」

鼻息荒く目を爛々と輝かせながら、ここまでノンブレスで言いきった。

クトも今度は若干と言わず、思いつきり引いていたが、両肩を掴まれているから逃げられなかったようだ。

「…………と、取り敢えず、一旦落ち着こうk

「これが落ち着いてなんていられるもんですか!!!!」

観れば観るほど人間そっくりね細部や内臓器官[!]ってどうなっているのかしら外見からしてやっぱり雌個体なの今までの魔女との戦いで武器を使わず純粹な力だけでねじ伏せていたけど筋肉とかどうなっているのかしらそれともなにか私たち魔法少女にも使えない魔法かしらああ聞きたい事は一杯あるのに口も頭も追いつかないwtrあえzirkwrt snst mnnこtえtとりま脱げえええ!!!」

「ヒエエっ?!?!? ちよ、おま、きゅ、きゅ、キュウベえ、ヘルプ! ヘルプ!!」

完全にイツち^走やつてる状態でクトのワンピースに手をかけるマミ。

クトも予想外過ぎて対応仕切れないのか、必死に手を伸ばしてきたけど――

「……………クト。 そうなったママは、もう、どうしようもないんだ。ま、頃合いを見て戻ってくるよ」
そう言って、部屋を後にする。

中から、

「このっ、裏切り者があああああああああああああ
え、ちよ、ママさ、そこはっ——
!!!

う、うわあああああああああああああああああああああ——」
って感じの、クトの素の悲鳴というある意味珍しいものが聞こえてきたけど、無視することにした。

取り敢えず、合掌。

—3時間後

そろりと、ママの部屋の前まで戻る。

耳を澄ませて……………

よし、あの精神衛生に悪過ぎる音は聞こえないね。

コツソリ部屋に侵入……………リビングには居ないようだね。 何処かに出かけたのか

な？

…………いやな予感がするけど、一応、他の部屋も確認しておこう。

ドアを開け……………？ 何か引つかかっているね。

これは……………服？

それも、黒のワンピース——

………よし、出よう。今すぐこの部屋から脱出するんだ

「………キュウベえか？」

「キュっつ?!?!」

く、くくくクトかい？」

真つ暗な部屋の中から、起伏を感じられない、平坦な声が聞こえてくる。だというのに、なぜか恐ろしいものを感じる。

地雷原を歩くような気持ちで、奥に進むと………

クトは、マミと一緒に布団に包まっていた。

ただし、どうみても事後の状態で、一切の光を失った目だったけど。

「………その、クト？ 大丈夫…そうには見えないけど、無事、かい？」

その返答は、

「………女同士っていうのも………アリ、なんだな………」

といたったものだった。

「……クト？ 戻ってくるんだ！」

クト!!? クトオオオオオオオオオオ!!?
」

裏ルート：第8話

—マンション 付近

sideキユウベえ

『ううう………：昨晚はお愉玩しみにされた………』

「ごめんなさい、ついテンションが上がっちゃって……」

「まだ言ってるのかい？」

あの悪夢から一夜明け、翌日、放課後。

途中でマミの暴走によって強制終了してしまった話し合いを続けるべく、学校の通学路をマミの肩に乗ったままついていく。ちなみにクトは、行きは一緒に居たけど、学校が始まってからは、『試しておきたいことがある』とかで別行動。

……キミの能力、精神干渉というより神経干渉じゃないかい？ 目の前にいた筈の人物が瞬きする間に消えるって、中々に心臓に悪いよ。

それはともかく
閑話休題。

何か考えがあるらしくて、ママはいつも通り学校に通うことになったけれど……

「……それで？ 一体何を企んでいるんだい？」

『知ってるだろうけど、私は今、あの場にいた魔法少女には魔女だと思われてるワケじゃん。でもって、幻影術で投影したお菓子の魔女とかの効果でママも死んだと思われてるじゃん』

「結論を3行で頼むよ」

『その認識をぶち壊す。』

インキュベーターの信用暴落。

そこでママが介入。

これで、私の、私たちの勝ちだっ！』

「最後の一文いるかい？ なんでわざわざ4行にしたのか、わけがわからないよ。そして思ったより作戦が浅いね」

『手は幾つか思いつくんだけど、繋げるのがなあ……』

つまり、深い考えは無い脳筋筋ってことだね。

「……………聞くだけ聞こうか。他にはどんな手が？」

『ソウルジェムの穢れ、物は試して重曹で擦ったら時間は掛かるが取れたぞ』

「……………はあああ?!?!」

『今漂白剤でも実験中ー。いやー、ほつといても即濁るソウルジェムってこういう時に便利だなww』

「ちよ、キミ、自分の本体を洗剤で洗ってるのかい?!?!」

そもそもソウルジェムの濁りを洗剤で取ろうっていう発想そのものが間違ってるよ

!?! 取れることも驚きだけど?!?!

「……………私、今までなにやってたのかしら……………」

「ほ、ほら、きつとクトだけっていう可能性も

『シャルロットグリーフシードに穢れ移してからでもイケたから、多分大丈夫だぞ』

クトオオオオ?!?! どうしてキミは平然とトドメを刺すんだい?!?!

「う、ふふふ……………」

ガツクリとorzしたまま笑い始めるマミ。 どうするのさコレ?!

『さて、さて。』

——あ、ヤベ、漂白剤だとソウルジェムがつ！ ソウルジェムそのものががががが

がが』

「ちよ、クト、こんな状態のマミをどうすればいいのさ!？」

.....

に、逃げたあああああ!?!?

帰ったら無限ティロ・フィナーレの刑にしよう（マミが）。

そうでもしなきゃこの激

情は収まらん——

「.....え?? 巴.....マミ.....???

「——ほむらちゃん、待って.....

.....え?? マミ、さん??」

ギクッ!

この声は、……………

暁美、ほむら……?! それに鹿目まどか!?

声が聞こえてきた方向を見ると、まるで幽霊でも見たような表情の2人がいた。
……………あれ? そう言えばマミの反応が無い気が――

「……………うふふ……………重曹……………」

魔法少女に……………NaHCO₃……………」

まだシヨック受けてるうううううううう!!?!?

しようがない、これは使いたくなかったけれど……………!?

『マミ、この場面を乗り切ったらクトの秘密をおs』

ガバアツツ!!

……………人間の知識欲を舐めていたようだね。

それとクト、すまない。またマミの玩具になっておくれ。

『……………ねえキュウベえ? この状況、軽く詰んでないかしら?』

『……………言えてるね。 どうするんだい? ちなみにクトは音信不通になったよ』

勝利（？）条件は、

・ 穩便に撤退。

或いは、

・ 彼らをこちら側に引き込む（ただし明らかに信用されてない）。

敗北条件

魔法少女の脱落。 それを避けたとしても、話し合いの機会が皆無になることが確定するのかもしれない。

うん、普通に難しいね。

『……………これはもう、アレね』

あつ、とつてもやな予感。

『——あはは☆ なるようになくれっ♪』

『頼むから正気に戻っておくれ?!?!』

ああ?!? なぜか瞳が渦巻いてるし!?

『もうっ! なにも怖くないっ!!』

『それ死亡フラグだからああああああ?!?!』

あああ……い、胃があ………

「………なんで、あなたは、死んだはず、——」

向こうもショックから立ち直ったのか、つつかえながらも言葉を紡ぐ。

これに対するマミ（暴走中）の返答はっ?!

「——うふふ。 暁美さん?」

あ、終わった（ボクの胃が）。

これはマミ（暴走中）じゃない、マミサン（暴遭中）だ。

「——晩で随分鹿目さんと仲良くなったみたいね。 妬けちやうわ」

「っマミさん………」

「ダメよまどか、様子がおかしい！」

「ごもつとも。現在発狂中だよ。」

「状況的に考えて……魔女マジコの仕業ね？」

その化けの皮を剥がしなさい。人の死をなんだと思ってるのっ!？」

……あー、これは、

『マミ、どうやらクトがなんらかの方法でキミに化けたと思ってるみたいだ。どうするんだい?』

『大丈夫よ、私にはティロ・フィナーレ（魔法）があるっ!』

『もうやだこのバーサーカー会話が成立しない。』

あの大砲擬きでどうするっていうのさ?!?! あと（魔法）ってなにさ?!?!』

『クトがティロ・フィナーレ（物理）打てるからよ!』

『ただの右ストレートの間違いだろう?!?!』

ああ……せめてツツコミがもう1人欲しい……ボケは2人もいらぬし片方はい
ろんな意味で規格外だし……

ところで、なにか忘れてるような?

「……………聞いているのかしら、あなたたち……………っ?!」

あ、そうだそうだ。 暁美ほむらと鹿目まどかだ。

「勿論、聞こえているわ」

「……………なら、さつさと元の姿に戻りなさい」

「元の姿ねえ……………」

勘違いしているようだけど、私は巴マミ本人よ?」

「……………」

ほむらも、マミが本物だとは思っていたみたいだね。

ただ、彼らの視点でそうだと仮定すると——

「—じ、じゃあ、マミさんは無事で、ちゃんと生きてるってことですよね!」

「ええ。 ちよつと危なかったけどね」

……………よかった。 思ったよりマトモに会話が進んでいる。

このままいけば、もしかすると——

「ウソね。あの状況であなたが生還できる可能性は、0よ」

……………キミはどつちの味方だい、暁美ほむら!?!

「……………ほむら、ちゃん?」

「巴マミ。あなたのことはもう調べてあるわ。当然、戦い方も。」

——^単マスケツト^発銃^銃に、リボンを使用した拘束魔法。これが、あなたの主な攻撃手段。たつたこれだけで、あの状況を、誰にも気が付かれずに打開することは不可能よ」

「……………じゃあ、今ここにいる私は何なのかしら? 足ならあるわよ?」

「……………どうせ聞いているのでしよう、クト。さっさと現れないと——
一瞬で魔法少女に変身するほむら。」

あ、とつてもやな予感(本日二度目)。

「——バママミが死ぬわよ?」

次の瞬間——

ボクらは、発射済みの対戦車榴弾に囲まれていた。

「——ほむらちゃん?!?!」

「クっ——」

暁美ほむらが変身した時点でママミも変身し始めていたけど、間に合わない。
あこれ、少なくともボクは死んだな—。

「——私、これでも『ヒーロー^御は遅^都れてや^合って来^主る理^義論』ってあんま好きじゃ無いんです
けど?」

まあその塊な奴が言っても説得力無いのは分かっただけだよさ」

器に依存しているアンタじゃ私にマトモなダメージを通すことは出来ないし、それだけでなくも2対1、オマケにそっちはパン鹿目まどかピーを連れてるときだ」

「……………敵の言葉を素直に信じるとでも?」

クトの背後に瞬間移動したほむらが、両手に持った大型拳銃を頭部に突きつける。

『クト?!』

『大丈夫だから、声かけたら直ぐに移動出来るように変身解いというて。』

さて、さて、——』

「…………デザートイーグル・50AE、か。 M⁹2F^S ベレッタといいリボルバーM²といい、良い趣味

してるな」

「あなたに褒められてもなにも嬉しくないわ」

「まさりやそうか。」

で? 撃たないのか?」

「——どうやって巴ミAMIを生き返らせたのか、説明しなさい」

「わざわざ最強のマグナムオートを出しといてそれk」

ゴリツという音が、クトの後頭部から響く。

「…………分かったから、銃口を降ろせ。 地味に痛い」

「…断るわ」

「あ、そ。

「つつてもねえ……生き返らせたって、そもそも死んでない人に使う言葉じゃないと思うがな」

「……………続きを喋りなさい」

「いちいち頭を小突くでない。」

「……………私は魔女じゃなくて魔法少女だって言ってるのに、話聞かなかつただろ？ それで一人ずつゆっくり言い聞かせようと思って、まず近くにいたマミを拉致った。それだけだ」

「……………あなたが仮に魔法少女だとして。なぜソウルジェムが濁りきった状態で放置しているのかしら？」

「これでももう今日だけで3回くらい汚れを落とすただけだな？ コレについては寧ろ私が聞きたい」

「……………信用出来ないわね」

「……………」

「取り敢えず、一旦引いてくれないか？ 私としても、無駄な戦闘は避けたい」

「……………チツ。」

「さっさと行きなさい」

「どーも」

拳銃を下ろしたほむらをそのままに、クトがこちらに歩み寄ってくる。

「——マミさん！」

「? 鹿目さん？」

移動を始める直前、縋るような目をした鹿目まどかが、マミに声をかけてきた。

「また……また、魔法少女体験コースに、連れて行って、くれますか……?」

「！」

——ええ、もちろん！」

「……………マミ、保護者サマがマジギレしそうだから今日はやめてくれ。本気のア

レを生け捕れとか、私でもキツい」

冷や汗を垂らしているクトの視線を辿れば……………

視線で人を殺せるなら、殺人ビームがバンバン出まくってそうな目つきの暁美ほむら

がいた。

「……………怖っ?!」

「……………右に同じく。マミ、行くよ」

「分かったわよ」

少女移動中

「——それで、どこへ向かってるんだい？」

「特にどこへも」

「？ さつきは予定があるって、」

「あれほむほむから逃げる為のウソな。」

——っ!? なんか寒気が……?」

ま、まあいいや。 実験結果についても話したいし、どつか適当な所でお茶しない？」

実験……ああ、ソウルジエムの穢れが洗剤で落とせた件か。

「それなら、この近くにス〇バがあるわよ」

「……金、足りるか？」

「大丈夫よ」

「……最近の中学生パネエ」

くさらに少女移動中く

—某コーヒーチェーン店

「そいじゃ、取り敢えず結果だけ言っていくぞー。」

まずソウルジエムの穢れ。石鹼程度だと効果無かったし、逆に漂白剤みたいな強酸性の洗剤だと、穢れこそ落ちるけど身体の方にまで悪影響が出る。ま、コスパ面から見ても重曹一択だったな（家庭用漂白剤は、塩素系はアルカリ性、酵素系は中性だったはず。酸性はトイレのサンポール）

「……因みに、その悪影響って？」

「魂が物理的に真っ白になります。」

多分普通のソウルジエムでやってたら頭がパーになるな、あれは」

若干引きつった笑みを浮かべながら、コーヒー（一番安い奴）のコップを傾けるクト。

「……それで、他には？　まずは、なんて前置きしたなら、他にもあるんでしょう？」
 「ああ、私が回収したグリーンフシード、どうにかしてソウルジエムに戻せないか試して
 んだ」

そう言ってから取り出したのは、お菓子の魔女のグリーンフシード。

「結論から言うぞ。」

……多分、成功する」

「……………はあああ?!?!」

もうやる事なす事無茶苦茶だよキミ?!

「……………えっと、どうやってやったんだい?」

「ん……………」

こう、きゅつとしてどかーん的な?

適当に弄ってたら浄化され始めたから慌てて止めたんだよ。　浄化しきったとして

も入れ物肉が無いからな」

「わけがわからないよ?!?!」

思わず絶叫。　幾らなんでも規格外過ぎる!!?

「……………そんなことよりキュウベえ。　カウンセリングって出来るか?」

「え?　ある程度なら出来ると思うけど?」

「じゃあマミのことよろしく。私にや無理だ」

「へ？」

振り向いて、マミの方を見ると――

「……………今まで、街の平和を守る為って、人を……………」

――俯いて、肩を震わせているマミがいた。

「……………あ、そっか。グリーフシールド^魔ソウルジエム^少が確定したからか」

「昨日の夜は、多分自己防衛かなにかで、無意識の内に考えないようにしてたんだろうな。それを改めて突きつけられて……………か」

席を立ったクトが、マミのソウルジエムから、クトのソウルジエムに穢れを移し続ける。

「……………取り敢えず、思いつきり泣け。」

周りの目と耳は誤魔化しておく」

効果を分かりやすくする為か、ドーム状の透明な膜が、席ごとボクらを覆う。

膜が床に到達する頃には、ハンカチを目元にあて、涙を流しながら、何かを呟いていた。

「……………クト、」

「分かっている。心を覗ける私が、傷心の1つも分からないとでも？」

「違ふよ。」

——絶対に、インキュベーターを止めよう。ボクらが、決着をつけるんだ」

クトは、少し驚いた顔をしていた。

「……………どうにかするアテはあるのか？ インキュベーターの駆逐は現実的じゃない。」

1人救済する間に、新しい魔法少女が増える。イタチごっこになるぞ」

「……………キミに、頼みがある」

クトも『その考え』に辿り着いたのか、眉を潜める。

「……………鹿目まどかを使う気なら、私は反対だ」

「違う。キミだ。キミの魔法少女としての才能——絡んでいる因果は、鹿目まどか

すら上回る」

「……………キープした願い、か。」

だが、『絶望』はどうする？ その願いだと、元魔法少女は全滅、とか起こりうるぞ」

「それも含めて願えばいい。」

ただし、どう足掻いてもキミには特大の絶望が襲いかかる。

魔女の強さは、元となった魔法少女の強さに比例する。

……………キミが絶望に負ければ、確実にワルプルギスの夜よりも強大な魔女になる」

「……………」

無表情のまま、硬直するクト。

やがて、マミとクトのソウルジェムをテーブルに置き、離れていく。

「!? クト、ソウルジェムは——」

「外の空気を吸ってくるだけだ。」

……………その話、少し、考えさせてくれ」

そう言って、膜を通り抜けると、そのまま店の外へ出て行ってしまう。

—結局、ボクらがクトに合流したのは、マミの元にまどかからの電話がかかってきた後だった。

その内容は、——

—魔女の口づけがついた大勢の人がいる。——

裏ルート：第9話

—見滝原市 上空

sideキユウベえ

—やあ！ みんな大好きキユウベえだよ！

……え？ なんでこんなハイテンションなのかって？

それはねえ……

「——クト！ あそこ！ あの廃工場よ！」

「オウケエイ！ ハッハアアテンションプリーズ只今から当機は墮ちるぜちやんと掴まれよ振り落とされっぜはい3、2、急降下あああああああ！！」

「キヤアアアアアアアアアア！！」

「もうヤダこの人たちいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

「……生きてる………はは、生きてる………はは、ははは！ 生きてる！ 無事生還出来た！ ああ、生きてるって素晴らしい！ この世の全てに感謝を！ 奇跡万歳！ 魔法万歳!!」

「照れるぜ褒めるでない」

「キミには言つてないよ邪神つつ!!」

「大袈裟ねえ」

「キミは一度高度200メートル弱からのバンジージャンプを体験すべきだよ!! その範囲なら中点にソウルジェムを置けば意識保てるから!!」

ゼエハア荒れる息を整えながらツツコむ。

「なんでキミたちケロリとしてるんだい?! というかマミは高山病とか大丈夫なのかい!?!」

「キュウベえ、世の中にはな、

奇跡も魔法もあるんだよ!」

「そうだったああああ!!」

「——さて、そんなことは銀河の彼方へギガンティックスロー^投しておいて。

まどかが助けてを求めてるんだろ！

速攻で片付けるよ！」

「……キミの場合、本当にワンパンで十分だからシャレにならないんだよね」
壁を壊して侵入するつもりか、クトが拳を押し当てて――

「……………マミン？」

「―っ、ご、ごめんなさい……」

私、戦えない……………」

……さつきまでのテンションがウソのように、震えて、座り込んでいた。
「……………ごめんなさい。でももう私、人を傷つけることなんて――」

「マミン」

クトが、振り返らずに話しかける。

「……………このままだと、まどかは死ぬぞ？」

「……」

「……まどかだけじゃない。この中には、魔女に操られている人が大勢いる。」

「このまま放っておけば、全員、死ぬ」

「……なら、魔女はそのままに、その人たちだけ助ければ、」

「……マミ。」

「……少し前のことを思い出そうか。」

「私はあの晩、『ダークヒーローになつてよ』って言った。」

「……なんでダークヒーローって言ったか、分かるか？」

「……？」

「——『ヒーロー』は、見ず知らずの人も含めて、みんなを助けなきゃならない。」

「確かにカツコいいし、誰にだって出来ることじゃない」

「クトは、だがな、と続け、」

「——私に言わせりゃ、んな責任なんぞクソくらえだ。」

「絶対的な正義は無い。」

「100%の正しさなんてのも無い。」

「正義つつうのはな、常に勝つた者が決めることだ。」

「負ければ、それまで。」

ただ死ぬだけならまだマシ。

死してなお、嘲られ、利用され、後ろ指を指され、汚され……………」

「……………」

クト…………？ キミは、一体…………

「…………己の正義を貫き通すには、どんな形でもいい。勝て。

でもって、自分の望みを叶えて、幸せになつてから死ね。

万人に受け入れられる必要は無い。

自分の守りたいものだけ守れるようになれ」

「……………」

クト、キミは、どんな過去を——

フラリと、マミが立ち上がる。

「…………クト。 私は、みんなの平和を守る魔法少女になるって決めたのよ。

なら、私は、それを貫き通す。

人も救う。 魔女だつて救つてみせる！

——力を貸して、クト!!」

…………彼女は、振り向かない。

「……それが、マミの答えか？」

けれど、骨翼が、その鋭い先端を見せつける。

だけど、マミの答えは、

「——ええ!!」

力強いものだった。

「……そうか。」

——上等だ！ 後でへこたれんなよ!!」

クトは、獯猛な笑みを浮かべて振り向き、

「——『ツエ^申ペシユ^刺』つつ!!」

鋭利な骨が、壁ごと内側の魔女と使い魔に突き刺さり、貫通し、縫い止める。

「グリーンフシードさえ残っていれば、後はどうにでも出来る！ やつちまえ、ママ!!」

「任せなさい！ 『ティロ・——』」

一瞬で変身したママが、必殺技を、決める。

「——ファイナーレ』つつ!!」

ズツツドオオオンツツツ!!!

魔砲の一撃が直撃した魔女は一瞬で崩壊し、そこにはボロボロに粉碎された壁だった残骸とグリーンフシード、呆然としている鹿目まどかが残った。

「——鹿目さん！ 無事!?!」

「え？ あつ、はい!!」

マミがまどかを保護して、奥にいる被害者の様子を見に行っている間、グリーンフシードをポーチに入れるクト。

「……………頼むから、自分を疎かにする正義にはなるなよ、マミ」

「……………随分と彼女に肩入れするね」

「……………昔、憧れてた奴に、何処となく似てるのさ。」

……………さてと。 こりや私もいっぺんソウルジェムピカピカにするかな？ 広範囲探

知するのに、自前の能力だけじゃちとツライからな」

「……………道理でソウルジェムを使わずに魔女の居場所が正確に分かるワケだよ」

「ふはは。」

じゃ、取り敢えず、——」

ギチイイイツツ！ と、手に力が込められ……？

「——開幕ブツパするには相手が悪かったなあ、美樹さやかあ!!」

ゴキイイイインツツ!!

「——っ!? くっ!!」

拳と剣がぶつかり合い、異常な音が響く。

「オイオイ、最近の中学生はいきなり切り掛かるのか！ 随分とアグレッシブだな！」

「初戦闘の相手がアンタだとしても！ マミさんの後を継いだあたしは、負けられないんだよ!!」

返す刃を骨翼で受け流し、掌を下腹部に押し当て——

「——『発勁』！」

ズドンツツ!!

「!? ぐ、あっ!?」

轟音をたてて、美樹さやかは身体が数メートル吹き飛ぶ。

「マミの後を継ぐねえ！ 本人が聞いたら勝手に殺すなって言われっぞ！」

「うるさい！ 魔女のアンタになにが分かる!？」

「よしあの孵卵器野郎共マジでやるっ!!」

剣と拳、骨翼が、かなりのペースでぶつかり合う。

美樹さやかは本気で殺しにかかっているけど、………クトは遊んでるね。

まあ、技術、能力、手数、経験、全てに於いて圧倒的優位に立つクトからしてみれば、新米魔法少女を下すことなんて、朝飯前だろうね。

ガギインツツ!!

「あっ!？」

そうこうしている内に、クトのアップパーがさやかの剣を弾き飛ばす。

「——私の勝ちjy」

「なにやってるのよこのバカっ!？」

あんきるしゅたいんっ!？」

ドゴオツ!!

………と思えば、マミの容赦ない飛び蹴りが炸裂、近くの花壇に頭から突っ込んでいた。

「うえ!! マミさん!! ナンデ!! えっ、ホンモノ!! 生きてる!!」

「ええ。心配させちゃったわね。でも、大丈夫よ!」

「マミさん”く!!」

「さやかちゃん、魔法少女になったの?!」

「おう! どう? 似合う?」

……女子中学生3人は置いといて、花壇の反対側に周る。

「……気分はどうだい?」

「……………アレだな。首だけの剥製って感じだ」

ズルズルと、葉っぱと小枝に塗れながら、上半身を引き出す。

「——っ! まどか、下がって!」

「マミさん、一緒にあの魔女を斃そう!」

「え? えっと、」

「……………まあいいや。軽く揉んでやつから、2人でかかって来い」

殺気立つさやかと戸惑うマミを、汚れを払いながらクトが見据える。

「えっ!？」

「……随分ナメた口きくじゃん？」

「ハッ！」

——3分だ」

黒い魔法少女に変身すると同時に、ゴキ……ベキ……という謎の異音が、クトの全身から、響く。

「な……何が、3分なんだよっ!？」

「3分——」

それだけあれば、あんたら2人をブッ飛ばすには、手加減してても充分だ」

2人を——特に、美樹さやかを睨みながら、宣言する。

「……………な……………」

なめんじやないわよ……っ!」

さやかが一気に距離をつめる——

が、

——ズドンッ!

「!? う、わ、」

クトがその場で地面を踏みつけることで発生した揺れに足を取られた隙に、クトが一瞬で背後に周る。

「基本スペックがダンチだから、ある程度はしようがないにしても、あんたには足りないものが多過ぎる。」

「まずはスピード」

「さやかが剣を横に振るのを上体を仰け反らせて避け、戻る動きで頭突く。」

「!? つぁー」

「次にガード」

「怯んだ隙に襟を掴み、そのままバックドロップを決める。」

「?!?!? グッ——らあっ!!」

「パワーも足りんな」

「密着した状態での肘打ちがクトの眉間に突き刺さるも、微動だにしない。」

「あとママにも言えることだけど、全く連携出来ていない」

「?! ぐあっつ!!」

「!? 美樹さん!?!」

「ママの銃撃も、さやかを武器の様に振り回すことで弾丸を防ぎ、更には展開されていた大量のマスクット銃も薙ぎはらって、次の一手を遮る。」

「このっ、離せっ!!」

「—あぐっ!?!」

「技術も無い。素人が慣れない武器持つとか、自殺行為だぞ?」

なんとか両手で剣を振るうも、裏拳でアツサリ弾かれ、そのまま足元に叩きつけられる。

「やっぱり貴女、強いわね!

でも、これならどうよ!!」

「——!」

地面から伸びたマミのリボンが、クトに巻き付く。

が—

「—フンツ」

ブチィ!!

!?!? うそっ!?!」

それすら一瞬で引きちぎり、展開しかけていた砲門を容赦無く蹴り上げる。

とつさにバックステップで距離を取ったマミに追撃しようと、クトが距離を詰め—

「—はああああああっ!!」

「おらよっ!」

背後からさやかかか斬りかかるのを、後ろ蹴りで弾き返し、マミには肘打ちが刺さり―

「な、めるなああああつっ!!」

「!?」

―しかしさやかは蹴りを受け止め、そのまま剣を振り下ろした。

「―ッ!!」

クトはバク転で回避、そのままサマーソルトで蹴り上げるも、それをさやかか上体を反らせて避け、さらにその動きに合わせて切り上げる。

「とつた!!」

「思い上がるな、人間!!」

……けれど、邪神クトはそんなに甘くない。

切り上げを骨翼で受けながすと、着地と同時に地面スレスレの回し蹴りでうつ伏せに倒れ込ませ、それに合わせて膝蹴りを顔面にブチ込み、仰向けに勢いよくひっくり返す。

ゴツツツ!!

「ガ……ツ!?」

「―トドメだ」

ドゴンツツツツ!!

踵落としが鳩尾にめり込む。

「ぐっ……………う……………」

「美樹さん?!

『ティロ・ー』

「ソレは一発逆転にはチャージが長過ぎる」

トーンー

クトが、マミの首筋に軽く手刀を当てる。

——本気なら、首を引き千切れるぞ、という意味を込めて。

「……………分かったわ、降参よ。」

もうちよつと手加減しなさいよ。結構痛かったわよ?」

「悪い悪い」

「あと、美樹さんにはちゃんと謝っておくこと!」

「えー、向こうから突つかかってk

「クト?」

………あい」

端から見れば、仲のいい姉妹に見える漫才をスルーして、気絶しかけのさやかの方を見る。

「さやかちゃん……？ さやかちゃん!？」

「う………まどか、私、いきなり負けちゃったよ……」

「………あー、さやかか？」

気まずそうに、クトが歩み寄る。

それを見て、まどかがさやかを庇うような素振りを見せる。

「………私、そんなに魔女に見えるか？」

「………魔女っていうより、悪魔に見える」

「Σ(。D。)?!?!」

ガツクリと項垂れるクト。

………うん、まあ、自業自得だね。

「………と、取り敢えず、美樹さやか。

その………悪かったな」

「………次は、絶対、勝つ」

「ん、楽しみにしてる。

—あ、そうそう。

足りないだけだったけど、光るモンもあったから、伝えておく。

—成長速度と、反応速度」

「……………」

「私のマトリックス避け——あれ、実践してみるとバランス取るのがスゲエムズイんだよな。アレをアツサリ吸収するし。あと、最後の斬り上げ。正直、あの蹴りで決まると思ってたからな。

それと、途中、私の一撃を耐えたガッツも良かった。

……………頑張れよ。あんたなら、私を斃せる」

そこまで言うのと、クトは、さやかたちから離れた。

「……………クト、あの励まし、何処までが本気だい？」

大分無理矢理感があつたよう n

「全部」

「はあ!？」

顔を覗き込めば――

時折見る、嘲笑するような自虐的な笑みではなく、

――心の底から楽しそうな笑みが、あつた。

「特に反応速度。あれは磨けば一級品になるな」

「……………クト、彼女の願いは、」

「分かつてる。反応速度とは相性の悪い、癒しの願いだ。

……………ま、終わった事を言っても仕方がない。帰るかあ」

「ところでクト、私の良かったところは？」

「一番は火力だな。そもそもマミは結構強いから、私からダメ出しする点は無いな。

……………単騎での戦闘力は、だけど」

「……………それって、」

「やっぱり連携が下手。 マミの特徴は超火力の一撃必殺なんだから、集団戦だと諸刃の剣だぞ、それ」

「……………貴女、前にティロ・フィナーレを喰らって無傷じゃなかった？」

「……………グハツ?! あの時のダメージがっ?!」

「それは大変ね、包帯代わりにコレを使うといいわ」

「……………あの、マミさん? このリボンはなんでせうか??」

「縛り方の実験台の確保よ」

「顔が何処ぞの新撰組一番隊長ソックリなんですけどそれはっつ?!?!?」

裏ルート：第10話

sideキユウベえ

— マミの部屋 夕方

「ただいまー。」

……寝てるのね」

学校の帰りに乗っていたマミの肩から飛び降り、リビングの窓際で鼻ちようちんを膨らませながら爆睡する（外見は）幼女の傍に座る。

マミは中学生としての生活があるのに対し、クトは、文字通りソラ宇宙から落ちてきた少女だ。当然身分証の類も無く、学校も無い。

本人曰く、やろうと思えば能力で誤魔化すことも出来るらしいけど……

ま、気紛れな性格のクトのことだ。まずやらないだろうね。

そんなこんなで、マミが動けない日中、特に昼は町内パトロールで魔女狩りをして、余った時間で簡単な家事や趣味に没頭するという、だらけた生活を送っていた。

「はあ……………クト、起きておくれ」

「いあー……………いあー……………」

「……………」

当然といつては何だけれど、声をかけた程度じゃ、この墮落少女は目を覚まさない。

最初の頃は、いつそ見事なまでに膨らんだ鼻ちようちんを割ったり、額に水滴を垂らすとか、クトのリアクションを楽しめるような起こし方をしていたけれど、最近は、もつと別の方法で起こすことにしている。

……………だつて、

「あー手が滑つてクトの紅茶にトウガラシの種がー（棒）」

「what?！」

狸寝入りなんだもん。

キツチンから聞こえてくるマミの棒読み台詞に跳ね起きてツツコミを入れるクト。

「クト、おはよう」

「……………くーすー」

「なんでキミがそこまで惰眠を貪るのを好むか分からないよ」

「午後の陽気」

「納得したよ」

「オイマテマジカ」

もはや日常の一部とかした応酬をしていると、ママが紅茶とお菓子を持ってくる。

「——！今日はカップケーキか！」

「キミ、性格の割にはかなりの甘党だよね」

「どういう意味じゃん??」

言いながら、クトがケーキに手を伸ばすと——

「クト?」

「……あー、うん、」

ママに窘められ、照れたように指先で頬をかく。

「……………お、おかえり、ママ」

……………青春だねえ。

「……………青春、違くない?」

ケーキを食べ終え、ポットの紅茶も半分になった頃。

「——クト、今晚暇かしら？」

「基本年中暇でつせ。一応、変異した方の魔女は撃破済みだし」

床に置いてあるポーチを軽く叩くと、中から僅かに硬い物がぶつかる音がする。

「美樹さやかと魔女退治ツアー、だろ。使い魔から成長したタイプを確認した場所は

メモってあるから、そこから追えばいいさ」

「……………悪いわね」

「いいってことよ。誰かの絶望する顔見て愉悦る程、性格歪んでないし」

魔法少女にとって必須のグリーンフィードすら、クトという特大のイレギュラーと、マ

ミのような正義感のある少女の前には、別のモノ——

絶望に負けてしまった被害者、という存在になる。

グリーンフィードに穢れを押し付け、インキュベーターに取り込ませるとするのは、考えようによっては『殺人』となる。

もちろん通常ならグリーンフィードをソウルジェムに戻す事は不可能だし、ましてやそれは、魔法少女にとっては生命線ともいえるモノ。そこまで考えが至ったとしても、

そういうものと割り切るしかない。

「ただ、クトには、そんな『仕方ない』を真正面から握り潰す理不尽性がある。

ソウルジエムを、誰も想像出来なかった、というか思いついてもやらないような方法で浄化し、

魔女との命懸けの戦いも片手間で制し、

拳句、グリーンフィードすら浄化可能という、まさしく『理不尽』。

「……うん、改めて思い返すと、完全なまでに『ぼくのかんがえたさいきょうのまほうしようじよ』だね。

「敢えて問題点を挙げるとすれば、性格が若干、いや、かなり似合わない点だろうね。

「……おい、今ソコソコ失礼な事考えてなかったか？」

「気のせいだろう。それよりも、予定は決まったかい？」

「先送りって事がな。元魔法少女か使い魔成長かを見分ける方法が私の能力頼みな以上、下手にさやかに魔女を斃すなどはいえんし、かといって、ほつといて後から後悔っていうのもマズイからな。暫くはつきつきりって事になったよ」

「成る程ね。

「ところで、彼女についているだろうインキュベーターはどうするんだい？」

「今日は保留。纏まってるのを無双するならともかく、一匹二匹だけ潰すっていうのもなあ」

「幾らでもいるからねえ」

ポーチに入っていたグリーンシードを小さな金庫にしまい、軽くなったポーチを腰に巻く。

「そいじゃ、飛ぶぞ」

「歩きで行こう!?! 頼むから!!」

く少女移動中く

——結局ボクの懇願は無視され、飛んで美樹さやかの家に向かった。

現在、出待ち中とのこと。

「……………バカと煙は高い所になんとやらと言うけど、キミの場合、周りを巻き添えにして急上昇するから迷惑なんだよね」

「え？　じゃあ低空飛んでソニックブームで街薙ぎながら移動するのか？」

「根本的に飛ばないという選択肢は？」

「飛べる翼がある以上、選ばないな」

「—それより貴女、音速で飛べるの?!」

「おう。　衝撃波の処理が面倒だから、普段はしないけど」

「今度いいかしら?!」

「……………低温やら爆音やらでロクな環境じゃないぞ？　というか私がヤダ」

「えっ」

そうこうしているうちに、さやか

——ではなく、鹿目まどかが現れる。

「—あ！　マミさん！　クトちゃん！」

「あら？ 鹿目さん、どうしたのかしら？」

「私、さやかちゃんの事が心配で……マミさんも、あの時、死んじゃったと思ったから、怖くなっちゃって……」

「大丈夫よ。私もいるし、今度は切り札リーサルウェポンもいることだし」

「ヤバくなったら肉盾にされそーな予感」

「アイテム↓使用で、全自動かつ問答無用で敵をワンターンキルする盾だね、分かるとも。メタル狩りにもってこいだよ」

「なして例えがドラ○エ？」

「……………えっと、なにこの面子??」

あ、美樹さやか。

……………と、インキュベーター。

「まさか、このメンバーの中で君が一番弱い。足を引つ張らない為にも、僕と契約して

魔法少女n

「やったらオブジェ血祭な」

……………さやか、いきなり目の前に魔女がいるけど？」

開口一番に契約と、クトの排除にきたか。

さやかからは、クトが魔女だというイメージは拭えてない。

すわいきなり戦闘かと、いつでも逃げられるように足に力を入れて――

「あー……それなんだけどさ、キュウベえ。クトって、本当に魔女なの？」

「そうだよ」「違うよ」

「??？」

そっか、彼女にとつては、ボクらは同じ『キュウベえ』だからね。

「……………そういえば、なんでクトはそのキュウベえ以外を『インキュベーター』って

呼ぶのかしら？」

「ソウルジェム、エントロピー、グリーンシード、インキュベーター 孵卵器」

「……………分かったわ」

「??？」

さやかとまどかは、全く理解出来ていないようだった。

それもそうか。彼女たちは、魔法少女の実態を知らないんだから。

「…………このままだと会話が進まなそうだから、取り敢えず今日は、ボクのことを『ジユウ

ベえ』と呼んでおくれ」

「…………分かった。それで、キュウベえ。クトが魔女って、本当なの？」

「当たり前じゃないか。君には彼女の胸部にあるグリーンシードが見えないのかい

「？」

「そうなんだけどさ。魔女っぼくないというか、なんというか……」

「君はそんなあやふやな理由で彼女を信用するのかい？ 訳が分からないよ」

ううむと腕を組んで唸るさやか。

「……………クト。あたしたちを襲わないって、約束出来る？」

「おう。 約束しよう」

「……………ん。 ならあたしは、あんたを信じる」

「さやか!? 君は魔女に背中を預けるといのかい?!?!」

「うん。」

……………言い訳するみたいだけど、不意打ちもダメ、真っ向から戦ってもダメなら、
先ずは逃げなきやだし」

「正しい判断だ。 勝てると思ったら、またおいで。 相手になろう」

「……………」

邪魔者の排除に失敗したインキュベーターが、真顔のまま硬直する。

……あれでまだ、まどかを魔法少女にする事を諦めてないのだから驚きだよ。
「よし！ 行こう！」

少女探索中

―裏路地

ほぼ元の景色のままの、不安定な結界を見つけ、侵入する。

「……使い魔の結界ね」

「楽に越したことはないですよ、初心者なんだし」

「——あつ！ あそこ！ 使い魔が！」

まどかの指す方を見れば、「クレヨンで描かれたようにデフォルメされた小さな飛行機からはえた生首がボールで遊んでいる」という、字面にするとホラー以外の何ものでもない使い魔が漂っていた。

「よっしや！」

——くらえっ！」

変身を終わったさやかが飛ばした斬撃が、使い魔を——

バチイッ！

「!? 弾かれた:!?」

「——ちよつとちよつとー、何やってんのきアンタたち。

あれ使い魔だよ？ グリーフシールド持つてる訳ないじゃん？」

丁度十字路になっている場所の左側から、槍を持った赤い少女が歩いてくる。

「:魔法少女？」

「やっと来たね、杏子」

「——あつ、逃げちゃう！」

使い魔が、いつの間にか逃げ出していた。

流石に、4人もの魔法少女が集中した場

所からは逃げる程度の習性はあるみたいだね。

「追わなきゃ——」

「だから、やめろっつーの。」

「——!？」

少女が、さやか杏子の行く手を阻む様に槍を向けるけれど——

その穂先は、いつの間にか掴まれていた。

「……………アンタ、なんのつもりだ？」

「かわいい後輩を見守る先輩だよ。」

さやか、追え。こいつは私が抑えておく。マミ、一応ついて行ってやってくれ。

キュ…:ジユウベえ、離れとけ」

「ありがと！ まどか、行くよ！」

逃げていった使い魔を追って、さやかとまどかとマミが、少女の横を通って行く。

「……………クト、佐倉さんは、」

「知ってる。怪我させねえよ」

「——さて、さて。」

「最近の魔法少女は随分と物騒になったな？」

「……………ああ、そうか。アンタが噂の^{どっち付}コウモリ野郎^{かず}つてか。それに——」

少女の視線が、僅かに揺れる。

通り過ぎて行った少女を追うように。

「……………マミは死んだって聞いたんだがな」

「あの通り、ピンピンしてるよ。アテが外れて残念だったな」

「……………」

「……………」

少女とクトの、槍を掴む力が段々強くなる。

「……………いい加減離せよ、チビ」

「……………格上に対する言葉使いとは思えんなあ、あんこちゃん？」

「あ、あ？」

——上等じゃねえか。どっちが上か、ハッキリさせようか!!」

ガキンツ!

槍を手放すと、魔法で新たに槍を生成、再度突き出す少女。

それに対して、クトは手元で槍を回して持ち直し、突きを防ぐ。

「——これで終わりか？」

「——っ! テメエ、いい加減にしろっつ!!」

少女が矛先を滑らせて斬りかかろうとするが、それに気がついたクトは更に槍を回して振り払う。

距離が空くが、少女は直ぐさま槍の柄を分裂させ、多節棍でクトの持つ槍の枝分かれていまする部分に巻き付く。

「——ん？」

「っらあ!!」

少女が槍を振る動きに合わせて、クトの手から槍が奪われる。

更に追撃され、矛先が、棍が、連撃でクトを襲う。

その全てを、両手だけで弾き、逸らし、防ぐ。

「チッ! さっさと死ねこのチビ!!」

「誰がチビだクソアマ!!」

ゴギイン!!

槍による薙ぎ払いと手刀がぶつかり、もう一度距離が空く。

「…………クソ、しぶといチビだな」

「ケツ! 言ってる、もう手は見えた。あんたじゃ私にや勝てねえよ」

「あ…………? ざけてんじゃねえぞ!!」

少女が、槍を袈裟斬りに振るい――

ギインツ!

「!? なっ――」

「…………ハッキリ言ってやろうか?

私の勝ちだ」

――骨翼が、それを受け流す。

「――魔女がつ! 正体表しやがつたな!

――っ?!?!」

少女が槍を振るうも、その軌道上には既に骨翼が囲うように展開されたことで満足に動かせず、

そのまま壁に縫い付けるように、けれど傷つけないよう、少女の輪郭をなぞるように先端が突き刺さる。

「……………まだ、やるか？ 佐倉杏子」

「!? アンタ、どこかで会ったか……………」

「……………私の方が聞きたいよ、んなこと」

コスツ、という小さい音と共に、骨翼が壁から外れる。

「——で？ どうする？ 私なら幾らでも付き合えるぞ？」

「……………ママが生きてるんなら、この街はアイツの縄張りだ。 大人しく帰るとする

「それは困るな」

……………あん？」

槍こそ構えていないけれど、一切の油断無く、軽く腰を落とす。

「二週間しないうちに、この街をワルプルギスの夜が襲う」

「……………なぜ分かる？」

「……………私があんたの名前を知ったのと、同じ手だ」

「答える気は無いつてか？」

「そうだな……………」

私と同じように、ワルプルギスの夜の襲来について口にする奴がいる。そいつから聞き出したらどうだ？」

「……………考えておくよ」

軽快な音を立てて、杏子が離れていく。

「…大したジャンプ力なこと。あれで飛べないってんだから驚きだ」

「ボクとしては、魔法少女に飛行能力が無いのは喜ばしいことだよ」

「それ、単にあんたが高い所嫌なだけだろ」

クトと杏子の話し合い（？）が終わったのを見計らって、物陰から顔を覗かせる。

「——そういえば、ママたち、大分時間がかかってるね」

「ん？ ん……………」

……………この感じだと、使い魔が逃げた先で魔女にバツタリ、だな。あの魔力の感じだと、私が昼に使い魔殲滅した奴だから余裕だろ」

「……………便利だね、その能力。魔法少女からサトリ妖怪にジョブチェンジしたらどう

だい？」

「だから私は邪神だって」

軽口を叩きながら、ボクらは夜の街を走る。

裏ルート：第11話

sideキユウベえ

―見滝原市 裏路地

今日も、マミたちは美樹さやかと一緒に出掛けるつもりらしく、どうせならとハブラれたクトの暇潰し――魔女退治に付き合う事にした。

まあ、結果は言わずもがな、

と言いたかったんだけどね。

「テメエはっ!! 一々ヒトの武器盗らねえと戦えねえのかよこのチビ!!」

「あんだとコラ?! この大いなるクトちゃんさまが手加減して槍縛りでやってやってんだから噎び泣けゴルアツツ!!」

ガツガキゴギゴガボキドゴガスズガギリドガゴシヤメキゴカキュブツ——

………：そういえば、佐倉杏子もボツチで、尚且つ暇潰しで魔女狩りとかしそうだなあ。
今更気がついてても後の祭りなだけどさ。

因みに事の経緯は、

クト、魔女を半殺し中↓杏子乱入、「テメエか！ 最近使い魔だけブツ殺しまわってるってバカは!？」発言↓クト、安定の挑発↓槍で切り掛かる↓武器をゴ・ウゝダツ、戦闘開始↓激化。魔女は巻き添えくらって消し飛んだ。ついでに杏子といたインキュベーターも塵になった。↑今ココ！

——ゴツギイイインツツ!!!

「っ!?! しまっ——」

杏子の槍の柄——正確には、多節棍の連結部が切断され、そのままの勢いで穂先が杏子の首を——

「——っ、と」

……切り裂かずに、直前で止められる。

「……………テメエ、なんで止めた？」

「私としては、遊び相手に杏子は丁度いいんだよ。だからこんなふざけた理由で脱落すんなってこと」

「ああ!?! 遊び相手だ?!」

「ん? おう。 さやかはまだ素人だし、ほむらは^{初見殺し}ピーキー過ぎるし、ママはルール有りだと私が瞬殺されるし。

そういう意味なら、杏子は丁度いいんだよな。 程よく強いし、私も槍の練習出来るし」

あー……………あれは素で言ってるね。

ほら、杏子も肩が震えてるよ。 主に怒りで。

「……………なめやがってえ……………っ!!」

「よっと」

杏子が隙を突く形で槍の先端部を投げつけるけど、アツサリ避ける。

「上等だテメエ……………ぜってえ負かしてやる……………っ!!」

「お、やる気出てきたか! さて、もいっちょやりますかあ!」

……殺る気の間違えだろう。ま、いいや。

『クト、終わったら声かけてくれ』

『フルバーストオ!!』

—あ、いいよ—』

……うん、ボクは何も見えていない。

クトが杏子に叩きつけた槍から、爆発が起きたなんてふざけた光景も、なんかクトの持つ槍がちよつとずつ変わってきてる光景も見えない。

見えないと思ったら見えない。

……さて、クトとも別れた訳だけど、どうしよう。

あんまり離れるのも不安なんだよね。前に一度、インキュベーターの群に殺されかけた訳だし。

……だからって、あの戦場に戻るのもなあ。クトがそれとなく誘導してた（魔女とインキュベーターはそれで消し飛んだ）とはいえ、ハイになったクトが周りを気にしなくなる可能性もあるし……

「おーい、終わったぞー」

「あれ？ 思ったより早かったね？」

「石突きで力チ上げ喰らわせたらブツ飛んで、そのまま逃げやがった」

「……………生きてるのかい？」

「大丈夫だろ。ちゃんと自分の足で走ってたし」

そういう問題じゃ無いと思うな。

あとクト、その槍……………というか、

突撃槍ランスかな？ どうしたの？

「あんこからパクったのを私の魔力で再構成した」

「……………なんとというか、随分変わったデザインだね」

元となった佐倉杏子の槍は、十字架状の穂先に、多節棍にもなる長い柄が特徴の十文字槍だった。

けど、今クトの右手に握られてるのは、冒流的で禍々しい、名状し難いナニカの爪と思われるモノを模しているだろう三角錐の長い矛先に、それこそ剣として振るうことも可能なんじゃないかと思うほど短い（と言ってもクトの片腕程度はある）柄。

「……………キミの芸術センスは、その、大b、いや、少しばかり、変わってるね」

「? こんなもんだろ。」

そもそも杖や観賞用なら兎も角、殺傷能力を重視する武器に相手を感じさせるような装飾なんていらんし。寧ろビビらせるくらいで丁度いい」

あ、流石にその辺は分かかっていてそのデザインなんだね。

「再構成したって、よく魔力が保ったね」

「さつきウツカリぶちのめした使い魔野郎のグリーンフシード使って、濁るまでのタイムラグの間でやった」

「成る程。それなら、極短時間であれば魔法を使えるというわけだね」

「そゆこと。そいじゃキュウベえ、ちよいとテキトーナトコから色々パクリに行くぜい」

「そのテキトーと色々って、具体的にはなんなのさ?!」

く 人外物色中 く

—見滝原市

土手

「——いや、大量大量！　こんだけあれば暫くは困らないぜ！」

「……………えっと、く、クト？　本気でソレを使うのかい？」

ボクが震えながら指すのは、クトのランス。

「そりや造ったからには使うさ。」

え、なんかミスってる所あった?！」

「いや、どこも間違えてない、設計通りに出来てる。」

……………強いていえば、発想そのものが間違えてる」

「じゃあ問題無いな」

季節外れの鼻歌——クリスマスソングとして有名な『もろびとこぞりて』、でも何処か狂ってる——を歌いながら、工具（盗品）をポーチ（盗（ry））にしまっていく。

彼女が造り上げてしまったゲテモノが、その真価を發揮する日が来ない事を祈ろう——として、そういうえば丁度よく実験台ワルプルギスの夜がいることを思い出して、思わず目が遠くなる。

……………この街に未来はあるのだろうか。

「——ん？」

思わず星を眺めていると、ランスを眺めて愉悅に浸っていた（やつぱり芸術センスおかしい）クトが、急に遠くのビルを睨んだ。

「クト、どうしたんだい？」

「……………もうかよ、クソっ」

ガチャツと、ランスがクトの左腰に無理矢理固定され、更に能力によって隠される。

「……………キュウベえ、先に帰ってろ」

「??? え、ちよつと、——」

次の瞬間、

彼女は、音も無く消え去っていた。

その後、マミと合流することには成功したけれど………

その晩、クトが帰ってくることは無かった。

—翌朝

—ママのマンション

……ママの朝は遅い。

学校がある平日や予定のある日なら兎も角、休日は昼前までゴロゴロしているのは珍しいことじゃ無い。

昨日の夜更かしもあって、ゆっくり寝ていたのに、

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

無粋な連続チャイムが響き渡る。

クトなら鍵の有無なんて無視して入ってくるから、わざわざチャイムを鳴らしている時点で違うだろう。

「ふあ〜……………はいはい、今いくわ〜」

まあ、無視する訳にもいかないから、ママが眠そうな目を擦りながら対応してるけど。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン

ガチャ

扉が開くと、鬼気迫る表情の佐倉杏子と暁美ほむらがいた。

「……………そんなに連打しなくても大丈夫よ。それで？ 2人共、休日の早朝になんの用

よっ？」

「——ママ！ クトは?! あのチビは?!?!?!」

「えっ」

「バママ、説明している暇はないわ！ 一刻も早くあの悪魔を——」

「ちよ、ちよつと!! 落ち着きなさい!! クトなら、昨日から帰ってないわ!!」

「なっ——!?!」

「……取り敢えず、入ったら? 2人とも、髪がボサボサだし……」

なんかこう、血っぽい匂いがするわよ?」

なるほど、クト関連で何かトラブルがあつたんだね。

因みに彼らが連れていたインキュベーターは、クトが仕掛けたトラップで人知れず無音で始末されていた。

……取り敢えず、無断で跳ね板を設置するのは辞めようか。

部屋にすら入れずに犠牲者が綺麗な放物線を描いて墜落していくのが、閉まる直前の扉の隙間から見えた。

——その後、交代でシャワーを借りた2人から、昨日の出来事を伝えられる。

痛みを感じず、四肢を吹き飛ばしても断面の骨すら使って襲いかかってくる『狂人』。その狂人が口にしていた、謎の呪文。

その呪文に含まれていた『くとうるー』と、クトが言った『c t h u l t h u』との類似性。

「……それで。何か知ってるかしら？」

「まず、クトがヒトじゃないのは知ってるわ。本人から聞いたし、身包み剥いで羽がホノモノなのも確かめたし」

「……よくそんなのと生活する気になったな。アタシにや無理だ」

「言動や姿が人にそっくりだから、慣れると気にならないわよ。」

それで、『くとうるふ』？

……先に聞いておくけど、唯の夢って可能性h

「ないっつ!!」

……そう

そう言ったママミは、スマートフォンで何かを検索して、

「——これが、『クトウルフ』よ」

突きつけた画面には、大海に浮かぶ石造りの島に佇む、緑色の、蛸に似た触腕を無数

に生やした頭部に、巨大な鉤爪のある手足、コウモリのような飛膜のある、歪で醜い竜にも、巨人にも見える怪物が映っていた。

……あれ？ 全く似てないね。

「……それと、貴女たちの話に出てきた狂人。この邪神が語られる物語に出てくる『狂信者』まんまよ。

TRPGのRPGでも見て、夢に出たんじゃないの？」

ママがジト目で2人を睨む。

まあクトは、頭のネジが何本か足りないのを除けば、外見は病弱そうな、何処か暗い雰囲気を持つ少女だからね。

あの何が何だか分からない醜悪モンスターと同一とは考え辛いね。

「……そんなハズは……」

「……佐倉杏子。昨日のビルに、もう一度向かうわよ。ついて来てくれるわよね、巴

ママ」

「……………いいわ」

「!? 正気かよ?! アイツらとの追いかけてこはもうコリゴリだ!」

「追いかけるんじゃないわ。」

——私たちが、追いかけるのよ」

「で、でもなあ——」

「佐倉さん、知ってるかしら？ 一度巻き込まれた事件を途中で放り出すのはフラグなの。クローズドサークルモノでも、『こんな所にいられるか！ 意地でも脱出してやる！』って言ったキャラは、その直後、無惨な遺体で発見さる」

「よおし殺るぞお!!」

「佐倉杏子、字が違うわ」

そのままワイワイとだべりながら出掛ける3人。

……さてと、ボクの方でも調べておくとするか。

一番手っ取り早いのは、本人に直接聞く事なんだけど、念話は返答が無かったし。

……そう言えば、美樹さやかと鹿目まどかはどうしてるんだろう。

彼らはこの事態を知らない筈だし。

物は試しで彼らに念w

『キュウベえ、今どうしてるー?』

「クトオ?! 今どうしてるはコツチの台詞だよ!」

……念話を送ろうとしたら、まさかの本人が向こうから送ってきたよ。

『今はさやかんとこに転がり込んでっから心配せんでいいぞい。』

あ、ママには内緒でヨロ』

「内緒でヨロって……まあいいや。」

——ところでクト、聞きたい事があるんだけど?」

『なんぜらホイ?』

「……君は、一体何者なんだい?」

『……………』

クトの明るい声が、質問と同時に途絶える。

『……………杏子とほむらか。一晩でそこまで辿り着いたあな』

「やっぱり、彼女達を襲った狂人について、何か知ってるね?」

『……………ああ。』

——一応、言っておく。

襲われたら、死にたく無かったら、逃げろ。全力で』

「……………クト、君は一体、」

『彼奴らは、私が片付ける。アレは私の、私だけの獲物だ。絶対に手を出すな』
そう言うと、念話が切られる感覚があった。

……クト、君は一体、

何と戦っているんだい？

表ルート：一章 最強の魔法少女

表ルート：第1話

—ミタキハラデパート

side ほむら

—少し前を白い生物が駆ける。

必死そうに、銃口から逃げて。

けれど、逃がさない。

手にしたベレッタM92Fから9ミリパララム弾が連続して吐き出され、その生物を追い詰める。

運が良いのか、それとも悪いのか、弾は標的を捉える事なく端々に当たるだけで、そ

の逃亡を止めきる事が出来ない。

結果として痛ぶることになっているが、別に何とも思わない。

——ビシツツ

「あ!？」

1 発が、その生物の前足の先を穿つ。

それによって走れなくなったのか、恐怖に怯えるような表情をする。

「あ、わ、た、助け、」

「……………」

感情の無い言葉を見殺し、正確に狙いをつける。

アレらに心は無い。

アレらにかける言葉も、慈悲も無い。

拳銃のトリガーに掛かった指に、銃口をブラさないよう、ゆっくりと力を込めて――

「——ほむらちゃん、ダメっ!!」

「!? まどか!?」

弾道上に、何よりも守りたい少女が割り込んでくる。

咄嗟にトリガーから指を離して——

「——まどか、今だっ!」

ブシューウウー——!!

「! チッ!」

更にその間に、消火剤がばら撒かれる。

数瞬、完全に視界を覆った粉塵が収まる頃には——

インキュベーターも、2人の少女も消え去っていた。

更に悪い事に、使い魔程度のものとはいえ、結界が張られ始める。

「クッ、相手している場合じゃないのに………っ!」

——遠くに金髪の魔法少女を確認して、一先ず彼女たちの安全を確信すると、結界から脱出する。

インキュベーターによる情報の部分的開示によって、私の印象は最悪だろうし、この先どうすれば——

「——いいいいいいいい——」

「? この声って……」

間違えなく、インキュベーター。

結界の外側なのに聞こえてくるのは、連中の個体数の多さを考えれば不自然では無いけれど——

「——なんで悲鳴？」

直感的に、近くの剥き出しの鉄骨の陰に隠れる。

直後。

バキイツツツ!!!

吹っ飛ばされたドアが反対側の壁に叩きつけられて粉になり、下手人が姿を表す。

肩まで伸ばしたクセのある深緑色の髪に、黒のワンピースを着た、白い肌の小学生位の少女。

そして、肩にはインキュベーター。

その少女は使い魔の結界を一瞥するやいなや垂直に跳ね、天井付近の鉄骨に着地した。

停止した事で、顔が確認出来るが――

これまでのループで、一度も見た事が無い。

けれど、インキュベーターと行動を共にしているという事は、そう……事だ。

「……新しい魔法少女？ でも、一体何故こんな時に——」

鉄骨の陰から再度様子を伺おうと、首を覗かせると——

——ヒュツ
パアンツツ

「……ほむ？」

何かがすぐ横を通り過ぎ、砕け散った。

——居場所がバレてる!? どうして!?

正体不明相手に出し惜しみしている場合では無くなり、盾を操作して時間を止める。

灰色の世界を走り（途中、漂うビニールから、投げつけられた物体は冷凍シウマイだったことが分かった）、投擲直後のポーズのまま硬直した少女の背後をとる。

脅しの意味も含めて、大口径のM29を後頭部に突き付けてから、時間停止を解除する。

「動かないで」

「……………銃口突きつけられちゃ、動きたくても動けんがな」

……………!?!

特に驚いた様な素振りも無く、ノロノロと両手を挙げた少女に対する警戒を強める。

「晧美ほむら? こんな所で何をしているんだい?」

「—ああ、あなたもいたわね」

そのインパクトで半分程忘れていたインキュベーターに対し、空いていた左手にM9 2Fを握り、狙いをつけ——

「ナイスじゃんキュウベえ!」

!?! くっ」

集中が僅かに逸れた瞬間、少女が足払いを仕掛けてくる。

身体の一部が触れている以上、下手に時間停止するワケにもいかず、無理矢理2つの銃口を向けるも、少女が首を絞める様に正面から腕を伸ばして来るので、バックステップでの回避を余儀無くされる。

「チツ、引っ込んでなさい、この素人——っ?!」

「ハッ! どっちがトーシロジャン!!」

トリガーを引く、が——弾が出ない。

一体、どうして—

「—な、何で、」

「PVCばつかしていてPVPは能力頼みのゴリ押しってか?! ンなんじゃ勝てるモンも勝てないわなあ!!」

一瞬で距離を詰められ、左手一本で両方の拳銃を弾き飛ばされると、そのまま右手で首を掴まれ、拘束される。

「!! グッ—」

「おおっと危ない」

咄嗟に蹴りを放つも、少し姿勢を変えられ、吊るされる。

「あんま抵抗しない方がいいぞ。この高さからただ落ちただけなら兎も角、無理に逃げようとすれば叩き落とす。」

ま、その前に、このまま握力全開にすりやそれで片がつくな」

「……なにが、目的よ」

血管こそ避けられているが、気管を掴まれて、息が詰まる。

早く、外さないと……!」

「なーに。ただ質問に答えてくれりゃいいのさ。別に嘘ついても構わんから何かし

ら反応プリーズ」

「……さつさと、聞けば」

「おおうツンツンしてますなー。」

んじや質問。

「今、何回目？」

?!?!?!?!

ループに、気がついて………!!?!?

「——っつ?!?!?! 一体、何のこと」

「あ、おkおk察した。じゃ、色々事情がメンドいモン同士、お茶でもいかが？」

——向こうも手遅れっぼいし」

少女がチラリと見た先では——

憎きインキュベーターが、ワザとらしい笑みで、2人の少女にこう言った所だった。

「あのね、僕と契約して——

魔法少女になってほしいんだ！」

「……………チツ」

少女の手によって足場鉄骨に自分の足で立つことが出来、悪い状況に舌打ちする程度の余裕は確保出来た。

「客観的に見て、どーよキュウベえ？」

「……………あれで即決する子もいるんだよねえ」

「ま、良くも悪くも中二つつーこつたな。」

で、デートの誘いの返事は？ 暁美ほむらちちゃん？」

インキュベーターその2と会話していた少女が、こちらに話を振ってくる。

……………彼女は、何故か、こちらの事に詳しい。

ループについて口にした時点で、私の答えは決まっていた。

「……………分かったわよ」

く少女移動中く

場所は変わって、同デパートのファストフードコーナー。

私がよくあるセットを注文して、少女はフライドポテトばかり大量に注文して丸呑み

していた。

「ポテトはのどごしっ!!」

……………パフエなら聞いた事あるけど、ポテトで喉越しって……………

「普通に食べなさい、意地汚いわよ」

「ふえひふふう!!」

「……………はあ」

少女の名前すら聞いていないのに、気がついてたら溜息が出ていた。

「……………それで。貴女一体何者よ？ 私がこれまでやり直してきた時間軸に、貴女は影も形も無かったわ。だと言うのに、貴女は私を知っている」

「神です」

「馬鹿にしているのかしら?」

つい拳銃に手が伸びかける。

人の目もあるんだし、我慢我慢。

「ボクとしても、真面目に答えて欲しいな。キミは余りにも異質過ぎる」

「異質?」

妙な事を言ったインキュベーターが、彼女の異常性を口にする。

曰く、宇宙から物理法則を無視して落下してきた。

曰く、失った記憶にあるらしい絶望を祓うために、奇跡を『先送り』にした、最弱の魔法少女である。

曰く、完全に人間の域を超えた身体能力に、出処が不明の情報を持っている。

「……さっぱり分からない、ということが分かったわ」

「それで、キミは一体何者なんだい？」

じつと、ポテトをジュース同然のペースで飲み続ける少女を見つめる。

「……………私が何者か、ねえ。」

——ンなもん、私の方が知りたい」

「は？」

予想外の答えに、目が点になる。

「いや、答えだけなら幾らでも用意出来るさ。」

人間、神、出来損ないの魔法少女、宇宙人、タマ置いてけ、旧支配者—

ま、敢えて自己評価するなら、

1つ、ここ数日恐れられている都市伝説の名前が混じっていたのを聞き流し、少女から紡ぎ出された答えは、

「私は『クト』だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「……………結局、答えになってないじゃない」

ただの自己紹介だった。

「なら話を超シンプルにしようか、『時美時間遡行者』」

身体が一瞬震える。

時間遡行者……………これで、少女―クトが、ループについて知っているのは確定。

「……………貴女、何処まで、」

「メンドいから答えん。先ずは目的をスッキリさせよおか。

あんたは『鹿目まどかを助きたい』。

私は『記憶を取り戻したい』。

ここまではおk？ おkなら思考パートに入るけど」

「……………続けて」

「現状、やり方が分かかってんのは『鹿目まどかを助ける』方法だ。連中につきまとうイ

ンキュベーターと魔女を皆殺しにすりゃいいんだからよ」

「ボクの目の前でそれを言うかい？」

「アンタは殺さねえよ。 どうせグリーンフィード回収の為の個体は残しておかないとだからな」

不穏な会話に横槍を入れてきたインキュベーターを無視し、問題点を指摘する。

「そのやり方には問題があるわ。 インキュベーターは無限に湧くし、魔女だって『ワルプルギスの夜』がいる」

一瞬、クトが考え込むような仕草をする。

「……………ほむら。 命大事にで、バマミと佐倉杏子、場合によっては美樹さやかも込みで、悪プリンのヨーグルト相手にどれ位保つ？」

「悪プリンのヨーグルトじゃなくて『ワルプルギスの夜』よ。」

……………そうね、ひたすら防衛と回避に徹すれば——1時間弱は保つわね」

「上々。 それだけありや充分だ。」

……………あと、ダメ元で聞いておく。 ソウルジェムの方は？」

「……………これまでの経験から言って、最後まで保った事は一度も無いわ」

「…………………………、か」ボソツ

「？ 何か言ったかい？」

……………？

今何か、口走ったような――

「なんでも無い。じゃあ次に考えるのは、味方の脱路防止だな。魔法の出現ポイントって抑えてんの？」

「……いいえ。絞り込む事は出来ても、具体的な場所までは」

「じゃあ『お菓子の魔女』を先制で潰すのは無理か……」

まあそつちは、まどかに交代で張り付くなりなんなりするとして、問題は美樹さやかと佐倉杏子だな――

「……佐倉杏子はバママミが死なないと、この町を訪れる意味が無くなる。美樹さやかは、――」

「何処ぞのヘタレ相手に奇跡を――」

……あ、ええこと考えた――

ニヤアと、クトが歪んだ笑みを浮かべる。

「……嫌な予感がするのだけれど？」

「嫌な事思いついたからね。フフフ……」

――『鳴かぬなら 殺してしまえ ホトトギス』

「……?!?! ま、まさか貴女――」

戦国時代の第六天魔王・織田信長の遺した短歌――

直前まで人死による因果関係について話していただだけに、最悪の予想が浮かぶ。「佐倉杏子は巴マミが死なないと表れない。

美樹さやかはヘタレの怪我を治す為に奇跡を使う。

だったらよおーおー——

——2人ともブツ殺しちまえばよくね？ マミとそのヘタレ」

そして、その予感は、的中した。

表ルート：第2話

sideほむら

—ジャキイツ!!

撃鉄が上がっているM29の銃口を、クトの額に押し付ける。

人の目が集まるような感覚がするが、今は気にしていられない。

寧ろ、場合によっては今ここで時間を巻き戻すことすら視野に入れる。

「オイオイ、魔法少女を一撃で仕留めるなら、ソウルジェムを狙わなアカンよ」

「……………貴女、今自分が何を言ったか、分かっているの?!」

「モチのロナウドで」

「ツツ!!」

薄く笑った表情で、ネタを挟みながら、何処までも軽々しく『死』を口にする。
敵になるにしろ味方につけるにしろ、彼女はここで対処しなくては。

「……………ソウルジェムを出しなさい。貴女は、危険過ぎる」

「実力的にも性格的にも、大人しく従うと思うか？　ぶっちゃけ今現在ほむらの生殺与奪権は私の手の中なんだけど？　あ、ジューズもーらいー」

「……………クツ」

大人しく銃を収める。

—確かに、今の私では勝てない。

だからと言って、対ワルプルギスの夜用の対戦車榴弾を使うのは—

「……………何が目的よ？」

「都合の良い手駒の入手。安心しな。鹿目まどかは魔法少女にさせないし、ワルビ

アルのヨットもキツチリ潰すから。それならいいしょ？」

……………最低限、私の目的を達成するにあたっての協力は取り付けられた、と考えてい

いのかしら？

「……………ワルとヨしか合っていないわよ。　ワルプルギスの夜、よ」

「さいで。　行くよ、キュウベえ」

いつの間にかポテトを完食していたクトが、席を立つ。

「指示はテレパシーで送る。

……………オマケだ。いい言葉を教えておくよ」

「……………何よ」

少女が立ち止まって、それでも振り返らずに言う。

「常識に囚われてはいけない」。私たちと付き合うなら、あらゆるモノを疑え。
だが、探るな。理解するな」

そして――

今度こそ、クトは私から離れていった。

――数日後

「『常識に囚われてはいけない』、ね……………」

「どういう意味かしら？」

見慣れた魔女を手榴弾と拳銃弾で瞬殺し、グリーンシードのストックを確保しながら、未だ答えの出ない問いについて考える。

常識なら、数回目のループで消し飛んでいる。

そもそもの話として、魔法少女そのものが一般的な常識からかけ離れた存在だし

……………

ピヨン

「『曉美ほむら』」

バスバスバスッ！

飛び出てきたインキュベーターを、変身を解く直前だったので憂さ晴らしついでに射殺する。

「——いきなり何をするのさ？ 数を増やすのにもエネルギーを使うのだから、余り無

駄使いしたく無いのだけれど？」

「なら今すぐ地球から出て行きなさい」

直ぐさまもう一匹湧いてくるが、話が進まないので見逃す。

「まあいいや。じきに僕らは、無限と言っても良い程の莫大なエネルギーを入手出来るのだから」

「……………？ それはまどかのことを言っているのかしら？」

「半分は正解だ」

半分は？ これまでのループで、インキュベーターはまどかばかりに集中していた。

……………他に、まどかと同程度の資質を持った少女がいる？

そうだとすれば、最も可能性が高いのは——例の少女。

「……………なら、その残り半分は好きにすればいいわ。私は、まどかさえ無事なら、それでいい」

話は終わったと、狙いをつけて――

「――将来的に、確実に『ワルプルギスの夜』を超えるだろう魔女を生み出すグリーンシードの元に、巴マミが向かった」

「？ それがどう、し――」

……………まさか?!」

インキュベーターの頭を鷲掴み、銃口でど突く。

「答えなさい！ まさか、まどかも一緒にいるんじゃない——」

ループでバママはほぼ毎回、魔法少女の先輩として、まどかたちを連れて魔女と戦っていた。

「気になるなら一緒に来るかい？ 僕もこれから向かう所だしね」

「……………チツ、妙な動きをしたら、殺すわよ」

「それは少し困るね」

屋根の上を走るインキュベーターを、変身したまま追いかける。

位置関係こそこの間と同じだけど、今は銃撃は無い。

まどか——お願いだから、無事でいて!!

〈少女移動中〉

— 廃アパート

結果として、まどかは無事だった。

より正確に言うならば、危険が迫るとしたら、これからだが。

和気藹々と魔法少女についての説明をしながらのバマミと鉢合わせしてしまう。

出来ることなら、先に仕留めておきたかったのに!!

「— あら？ 暁美ほむらさん？」

「げ、転校生」

「あ、キュウベえがもう一匹?!」

「……バマミ。あなた、一般人を連れたまま戦うつもり？」

「ええ、そうよ。生まれたての魔女が相手なら問題無く斃せるし、仮に手こずったとし

ても、彼女たちを守りながらも勝てるわ」

「……………素晴らしい自信ですこと」

油断無くこちらを警戒するマミに対し、皮肉を言うことしか出来ない。

純粋な戦闘能力なら、マミは私を遥かに上回る。

ここは大人しく引き下がるしか無い——

「——待ってくれマミ。彼女は僕が呼んだんだ」

「……………キュウベえ？」

……………余りにも予想外の方面からの援護に、一瞬本気で驚く。

「今回の魔女——実は、もう既に別の魔法少女が乗り込んでいたのだけれど、その子と連絡が取れなくなっただんだ。

状況から言って、犠牲になった可能性が高い。マミの実力を信用してない訳じゃ無

いけれど、今回は共闘してくれないかい？」

「そうね……………分かったわ、急ぎませう。暁美さんもそれでいいわね？」

……………正直、怪しすぎる。

地理的に考えれば、このあたりで魔女と戦闘になるとしたら、佐倉杏子が正体不明だ
ろう。

けれど、佐倉杏子はまだ風見原だろうし——

だとしたら、クト？

……何にせよ、私に断るといふ選択肢は無い。

「……………分かったわ。油断しないで」

そして、魔女の結界に一步足を踏み入れれば――

――巨大なお菓子が、目に映った。

「――っ!？」

――『お菓子の魔女』

奇しくも、それは警戒すべき魔女の一体の結界だった。

けれど……………

あの魔女が、ワルプルギスの夜すら超える程強くなるのかしら？
手榴弾5、6発で爆殺出来るあの魔女が？

——使い魔一匹出ない道を歩いていく。

先に来たという魔法少女が全滅させたのかしら？

……進んで行くうちに、その魔法少女が佐倉杏子であるという線は消えたけれど。

「……………うわあ、なにこの現場。　どこのホラー映画よ」

「……………っ」

「鹿目さん、大丈夫？」

道を進むと、大量のインキュベーターの死骸が転がっていた。

あるものは首と胴を引き千切られ、あるものは頭蓋を潰され、あるものは口から裏返ったハラワタを飛び出させ、あるものは真つ二つにされ、あるものはどう殺ったか血塗れのボールにされ、あるものは……etc etc。

更に、何故か大量の未使用のグリーフシードまで落ちてている。　でも何故？

「……転校生、一昨日くらいにキュウベえのこと殺しかけてたけど——」

「これをやったのは私じゃないわ。そもそも、私なら銃殺が爆殺する」

殺し方で気がついたけれど——

全て、素手で殺ってるわね。どれ程の力が必要かはさて置き。

……じゃあ、その魔法少女って、クトのこと？

——だとしても妙ね。

彼女は、佐倉杏子を呼び出す為に巴マミを始末することさえ考えていた。

なのにお菓子の魔女と戦闘している？

一体どういう事かしら……？

——更に結界を進む。

インキュベーター殺戮現場はあの一箇所だけだったようで、ポツポツと2、3体転がっていることはあれど、さっきのような血の海は無かつた

——ズドオオオオオオン……………

「!? マミさん！ 今のつて、」

「ええ！ まだ誰か戦っているわ！ 急ぎましょう！」

割と近くから衝撃音が響く。

走り出した彼女たちの背後を念の為守りながら、結界の最深部——魔法の居場所へ雪崩れ込むと——

「あり？ お揃い……………つて訳でも無いけど、どうした？」

魔法少女の格好（？）のクトが、魔法を撲殺した直後だった。

「……………えつと、その貴女？ これはどういうことかしら？」

頬を引きつらせながら、マミがクトに問う。

……まあ、気持ちには良く分かる。

魔女の居場所はほぼ破壊の限りを尽くされ、クト本人も大量の返り血を浴びて、只でさえ白い肌が一層強調されている。

一番原型を失っているのが魔女本体で、なにをどうすればそうなるのか、全体隈なくボコボコに陥没していた。悲惨だ。

「……………私にもこの顛末が教えてくれないかしら？」

「お？ ほむらちゃん、久しぶり。この顛末つつても、私も成り行きでこうなったんだけど……………」

本気か演技か、訳が分からないと言いたげに肩を竦めるクト。

「実は――」

「マミー！ ほむらー！ そいつの言葉に耳を貸しちゃ駄目だ!!」

……………淫獣、まだ生き残ったんかい」

私たちについて来ていたインキュベーターが声をはりあげる。

「……………キュウベえ？ それって、どういうー」

「彼女が魔女だ！ 胸元のグリーンシードを見て!!」

「「えっ!?!」」

「……………フアツ？」

慌てて振り向く。

彼女の右胸には――

――確かに、真っ黒なグリーンシードが埋まっていた。

「――騙したわね!?!」

「ーさっさと斃させて貰うわよ!!」

「あゝあゝ!!」

両手に持ったマグナム銃の狙いをグリーンフィードに固定する。

ママも大量のマスケット銃を展開、流石のクトも驚いたようだ。

ドオンドオンドオンドオンドオンドオン!!

ドッグオオオオオオオオン!!

「ちよ、お待ちくだ、ノオオオオオオオオオ!!」

警告無しで即時発砲。 44マグナム弾と魔力弾が雨霰とクトに降り注ぐ。

「っおい待てほむらあ?! マミは兎も角、そっちまでインキュベーターの台詞をさらっ

と信じんのかよ?!」

「うるさい! 最初から怪しいと思っていたのよ!!」

「デスヨネーコンチキショー!!」

『インキュベーターがもたらした情報』という点で確かに引つかかるが、彼女の危険性は既に分かっている。

彼女が魔女であれ何であれ、処理出来るうちに殺しておくべきだろう。

「っさっさと当たりなさい! 貴女に勝ち目は無いわ!」

「だが断る!! そもそもこの程度の密度の弾幕に当たったとつたら恥ずくてウチの妹に会

えんわあ!! リアル弾幕ごっこ経験者舐めんなよーギラスつつ?!?!?!

ヒヨイヒヨイとまるで上から見えているかの様に弾を躲していたが、時間を止めて散弾で球体状に囲み、吹き飛ばす。

「えつと、ほむらちゃん? 今の人? 話しかけてたけど、良かったの?」

「……それは、」

「気にすることは無いさ。おそらくあの魔女は、そうやって油断を誘って不意打ちするのが目的だろう」

「いやアンタが言うなよ淫獣」

クトすら心配する心優しいまどかの問いに答えるインキュベーターにツツコミを入れるクト。

でも成る程、淫獣とは言い得て my…………

「―なっ?!?!」

「へーいお嬢さんs、今ブツ放すと中々に悲惨なことになるぜ痛い痛い?!」

「このっ、離れろっ!!」ドコドコ

まるで最初からいたかのように、クトが美樹さやか隣の隣に立って腕に絡みついていた。で、当然のようにバットで殴られていた。

「美樹さん!! 今助けるわ!」

「早めにお願ひしますコイツマジで離れない!! 蛸か何かか!」ゲシゲシ

「……………え? なしてバレたし?」

「……………はえ?? 蛸?」

「イエス! アイム、オクトパス!!」

「……………ごめんね、ちよつと頭叩き過ぎたみたい」

「ちよい待てその憐れむ様な視線は何?!?! なんか心にクルものがあるんですケド?!?!」

……………

「—いい加減にしなさい!!」

ドウンツツ!

さやかがツツコミ、クトは絡みつき、マミがりボンで引つ張り、まどかが可愛らしくオロオロする、一部を除いてグダグダに成りつつあった場に、1発の銃声を響かせる。

「今度はなんじやい? 私は今ピッチピチ女子中学生のJ.Cの柔肌を堪能するのに忙s

「離れる変態っ!」

ありがとうございますっ?!」

今度こそバットがアッパー気味にアゴにキマリ、今度こそクトが吹っ飛んだ。

すかさずマミがりボンで拘束、口径が完全に大砲のソレに合わせて、奮発してステイングアの砲門を突きつける。 後方確認——よし、誰もいないわね。

「……何か言い残すことは？」

「君たちは騙されている。具体的には私は私は魔女じゃ無いっ」

「処刑することには変わら無いわよ女の敵」

「詰んだっつ?!?!? 待て、話をしよう！ 話せば分k

『『ティロ・ファイナーレ』!!』

「死に晒しなさい」

「いやな感じいいいいいいいいいいいい……」

2人による大火力の攻撃で、空の彼方まで吹き飛ばされていくクト。

ご丁寧に、フェードアウトして逝った場所には、1つの星が煌いた。

……靴の裏に鏡でも仕込んでいたのかしら。

……あれ? 『吹き飛ぶ』?

しまった! あれじゃあ死亡確認出来ない!

ママたちも、何時までも解除されない結界に警戒する。

「……魔女は斃したのに、どうして——」

「さっきの魔女がまだ生きているか——別の魔女に結界を張らせているか、ね」

——でも、後者だと説明がつかない。

他の魔女に結界を張らせたに於ては、使い魔を殺し過ぎている。

「お菓子の魔女本体も死んで——っ?!

待って、どうして私は、お菓子の魔女がもう死んでいると判断出来た?!

——死体を見たからだ。

でも、普通の魔女は死んだらどうなる?

——結界ごと消滅する。

つまり、考えうる答えは?

——『お菓子の魔女』は、まだ生きています!!

「——バママミっ! 魔女の残骸の注意しなさい——」

急いで振り向けば、

魔女が、いつの間にか復活して、

「——え？」

グチャアツツ!!

——マミを、丸呑みにした。

パァンっつ

「っ?!?!」

魔女を仕留めるべく、盾を操作して時を止めようとする、軽い破裂音と共に結界が消えた。

まどかとさやかも放り出された様で無事だったけど――

――その場に、バマミの姿は、無かった。

表ルート：第3話

sideほむら

——巴マミが脱落して、次の日の放課後。

幸いにも、まどかは学校に来ていた。少なくとも、心が折れてそのまま廃人——という事態にはならなかったようね。

……前のループで一度、あったのよね。だから、出来れば巴マミも救いたかったけれど……

もう過ぎてしまったことを悔やんでも仕方がないわ。このまままどかが契約しないように注意して、ワルプルギスの夜を斃す準備を始めないと——

……？ まどか、そっちはあなたの家の方角じゃあ——

………マミの部屋があるマンションの方角、ね。

く少女尾行中く

まどかがマンションから出てきたのを見計らって、声をかける。

「——自分を責める必要なんてないわ、鹿目まどか」

「え……」

ほむらちゃん!？」

「話があるの。」

——私の忠告、聞き入れてくれたのね」

ママのマンションは、学校からまどかの家とは逆の方角にある。

凶らずも、ママが普段通っていただろう道を歩いていく。

「私が……もつと早くにほむらちゃんの話聞いてたら、ママさんは……」

「気に病む必要はないわ。それで巴ママの運命が変わったわけじゃない。

——けれど、あなたの運命は変えられた。

1人が救われただけでも、私は嬉しい」

「……………」

……ねえ、ほむらちゃんはさ。昨日みたい……人が死ぬところ、何度も見てきたの？」

「ええ、そうよ。」

数えるのも……諦めるほどにね」

……この会話も、何度目か。

まどかを騙しているという罪悪感にさえなまれながらも、疑われないよう、演技を続ける。

「マミさんが死んじやった事、誰も気付かないの？」

「巴マミには、遠い親戚しか身寄りがない。失踪届が出るのは、当分先でしょうね。」

——向こう側で死ねば、死体だつて残らない。彼女は永久に行方不明のまま……

魔法少女の最後なんて、そんなものよ」

……ましてや、魔女になってしまえば、ね。

「……酷過ぎるよ。」

マミさん、皆の為に、ずっと独りぼっちで戦つてきたのに、誰にも気付いて貰えないなんて。

寂し過ぎるよ……」

「元々そういう契約で、私たちはこの力を手に入れた。誰の為でもない、自分自身の祈りの為に戦い続けるの。」

「誰にも気付かれなくても、忘れ去られても……それは仕方のない事よ」

「私——マミさんの事、忘れない」

「そう言ってもらえるだけ、巴マミは幸せよ。羨ましいほどにね」

「……話は、終わった。」

早くイレギュラーへの対策を考えないと、それにグリーンフシードの確保も——

「ほむらちゃんのことだつて忘れないよ！」

「昨日助けてくれた事……絶対忘れたりしないから！」

「……まどか、

でも、私は……」

「……………」

「覚えてるわけ……ないじゃない」

「…………？」

「ごめんなさい、何でもないわ。

私、先に行く…………」

今までのループに無かったまどかの言葉に、涙が浮かぶ。

振り切るように走り出すと、少し前の道に、なぜか両手を地面につけて項垂れている、特徴的な金髪縦ロールの髪型の少女、が——

「…………え?? 巴…………ママミ…………??」

「——ほむらちゃん、待つ、て…………」

…………え? マミ、さん??」

うそ、どうして、

ママミは、死んだはず、どうしてorzって、え?? え??

それに、なにか呟いて――

「……………うふふ……………重曹……………」

魔法少女に……………NaHCO₃……………」

ますます意味が分からないわ?!?! なんて魔法少女に炭酸水素ナトリウムなのよ?!?!
?!?!

と――
巴マミに憑いているらしいインキュベーターが、なにか話しかけるような仕草をする

ガバアツツ!!

「っ?!?!」

いきなり立ち上がるし! もう何処からツツコめばいいのよ?!?!

「……………なんで、あなたは、死んだはず、——」

なんとかマミ生存、重曹発言、ゾンビモーシヨンのシヨックから立ち直って、話しかける。

「——うふふ。 暁美さん？」

……………ただし、向こうはキャラが崩壊していたけれど。

「——晩で随分鹿目さんと仲良くなったみたいね。 妬げちやうわ」

「っマミさん……………」

「ダメよまどか、様子がおかしい！」

巴マミは、元から厨二病を患っていた傾向があつたけれど、今は特に酷い。

この、過去のループで一度も無かつたことは、おそらく——

「状況的に考えて……………魔女ククトの仕業ね？」

その化けの皮を剥がしなさい。 人の死をなんだと思つているのっ!？」

例のイレギュラーが関わっているとしか、思えない！

その事を問い詰めると、何やらインキュベーターと目配せ…………

「……………聞いているのかしら、あなたたち……………っ！」

「勿論、聞こえているわ」

「……なら、さっさと元の姿に戻りなさい」

「元の姿ねえ……」

勘違いしているようだけど、私は巴マミ本人よ?」

「……………」

……姿形はマミそのもの。言動も、少しおかしいが、あり得ないと断言するほどじゃない。

ということとは、まさか——

「——じ、じゃあ、マミさんは無事で、ちゃんと生きてるってことですよね!」
「ええ。ちよつと危なかったけどね」

「ウソね。あの状況であなたが生還できる可能性は、0よ」

——死人を、蘇らせた……っ?!?」

「……ほむら、ちゃん？」

「バمامミ。あなたのことはもう調べてあるわ。当然、戦い方も。」

——マスケツト銃単発銃に、リボンを使用した拘束魔法。これが、あなたの攻撃手段。たったこれだけで、あの状況を、誰にも気が付かれずに打開することは不可能よ」

「……じゃあ、今ここにいる私は何なのかしら？ 足ならあるわよ？」

……わざわざ死者を蘇らせたのなら、なんらかの狙いがあるはず。

なら、誘き出してやるわ……！

「……どうせ聞いているのでしよう、クト。さっさと現れないと——」

時間を止め、一切の容赦無く、大量のパンツァーフアウストとRPG-7をばら撒く。

——停止、解除。

「——バمامミが死ぬわよ？」

次の瞬間——

ざっと100発程の榴弾が、バمامミとインキュベーターに迫る。

「——ほむらちゃん?!?!」

「クっ——」

慌てて変身し始めたようだけど、遅過ぎる。

仮に間に合ったとしても、マスケツト銃を顕現させるのにかかるタイムラグを考慮すれば、迎撃は不可能。

だから、彼女を守るためには——

「——私、これでも御都合主義ってあんま好きじゃ無いんですけど？」

まあその塊な奴が言っても説得力無いのは分かっただけだよさ」

——バケモノが、出て来るしかない。

ドゴガガガガガガガガガガガガ—— ツツツ!!!

双翼の魔女が、その二対の翼で、的確に榴弾を撃墜していく。

一対は、布がはためく様な動きで斬り刻み、

一対は、その翼の先端が指の様に蠢き、弾き、貫き、叩き潰し、打ち漏らした弾は、その側面を掴んで他の弾に投げつけ、誘爆させる。

……随分とメチャクチャね。あれを無傷で切り抜けた以上、私一人では厳しいわね。

「………やつと現れたわね——

——クト!」

「脅しといてやつともポッドもないだろ。悪りいけど、この後ちよつち予定あるんだ、やるなら私も相手するぜい?」

絶望を象徴する魔女らしく、骨で形作られている翼を大きく広げ、身構えるクト。

「……一応警告しておくぞ。幾らブツ飛んだ能力持つていようが、火力は手持ちの兵器に依存しているアンタじゃ私にマトモなダメージを通すことは出来ないし、それだけでなくも2対1、オマケにそっちはパン^{鹿目まどか}ピーを連れてるときだ」

「……………敵の言葉を素直に信じるとでも?」

確かに、榴弾の雨は防がれた。

なら、それ以下の小ささで迫る、しかも0距離で放たれる銃弾ならどうかしら?

時間を止め、一番威力のある拳銃を盾から二丁引き抜き、右胸に輝くグリーンシードにつきつけ――

……………あの身体能力相手に、正面に立つのはマズイわね。

それに、正直にこのグリーンシードが急所だとも思えない。

……………ここは素直に、背後から後頭部を狙いましょう。

――停止、解除。

「……………デザートイーグル、50AE、か。ベ^Mレ⁹ッ²タ^Fとい^Sい^Sリ^Mボル²バー⁹とい⁹い、良⁹い⁹趣⁹味⁹してるな」

「あなたに褒められてもなにも嬉しくないわ」

「まさりやそうか。」

「で？ 撃たないのか？」

「——どうやって巴マミを生き返らせたのか、説明しなさい」

……場合によっては、やり直しの手段が増やせる。

このループで、決着をつけられる！

「わざわざ最強のマグナムオートを出しといてそれk」

銃口でど突く。 今私が聞きたいのは、そんなどうでもいい事じゃないわよ！

「……分かったから、銃口を降ろせ。 地味に痛い」

「……断るわ」

「あ、そ。」

つつてもねえ……生き返らせたって、そもそも死んでない人に使う言葉じゃないと思

うがな」

「……………続きを喋りなさい」

「いちいち頭を小突くでない。」

……私は魔女じゃなくて魔法少女だって言ってるのに、話聞かなかつただろ？ それ

で1人ずつゆつくり言い聞かせようと思って、まず近くにいたマミを拉致った。 それ

だけだ」

……確かに、ここまで人間に酷似していて、知能がある個体は初めて見るけど……
「……………あなたが仮に魔法少女だとして。なぜソウルジェムが濁りきった状態
で放置しているのかしら？」

「これでももう今日だけで3回くらい汚れを落としたんだけどな？ コレについては寧ろ
私が聞きたい」

「……………信用出来ないわね」

「……………」

取り敢えず、一旦引いてくれないか？ 私としても、無駄な戦闘は避けたい」

……………ここは、退くべきかしらね。

相手の情報が足りない以上、危険はつきまとうし。

なにより、まどかがいる。コイツがまどかに襲いかかった時に、護りきれぬ自信が、
無い……………

「…………………………チツ。」

さっさと行きなさい」

「……………」

銃口を下ろすと、小さな足でテクテクとマミの方へ歩いていく。

……考えてみれば、あの子、本当に魔法少女だとしたら、小学生くらいの歳よね。
………彼女が魔法少女であることも考慮して動こうかしら——

「——マミさん！」

「? 鹿目さん？」

「また………また、魔法少女体験コースに、連れて行って、くれますか………?」

「!」

——ええ、もちろん！」

………前言撤回。

あの魔女、いつか絶対殺す!!!

折角まどかが魔法少女になる事を諦めていたのに!!

これを狙ったのね、あの悪魔アツ!!!

「………マミ、保護者サマがマジギレしそうだから今日はやめてくれ。本気のア

レを生け捕れとか、私でもキツイ」

「………怖っ?!」

「……右に同じく。 マミ、行くよ」
「分かったわよ」

「ほむうう!! ほむううううつ!!」

「……えつと、ほむらちゃん? 荒ぶってるけど、どうしたの?」

「——ふつ。 大丈夫よ、まどか。」

「ちよつと各種手榴弾と爆薬と対物ライフルの調達を心に誓っただけよ」
「ほむらちゃん、戦争でも始めるの?!?」

表ルート：第4話

sideほむら

巴マミの生存(?)が確認出来た翌日、放課後。

イレギュラーの存在による、大幅な過去のループとズレた部分を確認するため、まどかをストーキング尾行する。

美樹さやかが魔法少女になってしまったのは、かなり痛い。

もしまどかが、このまま魔法少女になるようなことになれば……っ!!

「……もうこうなったら、近寄るインキュベーターを片っ端から血祭りに上げるしか無いかしら……」

ある程度距離を置きながら、慣れた手つきで米軍基地から死ぬまで借りている双眼鏡を覗く。

……美樹さやかと一緒に、原っぱへ。

ループ通りなら、美樹さやかは上条恭介のいる病院へ、まどかは美樹さやかと私を協

力させようとする。

……あ、さやかが離れたわね。

それじゃあ、まどかに会いに行きましよう。

少女移動中

喫茶店

……ここにまどかと来るのも……何回目なのかしらね。

「それで、話って何？」

「あ、あのね——」

次の台詞は、『さやかちゃんね、仲良くしてあげてほしいの』

……考えてみれば、私ってば同じミスさやかの魔法少女化を止めないをしてるのよね。

魔女化する事を考慮すれば、いつそのこと——

「——魔法少女と魔女って、どうやって見分ければいいの？」
「……………ほむ？」

魔法少女と魔女の見分け方……………

一目瞭然だったから、考えたことも無いわね。

「……………クトのことかしら？」

「うん。昨日、クトちゃん、マミさんと一緒に私の事を助けてくれたの。」

その後、クトちゃんが、さやかちゃんとマミさんと戦って……………」

「……………」

バミミが美樹さやかと共闘？

……………てつきり、バミミはもうあっち側だと思っていたけれど……………

「……………さやかちゃんは負けちゃったんだけど、その後、クトちゃんがさやかちゃんのこと褒めて……………」

……………クトちゃんは、魔法少女なのかな。それともキュウベエの言う通り——」

「……………どうでしょうね」

私の考えとしては、彼女は魔女だと思う。ソウルジエムがあそこまで濁りきった状

態で自我を保つのは不可能。

……………だけど、クトのことを魔法少女だと言えば、まどかのインキュベーターに対する

不信感を与える事ができるわ。

「……………確かめてくるわ。」

彼女が、魔女か、魔法少女か」

「えっ?! で、出来るの?!」

「……………ええ」

——方法は、あるにはある。

彼女のソウルジエムを肉体から100メートル以上離して、生命活動が停止すれば、

彼女の魂は本物。

それから溜まった穢れを移して、彼女のソウルジエムを浄化できれば、确实。

……………ただ問題は、どうやってソウルジエムを肉体から離すか、ね。

バックとかにしまっているならいいけど、文字通り肌身離さず持っていたら、実力行

使で奪うのは難しい。

……………だけど、やるしか無いわね。

イザとなつたら、頭部を爆散させればいいわ。

「……………行つてくるわ」

そうと決まれば、急ぎましょう。

「…………街に繰り出したはいいけれど、アテが無いわね」

クトは、今回のループで初めて現れた存在。

当然、行動パターンは把握出来ていない。

「……………マミのマンションに張り込めば、チャンスがあるかしら？」

…………いえ。 私がループしている事さえ知っていたクトなら、おそらく、——

―夜

「――見つけたわよ、クト」

「……………よく分かったな、暁美ほむら」

やっぱり。

美樹さやかかの住む家を張り込んだら、一発ヒットね。

「……………あなた、昨日、美樹さやかと戦ったそうね」

「ああ、模擬だけだな。いいスジしてるよ、アイツ」

「……………単刀直入に言うわ。ソウルジエムを貸しなさい」

「……………断ったら？」

「……………奪うまでよ」

盾から、バレットM82を引き抜く。

「……………アンチマテリアルライフル、か」

「流石のあなたでも、コレの弾丸を素手で反らすなんて無理よ。

……………ソウルジエムを渡しなさい。私も、あなたが魔法少女である方がいいのよ」

「そうだな。」

だが、断る」

「そう」

ドツツゴオンツツツ!!!

強烈な反動が身体を突き抜け、放たれた弾丸は――

――クトの頭蓋を、吹き飛ばした。

「……魔法少女はソウルジェムさえ無事なら、肉体を幾らでも再生出来るわ。それこ

そ、脳だつてね」

頭部の上半分が消し飛んだ身体のソウルジェムに、手を伸ば――

「——悪いね。コレでも私、『原典』だと核攻撃喰らって平然としている種族なんでね」

——伸ばした手を、掴まれた?!

「くっ——離しなさい!!」

ドツツゴオンツツツ!! ドツツゴオンツツツ!! ドツツゴオンツツツ!!

一応ソウルジェムのある上半身を避け、下半身に0距離で12.7×99ミリNAT
O弾が炸裂する。

両足は消し飛び、骨盤は木っ端微塵になり、

それでも、掴んだ手が、離れない。

「このっ、バケモノ!!」

「私がバケモノ……?」

違う。私は邪神だ!! ふははははははははははっ!!」

「チッ!」

バレットを手放し、M29で両腕と、ついでに煩い口を吹き飛ばす。

「……っ、これで、やっと——

…………………え???

自分で生み出した惨劇に、一瞬目を逸らし、改めてソウルジェムを取ろうとしたら——

「……………身体が、無い??？」

よく見れば、血も、脳漿も消えていた。

あるのは、弾痕だけ。

……………考えてみれば、彼女は常にインキュベーターを一体連れていた。

それがいなかったということは、もしかして――

「さっきのクトは、ニセモノ……………っ!？」

……………仕方がないわ。今夜は諦めて、当初の予定通り、美樹さやかと佐倉杏子の殺し合いの妨害をしましょう。

……………間に合う、わよね？

少女移動中

「……こっちね」

魔法少女が取り逃した魔女を追う時、あらかじめ把握してある魔力は見分ける事が可能。

そして、慣れれば、その対象を魔法少女にすることも可能。

美樹さやかは魔力を追って、裏路地を進んでいく――

「……？ 魔女の結界……？」

いつもなら、美樹さやかが使い魔を狩ろうとするのを、佐倉杏子が止めていたのに。

結界の内側に侵入して、状況を確認してみれば、さやかとマミでコンビを組んで、魔女と戦っていた。

クトは、いない。

……それにあの魔女、確か、使い魔の数が特徴で本体は弱かつたはず。
なのに、やけに使い魔の数が少ない。

……先にクトが、誰かあらかじめ環境を殺してから、初心者に戦わせる——

「……………考え過ぎね。それより、佐倉杏子を探さないと——」

「呼んだかい？ もう一人のイレギュラーさんよお」

——?!?!

背後を、取られた——?!

「魔女の結界があるから入ってみれば、他の奴に先を越されてるわ、コソコソ隠れてる奴がいるわ……………」

「全く、この街はいつの間にかこんなに魔法少女が集中する所になったのかねえ」

「……………もう一人の、ということとは、会ったのね。」

あのバケモノに」

「ああ。 自称魔法少女の羽だけ骸骨野郎だろ？」

ワルプルギスの夜の件についても聞いてるぞ。 納得のいく説明があるんだろうな

？」

「……………」

「……黙りか。 ま、私にとってはどうでもいいことだけだな」

「…………？ 何故かしら？」

ワルプルギスの夜クラスの魔女が相手なら、戦力は1人でも多い方がいい。

特に、佐倉杏子程のベテランなら。

「だってそうだろ？ 割に合わないんだよ。 何人もの魔法少女で奴を斃そうが、落と

すグリーンフシードの数はたかが知れてる。 魔女を斃した後は奪い合いつてか？

それに、ここはアタシの縄張りじゃない。 アレと戦う理由もないんだよ」

「……………確かに、正論ね。」

なら、私の取り分のグリーンフシードを全てあなたに渡すとしたら？」

「……………なんでそこまでアレに拘る？」

「……………」

「……………はあー、また黙りか」

——佐倉杏子が、離れていく。
何とかして引き止めないと——でも、どうやって、——

「——グリーンシード無しでのソウルジェムの浄化方法、なんてどうだ？」

「っ?!?!」

く——クト?!

「……………幻影か？」

「お、分かるか。　　そういや杏子の固有能力は……………改良点だな」

「……………？」

「この身体は、分身ってコト。　ニンニンって奴？　　本体はあっち」

クト（自称分身）の指差す方を見れば、

ちようどまどかに寄る使い魔をクト（自称本体）が骨翼で全て叩き潰したところだっ

た。

「……なら、さつき私が撃つたのも、」

「もちろんニセモノ。血の匂いがしない時点で気付こうよ」

……そういえばそうね。うっかりしてたわ。

「……おい。それより、さつき言った事は本当なんだろうな？」

「ソウルジェムの話か？ 勿論。」

情報の公開条件は、『ワルプルギスの夜の撃破』

「……分かったよ。アタシも参加する」

「ドーマ」

……結果として、今回はクトに助けられたわね。

本当に、敵なのか味方なのか、分からない奴n

「じゃ、ほむら！ 情報提供ヨロシクウ！」

「……ほむら？」

「？ 私、アレの出現ポイントも攻撃パターンも知らんぞ」

………言いたい事は分かるけど。言いたい事は分かるけどっ！

私のループについて知ってるくらいなら、そっちの情報についても知ってるでしょう

普通?!

「『普通』に真つ向から喧嘩売るのが私なんで」

「……………顔に出てたかしら？」

「そーさねー」

……………あ、結界が消えたわね。

「作戦会議の場が決まったら知らせてくれよ！ んじゃ！」

そう言うと、瞬きする間に音もなく消える。

「……………アイツ、何者だよ？」

「……………私が聞きたいわよ、そんなの」

表ルート：第5話

sideほむら

今日も私は、機械的に魔女を探し、狩る。

ループでの流れから言って、もうそろそろ魔法少女の実態が、
奇跡偽りの希望と魔法の陰に隠された呪い絶と現実望が顔を覗かせる。

幸い、現段階での犠牲者は0。それどころか、私にもインキュベーターにも制御不能ジョーカーのクトまで場に出てる。

「……しつかりしなさい、暁美ほむら。正念場はここからなのよ」

……美樹さやかの魔女化。そこから転がり落ちるように退場する佐倉杏子。

その段階までママが生き残っていたケースもあつたけれど、彼女も発狂し、死ぬ事になった。

「真実といえば……彼女はどこまで知っているのかしらね」

私が時間遡行者であるや、目的を見抜き、更には共闘する魔法少女を言い当てた、骨翼の少女。

——彼女は、どうして魔法少女の運命を受け入れたのだろう。

確か、彼女の願った奇跡は、『失ったエピソード記憶の一部を取り戻した後に叶える』というものだったはず。

……なぜ、記憶を思い出す事を含めて願わなかったのだろう。

キユウベえに、叶えることが不可能だと言われたのか。

最初から部分的記憶喪失なんて嘘なのか。

——或いは、

「……………確か人間の脳は、強烈過ぎるトラウマからの自己防衛反応として、記憶を失うこ

とがあつたはず」

無意識の内に、思い出す事を拒んでいるのか。

だとしたら、彼女のソウルジエムの状態にも、一応の説明が――

「――やあ、曉美ほむら。難しい顔をしているけど、どうしたんだい？」

「……………あなたたちを絶滅させる方法を考えていたのよ」

「それは恐ろしいね」

……………相変わらず、人の神経を逆撫でする事が得意な連中ね。

「……………なんの用よ？」

「なに。君達風に言えば、勝利宣言というヤツさ」

「!? なんですって?! まさか、まどか——」

あの子——契約してしまったというの?!

「残念だけれど、鹿目まどかはまだ魔法少女になっていないよ」

「……………何をしたの。まどかに、何をっ?!?!」

「そう怖い顔をしないでくれよ。」

僕らはまだ、鹿目まどかには手を出していないし、美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子に

も何もしていない」

「……………そう、ならよかつ——」

——何かしら? この、とてつもなく嫌な感じ。

気付かない内にとても大切な、歯車を奪われ、壊されたような気分は?

「——僕らがどうにかしたのは、君さ。 曉美ほむら。
いや——時間遡行者、と言った方がいいかな？」

「息が、

止まった。

「…………まさか……………まさか……………っ?!?!?」
インキュベーターは、やつらに似合わないような喜色の声色で、
こう、言っただけだ。

「——君の盾にある砂時計の砂は、もう、どうやっても流れない。
寧ろ都合なんじゃないかい？ 時間停止の制限が無くなったのだから」

——何を、

言っているのか、わからなかった。

ただ、真つしろにそまっけていくあたまで、わかったことは、

——もう、じかんを、まきもどすことはできない。

「ウソよ……………ウソよ、ウソよ、ウソよ、ウソよ、ウソよ、ウソよっ!!!」

時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。

何度も、
何度も、
何度も、
何度も
何度も
砂時計を、反転させる。

なのに、

砂時計の砂は、動かない。

「ウソよ、ウソよ、ウソよ、ウソよ、ウソよ、ウソよ、——」

「想定以上にあつさり壊れたね。本来なら絶望を与えるのは魔女の役割なのだけれど、なにセクトのスペックが彼の言葉通りなら、どんな状況下でも、それこそ鹿目まどかが魔女化しようが全てをひっくり返しかねない。」

だからと言って、既存の戦力では彼女を追い詰めることは出来ても、止めを刺すことが出来ない。

仕方なく僕らが動いて、周りから潰すことにしたのさ。

……って、もう聞いてないね」

時間を止める。

時間を止める。

何度も
何度も
何度も、
何度も、
何度も
何度も
何度も、
何度も、
何度も

時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。
時間を止める。

何度も、
何度も、
何度も
何度も
何度でも。

でも、

もう、

時が戻る事は、無い。

……どれくらい、そうしていたのか。

ふと気がつけば、夜の街を当ても無く彷徨っていたらしい。
ソウルジェムを手にとってみれば、8割ほど黒ずんでいた。
身体に染み付いた流れ作業で、グリーンフシードに穢れを押し付ける。

「……………」

——頭を、切り替える。

時間を巻き戻す事が出来なくなった以上、このループが、最後のチャンスということだ。

幸い、時間停止の制限が無くなったから、戦闘や武器の調達にも遠慮無く能力を使える。

「……………このループで、

まどかを、助けてみせる」

彼女から、魔法少女の運命から救う。

私の願いは、それだけ——

……ワルプルギスを斃して、どうする？

あのインキュベーターの事だ。

例えワルプルギスの夜を乗り越えたとしても、その次が無いとは限らない。

その『次』が来た時、

私に、何が出来る？

もしかしたら、私がこれまでやってきたことは、

全て、無駄だったんじゃない——

「つ、辞めにしましょう。そんな先の事を考えても仕方無い。それより、ワルプルギスの夜を打倒するまでの事を考えないと——」

——ガッ、ガギイ、ガキツガツギリツ——

……金属音？

……この音、まさか、

慌てて音源に向かう。

屋根を飛び越えたり、一本道は時を止めたりして、最短時間でたどり着いてみれば——

美樹さやかと佐倉杏子が、戦っていた。

どれだけ戦い続けたのか、非常に高い再生能力を持つ美樹さやかが満身創痍で、佐倉杏子でさえも消耗していた。

「ちっ——」

時間、停止。

劍先と矛先の向きを強引にズラし、停止解除後には2人とも路地の壁に激突するよう
に調整する。

—停止、解除。

「!? うわあっ?」

「!?—っつあ?!」

美樹さやかは壁に頭から突っ込み鈍い音をたて、佐倉杏子はブレーキこそかけていた
が、止まりきれずに槍を壁に叩きつけて勢いを殺していた。

「……テメエか。 何しやがったっ!!」

直ぐさま復帰した杏子の突きを時間停止で背後に立つ事で避ける。

「な、何だ?!」

……? 佐倉杏子の受けたダメージ、痣や擦過傷が殆どね。
少なくとも、剣による切傷じゃない。

「……随分と変わった魔法だな、アンタ」

「——佐倉杏子、その怪我、どうしたのかしら?」

「ああ!? あのチビにやられたんだよ!!」

チビ……クトの事ね。

雰囲気で誤魔化されるけど、彼女の身長は小学生並だし。

それは置いといて、彼女が他の魔法少女と戦闘?

以前の美樹さやかとの戦闘は、まどかの話を聞く限り戦闘というより遊びらしいけど

……

「彼女があなたを襲ったのかしら?」

「……………」

「……………佐倉杏子?」

「チツ! アタシから吹っかけたさ! ハナっから遊ばれてたみたいだけどな! これ
で満足かテメェ!!」

「そこまでは聞いてないわ」

まさか……………八つ当たりで美樹さやかと戦ったのかしら？

「……………佐倉杏子。最近は魔女の出現数が減っている。無駄な争いは避けるべきよ」

「……………それくらい、分かってる」

吐き捨てるように言うのと、変身を解いて去っていく。

……………そういえば、美樹さやかはやけに静かなような気が……………

「」

「……………気絶してるわね。」

——起きなさい、美樹さやか」

うつ伏せに倒れていた彼女をひっくり返し、頬をペチペチ叩く。

「うん…………………………転校生？」

「……………私には暁美ほむらという名前があるのだけけど？」

「…………………………そうだ、あいつ——?!」

跳ね起きた美樹さやかが、周りを見渡し——直ぐに怪訝な顔をする。

「……………あれ？ あいつは？」

「佐倉杏子なら、何処かに行つたわ」

「そっか。」

「……………ねえ、転校生。ソウルジェムを綺麗にしておくのつて、そんなに大事なことなの？」

「……………争いに勝つ事に拘るなら、そうね。経験や才能も肝心だけれど」

「……………だからつて、他人を犠牲にするなんて……………」

……………本来なら、昨日の晩行われていたやり取りがあつたのかしら。

魔法少女の在り方としては、佐倉杏子の方が正しい。

美樹さやかでは務まらない。

優しさは甘さに繋がるし、蛮勇は油断になる。

なにより、どんな献身にも見返りは無い。

あのバケモノですら、その辺りは弁えているだろう。

「それに、あいつは……………っ!!」

……………大方、上条恭介について何か言われたのね。

——佐倉杏子に、彼女に手を出さないよう言っておくべきね。

学校の日直だったバママミと合流する、と言った美樹さやかと別れ、佐倉杏子を探す。
魔力反応を追っていけば、彼女が入り浸るゲームセンターにたどり着いた。
店内をぐるっと見回り、

「……………何処にも居ない?？」

もう一度、魔力反応も確認しながら、ぐるっと見回る。

……入れ違いになったのかしら。　寧ろ反応が離れていくわね。

反応を追って、店の外に出る。

そのまま探し回れば、川近くの廃ビルから反応があつた。

一瞬、魔女を狩っているのかと思つたが……

魔女の反応は無い。

ならここが彼女の拠点かと思つたけれど……

——なぜか、とても嫌な予感がする。

本能が、この場から全力で逃げろと叫ぶ。

この先にある光景を覗き込めば、二度と戻れないと。

……知らぬ間に流れていた汗を拭い、震える身体を抑えて、魔ビルに侵入する。
念のため、予め変身しておく。

一階……何も無い。

エレベーターは、ワイヤーが切れて、底でひしゃげていた。

二階、三階、四階と確認していくと、徐々に、血の匂いが漂ってくる。

急いで階段を駆け上がり、最上階へ足を踏み入れると――

「――クソっ！ 今日は何日だっ！ 何なんだよ、お前らホント何なんだよっ!?!?」

佐倉杏子が、全身から血を流している一般人たちと戦っていた。

「佐倉杏子!? 何をしているの!?!」

「?! ほむら!?!」

振り返ったその顔は、驚愕の表情が張り付いていた。

「あなた、幾らグリーンフシードが大切とはいえ、一般人にまで手を出すなんて――」
「違うんだほむら!!」

——逃げろ!! 今すぐに!!」

「……………は？」

……………佐倉杏子？

なんで、あなたが追いつめられているような声を出すのかしら？

背後から殺気を感じて咄嗟に回避すると、錆びたノコギリの刃が振り下ろされていた。

振り下ろした相手を見ると、日曜大工の道具なんて持った事がなさそうな、線の細い女性。

「——なっ?!」

その事にも驚きだけど、何より、驚いたのは——

「——魔女の口づけが、無い——?!?!」

いつの間にか私たちを囲む彼等の首筋を確認しても、誰一人として、特徴的な痣が見当たらない。

「……………佐倉杏子、何があつたの?」

「……………ゲーセンでガキが1人、目の前でこいつらに攫われてな。つい追いかけたら、このザマさ。」

それとほむら。こいつらを人間だと思わない方がいい」

「何を言ってるの？ ただの誘拐犯のグループじゃない」

「相手してれば分かる！ 来るぞ!!」

正面を見れば、錆びたノコギリの他に、カッターナイフや金槌、ささくれだった木片等、簡単に入手できる武器を愚直に振り回し、雄叫びをあげながら彼等が突っ込んでくる。

しかも適当に振り回すから、互いに傷つけ合っていた。

「全く、面倒ね」

対象の時間を停めたままだと極僅かな介入しか出来ないから、小刻みに時間停止と解除を繰り返し、片っ端から気絶させる事にする。

先ずは目の前のスーツ姿の男性。

特殊警棒で、後頭部を手加減して殴る。

ゴリ、という手応えを確認して、時間を止め――

「――うごあああああああ!!」

「?! なっ、」

咄嗟に屈んで目の荒い金属ヤスリを避ける。

しかもその一撃は、後ろにいた別の人の腕を服ごと抉り、

——痛み一つ訴える事なく、2人揃って手に持った工具を振り下ろしてきた。

「!?!? 止めなさいあなたたち! その怪我で、なんで動けるの……?!」

真横からの殺気に対し、転がって避けて——

その光景に、絶句した。

——腕が折れ、骨が飛び出ている。

その折れた骨の先端で攻撃してきていた!!

『『う——(う)あああああああ!!』』

「——っ!?!」

まるで痛みを感じていないかのような動きをする彼等の攻撃を、死に物狂いで避ける。

出来る事なら逃げ出したいが……

全方向を囲まれているうえ、このビルは天井が低い。ジャンプして飛び越えるのは、高さが足りない。

時間停止中は、私が触れたモノの停止も解除されてしまうから、魔法も使えない。

それに、今気がついたけれど——

彼等の手にある武器は、命を奪うより、どちらかといえば、治りにくい傷を付けることに優れている。

「くっ!」

避けきれなかった攻撃を、武器を叩き落として迎撃するも、――

「うぐあああああ!!」

「!? がっ!」

そのまま首を絞められる。

魔法少女の力で、手加減無しで腹部を蹴りつけるけれど――

「!?!? なん、で、効かな、」

明らかにナニ力を蹴り壊した感覚があつたのに、気絶することも、痛みに悶えることもなく、人間とは思えないような馬鹿力で首を掴まれる。

「――ほむら!?! くっそおおおお!!」

佐倉杏子が槍を振るい、その両腕を切断する。

そこまでやって、なんとか脱出出来る。

「ゲホツゴホツ！ や、やり過ぎよ、あなた——」

「アレを見てまだ言うか!?!」

彼女の指差す方を見れば、

さつきまで私の首を締めていた男が、その両腕から血が吹き出ているにもかかわらず、嘔み付いてきた。

「ひっ——」

「いい加減にっ——しやがれえっつ!!!」

佐倉杏子はその眉間を蹴り飛ばすと、槍を投擲して、強引に退路を作る。

「——逃げるぞー!」

その道を、全力で走る。

時間停止の事も、本来なら私たち魔法少女が常人より身体能力が優れているのも忘

れ、全力で走る。

………体力を使いきって立ち止まる頃には、件のビルは遥か遠くにあった。
「はあっ、はあっ、おいほむら、無事か？、はあっ、」

「幸い、怪我は無いわ。」

それより、なんだったのかしら、彼等」

「んなもん、アタシが、聞きたい」

幸い、無意識の内にも目立つ道を避けていたのか、場所は裏路地。多少非現実的な話をしようと、周りの目を気にする必要はない。

「……なんだったんだろうな、アイツら」

「魔女の口づけも、魔力の痕跡も無いなら、普通（？）の狂人という事になるけど………
だとしてもアレは異常ね。全く痛みを感じた様子が無かった」

「痛みが無いにしろ、骨が飛び出たり腕や足が吹っ飛んでるのに平気な顔して襲いかかってくるヤツなんているのかよ?!」

彼女が堪らずといった具合に叫ぶ。

気持ちは分かる。私も、ただの悪夢だと思いたい。

けれど、鼻にこびりついた血の匂いが、

首に残る、鈍い痛みが、それを、否定する。

「……………兎に角、対策を考えましょう。あんな連中がいるのなら、それこそ夜間の魔女

狩りも危険——」

——突然、絹を裂くような悲鳴が響き渡る。

佐倉杏子と顔を見合わせ、その現場に急ぐと——

さっきのビルにいた、私に最初にノコギリで切りかかってきた女性が、別の女性を執拗に切りつけていた。

その度に、被害者の女性は悲鳴をあげ——回数を重ねる毎に、弱々しくなり、

最後には、絶命して、悲鳴が、永遠に、途絶えた。

「……………うそ、」

「……………こ、こんな所にいられるか。

おい逃げるぞで」

後退りして——ネチヨ、という音と共に、何かに、ぶつかる。

自分の事ながら、まるで錆びたブリキ人形のような動きで、泣き出す直前の表情の佐倉杏子と目を合わせ、そのまま振り返ると——

さっきの、両腕の無い男が、ナニカを呟きながら立っていた。

「……………うそだろ……………は、ははは……………」

「あ、あああああ………!!」

咄嗟に佐倉杏子の手をとり、疲れ切った身体に鞭打って走る。

目の前の現実から逃げるように。

あの男の眩きから、逃げるように。

"——ふんぐるい
くとうるー るるいえ むぐるうなふ
うがなぐる ふたぐん"

"——いあ
いあ
くとうるー
ふたぐん"

"——いあ
いあ
くとうるー
ふたぐん"

"——いあ
いあ
くとうるー
ふたぐん！"

"——いあ
いあ
くとうるー
ふたぐん！"

——この時の私たちは、分かっていなかった。

突如として、世界に湧き出た、その存在を。

この世界が、どんな存在の争いの火中に迷い込んだのかを。

——私たちの逃走劇は、終わらない。

裏ルート：二章 穢された正義

裏ルート：第12話

sideキユウベえ

クトからの短い念話を終えてからしばらくして、少し疲れた様子のママたちが帰ってきた。

「それで、ビルの方はどうだったんだい？」

「中には入れなかつたけれど、狂人だった1人には会えたわ」

「襲われたのかい?！」

「その人は正気を取り戻していたから大丈夫よ」

「……今朝の話を聞く限り、正気を取り戻していたらいたで大変な事になってそうだけど。」

「バمامミ、雑談もいいけれど、そろそろ……」

「……そうね。」

キユウベえ、クトと一番長い間行動を共にしているのは、あなたよね?」

「彼女が降って来たその時から一緒にいたけれど、それがどうかしたかい?」

「……なら、『クトウルフ』という単語に聞き覚えは？」

「あるよ」

ほむらからの質問に、普通に答える。

クトから口止めされているのは、今彼女が何処に居るかという点だけだからね。

「!? 誰から聞いたの?!」

「クトからだよ。あの時は……」

お菓子の魔女との一件の前後で聞いた事を全て伝える。

「——クト以外の『クトウルフ』は、この世界に存在するか否かすらハッキリしない地球外生命体。仮に存在するとしても、太古の昔に海底に封印され、今でも眠っている。

種族的な能力として、精神に干渉することが出来る。

これが、ボクが彼女から聞いた『クトウルフ』についてだ」

「……マミ、」

「原典の『クトウルフ』とはほぼ全て一致するわね」

いつの間にかマミが本棚から取り出してきた、『クトウルフ神話TRPG』というタイトルの本のある1頁を睨んでいるマミが、その説明を補足する。

「クトウルフは、ゾスから眷属を引き連れて来た異星人だし、海底の封印も、ルルイエに

封印されているという設定と一致するわ。精神への干渉も、何らかの事情でルルイエが浮上したときに、感受性の高い子供や芸術家が狂死するという描写から分かるわ」

ピタリと一致する。

姿形の変化も、本によれば自由自在に変化可能との事だし。

本来の姿が数十メートルの体高の怪物がその身体能力を保ったまま人間サイズまで縮んだのなら、人類の限界を遥かに超えたあの馬鹿げたパワーにも納得出来る。

ほむらも同じような答えにたどり着いたのか、

「彼女は、『本物』かもしれないわね」

と呟いていた。

「佐倉杏子とキュウベえ。あなた達は鹿目まどか達と合流してほしい」

考えを纏めたいらしいほむらが、班分けを提案する。

「そいつは構わねえけど……アンタたちはどうするんだ？」

「巴マミと、クトについても少し探ってみるわ」

「一分かつたわ。それじゃあキュウベえ、クトのことをお願いね」

「まずは探す事から始めないといけないけどね」

「佐倉杏子。間違っても余計な戦闘は避ける様に」

「分かってるよ。アレの面倒くさは知ってるからな」

〜少女別行動中〜

「さてと。おいキュウベえ、何処かアテはあるか？」

「彼女はアレでも魔法少女だ。多少事情が特殊とはいえ、グリーンフシードを求めて魔女を狩るんじゃないかな」

クトはグリーンフシードの浄化が無意味だけれど、さやかと行動を共にするなら彼女のバックアップの為に現れるだろうからね。魔女との戦闘は確実だろう。

「んじゃないいつも通り魔女を探すとするか」

杏子が魔力反応を追って、魔女と出くわしたらしばらく様子を見て、何も起こらないなら魔女を狩る。

それを3回程繰り返しても、彼女たちには会えなかった。

狂人との邂逅確率を下げる為、上から探す事にして、今は高めのビルの屋上。

「クツソー。マジで何処にいるんだ？」

「さあ？」

途中それとなくさやかかの家に寄ったけど、魔法少女の気配は無かったし。

「クトの能力は精神干渉だ。幻覚や幻影を見せる事が出来るから、実際は何処かですれ違っていたりしてね」

「それは無いな。アタシの目は誤魔化されない」

……杏子の能力も幻影系だ。だからこそその言葉なんだろうけど。

「油断や慢心は禁物だよ。クトが事実『クトウルフ』なら、あっちの能力は持って生まれたものだ」

「……アタシは信じねえぞ」

そういえば、杏子の家は元々十字教だ。狂気神話という代物がどれだけ異端な存在

かは、三人の中で一番把握出来るだろう。

「……風が強くなってきたね」

「ちっ。何かかっぱらうついでに場所かえるぞ」
「そう言つて立ち上が——」

—ドゴグシャアアアアアア—!!!

「?!?!?」
「な、なんだっ?!?」

突然、轟音と共に一つ隣のビルの屋上が崩壊する。
クレーターを中心にヒビ割れが全体に走り、建築物そのものが倒壊しない方が不思議な状態——

「—おい! 逃げるぞ!!」

「きゅぶつ?! きよ、杏子? 一体——」

そこまで言いかけて、やっとその場の異常性に気がつく。

クレーターが発生するということは、そこに叩きつけられた『ナニカ』がいるという事だ。

「杏子?! どうしちやったんだい!? 杏子?!」

そのまま瞳孔の開いた目で笑い続ける杏子。

そうしてる間にも、姿を見せないソレが――

本当にどうしちやったんだよ?!

――ズガッツ!!

「?!」 VOoooooooooooooooo!!

「――じゃあかあしいいわあああああ!!」

すぐ目の前に槍が突き刺さり、大質量の物体同士が衝突した様な轟音に混じって、咆哮と、聞き覚えのある絶叫が響く。

「――クト!?!」

「後だ! すつこんでろ、ザコガッツ!!」

コンクリートに深々と突き刺さったランスを強引に振り回すと、鈍い音と共に、かなりの大きさの物体が空を切る音が聞こえる。

「クト! アレはなんなのさ!?! それに杏子がおかしくなったんだ!!」

「あ? チツ! ルウアツツ!!」

ランスを上空に蹴り飛ばすと、未だワライツツケる杏子の頭に手を当て、

「SOUL SINGING！」

一瞬の間を置いて杏子の意識が無くなる。

「!? い、今のは!?!」

「理解するな。それより、早くマミたちと合流しろ！ 中々面倒な事になった!!」

初めて見る、クトの鬼気迫る表情というものに圧倒されている間に、衝撃波と共に何処かに飛んで行ってしまふ。

裏ルート：第13話

sideさやか

「——さ！ 今日も1日、頑張るぞー！」

今日は日曜日！ さあ！ 朝から張り切っちゃうぞー！

「さやかちゃん、1人で大丈夫？」

「大丈夫大丈夫！ 1人じゃないし」

「？」

えっと、念話念話つと——

『クトー』

「はいはいつと」

私の隣の景色が歪んで、そこから女の子が出て来る。

「クトちゃん!? ていうことは、ママさんも近くにいるの?」

「いや、今は別行動中。ほら、最近の夜は物騒つしよ?」

「それって裏路地の連続殺人のこと? ニュースで見たよ」

「ソーナンス。 という訳で、私は特訓係兼護衛つとこだな。

向こうも残りの魔法

少女3人で固まってるだろうし」

——そう、正体不明の魔法少女（？）クトが、昨日の夜突然転がり込んできた。

なんでも近い内にヤバイ魔法が出て来る可能性があつて、その為にあたしに特訓をつけることにしたらしい。

最初こそ、そんなことしなくてもあたしは十分戦える！つて息巻いたけど、

まあ、うん。

ソツコーで負かされたあと、「私でも戦えない程の相手が出て来る」と言われて、納得した。

……ていうか、クトが勝てない魔法つて、冗談抜きで世界が終わるんじゃない？

「フラグだからその先はいけない。さて、まずは移動しようか」

く少女移動中く

——場所は変わって、裏路地。

魔法の結界の内側。

「はあああああああつ!!」

そこらじゅうにセーラー服が吊るされてるワイヤーが張り巡らされてる中で、スカートの腕（足？）の生えた使い魔をすれ違いざまに切り裂きながら、中心に浮いてる何処となく蜘蛛つばいセーラー^員服^長の塊^魔の魔女^女に向かって突っ走る。

「っ——邪魔!!」

魔女が机や椅子を投げつけてくるのを弾き飛ばして、剣の間合いに入ったタイミングで両手で剣を握って、思いっきり上段に構えて――

「これで——終わりっつ!!」

——ザンツツ!!

ハッキリとした手応えの後、魔女が真つ二つになったのが見えて、グリーンフィードを落とす。

それと同時に結界が解かれて、元の景色に戻る。

「さやかちゃん! 怪我は無い!?!」

「ノーミス完勝! さやかちゃん大勝利——!」

「これこれ、慢心するでない」

すぐさままどかとクトが駆け寄ってくる。

「さて、評価タイムだけど——

良い方と悪い方どっちから聞きたい？」

う、悪いトコあつたか。

「じゃあ、悪い方からで……」

「ほいよー。」

まず聞くけど、魔女と戦う時、何処で戦ってる？」

何処でって……

「魔女の結界の内？」

「そう。言い換えれば連中のホームグラウンドだ。つまり？」

「……こつちの方がずっと不利？」

「正解。あつちは罨や雑魚敵を配置し放題だし、自分にとって有利な地形にする事

だって出来る。

例えば、そうだな。

さやかか魔女の立場なら、どんな所で戦いたい？」

「うえ?! そんなこと想像したくないけど……」

えっと、あたしの武器は剣。魔力さえあれば幾らでも作り出せる——

………剣、か。

「……空を飛んだり、遠距離攻撃が出来る相手と相性が悪いから、剣を振りまわせる程度には狭いスペース？」

「だろうね。そう考えると、さっきの魔女は遠距離^{投擲}攻撃と使い魔の物量で押し切るタイプだから、広いスペースで、回避ルートや行動可能範囲を狭める為に足場はロープだけっていう構造だったでしょ。ああされると、近接型はさやかがやってみたいに強行突破するしか手が無くなる。

相手が弱かったから良いものの、下手したら不味かったんジャン？」

「うぐっ?! じゃあクトならどうするのさ?!」

剣しか持っていないのに、あれ以外にどんな手g

飛び道具が無いなら手持ちのモンをブン投げれば良いじゃない

「あらかじめ剣を大量に生産からの全投影連続層射」

「即答?! そしてエゲツない!!」

「ま、安全第一ならな。それに私なら面倒がって結果ごと叩つ斬る」

「超脳筋!?!」

「フハハハ！」

で、もう一つポイント」

「まだあるの?!」

「悪いトコはこれで終わりだからモチつと辛抱。」

雑魚に仕事丸投げするタイプの敵は、大抵その雑魚連中が無限湧きするか再生持ちの事が多いからな。今回は無限湧きっぽいから別にいいけど、再生型なら剣ブツ刺してそのまま放置つてのも手だぞ。回復阻害出来るから」

「そしてまた攻撃がゲスい!?!」

なんか……………言ってるのが正しいのはなんとなく分かるんだけど。

あたしの想像してた正義の味方の戦い方と、違うような……………

「そんなあなたにレッドマンの視聴をオススメします」

「いやアレはダメなヤツ!!」

「なして? アレだつて巨大ヒーローモノだよ?」

……………一応」

「言っちゃったよ?! この人自分で一応って言っちゃったよ!!」

「じゃあチャー研で」

「もつとアウトオ!!」

ネタが通じずにポカーンとしているまどかを置いてけぼりに、全力でクトにツッコむ。

何故だろう、魔女との戦いより疲れた気がする。

「せいじゃ、良かったトコだな。」

ソウルジエムの浄化でもしながら聞いとくれ」

「あ、忘れてた」

変身を解いて、少し濁っていたソウルジエムの黒ずみをグリーンフィードに移す。

「さやかの良いトコは、相手を怖がらないって点だな」

「え？ それって当たり前の事じゃ無い？」

「ノンノン。これがカーナーリー大事。ビビっていると相手の動きに過剰反応して寧ろ隙だらけになるし、腰がひけるから攻撃の威力も減衰する。目を瞑るなんて以ての外。

……そう考えると、さやかってかなりブツ飛んでるよな」

「？ 何処が？」

クトがジト目で見てくる。

「いや、普通の女子中学生は、いきなり異形のバケモノとバッタリ会ったら、悲鳴あげて逃げるだろJ常識的に考えてK。なに思いつきりタマの取り合いやつちやつてくれてんの？ 私の

あの時の苦労は………ブツブツ」

「おーい？」

クトが座り込んでブツブツ言い始めた。

……心なしか、背後に『ドヨーン』って字が見える気がする。

「と・に・か・く！」

「!?」

うわ復活早!?

「あんたは、私に無い才能を持つてんだ！　行き過ぎは慢心その他に繋がるから誇れとは言えないけど、胸張れ!!」

私の背中をバシバシ叩きながら、笑顔でこう言った。

——その後、剣を連続で投げつける練習をする為に、橋の下、目立たない場所でドラム缶を的に片っ端から投げてる。

……ただ、

「ーていつ!」

スカッ

「とりや!」

スカッ

「うらああつ!」

スカッ

「……………」

「……………」

「……………プッ」

「笑うなああああ!!」

全然当たらないい……

「いや、悪い悪いww」

「そんな笑うなら、あんたは当てられるんでしょうね!？」

「おー。ちよつち貸してみ」

そう言つて、突き出された剣を受け取ると、手に馴染ませる様に軽く上に投げて、

浮かばせる。

「……………ん？ え？ ちょよ、ちょよと待つて?!？」

「別に投げ方は指定して無いだろ？ 根本的にハンドガードがしつかりしてる剣は投擲には向かないし」

「」

「うわあ…………」

そ、それならそうともっと早く言つてよ?!？」

「スマンスマン。

ほいっと」

ズガンツ!!

勢い良く射出された剣がドラム缶に突き刺さり、そのままドラム缶を横倒しにする。

……………やっぱあんたつて、ほんと規格外だね。

「フ、褒め言葉だな」

「だからさらつと心を読むなと——

「さやか！ まどかつ!!」

……………へ？」

クトがいきなりあたしとまどかを突き飛ばす。

何をするの、と口を開こうとして、

——グシャツつと、重いモノが落ちる音が聞こえる。

音がした方を見ると、赤い人型のナニカが、——

「くう……」

「この声……ほむらちゃん?！」

「まどか、止まれ!!」

まどかがほむらに駆け寄ったのをクトが制止する。

「!?! チツ、この感じ……」

さやか! ほむらを診てやってくれ! 後、絶対にまどかから離れるな!!」

それだけ言い残すと、何処からかランスを取り出して、飛翔する勢いのまま何処かへ消える。

「おい、転校生! 何があつた?」

「……だから、私は、ほむら……」

生きてはいる……! !

回復の魔法をかけると、息苦しそうだったのが安定する。

「ぐっ………さやか、まどか……?」

——クトはっ?!」

「えっと、なんかよく分かんないけど、なんかを追いかけてった!」

「? それより、ここは危険よ! 早く逃げないと」

変身を解除して、足を引きずり気味になりながらも歩き始める。

「ほむらちゃん、まだ、」

「今は逃げるのが先よ。 急いで——」

ドツゴオオオオンン!!!

「きやあっ?!」

少し離れた所に、何かが墜落したような爆音が響く。

クレーターが出来るほどの衝撃だったらしく、ぽっかりと空いた凹みだけが地面に――

「――GYAGOOAAAAAaaaaaAAAAAaaaaaAAAAA
AAAA!!」

「ひっ!？」

「まずい……っ!!」

虚空から、『ナニカ』の咆哮が轟く。

「――逃がすかゴルア!! 『ステインガー』!」

真上から『ソレ』に対してクトが槍の穂先を突き出すも外れたらしく、根元まで刺さる。

!?!?!
くっ、お前ら、逃げ――」

ドンッ!

「!? うー」

何を言っているのか聞こえる前に『ナニカ』に突き飛ばされる。

「あ——」

「させるかってんだよっつ!!」

クトには見えているのか、翼を飛ばたかせて凄まじい勢いで飛んでいく。

不可視の魔女?! なんて厄介な……!!

「—それより、まどか! 転校生! 無事!?!」

「私は大丈夫だよ! でも、ほむらちゃんが、ほむらちゃんが——」

——息をしてないの!!!」

「……………え?？」

駆け寄って、テレビでやるみたいに手首に指を当てる。

……………脈が、無い。

「うそ、だよな? やり方が間違ってるからだよね?!?」

胸の部分に耳を当てて、

——何も、聞こえなかった。

「……………うそ、こんな、こんなことって、——」

「——へえ、あんな存在もいるのか」

聞き覚えのある平坦な声が後ろから聞こえてきて、振り返ると、

「…キュウベえ？」

「改めてどうしたんだい？ 僕の顔に何かついてるのかい？」

「なんで、——」

そんな平然としてられんだと怒鳴ろうとして、

「キュウベえ！ ほむらちゃんを、助けて……っ！」

「僕には無理だよ。 あんな高速で飛び回る情報概念体に対して有効打そのものが無い。 彼女を取り戻す事は不可能だ」

「そんな……そんなのって……」

「何か勘違いをしているようだけど、ほむらはまだ生きてるよ？」

「……………え？」

だって、脈は止まって、

「ほむらは、あの怪物が攫っただけじゃ無いか」

「なに言ってるんだよ。 転校生はそこに——」

「分かってないね。 だから、彼女の本体ははさっきの怪物が攫ったと言っているじゃ

ないか」

—思考が、止まる。

キュウベえがなにを言っているのか分からなくて、

「君たち魔法少女が身体をコントロール出来るのは、せいぜい100メートル圏内が限度だからね。まあ、今回ばかりは運が無かったね」

「100メートル？ 何のこと？ どういう意味なの?！」

それでも、何故かその先の台詞が予感出来て。

「—そこにあるほむらの肉体は、ただの抜け殻なんだって。ただの人間と同じ壊れやすい身体のまま、魔女と戦ってくれなんて、とてもお願い出来ないよ。君たち魔法少女にとって、元の身体なんていうのは、外付けのハードウェアでしかないんだ。そして本体としての魂には魔力を効率よく運用出来るコンパクトで安全な姿が与えられている。」

魔法少女との契約を取り結ぶ僕の役目はね。君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変えることなのさ」

「な……………っ?! 騙していたの、あたしたちを?!」

「騙してなんかいないさ。僕は『魔法少女』なつてくれつてきちんとお願いした筈だよ？ 実際の姿がどんなものかの説明は省略したけど」

眉一つ動かさずしやあしやあと語るキュウベえ。

—パアンツ!

破裂音と同時にキュウベえの頭が消し飛ぶ。

「……………美樹さん」

「……………マミ、さん」

銃声のした方を見れば、うつすらと煙を吐くマスケット銃と紫色の宝石の様な、ほむらのソウルジェムを持ったマミさんがいた。

そのままソウルジェムをほむらに握らせると、死んでいたはずのほむらがすぐに起きる。

「……………」

裏ルート：第14話

sideキユウベえ

あれから一夜明け。

杏子のこと心配になったのと、ほむらから、今日は高確率でさやかか杏子と行動を共にするからと見張りを頼まれたのもあって、杏子を追う事にした。

最初はその言葉を疑ってたんだけどね。何故なら今日は月曜日だ。昨日あんな事があったばかりだから塞ぎ込みたくなるのは分かるけれど、普段の生活リズムを維持するというのには、精神を安定させるのに良いのだから。

……だと言うのに、ほむらの予想通り合流しちやったよ。サボりかい。

移動する彼らをコツソリ追い、辿り着いた先は、風見野市にある廃教会。

……佐倉杏子の嘗ての家、だ。

………入るのは、やめておこう。

別に、内側に居らずとも、見守るだけなら十分だしね。

一度ほむらからの念話が来たくらいで、あとはただ待つだけの時間だった。

——幸いにも、今日は狂人にも、怪物にも会わずに済んだ。

けれど、少しずつ大きくなる感情の一部、多分『勘』にあたる部分が、ハッキリとした警告をあげている。

——このままでは、全てが手遅れになると。

——事態が動いたのは、翌日だった。

杏子はほむらたちの方でどうにかする事にしたらしく、ボクは3人の話が終わるまでの間（今日中にどうにかするとほむらは言っていた）、今度はさやかとまどかを見守るこ
とになったんだ。

『—それじゃあ、頼んだわよ』

「ハイハイ。これから魔女狩りに行くところみたいだし、いざとなったら、助けてくれ
よ?。」

『善処するわ』

わーありがたい(棒)

つと、目を離しちやダメだね。

見れば、丁度さやかがマンションから出てきたところみたいだね。
それに誰かが近付いてる足音もする。

「——今日の魔女退治も、ついて行ってもいいかな」

「……まどか」

「さやかちゃんに一人ぼっちになってほしくなくて、来ちゃった」

「……なんで、そんなに優しいかな。あたしには、そんな価値のないの……」

さやか……今朝より精神が不安定になってる。

「……………あたしね、今日、後悔しそうになっちゃった。あの時、仁美が助からなけれ

ばって、ほんの一種だけ、思っちゃった……

最低だよ……正義の味方、失格だよね……

仁美に……恭介取られちゃうよ……

……でもあたし……なんにもできない。

だってもう死んでるんだもん。ゾンビなんだもん……

こんな身体で抱きしめてなんて言えない。

キスしてなんて、言えない……」

涙を流しながら、本心を吐露するさやか。

……おそらく、この先にあるモノが、彼女の望んだ『奇跡』の代償なんだろう。

このまま進めば、確実に彼女は『堕ちる』。

——しばらくして泣き止んだけれど、あの状態での戦闘は危険だ。

一応、連絡を入れておくとしよう。

『ほむら。 さやかたちが出かけた。 かなり精神的に追い込まれている』

『分かったわ。 こつちも杏子との話が丁度終わった所よ。 そつちと合流するわ』

『早めに頼むよ』

——で、こういう時に限って、あつさりと魔女が見つかるもんだから嫌になるよ。

場所は工場の一隅。

全てがモノクロと化した世界で、一本の坂道の頂点に祈りを捧げるポーズの魔女が居て、先端が鋭く尖ったその髪が触手の様に漂う。

使い魔が見当たらないからまどかはある程度安全だけど、接近しなければならぬ

やかには不利な相手だ。

実際、苛烈な攻撃を防ぐので精一杯で、本体に攻撃出来ていない。

「——くツ!?!」

そうこうしている内に片手を封じられ、それを解こうともがいているその背に多数の矢が迫る。

「さやかちゃん！ 危ない!!」

「う——」

「——誰に手を出している、影風情が」

ゴツオオオオオオオオン!!!

振るわれるは、禍々しい鈍い輝きを放つランス。

唯の人なら持ち上げられるかすら怪しいソレが、魔女の触手を容易く消し飛ばす。

「クトちゃん?!」

「ワリ、遅くなった。」

「たくつ、次から次へと」

邪神^{少女}がランスを頭上で回転させ、質量に速度が追加されていく。

「さあ、何発耐えきれる?」

「……邪魔しないで。 1人でやれるわ」

「おい、無理すん——」

「はああああああああああ!!」

剣を両手で構えたまま魔女に突撃するさやか。

当然迎撃され、首や頭部、腹部に触手が突き刺さる。

「さやかちやああん?!」

「——ッ! 言わんこつちやない!」

速度が低下し始めていたランスを構え直して——

「……………は……………あはは……………」

「……………おい、さやか、まさか」

再度突っ込むさやか。先程と同じ様にその身体に触手が突き刺さるが、剣の攻撃は届いている。

「……………あはっ、あはははは！」

その気になれば、痛みなんて、完全に消しちやえるんだあ……………

ふふ……………あつははははははは、ぎやははははははは！

うあああああああああ!!」

「……………もう、やめて……………」

「……………こんな、どうすればいいんだよ……………」

白と黒だけで構成される世界に、狂気を孕んだ笑い声と生々しい肉を叩き切る音が響き渡る。

それは、魔女が消滅するその時まで続いた。

「——ハンツ！ やり方さえ分かっちゃえばこつちのもんだね。これなら負ける気がしないわ」

「……さやか。それ、本気で言ってるのか………？」

魔法で一瞬で治癒したとはいえ、血塗れのさやかにクトが話しかける。

「は？ 本気に決まってるじゃん。どうしたのさ、クト」

「………もういい。分かった」

ガシヤンと、ランスが手から滑り落ちる。

「さやかちゃん……」

「なに震えてんのさ。 帰るよ、まどか」

「——1つだけ聞かせろ、さやか！」

まどかたちに背を向けたまま、クトが叫ぶ。

「お前の掲げる『正義』はなんだ!?! 美樹さやかア!?!」

「……………」

さやかは、何も答えなかった。

「——おい、キュウベえ」

「……やっぱり気が付いていたのか」

「つたりめーだ。私を何だと思ってる」

「……旧支配者、クトウルフ」

「ツ………分かってるなら説明不要だ。」

まどかを追え。ほむらたちがこっちに來てるのは分かってる」

「………分かった」

彼女たちを追い、工場の敷地を後にする。

——少女の八つ当たり同然の魂の叫びは、雨に掻き消され。

1人の魔法少女の終わりの時は、刻一刻と、近付いていた。

裏ルート：第15話

sideキユベえ

さやかがまどかかと離れ、メチャクチャな魔女狩りを始めてから、あと数時間で丸一日が経過する。

幾らソウルジエムを砕かれなければ死なないとはいえ、身体を動かすのは魔法少女も普通の少女も変わらず、摂取した栄養だ。魔力で代用することも可能だけれど、通常よりも消耗が激しくなる。

彼女はあれから、ほぼ不眠不休で戦い続けている。色々と限界だろう。けれど、今彼女に声をかけることは出来ない。出たら確実に切り刻まれる。

さやかは、今、かなり追い詰められている。

余裕なんて無いはずなのに、彼女が夢見た『正義の味方』である為に、使い魔すら全滅させている。

「——うおああああああッ!!」

現に今だって、はぐれた使い魔を真つ二つにしている。

「うう……」

がくりと膝をつくさやか。

……それにしても、昨晚斃した分以外は何故か魔女と邂逅せず、なぜか使い魔ばかりだ。ソウルジェムの穢れが溜まって魔法が劣化しているのに問題無く勝っているとは言え、とても『幸い』とは言えない。

「くっ………次の魔女を、探しにいかないと………」

「——何時まで意地を張るつもりだ?」

ブワツと風が吹き、さやかの前に最強の少女が着地すると、黒い宝石が放られる。

「ほれ、グリーンフシードだ。そろそろ身体すら満足に動かせなくなるぞ」

『回収は頼むぞ、キュウベえ』

『……今度から分かっているときは、先に声をかけてくれるかい?』

『善処はする』

あ、絶対やらないな。

「……あなた、何を考えてるのさ」

「? どういう意味だ?」

異常を感じて、出て行こうとした足を止める。

「……あなたってさ、嘘つきだよね」

「……………」

クトは、何も言わない。

「あなた、いつもどっか、遠くを見てる。あたしたちを見てない。

本当はさ、今だって全然別のことを考えてるでしょ。誤魔化しきれてないよ、それ」
……………そうか。

——残念だ。この手は使いたくなかったよ」

「っ?!」

気温が一気に低下し、息が詰まるような感覚が発生する。
グワツと、骨翼が広がり、

——ギチツ!!

「っ!？」

その骨翼に鎖が巻きつき、動きを封じ込める。

「何やってる!?! さっさと逃げろ!!」

「杏子?! テメツ……!?!」

「……………っ!」

さやかが反対方向へ走り出す。

クトが追おうにも、翼だけでなく身体にも鎖が巻かれる。

「おのれえ——っ!」

「フン! マミのリボンは引き千切れたらしいけど、コイツならどうだ!」

その僅かな間にも、更に伸ばされた鎖がクトを拘束する。

「っ——この程度の小細工なんてエ……ッ」

「?! 本性表しやがったか! でももう動けねえだろ!!」

二重、三重、四重と鎖が巻きついていき——

「——ッ!——」

「——しゃっ! これでアタシたちの勝ちだ!!」

「……………佐倉杏子。 その団子状の塊は何かしら?」

衝撃の光景で気がつかなかったけれど、いつの間にかほむら来ていた。

いや、時間停止かな？

「あのチビだ。 さやかあの奴を襲おうとしてたからな！ 不意打ちで全身グルグルにしてやったぜ！」

「……なにやってるのよ、あなた」

呆れた表情のほむら、でも何処か安堵している様子だ。

「……内側にダメージを与える方法は？」

「無いーけど、このまま固定して海に捨てちまえばいいだろ。 コイツ、元々海底にいたんだろ？」

「……………発想が危ない人のそれよn」

—ギチイツツツ!!!

……もつとも、その表情はすぐに凍りついたけどね。

「!!」

「ウソだろ?! 指一本動かせないハズ——」

2人は繭を警戒してる、けど、多分あの2人は幸運だね。

——地面にうつる影。

2人の影に対し、繭の影。

その影では、繭を何本もの触手が破り、

——ゴグシヤアアアアアツツ
!!!

ついに、現実でも繭が破られる。

鎖の破片を散乱させながら、翼の生えた緑髪の少女が浮かぶ。

【……………】

俯いたその顔が僅かに上げられ――

ドゴンツツ!!!

「!? がっ――」

杏子が壁に叩きつけられる。

影を見れば、彼女に向かって触手が伸びていた。

「また不可視――うっ!?!」

一瞬で距離が詰められ、魔法を使うことさえ出来ずに首を掴む。

【AAAAAAAAAAAAAAAA――】

「ぐ――あ――」

容赦無く締め上げられる。

杏子は触手で抑えられ、ボクも重圧で動けない。

——あの後、なんとか回復した彼女たちのあとを追う。

会話を拾った限りだと、マミがさやかの魔力痕を見つけたらしく、今辿っているの
ことらしい。

そして、クトが完全に敵となったことも。

確かに、あの殺気はさやかの事を殺しにかかっていたし、直後の戦いとも言えない様
な蹂躪も、魔法少女相手には加減が無かった。

……でも、最後に感じた、

アレは、一体………？

s i d e マミ

「……予想より、遅くなっちゃったわね」

美樹さん、昨日からずっと休んで無いのよね……

私が魔法少女の真実を知った時は、絶望も何もかも全て吹き飛ばしてくれ、私より小さな女の子がいてくれた。

あの子がいなかったら、あの事実には耐え切れる自信が無い。そもそも、知ることが出来たかすら怪しかったと思う。

「……私ったら、何も出来てないわね」

もし、ソウルジェムの秘密が明るみになった時、何か気の利いたことを言えていれば。
もし、美樹さんが契約するのを止めていたら。

もし、デパートで初めてあの子たちに会った時、魔法少女について隠していれば。

……今言っても仕方の無いことね。

魔力反応を追っていくと、暗い駅に着く。

ここで見つかるといいのだけれど……

改札を通り過ぎて、周りを見ながら走る。

人が不自然にいない気がするけど、だからこそ、思いっきり走れる。

これだけ反応が強ければ、近くにいるはず——

——いた!

「やっと見つけたわ!」

ホームに設置されている椅子に俯いて座る美樹さん。

『暁美さん! 佐倉さん! 美樹さんを見つけたわ!』

『場所は!』

『○○駅よ!』

『そこなら5分とかからず行けるわ。そこから動かないで』

『分かっているわ』

念話で暁美さんたちに声をかけてから、美樹さんの隣の席に座る。

「さあ、帰りましょう? 皆心配しているわ」

「……すいません、手間かけさせちゃって」

「? らしくないわよ。美樹さんはもつと元気じゃないと」

「……そうですか。」

——別にもう、どうでもよくなったから」

「——ッ?!?」

その眼には、只々、深い闇が、映っていた。

それをみた瞬間、殺気にも近い、とてつもない寒気が背筋にはしる。
「結局あたしは、一体何が大切で、何を守ろうとしていたのか。」

なにもかも、わけ分かんなくなっちゃった」

淡々と、平坦に、言葉が紡がれる。

嫌な気配がして、美樹さんの手元を見ると、

——穢れに満ちた、ドス黒い、グリーフシード悲嘆の種。

「み、美樹さんは、平和を守ろうと、頑張ったじゃない！」

「……確かにあたしは何人か救いもしたけど、その分心には恨みや妬みが溜まって、一番大切な友達さえ傷つけて……」

——これは、もう、私じゃ、止められない。

でも、あの子にはもう、頼れない。

「誰かの幸せを祈ったぶん、他の誰かを呪わずにはいられない。あたしたち魔法少女って、そういう仕組みだった」

「っ、そんなこと——」

見ていられない。

お願い。

誰か——

「あたしって、

ほんとバカ」

——ピシッ

崩壊が、始まる。

「美樹さああああああん!!!」

—誰か、
助けて

裏ルート：第16話

sideキュウベえ

ママからの念話を終えると、時間停止を駆使してあつと言う間に行つてしまうもんだから、置いて行かれたボクは懸命に足を動かす。

「はあ。 インキュベーターの個体数と情報伝達能力を活用したシステムから切り離された弊害が、ここまでキツイとはね。 ま、面倒臭さを感じられるって事は、いいことだと思つておこう」

……インキュベーターで思い出したけれど、本当に一匹も見かけないな。

さつきのエネルギー波、アレは間違いなく魔女化した時に発生するものだ。

普通ならあのエネルギーは回収されるものだけど、ある種の衝撃波として広範囲にばら撒かれるなんて、どう考えてもおかしい。

エネルギーを回収しなかった？

効率房のインキュベーターが？

あり得ない。 何らかの事情で回収しなかったと考えるのが妥当か？

……情報が少な過ぎる。もう直ぐ着く頃だし、目の前の事態に――

『――いあ くとうるー ふたぐん!』

『いあ いあ くとうるー ふたぐん!』

虚ろな眼、意味不明な唄、手には凶器の群衆――

成る程、これがほむらたちが言っていた『狂人』か。

幸い、特に四肢を欠損している訳でもないし、生理的嫌悪感もそれ程では無い。

映画とかのゾンビよろしく、入り口付近でたむろつてるだけだから、駅構内への侵入は容易そうだね。

さてと、ダクトは何処だったかなつと――

……それにしても、延々とあいあうるさいなあ。

やっぱりと言うべきか、駅の内部も狂人だらけだ。それしか出来ないのか、唄を眩きながら、ひたすら下り線ホームに向かつて歩いていくだけ。

問題があるとすれば、

—ドグギギギギギギギツ!!

重量のある金属塊を擦りながら振り回すような音。それに混じって、発砲音なども

聞こえる。

また戦っているのかい!?

しかも、狂人が歩いていつてるもんだから、押し返され、血塗れで倒れている。

「あそこは通れない、というか通りたく無いね」

仕方なく、汚れるのを我慢して端の排水溝を歩く。

ホームまで登って、覗k—

グシヤアツ!!

「キュツぷ!」

直ぐ上にコンクリートの塊が激突して木っ端微塵になる。

見れば、ランスと引き千切ったのか断面が歪んでいる看板を二刀流で振り回すクトを杏子が何時もの十字槍で捌き、ほむらとマミがそこに銃撃を加えていた。

「っー」

銃弾を鬱陶しく思ったのか、看板をマミに向かって投げとばす。

即座に迎撃され、僅かに生じた隙を狙って槍が突き出されるのを頭部で受け血が吹き出し、さらに散弾銃の連射でランスを持っていた右腕が吹き飛ぶ。

「ーうるああああ!!」

ソウルジエムが入ったポーチを狙った追撃を、コンクリートの地面を踏み抜いて蹴り上げ、強引に盾代わりにして防ぐ。

視線が途切れ、その間に僅かに浮遊。

右腕を一瞬で再生し、両手で天井の軸を掴むと引きちぎり、双槍にする。

「なんっー回復力だよおい!」

「削りきるまでよ。魔力そのものは少ないわ!」

「ッ！」

魔力で編まれた槍とただの鉄骨ではまともな勝負にならず、あっさりと双槍が二つに切り裂かれる。

宙を舞う二本のうち、一本は杏子に、もう一本は狂人の昇ってくる階段の天井部に蹴り出される。

天井に向かった方は突き刺さるけど、杏子への方は銃声とともに弾かれ、多節棍を使った立体的な軌道で矛がクトの首を狙う。

素早い側転で一閃を躲し、近くに落ちていたランスの柄を踏みつけて跳ね上げることのでまみの銃弾を防ぐと、骨翼でほむらを襲う。

「その攻撃は、もう何度も見たわ！」

届く前に姿が掻き消え、眼と鼻の先に手榴弾が現れる。

爆発。 閃光。

直前に咄嗟で手榴弾を掴んでいたらしく、左手は骨が露出するほどズタズタになる。

「……痛いな」

「!？」

ブチィ、と己の腕を肩から引き抜き、指先から二の腕の部分を喰らうと、そのまま引き抜く。

持ち手の部分にのみ肉が残り、赤く、白い骨が現れる。

「な?!」

「た、食べちゃった……っ?!」

余りにもグロテスクな光景に怯んでいる隙に、骨を投げ捨てると、右手でランスを掴み取り、再度一瞬で再生させた左手を突き出して掴みに行く。

「っ、それも、見たわ!」

ほむらが紙一重で躲し、超近距離で顔面に散弾を叩き込む。

血が飛び散り、硝煙を吐きながら後ろに吹っ飛び――

「――足らん。足らんなあ……っ!!」

異様な空気が場を支配する。

片目は潰れ、蒼白くも端整な顔立ちは見る影も無くなり、口は耳まで裂ける。

「っ――いい加減、止まりなさい!?!」

榴弾が炸裂し、血に混じってピンク色のナニカがぶちまけられ、再び倒れる。

「まだ、まだまだ――」

「暁美さん、もうやめて! やり過ぎよ!!」

「うっ……」

瞳孔が開ききつた眼で榴弾グレネードランチャー砲に弾を込め直すほむらをマミが止め、杏子は気分が悪

そうに口を押さえる。

「——は、クハハハハハッ！ ママナラネエナ！！ クギヤハハハハハハハハ！！」

ぞつとする、パンドラの箱の蝶番が軋むようなワライゴエが響く。

そちらを見れば、頭部の半分以上を失い、極彩色の液体を断面から垂れ流す、人の力タチをした、ナニカが、立っていた。

その口が、足が動くたびに杯状の頭蓋骨から脳漿や髄液が溢れ、片方残った眼球がギョロリと蠢めく。

「!?!?!」

「あ、あああああああああ!!!」

震える指で引き金を引かれた榴弾は、見当違いの方向に飛び、建造物の一部を吹き飛ばす。

「……ド処ヲ撃ツテイる？ 私は此コダぞ？ クハハハ——」

ブオンとランスが振り回され、その風圧で3人とも体勢が崩される。

『「いあ いあ くとぅ——」』

ズガンツ!!

「……煩イ」

こびりついた血で滑ったのか、階段の天井のランスが突き刺さり、今度こそ崩落する。

鉄筋コンクリートの雪崩がホームに入り込んでいた狂人すらを巻き込み、完全に遮断する。

「……？ 煩ワしいナ」

そう呟くと、自分で崩壊した頭部を千切り、落ちたソレを踏み潰す。

それが合図だったかのように、首の断面から、グチュグジュと傷一つ無い頭部が生えてくる。

「ば、化け物——」

「何を今更。最初からそう言っているだろう？」

全身を己の血と脳漿で染めた紅のドレスの少女が、歪んだ笑みを浮かべる。

「——ああ、それだ。」

『恐怖』。『狂気』。

いい、イイゾ!!

さア——

私を、殺してみせろ!!!
!!!」

骨翼が空を割いて一気に距離を詰め、その銃口を掴む。

「!? こ、来ないで!!」

「クハ、逃げてどうする? 最初の威勢はどうした? フハハハハ!!」

心臓部に銃口をめり込ませると、震えるその手を押さえ付け、強引に引き金を引かせ
る。

バコンツとくぐもった音がなり、背中側から肉片が飛び散る。

「ぎゅっ！

……グブ、どうだ？ 恐怖はこうやって払え。 でなければ何度でも蘇るぞ？」

「あ——」

今度こそ限界だったのか、ほむらが気絶する。

「クク………あ——？」

まるで映画で描かれるようなベタなサイコパスのように首をカクつとしながら、周りを見渡す。

その視線は、頭蓋が吹き飛んだ状態で動いた時点で気絶したマミを通り過ぎ——

「——其処か」

「ひいっ?!?!」

完全に腰が抜けて、槍に縋り付くことしか出来ていない杏子を捉える。

ジャリ、ザリ、と、色々な意味で鉄分塗れの床を踏み、一步一步近付く。

……うん。かなり、いや今すぐボクも気絶したいくらい怖いね。

今ボクが隠れてる場所が、丁度杏子が座り込んでる所のすぐ側なもんだから、自分の方に来て居る様に見える。

「く、来るにやあつ!!!」

後退りするも、ここは地ごk……間違えた、狭い駅のホーム。

すぐに退路が無くなり、背中が壁にぶつかる。

「クハ、嘸んでるぞ? 何時もの気丈さは何処へ行つた?」

数歩で追いついた怪物が、その肩を掴む。

「?! やめ、離せえつ!!」

少しでも距離を置こうと、両手を突き出し、その手は空をきる。

「へ……………?!?!」

前を見るな、と叫べたらどれだけよかつたか。

その手は、ポツカリと開いた胸部の穴を通り、反対側から出ていた。

「う、うわ——」

「おや？　そういや塞ぎ忘れていたなア」

急いで引き戻すも、まるで狙ったかのように再生した部位に飲まれる。

「?!? いや、離せ、離して!!!」

両手を必死に引き抜こうと藻がき、案外すぐにズボッと抜け、て――

「……………おっ？」

――その手には、管が繋がり、脈動する、心臓が、

「――う、うわああああああああああつ?!?!」

咄嗟に投げ捨てようとするも、筋肉が強張っているのか、離すことができず、

グチユツ

「ひう――」

ソレを握り潰してしまい、そのショックでか気絶した。

……つまり、これで、全滅した。

まるで肉食獣が獲物を品定めするかの様に辺りを見渡す、と

「——いんふ」

吐血して、
倒れた。

裏ルート：第17話

sideキユウベえ

——クトが、吐血して、倒れた。

……へ？　なんで??

「ふ、ごほっ！　ったく、ホントに儘ならないなあ。死にたい時に死ねず、生きたい時に限つてこのザマなあ……」

倒れ伏したまま血を吐き出し、そうボヤク。

その姿は、さつきまでであった殺気や恐ろしさは霧散し、今にも消えそうな、弱々しい少女でしかなかった。

「……と、ここまでやったんだ。やる事は、きつちり、やりますか」

ゆつくりと立ち上がり、気絶した3人のポケットを探る。

取ったのは、グリーンフシード。

そのままヨロヨロと歩き、瓦礫からランスを回収すると、その場を後にする。

……もしかして、ボクがいる事に気が付いてない？

そのまま側溝を伝って、クトを追う。

ドアを幾つか通ると、すぐに魔女の結界に到達した。

この魔力反応は……さやかか、だね。

何のためらいもなく侵入していった彼女に、物陰に隠れながらついて行く。

「……さやか。今回はチャラにしてやるが、神をコキ使った代償は、本来高いんだぞ？」

「……さやかか。」

そして、人魚の魔女の部屋に着くと、

ほむらたちから奪った分と、クトが元々持っていたらしいグリーンシードの限界を超える量の穢れが、

クトのソウルジェムから、移される。

パキパキと魔女が孵化し、広い部屋を圧迫する程の数が見れる。
物陰から伺えるだけでも、軽く15は超えてる。

「……………借りるぞ、■■■■。」

さやか、お前こういうの好きだろ？

— I am bone of the dark.
「身体は腐肉で形作られる」

ゆつくりと、垂直に挙げられたランス。
左手に握られたソウルジエムからは、美しい白い閃光が発生する。

Hate is my body, and mad is my blood.
「血潮は憎悪、心は狂気」

I have made over thousands and death.
「幾多の世界を超えて不滅」

言葉が紡がれるたび、ランスに膨大な量の魔力が込められる。

「Unknownto desire.

ただの一度の救いも無い

Have withstood pain to moan unlimitted corpses.
 咎人は常に独り、屍の前で嘆き続ける」

超過したエネルギーがオーバーフローを起こし始め、ランスを囲うような渦を発生させる。

「けれど

The wish never ends.
 その願いは未だ潰えず

Her whole body was
その身体は、

still
それでも、「

悪趣味な装飾が消え去り、純白に金のラインが疾る、素直に美しいと言える刀身が露
わになる。

そして、

「
” Forever Fantasy ”
終わりになき幻想”を求める!!!
」

——ランスが振り下ろされ、魔力の奔流が魔女を一体残らず、呑み込んだ。

……………閃光が収まったのを確認すると、クトのいた所を見る。

まず目にはいったのは、蹲り、血反吐を吐くクト。

次は、散乱する大量のグリーンフシード。

そして――

「……やっと、ゴホっ、やっとだ。　ゲホ、ゴフツ、やっと、追いついたぞ………」

魔力が結界の外にまで影響を及ぼしたのか、破壊された扉、その部屋の内側に横たえられている、

――美樹さやか、遺体。

「……余計な、手間、かけさせやがって」

グリーンシードの1つ――元、さやかのソウルジエムだったそれを拾い、胸に抱く。

「……頼むから、上手くいけよ。

——M精I神N転T移D移T移R移A移N移S移F移E移R移!!」

グリーンフィードが、青い光を放つ。

少しづつだが、確かに浄化され、

それと比例するかの様に、クトのソウルジエムが凄まじい勢いで濁っていく。

「——つくあ……………」

やつぱり、それ用の呪文じゃねえ分、負担、ヤツベえ……ゴフツ!!」

口からドス黒い血が溢れる。

ソウルジエムは限界ギリギリまで濁るが、グリーンフィードは未だ浄化しきらない。

「さやかあ——戻ってこい!!!」

テメエの居場所は、んな暗い場所じゃねえ!!!

私は、もう、——

M
I^精
N
T^神
D
T^転
R
A
N
S
F^移
E
R
イ
ツ
ツ
!!!
」
!!!

ダメ押し魔法で、

ついに、

ーグリーンフシードが、青く透き通る、卵状の宝石に、

ソウルジェムに、戻る。

「……はは。 はっははははは!!

見たかバブルスライムモドキイ!!

だあれが塵殺兵器だ!! 私はやったぞ!! 私hゲフゴホゴフ!!」

血を噴水の様に吹きながらも、穢れつないソウルジエムを掲げて笑う。

「ケフ、ゲフっ。 し、シメだ」

這いずりながらも、さやかの手に穢れのないソウルジエムを握らせる。

「……………う……………」

僅かにだが、胸が上下する——呼吸が、確認出来る。

ほ、本当にグリーンフシードを浄化したのかい?!?」

「?!?! きゅ、キュウベえ?!」

「あ」

どうやら、驚きのあまり声が漏れたようだ。

「こ、これは、あの、そゲフォの、い、何時から見て、ゴホツ」

何故かアタフタし始めるクト。 その表情は、本気で焦っている。

「クト? キミこそ、今のは一体——」

『—いいあ　いいあ　くとうるー　ふたぐん!』

『—いいあ　いいあ　くとうるー　ふたぐん!』

「!?!」

狂人たちの声が、すぐそこから聞こえる。

「チツ!　ガチでウゼエ!!」

「あれはキミの信者だろう?!」

「勝手に発狂し始めんだから私の意志じゃねえよ!!　つかほつとくと脳ミソやら心臓やらキ〇タ〇まで捧げてくる連中が信者とか、寧ろこっちの方が超迷惑だ!!」

「フアツ!?!」

壁に手をつけて立ち上がると、部屋の外に向かって歩き出す。

「キュウベえ!　もう直ぐほむらたちが目を覚ます!　迎えに来てもらえ!」

「あの狂人たちはどうするのさ?!」

「私が引きつける。」

それと、キュウベえがここで見たことは、秘密にしておいてくれないか？」

パキ、パキと割れ始めた黒いソウルジェムを握り、そう言い放つ。

「!? まずソウルジェムを浄化しないと！ グリーフシードはこんな——」

「キュウベえ」

見上げれば、振り返ったクトが、こちらを力強い目で見ていた。

「……私は、クトウルフだ。邪神だ。」

悪は、人の手によって打ち取られなければならない」

「……クト？ 何を言ってる——」

「キュウベえ。」

——今まで、ありがとう。
そして、

——さよならだ」

s i d e ■■

「——クト！ 待ってくれ！！ クト！！」

背後から、小さな相棒の呼ぶ声が聞こえる。

でも、もう、後戻りは出来ない。

私のソウルジェムは、いつ魔女を生んでもおかしくない。

今は、その決定的タイムリミットを騙し騙し延ばしているだけだ。

ただ、奴等を引きつけて離れるのに必要な分以外の魔力供給を切る。

視界はボヤけ、

いあいあとしかほざけない連中の声はシャットアウト、
ランスとソウルジエムを握る感触すらあやふや。

『——いあ——とう——』

【っ！ この私を放って何処へ行く気だ!!】

視界の端でほむらたちの方へ行こうとする一団を、神威を織り交ぜた一声で繋ぎ止める。

——パキ、ピキキ……

……やっぱり、こっち関連の力は消耗が激しいな。

足に力が入らなくなる。

杖代わりの槍で何とか立ってられるけど、もう、一步も歩けない。

「……はっ！ 私みたいなクソツタレには、お似合いの場所だな、おい」

もう耳こそ聞こえないが、大方いあいあくとうるーなんちやらかんちやら騒いでんだろ。さつきつからちよくちよく水っぽいなんかがかかってんだよ。なんだこれ？ 血か？ 涎か？ ピー液か？ 普通に全部ヤダなあ。

—自分の身体すら支えきれなくなり、倒れる。

手からソウルジエムが零れ落ち、転がる。

トロトロした動きで狂信者どもが助け起こそうとするが、ハッキリ言わせて貰えば、『さわんな』だな。ぶっちゃけ無意味だし。

—パキイツツ!!

ソウルジエムがグリーンシードへと変異し、魔女が羽化する。

………死んだのに意識あるって、すげーデジャビュ。前にも似たようなこと無かつ

たか？

そしてこんな状況下でこんなコメントが出るあたり、私の^{思考鈍化}バーサークっぷりも中々だな。

魔^私女の触手が、僅かに意識の残る私の抜け殻を絡め、その身に取り込む。

それと同時に、ずっと、ずっと待ち望んでいた感覚が、私^{魔女}の身を貫く。

それは、剣／刀だった。

それは、矢／槍だった。

それは、拳／蹴だった。

それは、盾／鎚だった。
それは、弾／砲だった。

幾重もの武器が刺し、斬り、打ち、穿ち、貫き、撃ち。
私の命を絶とうと、この身を削る。

……それで、いい。

我は『c t h u l t h u 』。
存在そのものが悪である物。

この身は、光の元に討ち取られる。

ここは、英雄の墓場にして、私の処刑台。

ここが、私の、最期の場所。

……………それで、いい。

助けは、要らない。

ただ、眠るだけ。

——だというのに、見滝原に来てからの記憶が駆け巡る。

……私は、

……私は、——

表ルート：二章 歪んだ悪

表ルート：第6話

sideほむら

——足元すら見えない暗闇を走る。

周りの風景は全く見えないのに、何故か、迫り来る人影はハッキリと見える。

——全員、あのビルにいた狂人たちだった。

線の細い女性が、

スーツ姿の男性が、

学生服の少女が、

よぼよぼのお爺さんが、

砂場で遊んでいそうな男の子が、

その手に、凶器を持って。

ノコギリ、ヤスリ、ワイヤー、カナヅチ、ナイフ、ガラス片、スパナ、カッター、ハサミ、鉄パイプ、クギ、鎌、ドライバー、松明、栓抜き、缶切り、ペン、スコップ、ビニール袋、杖、ツルハシ、傘、シャベル、木片、バット、バーナー、鉛筆、錆びた包丁、折れた骨、歯、削った爪、――

逃げる私。

迫る彼等。

あの眩きが、叫びが、聞こえる。

”――いあ　　いあ　　くとうるー　　ふたぐん!!!”

”――いあ　　いあ　　くとうるー　　ふたぐん!!!”

"——いあ　　いあ　　くとうるー　　ふたぐん!!!"

「いや!!　来ないでっ!!」

耳を塞いで走っていると——

目の前に、見覚えのある、ピンクの髪をツインテールにした少女が倒れていて、

「……………まどか?　　まど——」

その身体に、無慈悲にノコギリの刃が振り下ろされる。

「あ——」

よく見れば、彼女の身体は、真っ赤に染まって、

「ああああああああああああああああああああ」

また走りだす。

しかし、考えてしまう。

——なんでこの場には、私しかない？

佐倉杏子は?! 美樹さやかは?!?!

バマミは?!?!?!

——ふと、振り向いた。

——振り向いて、しまった。

「——い、起きろ！ ほむら？ ほむらっ!!」

「——はっ?!」

……目を覚ますと、泣き出すのを堪えているような表情の佐倉杏子が、私の肩を揺さぶっていた。

「や、やっと起きたか！ アタシは、アタシはてつきり……ぐすっ」

「……………ここは、……………」

周りを見渡すと、至る所に町の地図や、ワルプルギスの夜の情報が紙媒体で貼られている部屋。

……………思い出した。昨日、佐倉杏子の手を掴んだまま自分の部屋に駆け込んで、窓と扉に即席のバリケードを作って、そのまま寝落ちしたんだった。

「……………じゃあ、さっきのは、夢——」

「……すごい魔されてたぞ。大丈夫か？」

「……あなたこそ、目が真っ赤よ」

言い返して、ソウルジェムを確認すると——やはり、大分濁っていた。

まあ、魔法少女の変身を維持したまま長時間全力疾走した事を考えれば、こんなものだろうけど。

グリーンフィードで手早く浄化し、京子にも浄化を促す。

それで気が抜けたのか、一気に全身の力が抜け、

——カリカリカリカリ……

「?!?!」

窓のバリケードから聞こえてきた音に、飛び上った。

「まさか、アイツら?!」

「おおおおお落ち着きなさい佐倉杏子!! バリケードを退かした瞬間に、いえいつそののまま全力砲撃をぶちかませば——」

「いやアンタが落ち着け！　そんでロケランしまえ！　部屋ごとブツ飛ばす気か!？」

盾から取り出したRPG―7を巡って一悶着した後、無関係だった場合も考えて、バリケードを退かした瞬間に槍とショットガンを突きつけ、奴らなら即排除。　手加減無しの殺す気で掛かることにした。

「――覚悟はいいか？」

「……………いつでもいいわ」

「それじゃ、

――それっつ!!」

バリケードが退かされ、穂先と銃口が突きつけられたのは、――

「……………やれやれ。　これはなんの騒ぎだい？」

「…………キユウベえ？」

憎きインキュベーターだった。

……………普段なら即排除だけれど、今回は見逃そう。

断じて、安心し過ぎて力が抜けたからではない。断じて。

「……………それで、なんの用よ」

「2人のソウルジェムが急速に濁っていく反応があったからね。みれば、バリケードの所為で入れないし」

何事かと思つて来て

「……………そうね。あなたにも話しておくべきかしら」

「？」

いつも通りの無表情なインキュベーターに、昨日の出来事を伝える。

謎の狂人たちについてと、謎の文句について。

「……………なるほど。 災難だったね」

「……………一応聞いておくわ。 あれは魔女とは無関係なの？」

「無関係だね。」

ただ……………」

インキュベーターが珍しく言い淀む。

「？ 何か知っているの?!」

「……………彼等が口にしていたという言葉。 そのなかで、近い発音の単語をしっているんだ」

「教えろ（えなさい）!!!」

「そう言うと思っていたよ。」

ただ、僕が知っているのは、本来発音不可能な単語だ。 その言葉を無理矢理発音した場合に近いというだけで、手がかりであるとは限らな

「いいから!!!」

……どれだけ怖かったんだい?!

ま、まあいいや。その単語は、

『くとうるふ』、或いは、『くーるー』。
近い発音の単語だ」

これらが、その文句の中では『くとうるー』に

「くとうるふに、くーるー……?」

聞いた事も無いな」

京子は首を傾げる。

ただ、私は、

「……………何処かで、聞いたような覚えが……………？」

「マジか?! 思い出せるか?!」

「ちよつと待ってて。今やってるわ」

……………あれは、確か、私がまだ入院していた頃。

何かの本で読んだような……………

確か、タイトルは、……………

……………それ以上は思い出せないわね。なんとなくだけど、当時の私には難解で、読んでる途中で放り投げたような気がするわ。こんな事なら、ちゃんと読んでおけばよかった。

「……………何かの、本に書いてあった。それしか思い出せないわ」

「本、か。　　そういうやキュウベえ、アンタどこでこの単語を聞いたんだ？」

確かに、気になるわね。

そこから情報を得る事も可能だし。

「……………君たちの話を聞く限り、知らない方が幸せだろうけど、本当に知りたいのかい？」

「ええ。　　アレをどうにかしない限り、見滝原に平和は訪れないわ」

「……………僕は警告したからね。」

——クトだ。　　彼女が、自分がその『くとうるふ』だって」

「……………」

「……………マジ、かよ」

『―絶望と、ちよいとした理由で狂気を司る『邪神』、『くとうるふ』』

彼女は、確かに、そう言ったらしい。

「……………ヤバい、ママ!!」

アイツ、クトと一緒に、」

「急ぎましょう!!」

バリケードをさっさと退かすと、変身して窓から飛び出る。

どういう事か、説明して貰うわよ。

クト!!

少女爆走中

— マミのマンション

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピン

ガチャ

「……そんなに連打しなくても大丈夫よ。それで？ 2人共、休日の早朝になんの用

よ？」

壊さんばかりの勢いでチャイムを連打すると、眠たげな表情の巴マミが出てくる。

「——マミ！ クトは?! あのチビは?!?!」

「えっ」

「巴マミ、説明している暇はないわ！一刻も早くあの悪魔を——」

「ちよ、ちよつと!! 落ち着きなさい!! クトなら、昨日から帰ってないわ!!」

「「なっ——!?!」」

血の気が引くのが、自分でも分かる。

まさか、本当に、昨日の件にクトが——

「……取り敢えず、入ったら? 2人とも、髪がボサボサだし……」

なんか、血の匂いにするわよ?」

——その後、交代でシャワーを借りながら、昨日の一件と今朝の情報を伝える。

途中から、クトが普段連れているインキュベーターも混ざっていた。

……この個体、やっぱり他のインキュベーターと比べて、表情豊かだね。今だって、寝惚けた顔で何とか体勢を保っているように見える。

「……それで。何か知ってるかしら？」

「まず、クトがヒトじゃないのは知ってるわ。本人から聞いたし、身包み剥いで羽がホンモノなのも確かめたし」

「……よくそんなのと生活する気になったな。アタシにや無理だ」

「言動や姿が人にそっくりだから、慣れると気にならないわよ。」

それで、『くとうるふ』？

……先に聞いておくけど、唯の夢って可能性h

「ないっつ!!」

……………そう」

そう言ったママミは、スマートフォンで何かを検索して、

「——これが、『クトウルフ』よ」

突きつけられた画面には、大海に浮かぶ石造りの島に佇む、緑色の、蛸に似た触腕を無数に生やした頭部に、巨大な鉤爪のある手足、コウモリのような飛膜のある、歪で醜い竜にも、巨人にも見える怪物が映っていた。

……………正直、クトとは似ても似つかない。

「……………それと、貴女たちの話に出てきた狂人。この邪神が語られる物語に出てくる『狂信者』まんまよ。」

TRPGのプレイでも見て、夢に出たんじゃないの?」

疑惑の視線が私たちを貫く。

当たり前だ。私だって体験していなければ信じなかっただろう。

「……………そんなハズは……………」

「……………佐倉杏子。昨日のビルに、もう一度向かうわよ。ついて来てくれるわよね、巴

ママミ」

「……………いいわ」

「!? 正気かよ?! アイツらとの追いかけてはもうコリゴリだ!」

「追いかけるんじやないわ。」

——私たちが、追いかけるのよ」

「で、でもなあ——」

「佐倉さん、知ってるかしら? 一度巻き込まれた事件を途中で放り出して逃げるのはフラグなの。クローズドサークルモノでも、怯えて密室に引き籠もったキャラは、その後、無惨な遺体で発見さる」

「よし殺るぞお!!」

「佐倉杏子、字が違うわ」

何にせよ、怯えて縮こまるだけよりはマシね。

少女警戒中

……問題のビルに到着、したまではよかったけれど……

「……………」

「……………」

「まあ、そりやそうよね」

ビルの周りには、黒字で『KEEP OUT』と書かれた黄色テープが張り巡らされ、青いビニールシートが入り口を覆っていた。

そして、そこらじゅうにいる警官。

あとオマケで野次馬と報道陣。

軽く聞き耳をたてるだけで、様々な憶測が飛び交っているのが分かる。

『——ビルの中で、カルト連中が集団自殺を図ったらしい。』

『——いや違う。連続殺人鬼のアジトだ』

『——昨日まではいつも通りだったのに、どうしてあの人が——』

『——路地裏でも殺人事件があつたらしい』

『——終末の兆しだ。——バカ言え、宇宙人の実験場だ』

……取るに足らない喧騒の中で、ある一つの情報が、意識を、揺さぶる。

『——緑の髪をした、黒いワンピースの女の子がいたらしい——』

「……バマミ。聞き取れたかしら？」

「ええ。これは調べないと駄目ね」

「? ? ?」

イマイチ聞き取れ無かつたらしい佐倉杏子を置いて、野次馬に聞き込みをしている警官に目をつける。

「……今、事の詳細を知っているのは警察ね。バマミ、演技力に自信は？」

「ふ——任せなさい！」ドヤアッ

「……………やっぱり私がやるわ」

「なんでよ?! という叫びと、展開に置いてけぼりにされた人の顔に書いてある? をスルーして、近付いてきた警官に向き直る。」

「軽く深呼吸——問題無い。数々のループでまどかをつき離さざるを得なくなつた時に身につけた演技力、その目に焼き付けるといいわ、2人とも!!」

「——君たち、この辺の子かい? 悪いんだけど、あのビルについて、何か知ってるk」

「あ、あの! 私の友達を見かけてませんか?! 昨日から見えてないんです!」

「」

「両手を胸の前で組み、精一杯涙目で『心配なんです!』と訴えんばかりに上目遣いで見る。ちなみにメガネはかけている。」

「——はっ?! え、えっと、その友達っていうのは、どんな子だい?」

「これ位の身長で、緑色の髪の毛の女の子なんです! 昨日は珍しく黒い格好をしてみました!」

「!! そ、その女の子、何処に住んで——」

ヒット。昨日のビルには、今言った特徴の狂人はいなかった。
なら目撃されているのは、十中八九、クトね。

欲しい情報は手に入った。後は適当にはぐらかして、逃げるだけね。

「ありがとうございます！ さよなら！」

「あ、ちよ、君?!」

ポカンとした顔でフリーズしている2人の手を強引に引つ張り、角を曲がって直ぐの細い路地に隠れて、追跡をやり過ぐす。

「ふう、これで一安心ね」

「」

「」

「……いつまで固まっているつもりなのかしら？ 佐倉杏子、バマミ？」

目の前で手を振ってみる。

「……………わっ、——」

あ、バマミは反応した。

「わ?!」

「——私の曉美さんが、あんなに可愛いハズがないっ!!」

「誰があなたのものよ?!」

思わずツツコム。

その声で意識を取り戻したのか、佐倉杏子も復活した。

「……………可愛いは正義、か……………」

「鉛玉ブチ込んででも正気を取り戻させてあげましょうか?!」

ただし、何故かアルカイックスマイル悟ったような微笑みでだった。

「冗談（だ）よ、冗談」

「はあ……………胃薬でも買おうかしら……………」

私の友達は、まどかと胃薬だけ……………」

……………虚しくなるから辞めておきましょう。

「……………それよりも、どんな形であれ、クトがこの一件に関わっているのは間違いない

わ。ソウルジェムで魔力反応を追えば——」

「——君たち、さつき警官に話しかけられた子よね」

「——っ!?!」

後ろから、話しかけられた。

見たところ一般人だから、それだけなら特に気にしないけれど——

この女性、昨日、あのビルにいた……!!

「あ、ちよ、ちよっと待って! 君たち、その緑色の髪の子の友達なんだよね!!」

「——っええ、そうよ」

「だったら、伝えて。」

——「助けてくれて、ありがとう」って！」

「……………は？」

想定外の言葉に、思わずポカンとする。

よくよく考えてみればこの人は、あの呪文を呟く以外は雄叫びと唸り声しか出せなかった時と違って、まともな会話が出来ている。

……………どういう、ことなの……………??

——詳しく話を聞いてみると、

「……………信じてもらえないと思うけどさ。

昨日、突然頭の中に、変な映像が流れ込んで来

たんだよ。

内容は……覚えてないけど。

それで気がついたら、自分でも訳のわからない言葉を叫びながら、カナヅチを君たちくらいの子供に振り下ろしかけてるところだね。手首を掴まれて、止められてたんだ。

後ろを振り向いたら、緑色の髪の小学生くらいの子が、『ゴメンナサイ』って何度も眩きながら、カナヅチを私から取り上げてね。その後、その子がゴニョゴニョなんか呟いたと思ったら、いきなり意識が無くなって、目が覚めたら家だったんだ」

……との事だった。

「……………全てあなたの夢だったという可能性は？」

「いや、無いね。カナヅチなんて変な物振り回したっばいから、手にタコが出来てるし、枕元に、『あなたは誰も、傷つけてない』って紙があった」

「……………」

昨日あなたに襲われたんですけど、という言葉は飲み込む。

「……………分かったわ。必ず伝えておく」

「……………そうか、悪いね」

そう言って、その女性は去っていった。

「―――先ず、情報を整理しましょう」

場所は変わって、喫茶店。

「整理つつつても、訳わからんの一言で済んじまいそうだけど……」

「そう言う訳にも行かないわ。今この瞬間も、街の住人が危険に晒されているもの」

特に、まどか。

インキュベーターや美樹さやかがいるから、今この瞬間に命が奪われている可能性は低いでしょうけど。

「まず、狂人についてまとめましょう。」

彼らは痛みを感じず、四肢を失つても襲うのを辞めない。

狂人となるきっかけは、『謎の映像』が関わっている可能性がある。狂気を解くこと

も可能だけれど、方法は不明」

「……大体、そんなものね」

「なーمامミ、狂人って、さつき言ってた『狂信者』と似てるんだろ？ そつちはどうなんだ？」

「基本的には、現実の宗教でも時々問題になつてゐる過激なカルト系信者と同じよ。

物語の中では、彼等神格が太古の昔に連れてきた眷属の血筋がそういつた狂信者を束ねてるんだけど、そういつた存在は外見が人間離れしてるから、一目見れば分かるわ」

「じゃあ、手掛かりは無い、か……」

「なら、あの呪文については？」

「長い方は、『ルルイエの館にて、死せるクトゥルフ夢見る内に待ちいたり』という意味よ。」

「短い方は……：簡単な言えば、一種の讚美歌ね」

「うえ、あんな気色悪い讚美歌なんてあんのかよ……」

「つか、さつきからちよくちよく出てくるくとうるふつて、小説に出て来る化け物なんだろ？」

「ええ、そうよ。」

初出は1926年。ある一人のパルプマガジン作家が書いた、のちのホラージャン

ルの先駆けとなったと言っても過言ではない作品。 タイトルは、

「……思い出したわ。『クトウルフの呼び声』」

「そう、それよ！」

「……何にしろ、作り話なんだろう？」

あの連中やクトとは無関係だろ」

「問題はそこなのよねえ」

……昨日の狂人は、実在していた。

だというのに、彼等の口にしていた台詞に、クトの言葉。 それらが指し示すのは、実在しないモノ。 フィクションの存在。

普通に考えれば、私たちの聞き間違いで、クトの言葉はインキュベーターが私たちを混乱させる為の嘘をついた、と考えられる。

けど……

「……『常識に囚われてはいけない。 私たちと付き合うなら、あらゆるモノを疑え。』」

だが、探るな。理解するな』」

「？ 暁美さん、それは？」

「……私が、最初にクトに出会った時、去り際に言われたのよ。ただ、どう考えても意味が矛盾して……」

疑え、と言いながら、探るな、理解するなど言う。

なら、疑ったまま信じろと？

「……キュウベえなら、何か知ってるかしら？」

「インキュベーターが？」

「ええ。 といつても、普段クトが連れているキュウベえね」

「ああ、あの妙に顔つきが違う奴か？」

「私が知る限り、クトと1番付き合いが長いのはあのキュウベえよ。もしかしたら、何か知っているかも。 一度、部屋に戻りましょう」

手探りとはいえ、方針は決まった。

あのイレギュラーの謎へと続く、

への。——魔法少女の闇が可愛らしく思える程の、遙か昔に仕掛けられた、狂気が隠れる謎

表ルート：第7話

sideほむら

狂人たちの襲撃も無く、無事に部屋に辿り着く。

クトが件のキュウベえを回収しているかもしれないなかったけれど、杞憂だったようね。
……………もつとも、いつかのような幻影の可能性もあるけれど。

「それで、ビルの方はどうだったんだい？」

「中には入れなかったけれど、狂人だった1人には会えたわ」

「襲われたのかい?!」

「その人は正気を取り戻していたから大丈夫よ」

「バمامミ、雑談もいいけれど、そろそろ…………」

「……………そうね。」

キュウベえ、クトと1番長い間行動を共にしているのは、あなたよね？」

「彼女が降って来たその時から一緒にいたけれど、それがどうかしたかい？」

「……なら、『クトウルフ』という単語に聞き覚えは？」

「あるよ」

サラリと、問題の言葉を聞き覚えがあると言う。

「!? 誰から聞いたの?!」

「クトからだよ。あの時は……」

——詳しく聞いてみれば、今朝インキュベーターから聞いた、『お菓子の魔女』の結界内での戦闘の直前の宣言と、もう一つ。

その結界内での戦闘の後、バマミを攫った手段のネタバラし（やはりというか、幻影能力がタネだった）の際に聞いたらしい。

問題は、その内容。

「——クト以外の『クトウルフ』は、この世界に存在するか否かすらハッキリしない地球外生命体。仮に存在するとしても、太古の昔に海底に封印され、今でも眠っている。

種族的な能力として、精神に干渉することが出来る。

これが、ボクが彼女から聞いた『クトウルフ』についてだ」

「……マミ、」

「原典の『クトウルフ』とほぼ全て一致するわね」

本棚から取り出してきた、鈍器鈍器としても充分な分厚さ分厚さのある本のとある1頁を睨んでいるマミが、その説明を補足する。

「クトウルフは、ゾスから眷属を引き連れて来た異星人だし、海底の封印も、ルルイエに封印されているという設定と一致するわ。精神への干渉も、何らかの事情でルルイエが浮上したときに、感受性の高い子供や芸術家が狂死するという描写から分かるわ」

また情報が一致した。

内容が内容なだけに、『過去に同じ本を読んだイタイ魔法少女の厨二設定』と言ってしまえばそれまでだけど……

あの異常な身体能力。

奇跡を先送りにした契約による無色の魔法少女にも関わらず存在する、幻影術。突如として現れた狂人、そして彼等が口にしていた、狂気の賛美歌。

……………認めたくは無いかけれど、

「彼女は、『本物』かもしれないわね」

……そもそも、小説に描写された邪神と、魔法少女。

何も知らない一般人からしてみれば、どっちも同じように『存在しない筈のモノ』だ。
私達魔法少女が存在する以上、『邪神』が存在しない理由はない。

……とすると、私達がすべき行動は、

「佐倉杏子とキュウベえ。あなた達は鹿目まどか達と合流してほしい」

「そいつは構わねえけど……アンタたちはどうするんだ？」

「バマミと、クトについても少し探ってみるわ」

狂人を相手にする以上、本来なら非情になれる杏子の方が適任だけれど、本当に件の邪神絡みだった場合、私たちでは予備知識が足りない。

「分かったわ。それじゃあキュウベえ、クトのことをお願いね」

「まずは探す事から始めないといけないけどね」

「佐倉杏子。間違っても余計な戦闘は避ける様に」

「分かってるよ。アレの面倒くささは知ってるからな」

く少女移動中く

—さて。

こうやって行動を起こしたはいいいけれど、どう行動するのが正しいか、分からないわね。

ママの知識や本の内容は、あくまで参考。アテにし過ぎれば、足元を掬われる可能性だってある。

どうすれば——

「……曉美さん？ 顔が怖いわよ？」

「……………巴ママ。あなたはさっきの話、どう感じたかしら？」

……じつとしていてもどうしようもない。まどかたちに危険が及ぶ以上、例え罠だと分かっても進むだけ。

「……私個人としては、クトゥクトゥルフって考えるのは無理があると思うわ。あの子

には、他人を思いやれる『心』がある。 他者を破滅に追い込んで歎ぶような存在じゃないわ」

「……………だと良いけれど」

問題はクトだけじゃない。

インキュベーター、それにワルプルギスの夜だっている。

さやかにソウルジェムの秘密が知られれば、魔女化は避けられない。

——ちらりと左手首を見る。

時を巻き戻すことの出来なくなった盾のつく、左手を。

——もはや、やり直しは出来ない。

邪魔をするなら——

——例のビルを中心に人通りの少ない道を敢えて通る。

まだ明るい時間帯なのもあるのか、未だ狂人は見かけない。

地道に探し続けるけれど……やり方を変えるべきかしら。 マミには高所からの
搜索をを頼んでとはいえ、ここまで手掛かりすら無いなんて……

——ジャララララ……

………? 何かしら、今の?

鎖の音?

「……佐倉杏子?」

音のした方へ歩いてても、其処には、誰もいない。

「……気のせい、かしら?」

空耳だったと判断して、その場を離れ——

ドゴツツ!!

「!? がっ?!」

背中に重い衝撃がぶつかり、壁に叩きつけられる。

「くっ——」

相手の姿は見えないけれど、狂人の可能性を考えて時間を止める。

次の瞬間には見慣れた灰色の世界が変わる。

「…さてと、今度は一体何処の誰よ?」

テイザー銃（撃てるスタンガンのような物）を構えて、後ろを——

ジャラジャラジャラ!!!

「?!
な、なんで?!?」

私しか動けない筈の世界に、今度はハッキリと鎖の音が、いや、それだけじゃない!!

「H A A A A a a a a a a a a a a ……」

——その息遣いを聞いただけで、まるで身体が彫刻になってしまったかのように動けなくなる。

一体なんで?! どうして?! どうやって?!?

パニックになっている間に足首に鎖が巻きつき、そのまま凄まじい力で振り回される。

裏路地なんていう狭い空間で人間大の物体を振り回せば、当然、其処らじゆうに叩きつけられる。

「がっ! ぐっ! あっ! 痛っ! や、やめっ! 助けっ!」

『暁美さん?! 何があったの? 暁美さん!?!』

頭の中にママの声が響く。

「ママ、こっちにつ! 来てはっ! いけな——ああああああっ!!!」

振り回すだけに飽きたのか、『ソレ』は、私を鎖で容赦無く引き摺る。

細かい凹凸のあるアスファルトで削られ、全身打撲でボロボロの身体から血が滲み、その部位を庇おうとすれば他の部位に裂傷ができる。

「がっ！ あああああああああつっ!! くう……」
最早何も感じなくなった頃、また何処かに叩きつけられた様な衝撃が身体を貫く。

「——おい、転校生！ 何があつた？」

「……だから、私は、ほむら……」

さやかの声が聞こえてきた様な気がして、思わずそう眩いてしまう。
この怪我だと……流石に……

……？ 痛みが、少し、楽に——

目を開けると、心配そうな表情のまどかとさやかが目に入る。

まどかのそんな表情も可愛い

——って違う！

あの不可視の怪物、ソウルジエムの魔力探知に一切引つかからなかった。おそれなく、アレが話に聞く『神話生物』という存在なのでしょうね。

だとすると、クトは、本当に——

「ぐっ………さやか、まどか………？」

——クトはっ?!

「えっと、なんかよく分かんないけど、なんかを追いかけてった!」

あの怪物を追ったのかしら? それなら好都合。

「? それより、ここは危険よ! 早く逃げないと」

変身を解除して、足を引きずりながらも歩き始める。

「ほむらちゃん、まだ、」

「今は逃げるのが先よ。急いで——」

ドツゴオオオオンン!!!

「きゃあっ!?!」

少し離れた所に、何かが墜落したような爆音が響く。

クレーターが出来るほどの衝撃だったらしく、ぽっかりと空いた凹みだけが地面に――

「――GYAGOOAAAAAaaaaaaAAAAAaaaaaaAAAAA
AAAAA!!!」

「ひっ!?!」

「まづい…っ!!」

虚空から、『ソレ』の咆哮が轟く。

「逃がすかゴルア!! 『ステインガー』!」

真上から『ソレ』に対してクトが槍の穂先を突き出すも外れたらしく、根元まで刺さる。

……? クトはあの怪物と敵対しているということ?

!?!
くつ、お前ら、逃げ——」

ドンッ!

!? う——

何を言っているのか聞こえる前に『ナニカ』に突き飛ばされて、

——ソウルジェムを、奪われる。

「あ——」

意識が遠のき、視界が暗くなって——

助けて、まど——

「——え。起きてよ。ねえってば！」

「ほむっ?!?!」

急に肩を揺さぶられ、意識が戻る。

「いや、ほむってなに？ まだ寝ぼけてるの？」

「そーなのかー」

「いやその返しはおかしい」

眠気を頭軽く振ることで払って、手の甲でツツコミを入れてきた■■■■に目のピントを合わせる。

「……？ 私の顔に何かついてる？」

「……いや。なんか、永い夢を見ていたような気がしてな」

「??」

コテンと首を傾げる■■■■。カワイイなあもうっ♪

「っと、ご飯の支度ができたから呼んできてっってお兄ちゃんに言われてたんだった！ それに今日は折角。パパたちも帰ってきてるんだから!!」

「ダニイ!! イソガネバー」

「ちよ?! もー! 家の中ではしるなー!」

小走りだったからか、廊下への扉を開けた時にはもう追いつかれてた。

ま、ワザとだけどね!

■■■■! どっちが先にリビングに着くか競争じゃー!」

「オツケー! じゃあおっ先ー」

「手のひらくルツクルツ?!」

そして即抜かされる。ふぬおおおお！ 年長者として負けられん！ 外見年齢

は大差無いケド！

え、大人気ない？ 知らんな!!

「ぶるああああ!!」

「おおお!! つて、床ミシミシ言ってるううう!!」

ボケとツツコミの応酬をしながら廊下を翔ける。

ああ——

「楽しいな——」

「ん？ いきなりどうしたんいつちば——ん!!」

「ばああああああああああああああああ!!」

余計な事を考えまくっていた所為か、タツチの差で負けた。

ウギィ〜！

「あつはつは！ これで■■■のデザートは私の物よ！」

「ふあつ?! は、初耳なんスけど?!」

「だって今決めたもん」

「あああああんまああありだああああああ！」

せ、せめて半分で！ お慈悲を！ お慈悲〜

「しようがないなー■■■ちゃんは」

クスクスと笑う■■■。こ、小悪魔や！ 小悪魔がいる！

「———そういえば、さつき『楽しいな』とか言ってたけど、本当にどうしたの?」

「ん? ああ。今こうして、■■■たちとこうやって笑って過ごせるってことかな。

私は、まあ自分で言うなって話だけど、この間までロクな人生じゃなかったからね」

「イキナリ話がデープに?! シリアスとか似合わないよ?!」

〔ショボンヌ〕

「……………それにしても、『楽しいな』、か」

立ち止まる■■■。振り返って見ると、何故か目元に影が出来ている。

「■■■■? どうした?」

「……………ねえ。楽しいって言うならさ。

—ドウシテ、ワタシタチヲ、コロシタノ??

——目が醒めると、まどかとさやか、それにマミが私の顔を覗き込んでいた。
手の中には、紫色の卵型の宝石。

……状況から見て、ソウルジェムの秘密は知られてしまったようね。

「……………」

……………迷惑を、かけたわね」

表ルート：第8話

sideほむら

——あの怪物に襲われて（？）から一夜明け。

状況は、お世辞にも良いと言えるものでは無かった。

まどかときやかかと杏子は、魔法少女の真実の一部を知ってしまい。

『怪物』の正体は、魔女では無いということしか分からず。

オマケにクトも、件の怪物を追っていったまま行方不明ときた。

「……クトならスリーアウトチェンジとか言い出しそうね」

「まだストライク止まりよ」

「それでもバッターチェンジよね」

場所は私の部屋。書き込みでかなりカラフルになった町の地図を私とマミで挟む。

「……状況を整理し直しましょう。まず魔法少女。佐倉さんはどんな具合かしら

？」

「一応問題なさそうよ。流石に真実の方は堪えたみたいだけれど、そこまで心配して
いないわ。」

それより気になるのは、キュウベえから聞いた、怪物に邂逅したタイミングでの杏子の
の反応よ」

「考えやすい可能性としては、SAN値の減少による狂気の発症だと思うけど……」

「目が覚めた後は大丈夫そうだし、時間そのものも短いから、もう治っていると判断して
もいい、だったかしら」

「ええ。」

……問題は、美樹さんよね」

「……このまま放っておけば、魔女になりかねないわ」

「……佐倉さんのことといい、随分と自信を持って言うのね。根拠は何かしら？」

「……もう少し、時間をちょうだい。まだ決心出来ないのよ」

「……そう」

……私は、怖いのだ。

問題無さそうとはいえ、発狂したママにマスケット銃を突きつけられたトラウマが、
私の勇気を削る。

「——それで、『怪物』の正体ね。手掛かりは『不可視』と『鎖の音』。けど不可視の方は、それ用の魔術もあるからヒントにならないわね。それで、鎖の方だけども……」

——検索したら、ヒットするにはしたのよ。鎖を扱う邪神が、一種だけ」

「！それで、どうだったの!？」

「……それが——」

——ヒットしたのは、『アフォーゴモン』。時間神よ」

……時間、神？

——冷や汗が、垂れる。

「簡単に言えば、時を止めたり、時間軸を行き来する能力があるとされているわ。

暁美さん。貴女の魔法って、」

「……察しの通り、時間停止よ」

私が答えると、ママがなるほど小さく呟く。

「クトが貴女の事を『初見殺し』と言った理由がよく分かったわ」

「……話を戻しましょうか。私たちを襲ったのは、そのアフォーゴモンでいいのかしら」

「それもおかしいのよね。アフォーゴモンの本来の攻撃手段は火炎状の雷光で、鎖を使うのは、その神性の怒りに触れた者を拘束する時だけなのよ」

「……………こっちも分からず、か」

只でさえ魔法少女の事だけで手一杯なのに、こっちに関して言えば、情報量が絶望的に少ない。

……………もう、どうすればいいのよ?! なんて、絶対にミス出来ない今回に限って、こんな連中が——

「……………暁美さん、怖い顔になってるわよ。

まずは、解決出来る事からやつつけちゃいましょう」

停滞しつづあった会話が、流れ始める。……………やつぱり、この人には勝てないわね。

「……………佐倉杏子ね」

彼女は確実にこちら側に引き入れておきたい。

「……………ソウルジェムの話はしたのよね」

「……………ええ」

ということとは——

『キュウベえ、今何処かしら?』

『風見野市にある、廃教会だよ』

『なら佐倉杏子も一緒ね』

『……………どうして分かったんだい?』

『あの教会で起きた火事の件なら知っているわ』

『廃教会なんてそうそう無いから特定出来たのか』

……杏子とじっくり話が出来るのは明日でしようね。

「巴マミ。明日の放課後、佐倉杏子を連れて此処へ来て」

「分かったわ」

解決出来る事からやつつける。

今一番目処が立っているのは、何の皮肉か対ワルプルギスの夜だ。

その為にも、杏子を死なせてはならない。

—翌日 放課後

「——それで、アタシに話って何だよ」

「まずは、一昨日の一件についてよ。あなたはあの怪物と会ったのよね？」

「あー、そのことなんだけどな。」

実は、よく覚えてないんだ」

「覚えて、ない……？」

「正確には、会ったことそのものは覚えてるけど、どんな奴だったかを思い出せないって感じだな」

そんな都合のいいことって——あり得そうね。

魔法やそれに近いものを使えるのは、魔法少女と魔女だけじゃ無い。

ソレの扱う魔術を、私たちの物差しで測るのはやめたほうがよさそうね。

「……まあいいわ。 ついでで聞いたただけだから。 本題は、ワルプルギスの夜についてよ」

「そういえば、この町に来るんだよな。 ったく、チビとその愉快な同類といい、ワルプルギスといい、この町はロクなことが無いな」

「……それは否定しないわ。

そのことについてなのだけれど、逃げるなら今よ。只でさえ危険な伝説級の魔女と戦わなくてはならないのに、神話生物も如何にかしななければならぬわ」

「ハっ！ そう言われてアタシが逃げると思うか？」

八重歯をむき出しにして、笑う。

「——アタシは、逃げない」

「……そう。 なら良いわ」

「また貴女と戦えるわね。 よろしくね、佐倉さん！」

「あ、ああ」

そういえば、元々杏子はマミとコンビを組んでいたのよね。魔法に対する意識で決別したらしいけど。

そんな彼女が、まだワルプルギスと戦う理由——

教会でのさやかとの会話が あったなら、彼女を意識して決意を固めたのかしら。

——ただ、私は、クトだけでなく、彼女も、処理するつもりだけだ。

失敗は、許されない。

神話生物が襲いかかってくる遠縁と思わしきクトは言うまでもなく。

ループでの杏子の主な死因は、人魚の魔女を相手にしての自爆。

ならば、私が、さやかにトドメを刺せば、彼女の自爆は防ぐことが出来る。

……今まで、何度も、見殺しにしてきた。今更、彼女に手をかけることを躊躇う理由なんて——

「——おいほむらー！ 早いところ話を始めてくれ！」

「え?! え、ええ、そうね。ワルプルギスの出現予測は——」

自分自身が、段々とズレテイクのを感じながらも、頭を切り替える。

ワルプルギスの夜そのものは、かつて一度、私とまどかで斃せている。

攻撃パターンはある程度知っているし、私自身の実力も上がっている。それに、杏

子もママもかなりの実力者。

今度は、間違いなく、勝てる……! !

——途中、情報元を疑われながらも、ワルプルギスの攻撃パターンを一通り伝え、一息ついていると、

『ほむら。 さやかたちが出かけた。 かなり精神的に追い込まれている』

キュウベえからの念話……このインキュベーターはどうするべきかしら？

……ここ数日、何故かあの個体以外見かけないし、穢れの溜まったグリーンフシード処分用として生かしておきましようか。

『分かったわ。 こっちも杏子との話が丁度終わった所よ。 そっちと合流するわ』

『早めに頼むよ』

念話を切り上げて、マミと杏子にその事を伝える。

——私は今度こそ、まどかを守り切ってみせる。

少女移動中

——キュウベエの誘導に従って、着いたのは、工場の一隅。

この辺りで出る魔女……影エルザマリアの魔女ね。

あの魔女の力を考えれば、正気を保ったままのさやかなら敗北している可能性が高い。

……ただ、あの魔女の魔力は感じられない。

その代わり、あるのは——

「……この魔力反応は、クトのよ」

人の姿をとり、何故か魔法少女の契約を結んだ、神話生物。

マミはアレの事を気にしているみたいだけれど——

「……いくら敵対しているような素振りだったとはいえ、相手は私たち魔法少女とも違う、真正正銘の化物よ」

盾からミニニミを取り出し、初弾を装填する。

「!? 暁美さん、クトは、」

「アレはクトウルフで、あの狂人たちが崇めているのもクトウルフ。極め付けは、連中の神話の総称は、『クトウルフ神話』」

……処分する方が、私たちにとって安全よ」

「……言ってるな」

狂人を思い出したのか、僅かに青ざめた顔で杏子が同意する。

変身こそしているけれど、未だマスケット銃を構える様子の無いマミを置き去りに、槍を携えた杏子と、扉を蹴り開けて進む。

相手は、直ぐに見つかった。

壁の方を向いたまま、床に落としたランスを拾う事もなく、只々呆然としている、黒尽くめの儂い少女。

今にも消えそうだった存在感が、私たちを捕捉することで、いつものソレへと変わる。

「……………随分と遅かったな。 魔女ならさやかが狩ったぞ」

「……………」

「……………黙りか。 その感じだと、さやかの方を追うつもりはなさそうだな」

念話で、杏子に今目の前にいるのが幻影か本体かの確認をとり、コレが本体だという
答えが返ってくる。

「……………マミはどうしてる？ 黙って出てきたから、ちよつち心配だな」

「あなたが知る必要の無い事よ。」

——死になさい」

トリガー引きっぱなしで、フルオートによる鉄の雨が少女の形をしたソレに突き刺さる。

あつという間にハチの巣になる、が。

その怪我は、弾丸が貫通するそばから再生して、一向に斃れる気配が無い。

「おいおい、ご挨拶だな。 魔法少女を仕留めたいならソウルジェムを狙えと——」

「あなた、魔法少女以前に化物でしょう」

「確かにそうだけどさ……………」

銃撃と会話によって、アレの意識は完全にこっちへ向いた。

残弾が心許なくなつて――

「――そこだツ!!」

「!? 杏子――」

アレのソウルジエムの正確な位置を探っていた杏子が、腰のポーチを切り裂く。

零れ落ちて来たのは、真黒なソウルジエム^{グリーンフシード}。

「――っ! 上手く読心めないと思つたら、ダメ、」

杏子の本来の固有能力は、アレに近い『幻術』。

そして、本来自身の思考を不特定多数の他者の精神に叩き付けるクトゥルフなら、意識していない相手の思考を読むのは不得手じゃないかという想像からでた即席の作戦だったけど、上手くいった!

「貰ったああああああああ!!」

「――っ!!!」

杏子の槍が、ソウルジエムに突き刺さる。

槍が、
弾かれる。

キンツ、
と小さな音をたてて――

「「……………はっ?!」」

恐る恐る、転がるソウルジエムを見ると、

「……………うそ。

き、傷一つ無いなんて……………っ!？」

衝撃のあまり呆然としてしていると、目の前をアイボリーの影が通り過ぎ、ソウルジエムを奪われる。

「いやいや、なんで……………」

——ッ、そういうことかよ」

ソウルジエムを握ったまま骨翼を大きく広げる。

「待ちなさい!! クト——」

直後、突風が私たちの全身を強く打つ。

目を開けると、そこにソレの姿は無く、

天井には、巨大な穴が開いていた。

表ルート：第9話

sideほむら

「……早く、見つけないと」

まどかの美樹さやかを心配する言葉を躲し、放課後になって直ぐに美樹さやかを探し始める。

杏子とママも協力してくれているけど……

何としても、一番に見つけたいわね。

『処理』する時の手間も、後の言い訳も楽だから。

だからこそ、まどかには検討違いのエリアを探してみるようにそれとなく言っている。

時間を小刻みに止め、過去に何度も美樹さやかが魔女化した駅を中心に路地裏を周る。

「……………ここにもいない」

それなりに離れた場所を確認して、頭の中にある地図にバツ印を付ける。
時を止め――

――ゾクツ!!

「っ――?!」

ワルプルギス並みの殺気が辺りを包み込む。

「まさか、もう魔女に?!」

慌てて時を止め、殺気を感じた方向へと駆ける。

灰色の世界を走りまわっていると、妙な物が視界に映る。
近付いてみると――

「……何やってるのよ」

多節棍の鎖で巨大な球体を造っている杏子がいた。

………いやほんとに何やってるのよ？ しかもガッツポーズしてるし。

時間停止を解除する。

「……佐倉杏子。その団子状の塊は何かしら？」

昨日の時点で私の魔法^{時間停止}について言っているからか、特に驚いた様子も無く、安堵した表情で振り向く。

「あのチビだ。 さやか^の奴を襲おうとしてたからな！ 不意打ちで全身グルグルにしてやったぜ！」

「……なにやってるのよ、あなた」

でも、あの化物の行動を制限出来たのは大きいわね。

先にこつちから片付けましょうか。アレが相手なら杏子も邪魔しないし、丁度いいわ。

「……内側にダメージを与える方法は？」

「無いーけど、このまま固定して海に捨てちまえばいいだろ。コイツ、元々海底にいたんだろ？」

「……………発想が危ない人のそれよn」

——ギチイツツツ!!!

鎖の封印が揺れ、軋んだ音が響く。

「!!」

「ウソだろ?! 指一本動かせないハズ——」

杏子は新しく生成した槍を構え、私は両手に持ったマグナムで狙う。

僅かに間が空き、

そして、また、逃げられる。
狂気の邪神が、放たれる。

——あの後、なんとか回復した私たちは、マミから美樹さやか
の魔力反応を見つけたことを伝えられる。

ただ、クトが完全に敵となったことを伝えた時は、少し取り乱していた。

あの殺気はさやか
の事を殺しにかかっていたものらしいし、さつきの戦いとも言えな
い様な蹂躪も、魔法少女相手には今までと比べて、加減が無かった。

……でも、最後に感じた、
妙な違和感の様なもの、一体………？

——連絡のあった方へ向かっていると、しばらくして、再度念話が届く。

『暁美さん！ 佐倉さん！ 美樹さんを見つけたわ！』

『場所は!?!』

『○○駅よ!』

『そこなら5分とかからず行けるわ。そこから動かないで』

『分かっているわ』

……面倒な事になったわね。 美樹さやかを始末すると、確実に疑われてしまう。

ワルプルギス前にそれはマズイわ。

だからと言って放置すれば、確実に魔女化する。

ママはあの怪物から聞いていたらしく、心を整理する時間があつた訳だから、今回は大丈夫そうだけど、杏子がどんな反応をするのか。

それにまだかつて、美樹さやかか蘇生を願って契約してしまうかもしれない。

……………何にしても、まずは合流しないと。

「佐倉杏子、私の手を取りなさい。時間を止めて行くわ」

「おー！ 昨日言ってたあれか」

しつかりと手を繋いだのを確認してから、盾を操作し、世界を灰色に染める。

「さ、行くわよ」

「お、おう。」

……………なんか、寂しい世界だな」

うるさい。

もはやトラウマになるほど見た場所に着き、時間停止を解除する。

「ここに、さやかが……」

「そうね。 さつさと行きましょう——ッ?!」

途轍もない負のエネルギーが吹き荒れる。

……間に合わなかったようね。

「お、おい！ 何なんだよ、今の?!？」

「今のは、——っ?!？」

「？ 何で黙って——ひっ!!」

不自然に人のいない駅前の通り。

はっきりと空いた、魔女の結界とも違う異様の空間に、『呪文』が、響き渡る。

『——いあ いあ くとうるー ふたぐん！』
『——いあ いあ くとうるー ふたぐん！』

「狂人——逃げるわよ！」

立ち止まったままの杏子の手を引いて、急いで魔力反応を辿る。
焼け石に水でしょうけど、道中閉められる扉は全て閉め、時間を稼ぐ。

ホームに駆け込むと、——

「お願い、やめて！ 美樹さん！ 目を覚まして!!」

人魚の魔女の攻撃を防ぎ続けるマミ。

「!? おいマミ！ さやかは奴はどうなってるんだ!!!」

「!! 佐倉さん、」

「!? マミ、前を——」

マミが杏子の方を向いた隙について、剣が振り下ろされ——

「——やっぱり、間に合わなかったか」

ドゥンツツ!!!

榴弾が爆発した様な音がすると、振りかぶられた大剣が弾かれる。

この、声は——

「「——クトつ?!」」

「……………」

先端から煙を吹くランスを肩に担ぎ、少女の皮を被った化物が再び姿を表す。

「……………DOM支INA配TE」

そう一言呟くと、魔女が一瞬震え、大人しくその場を後にする。

「?!?!? い、今のは?!?!?」

「ッ——どうだっていいだろう。それより、時間が無いから、端的に言う。」

——お前らの持つてるグリーンフシードを、一つ残らず寄越せ」

「?!?」

「そう言われて、はいそうですかと渡すと思うのかしら?」

時間が無い——ワルプルギスが来るまでの時間かしら? 露骨に戦力を削りに来た

わね。

「……思っちゃいけないさ。なに、大ボカやかした私の所為さ」

? 何を言つて――

「――私はクトウルフ。

邪神にして旧支配者。

狂気を司りし邪教の司祭」

ボソボソと何かを唱え始める。

少女の陰がゾワリと蠢き、実体を持つ。

「私が求めるは、絶対の『力』。

叡智を潰し、希望を除け、

絶望の扉を抉じ開ける『力』」

その触手が怪物を覆い、膨大な瘴気が辺りに漏れ出る。

「故、この身は破滅を招く物。

破壊でしか己の願いを叶えられぬ物」

触手が消し飛ぶと、以前魔女の結界の内側で見た、魔法少女の格好の少女が。

踝まで届くほど長い裾のワンピースは縮み、ミニスカートになり。

靴はスニーカーから、寂れた港町を連想させる色のローファーに。

腰には、ベルトのように、髪と同じ深緑色のリボンが巻き付き。

肩からは、足首まで届く、ドス黒いロングコートを羽織り。

首元には、水のようなマフラーが巻かれ、その長い両端は鞭の様にしなやかに浮かぶ。

「さあ。

覚悟はいいか？

魔法^探少^案女^着よ

表ルート：第10話

sideほむら

「——フンツ!!」

ドウンツツ!!

片手で持ち上げられたランスの先端で爆発が起こり、熱と衝撃による砲撃が、背後にあつた支柱を容易く吹き飛ばす。

「相変わらず無茶苦茶ね?!」

「まだ手を隠してたのかよ?!」

「え?!」 クトの武器つてガンランスなの?! え? え?!」とパニックつてるママを放置して、化物に飛び掛る。

「らああああああああああつ!!」

「……無駄だ」

先に杏子の槍が襲うけれど、あつさりとランスに絡め取られる。

即座に多節棍に切り替え、逆にランスに巻きつくことで動きを制限しようとするも、

「……小細工が」

軽々と杏子ごとランスを振り上げ、

「っ!? うわっ!!」

地面に叩きつける。

杏子はギリギリで手を離して離脱には成功するも、多節棍は潰され、魔力の粒になって消滅してしまう。

「これでも喰らいなさい!!」

射線上にクトだけを捉えた瞬間に時間を止め、後のことは考えない様にして対物ライフルの引き金を引きまくる。

さらに怪物の背後にC4を設置し、ボタン一つで起爆できる様にする。

「停止、解除!」

何発もの鉛の塊が容赦なく牙を剥き、ソレの身から肉を剥ぎ取る。

額を穿ち、頬の肉を吹き飛ばし、心臓を貫き、細い四肢に風穴を開ける。

トドメに爆風が背中を打ち付け、うつ伏せに倒れる。

「曉美さん!? やりすぎよ!!」

「巴マミ、相手はゾンビなんて目じゃ無いような化物なのよ」

確かに普通の魔法少女なら、さやかのような回復特化でもなければ死んでいるか、あとはトドメを刺すだけだろう。

——そう、普通なら。

「——く、は。」

く、ククククク、クウハケケケケケケケケケケアハハハハハハハハ!!」

爛れた皮や脳漿をボロボロと零しながらも、立ち上がる。

「フウー、フウー………ああ、そうだ。それでいい……」

傷ついた部分を軽く揺らすと、既に再生済みの身体が内側にあるかの様に肉が浮き出て、一瞬で傷が治る。

「……さあ、リスタートだツ!!」

ドゴン、と鈍い音をたてて地面に亀裂が走る。

見れば、両足がめり込んで——っ!?!

直勤にしたがって咄嗟に屈むと、すぐ真上で小さな手が空を掴んでいた。

背筋を冷たい汗が流れる。

あの勢いで掴まれていれば、そのまま握りつぶされてもおかしくなかった。

「……避けたか。流石だ」

「それは、どうもっ!!」

超至近距離まで接近していた怪物の顎の下から撃ち抜くようにDEを発砲するが、上体を素早く起こすことであっさりと躲される。

「——うるあっ!!」

「!っつと」

追撃で槍が振り下ろされるが、倒立の要領で上がった足で蹴り弾かれ、防がれる。

着地した怪物は、ランスを剣のように振りかぶりながら未だ躊躇うمامィへと突進する。

身の危険を感じたمامィがランスにリボンを巻きつけて引き千切るまでの時間差によつて生まれた隙を使い、連撃を最低限の動きで躲していく。

「!? クト! どうしてこんなことを、」

「言ったはずだ。私はクトウルフ。」

決して人と相入ることなど出来ないっ!!」

大振りな武器では埒が明かないと思ったのか、リボンに引つ張られるままにランスを手放し、私にやるように片手で掴みかかる。

「くっ!」

首を傾けてその一撃を紙一重で躲すと、怪物の身体の小柄さが幸いしたのか、その勢いのままでマミの背後へ突っ込んでいき、休憩室を崩壊させる。

「……………クト……………っ!?!」

「!?!」

「うおっ!!」

私たちの顔面を狙ってコンクリの塊が飛んでくる。

マミは半歩ズレて軌道上から逃げ、私は手に持っていた銃を盾に防ぎ、杏子は槍で弾く。

「……………まだだ。この程度では神話生物は終わらん!!」

自販機の商品取り出し口を掴み再度突進する怪物の身体を私がサブマシンガンで押し留め、マミが自販機を撃ち壊す。

「チッ! ファンツッ!!」

武器を失った怪物は地面を踏み締め、低高度でタックルを杏子にしかける。

「杏子！ そのままクトを抑えてなさい!!」

「うええ!!? おい、無茶言うな——うお?!」

ジャンプで一撃を躲した杏子に一時的に相手を任せる。

「巴マミ。手を貸しなさい」

「……どういう意味かしら?」

ハッキリとした確証は無いけれど……

「——おそらく、アレは弱っている。」

さっきの掴みかかりは、これまではあんな風に踏みしめるようなタメは無かったし、こちらの攻撃だって、受けてもほぼ無傷だったわ。なのに、今は9ミリ弾ですらダメージを与えられる」

特に攻撃の予備動作については、ついさっき出来ていたことが出来なくなっている。

「……油断を誘っている可能性は?」

「時間が無いと言ったのはアレよ。それに、真向から蹂躪出来る筈の相手が油断するのを待つ理由が無いわ」

それでもあの馬鹿力は健在なのか、拳を振り抜いた衝撃波で体制が崩れた杏子に迫る蹴りを、臆を撃ち抜くことで援護する。

……やっぱり、防御力が落ちてる。

今なら、殺せる。

「杏子が抑えている隙に、十字に撃つわよ」

「でも——」

未だ怪物を信じているらしいマミが、躊躇う様子で——

『——いあ いあ くとうるー ふたぐん！』

『——いあ いあ くとうるー ふたぐん！』

「「「——っ「「「
!?!?」」」

すぐ近くから、狂人の呪文が聞こえる。

……私たちに残された時間も無いようね。

——仕方ない。

「巴マミ。あのままアレを放置すれば、あんな犠牲者を出すことになるわ」

「!?」で、でも、クトがやったと決まったわけじゃ——」

「——誰が、この場に来いと言った、案山カカシ子どもがアツツ!!!」

いつの間にか拾っていたらしいランスを振り下ろし、衝撃波と、それによって飛ばされた礫でホームに入りかけていた狂人を吹き飛ばす。

……決定的、ね。

やっぱり、狂人とクトは繋がっている！

「巴マミ——」

「——ああもう！ 分かったわよ!!」

周囲にマスケット銃が生成されるのを見て、私も移動する。

時間を止めず、マグナムで援護射撃を加えることで、満身創痍一步手前の杏子が離脱

する隙を作る。

「くっ、マミ！ 回復頼む！」

「させるか——ヌウツ?!」

杏子が下がるやいなや、シヨットガンに持ち替えて容赦なく散弾を浴びせる。

「——ルウウあああああああああああああああ!!」

銃撃から逃れるように跳ね、天井の骨である細い支柱を掴むと、強引に引つ張り、盾にする。

リロードの為に銃撃を止めると、すぐさま跳ね降りて看板を掴んで武器にしてしま
う。

オマケに着地した瞬間に足元にあったコンクリ塊を杏子の方に蹴り飛ばした。

「つぶね！」

グシャアッ!

幸い、狙いが甘かったのか、少しズレたところで粉微塵になる。

怪物がそちらに気を取られた僅かな隙に杏子が槍を携えて突っ込み、私とマミで銃撃
を加える。

「っ！」

銃弾を鬱陶しく思ったのか、看板をマミに向かって投げとばす。

即座に迎撃され、僅かに生じた隙を狙って槍が突き出されるのを頭部で受け血が吹き出し、仰け反った隙に散弾銃の連射でランスを持っていた右腕を吹き飛ばす。

『杏子！ ソレの防御力は下がってるわ！ 今ならソウルジェムを砕けるかもしれない！！』

『っ！ 分かった！』

「——うるああああ!!」

杏子のソウルジェムが入ったポーチを狙った追撃を、コンクリートの地面を踏み抜いて蹴り上げ、強引に盾代わりにして防ぐ化物。 まだそんな力があるの?!?

こちらの視線が途切れた瞬間に浮かび、右腕を一瞬で再生して、両手で天井の軸を掴むと引きちぎり、双槍にする。

「なんつー回復力だよおい!？」

「削りきるまでよ。 魔力そのものは少ないわ!」

「——っ!」

魔力で編まれた槍とただの鉄骨ではまともな勝負にならず、さっきの自販機同様あっさりと破壊される。

宙を舞う二本のうち、一本は杏子に、もう一本は狂人の昇ってくる階段の天井部に蹴

り出される。

天井に向かった方は突き刺さるけど、杏子への方は私が弾き、多節棍を使った立体的な軌道で矛がクトの首を狙う。

素早い側転で一閃を躲し、近くに落ちていたランスの柄を踏みつけて跳ね上げること
でマミの銃弾を防ぐと、骨翼が私を襲う。

「その攻撃は、もう何度も見たわ!」

その先端が届く前に時間を止め、避けるついでにピンを抜いた手榴弾をお見舞いす
る。

— 停止、解除。

爆発。 閃光。

直前に咄嗟で手榴弾を掴んでいたらしく、左手は骨が露出するほどズタズタになる。

「……痛いな」

「!?!」

ブチイ、と己の腕を肩から引き抜き、指先から二の腕の部分を喰らうと、そのまま引
き抜く。

持ち手の部分にのみ肉が残り、赤く、白い骨が現れる。

「な?!?」

「た、食べちゃった……っ?!」

余りにもグロテスクな光景に怯んでいる隙に、骨を投げ捨てる、右手でランスを掴み取り、再度一瞬で再生させた左手を突き出して再度掴みに来る。

「っ、それも、見たわ!」

紙一重で躲し、超近距離で顔面に散弾を叩き込む。

血が飛び散り、硝煙を吐きながら後ろに吹っ飛び――

「――足らん。足らんなあ……!!」

狂人とも違う、異様な空気が場を支配する。

『ソレ』の片目は潰れ、蒼白くも端正な顔立ちは見る影も無くなり、口は耳まで裂ける。

「っ――いい加減、止まりなさい?!」

その悍ましさに思わずグレネードランチャーを使ってしまい、血に混じってピンク色のナニカがぶちまけられ、再び倒れる。

「まだ、まだまだ――」

「暁美さん、もうやめて! やり過ぎよ!!」

「うっ……」

さらに叩き込もうとに弾を込め直していると、マミが止めてくる。邪魔しないで!! アレは、私が、殺して、殺シテ、コロシテ——

「——は、クハハハハハッ! ママナラネエナ!! クギャハハハハハハハハ!!!」

ぞつとする、パンドラの箱の蝶番が軋むようなワライゴエが響く。

そちらを見れば、頭部の半分以上を失い、極彩色の液体を断面から垂れ流す、人のカタチをした、ナニカが、立っていた。

その口が、足が動くたびに杯状の頭蓋骨から脳漿や髄液が溢れ、片方残った眼球がギョロリと蠢めく。

「!?!?!」

「あ、あああああああああ!!」

発射された榴弾は、見当違いの方向に飛び、建造物の一部を吹き飛ばす。

「……ド処ヲ撃ツテイる？ 私は此コダぞ？ クハハハ——」

ブオンとランスが振り回され、その風圧で体制が崩される。

『——いあ いあ くとぅ——』

ズガンッ!!

「……煩イ」

こびりついた血で滑ったのか、階段の天井のランスが突き刺さり、今度こそ崩落する。

鉄筋コンクリートの雪崩がホームに入り込んでいた狂人すらを巻き込み、完全に遮断する。

「……？ 煩ワしいナ」

そう呟くと、自分で崩壊した頭部を千切り、落ちたソレを踏み潰す。

それが合図だったかのように、首の断面から、グチュグジュと傷一つ無い頭部が生えてくる。

「ば、化け物——」

「何を今更。 最初からそう言っているだろう？」

全身を己の血と脳漿で染めた紅のドレスの邪神が、歪んだ笑みを浮かべる。

「——ああ、それだ。」

『恐怖』『狂気』。

いい、イイゾ!!

さア——

私を、殺してみせろ!!!」

骨翼が空を割いて一気に距離を詰め、銃口を掴む。

「!? こ、来ないで!!」

「クハ、逃げてどうする? 最初の威勢はどうした? フハハハハ!!」

心臓部に銃口をめり込ませると、血や体液でぬめった手が私の手を抑え、強引に引き金を引かせる。

バコンツとくぐもった音がなり、背中側から肉片が飛び散る。

「いっふっ—」

……グブ、どうだ？ 恐怖はこうやって払え。 でなければ何度でも蘇るぞ？」

「あ——」

その濁った深海のような瞳が、恐怖に引き攣る私の顔を写し——

「——らちゃん！ ほむらちゃんっ!?!」

「——はっ!?!」

目が覚める。

「や、やっと目が覚めたんだね！」

「……まど、か？」

目の前には、涙目の少女。

一体、なんで『こんな所』に——っ!!

「まどか! 怪我は無い?! 変な人に追いかけれなかった!」

「へ?! うん。うん。私は大丈夫だよ。」

それより、ここで何があったの?!」

問われて、節々が痛む身体で辺りを見渡すと、そこら中に血や肉片が飛び散り、地面には穴や亀裂、陥没した跡が残され、支柱が無くなった所為か天井は一部崩落していた。

あの怪物や狂人は、影も形も無い。

「……色々、あったのよ。それより、佐倉杏子と巴マミは?」

「呼んだかしら?」

振り向くと、回復し終えたのか、綺麗な格好のマミがいた。

「佐倉さんはまだ寝てるわ。特に大きな怪我をしていなくて良かったわ」

「そう……」

直ぐに使えるようポケットに入れていたグリーンフシードを探ると、空っぽだった。

「………巴マミ、」

「私のも取られてたわ。佐倉さんのものも」

「くっ……………!」

つまり、あの怪物は私たちに『ワルプルギスで詰め』、とでも言ってるのかしら!

幸い、盾に入れておいた分は無事だった。3人分をフルで賄うのは無理でも、取り

敢えずの補給はなんとかかなりそうね。

「佐倉杏子が目を覚ましたら移動するわよ。じきに人が来るわ」

「え? さやかちゃんは!」

「……………え?」

「だって私、さやかちゃんがいるって、クトちゃんに聞いてここに来たんだよ!」

「なっ……………!!」

あの、悪魔!! なんて置き土産を——

「……………鹿目さん、落ち着いて聞いて。美樹さんは、」

「バママミっ!! やめなさいっ!!」

「だって、どうすればいいのよ!?! この子は美樹さんの友達なのよ? 知る権利がある

わ!!」

「それでも、よ。知ればまどかは確実に契約してしまうわ!」

「でも、——」

駄目だ、埒があかない。

武器こそ出て来ないけど、ママの精神は今とても不安定だわ。

このままじゃ——

「ほむらちゃんもママさんも落ち着いてよ！ なにがどうなっているのか、全然分かんないよ!?!」

「いやー、ホントに。あたしもなにがなにやら」

「鹿目さんと美樹さんは黙ってて!! ——

……ん？

.....え???

まどかの隣を見る。

何故か涙目のキュウベえを肩に乗せ、呑気な顔で突っ立つてる美樹さやかが見える。

「.....どうやら魔法に失敗したようね。ちよつと待ってもらってもいいかしら」

視力を補助している魔法を解除して、再度魔法をかけ直す。

ポカーンと目が点になってるマミを見て、「よかった、よかった！」と涙ぐんでるまどかに抱き着かれて照れてるさやかを見る。

羨ましい。パルパル。間違えた、ホムホム。

「……………はあああああああああああああああああああああ
?!?!?」

「うわ、うるささ?! 転校生、急に大声出してどうしたのさ?」

「『どうしたのさ』じゃないわよ!! なにサクツと復活してるのよ?! 私があれこれ考えたのあつさり無駄にしないでよ!! 無駄になった方がいいけど!! 覚悟とか色々あったのに!! ていうか復活するなら最初からそうしなさいよだったらこんな、こんな、こんな……………」

「あー、ほむら?」

「なによ?!」

照れ臭そうに頬をポリポリと搔くさやか。

「……………その、ありがとうね」

「……………は?」

「いや、ほむらつてさ、今までは何もかも諦めた目をして、空っぽの言葉を喋ってたけど、今はちゃんと、ここにいます」

「っ!!」

「……………そう、ね」

ループの中で真っ先に失われた、さやかあの、私への純粋な笑みが、そこに、あった。

「——とところでさ、クトは何処なの？」

感慨に浸っていると、アレの存在が話題になる。

「……………何故かしら？」

「なぜって、ここにいないの、あとクトだけじゃん。あいつにも酷いこと言っちゃったし、謝りたいなって、」

「……………クトは、」

言うべきか、言わざるべきか。

「——彼女なら、君の魂と引き換えに魔女になったよ」

「?!?!」

瓦礫の上から、感情を感じさせない声が聞こえる。

「なっ——どういう事だよ!?!」

「そのままの意味だよ。」

「その二人は隠し通しておきたかったみたいだけど、魔法少女の最期は、死だけじゃない」

「っ黙りなさい!!」

拳銃でインキュベーターを撃つても、すぐさま次のインキュベーターが現れる。

そして、最悪の形で、

魔法少女の最後の真実が、明らかになる。

「——ソウルジェムが濁りきる時、

魔法少女は魔女となり、君たちが奇跡をもたらした分、呪いをばら撒くんだ。キチンとバランスのとれた良いシステムだろう？」

「……………うそ、」

「じゃあ、記憶の無い間、あたしは、」

まどかとさやかが、信じられないと言った表情をする。

「そう言う意味では、クトが魔女化したのは君たちにとつては大きな痛手だろうね。」

だつてそうだろう？ 彼女は大きな絶望を消し去る代わりに、怒りや憎悪、狂気でもってバランスをとり続けたんだ。まあ、どちらにせよ、限界は近かったようだけだね」

「!? 怒りや憎悪って、まさか、」

「そのまさかさ。彼女の本心としては、君たちに刃を向けるのはとても心苦しかっただろうね」

つ、つまり、

わざと嫌われる為に何度も襲った!?

「そもそも彼女の魂は、契約した時点で99%濁っていたんだ。それを強引に、君たちの魔法とは別の『魔術』で押し留め、蓋していたんだ。」

魔法少女や魔女の相手をするだけなら、彼女の素の身体能力故に魔力消費は非常に少なかっただろうけど、その個体に精神疾患を引き起こしたのを始めに、何度も魔術を行使して『蓋』にヒビが入り、さやかの魂を元に戻すために魔術を行使したのが切っ掛けで、ソウルジェムが濁りきったんだ」

「う、うそだ。 そんな、」

さやかが青白い顔をして、膝をつく。

「……待ちなさい、インキュベーター。あなたの言っている事が事実だという証拠は無いわ」

「確かに物的証拠は無いね。」

僕らが彼女の感情エネルギーを回収した時、その膨大な量故に混ざった彼女の記憶の内容を言っているだけだし」

「なら、なんで今それを言ったのさ?!」

さやかか肩に乗っていたキユウベえが、声を張り上げる。

「クトは最後まで『悪』でいるつもりだった! さやかを戻した事だって、ボクは口止めされた!!」

キミがクトの記憶を見たのなら、なぜ黙っていなかった?!

「それは簡単な事だよ」

一切の感情を込めず、淡々と、

「——僕は、そんな『願い』を聞いていないからね」

「っ!!!」

「それじゃ僕は失礼するよ」

それだけ言い残すと、白い尻尾が瓦礫の向こう側へと消え去る。

「……………」

重い空気が流れるなか、さやかかふらりと立ち上がる。

「……何処に行くの？」

「……クトを、助けに行く」

「ムダよ！ 魔女を戻す事は出来ない！」

「じゃああたしはどうなのさ!!」

涙を浮かべたさやかだが、叫ぶ。

「……クトは、あたしを助けてくれた。

あんたがたった今、無理だつて言った事を実現

してみせた!!」

「それは、クトだったから出来たのよ」

確かに、実例はある。

問題は、その方法だけだ。

「……キュウベえ。クトの使っていた『魔術』は、私たちにも使えるのかしら」

邪神の白い使い魔は、首を横に振る。

「つ、でも可能性は、」

「断言出来るけど、無理だよ。」

トドメを刺す事が、ボクらに出来ることだ」

「そ、そんな——」

さやかが、悔しそうに唇を噛む。

「……キュウベえ、私が契約すれば、」

「ダメだ。彼女の思いを踏み躪る事になる。」

仮に出来たとしても、クトは魔法少女の秘密を全て知っていた上で契約したんだ。

恐らく、契約しなかったらしなかったで大きな問題があったんだと思う」

まどかがとんでもない事を提案するけれど、キュウベえによつて却下される。

「……取り敢えず、魔女の様子を見に行きましょう。もしクトの意識があれば、希望が

あるわ」

「!!」

「!? マミ! そんなこと言って、」

「あり得ない話じゃないわ。あの子の正体だって、最初は半信半疑どころか全く信じ
ていなかったでしょ?」

「それは、——」

何も言い返せず、黙ってしまふ。

……そう考えたら、本当に魔女化した状態で自我を保ってる様な気がしてきたわ。

「……クトの正体って、変な翼は生えてたけど、私たちと同じじゃ」

「いえ。 実はあの子はね、

クトウルフだったのよ！」

「フアツ!? クトウルフって、あの t r p g の!？」

少し調子の戻ってきた様子やさやかが、マミの言葉にオーバーに反応する。

……あれ、そういえば、

「杏子はどうしたのかしら？」

「……………忘れてたわ!!」

マミの絶叫に慌ててソウルジエムを確認すると、

下の階に、魔法少女の魔力反応があった。

最後のソレの死が確定し、勝利の咆哮が世界を揺らす。

空間は軋み、悲鳴をあげ、

肉眼では見えぬほど矮小な存在ですら、恐怖に絶命し、

大地は死に絶え、蝕まれ、

空は呪われ、吸うもの総てを害する。

『、、——』

ソレは、その右手をあげ、

しかし、その手は、届かず、

——地に、墮ちた。

目が合った。

「?!?!」

『ソレ』ば、眼球だった。

「あ、あ、あ、」

周りを見渡せば、

目に映るは、亡者の瞳。

その1つ1つが、身を呪う。
怒りが、憎しみが、嘆きが、

s i d e 杏子

「……………」

魔女の結界の内側。

使い魔が一体もいないその場では、ある一人の人生が凝縮され、まるで罪状を並べたように、展示されていた。

——最初原の願点いは、子供っぽい、
けれど誰もが一度は考えそうなものだった。

『力が。最強の力が欲しい』

一体どんな経緯でその望みを持ったか、叶える存在に出くわしたかは分からなかった。

けれど、その『願いを叶える存在』は、インキュベーターですらドン引くだろう程の屑だった。

言葉巧みに騙すなんて事はせず、

一切の選択権を奪い、

容赦なく歪めた願いでもって叶えた。

最初は、問題無かった。

人生は大きく変わり、原始の地球で力の元に絶望する事はあれど、新しい希望妹ができ、翼の白骨化という代償はあれど、天敵をその力でもって撃破した。

問題は、その後。

更に世界を超えた先で、その力で全てを解決しようと、あらゆる事件に介入しようとした。

——結果は、悲惨なものだった。

身に宿した力ゆえ、近付いただけであらゆる生命が狂い、気がついた時には手遅れだった。

狂人どうしの殺し合いを止めようと、涙を流しながら飛び込み、

けれど、ただなんとなしに腕を振っただけで命が奪われ、

魂を守ろうと魔術を使えば、その全てが相手の心を壊し——

「——だああもう！ 見てられるか!!」

見てるだけでソウルジエムが濁りそうな『記録』を、槍の一閃で切り裂く。

——ああ、アイツは、アタシと同じだったんだな。

誰かの幸せを祈ったのに、その『誰か』を壊してしまった。

違ったのは、その後。

アタシは、自分の為だけに魔法を使った。

アイツは、それでも誰かの幸せを祈り続けた。

最初は、さやかを助けてくれた礼を言うだけのつもりだった。

「……………それだけだったのにさ」

魔法少女の正体は、ゾンビの様なものだった。今更その行き着く先が魔女だと示さ

れても驚かない。

見覚えのある顔が写った『記録』がある所まで来た。

”ピンク色の髪を、両サイドで結んだ少女”

”剣を構える、青い髪の元気そうな少女”

『私は、——』

”金髪ツインドリルの、マスクett銃を構える少女”

”赤い髪をポニーテールに結んだ、槍を携えた少女”

『私は、やっぱり、——』

”黒髪の、銃口を向ける、少女”

『……………バケモノだ』

「……………」

いとも簡単に、魔女の居る最深部への扉に辿り着く。

「……………ま、流石にそう楽にはいかねえか」

扉の隙間から泥が染み出し、醜悪なヒトガタになる。

人に近いのは大まかなシルエットと背丈だけで、全身ヌラヌラとしたタールの様な色で、目鼻は無く、牙と爪が異様に発達している。

《ゴプコポ……ゴオアアアアアア!!》
「——そこを、どけええええええ!!」

sideほむら

杏子の魔力反応を追って、クトの魔力で構築されている結界に入る。

魔女の結界にしてはシンプルな一本道で、両サイドの壁に写真の様な物が置かれている。書き込まれている赤字の内容からして、クトの視点でしようね。

「……キユウベえ、この魔女の性質は分かるかしら？」

……私は、見ない様にする。

後で概要を聞けば十分だろうし、まどかの前で、マミみたいに「ごめんなさい、人外呼ばわりしちやって、悲しがったわよ」ね」みたいな状態になるのは、ちよつと抵抗がある。

「……性質は『虚実』。所々魔力以外の技術で構築されてるみたいだから、ボクたちの知識や常識は当てにしないほうがいいね」

「つ、つまり!?!」

「本当に自意識があるかもしれない。でも魔女のままにいるから、そうだとしたら何か問題があるんだと思う」

「何があろうと、助け出さだけさ!」

少し赤くなった目を擦って、前を向くさやか。
ふと『記録』を見る。

『——今回も、ダメだった。』

『狂気の波動』を抑えきれない。 殺した。

私を狙った連中が、彼奴らを人質に取った。

殺した。

彼奴らの1人に攻撃された。 身を守ろうと腕を上げただけで、皆死んだ。 ナンデ

?????

書き込みのある写真には、高校生くらいの白い制服の少女たちに、1人の男子と、見

覚えのある少女が写っていた。

そして、それを覆う様に、写真に写っていた人物一人一人の死体が写されていた。

——奥へ進めば進むほど、『記録』は増える。

自然発生する狂人を抑えようと、魔術で自らを縛る。時間稼ぎにしかならなかった。

自身を狙う者が表れる。一般人に紛れても、誰とも会わずに深海に引き籠ろうとも、必ず襲われた。

次第に、少女の意識が邪神ケトルフに吞まれていくようになった。

狂気に染まり、殺戮を止められなくなる。死体は際限無く惨たらしくなり、最早原型を留めない。

——最終的に、自死を考え始めた。

自傷し、神に挑み、英雄に挑んだ。

己を封じる魔術の全てを使って構築した結界の内側に、理性ある内に彼らを呼び込む事には成功した。己の全てを話し、万全の状態だった。寧ろ、殺さず救うことすら出来たかもしれないと思うほど。

そこには、確かな希望があった。

……結果は、全滅だったが。

「……………こんなのって……………あんまりだよ……………」

「……………うぷっ」

「……………」

「……………ようやく、分かったよ」

「……………何よ」

肩に乗ったキュウベえが、小さく呟く。

「何で宇宙から降ってきたクトが、あんなに人間を理解していたか。落ちてきた時の、絶望の深さが、どれほどだったか。

『探るな、理解するな』の意味。

……そして、なぜ彼女が魔法少女になったのか」

そして、『記録』は、見覚えのある少女を写す。

「……ほむらちゃん、これって、」

「……………」

壁一面に書き込まれた、『私は化物じゃない』『私を殺して』の赤字。

そして、最後には、疲れたような文字で、

『——私は、やっぱり、バケモノだ』

「……よお、遅かったな」

「！ 杏子！」

巨大な扉にもたれかかる佐倉杏子。

足元には、タールで作ったヒトガタの使い魔が鎖で簀巻きになっている。

「クトはその先かしら？」

「おう。 ヤバそうだったから待ってたんだよ」

「……？ もう見てきたのかしら？」

「ああ。 アレは多分、チビの意識があるな」

「!! それなら、助けられるかも、」

「………どんな算段があるかは知らないけど、多分無理だ」

「!? どうして?!」

「——使い魔が魔女を攻撃している。」

コイツみたいなホラゲーに出てきそうな奴らが、アタシを無視してひたすらにな。あれなら放つとくだけでグリーンフシードになる」

「……………死にたがり、ね」

彼女なら寧ろ、トドメを刺されることを望むでしょうね。

時々見た、クトの笑顔を思い出して。

その裏に隠れていただろう、決して口に出さなかった嘆きを想像して。

「……………私がやるわ。時間を止めている間に近付いて、爆破を——

「待って!!」

……………まどか?」

「クトちゃんは、そんなこと、願ってないよ!! 助けてって叫んでる!!」

両目に涙を溜めて、叫ぶ。

「……………まどか、クトは自分を殺させようと、」

「そう考えてるかもしれない!! でも、本音は違うよ!!」

「……………助けよう」

さやかが、ポツリと言う。

「今まで、何人もあたしたちより凄い人たちが試して、失敗したことだけど、でも、あたしたちに希望が無いわけじゃない」

扉に、手を当てる。

「……………私も賛成よ。」

謝りたいこと、言ってあげたいこと、聞きたいこと、いっぱいあるもの」
扉に、手を当てる。

「……………私も行く。」

私には、呼びかけるくらいのことしか出来ないけど、
それでもクトちゃんは、私たちの大切な『友達』だから」
扉に、手を当てる。

「……………アタシもやるよ。」

グリーンシード無しでのソウルジェムの浄化方法、まだ聞いてないしな」
「ツンデレ乙」

「重曹で擦れば落ちるわよ?」

「う、うっせー! 誰がツンデレだっ!! てか重曹?! なんで重曹?!」

扉に、手を当てる。

「……ボクも行くこう。」

彼女には、大きな借りがある。

それに、こんな結末、ボクは嫌いだ。感情が芽生えたばかりのボクでも、これだけは断言出来る」

扉に、手を当てる。

「……………私は、」

クトのことを、どう思っている?

『正体不明』、『化物』、『怪物』、『悪魔』、……………

「……………私には、クトを助けに行く資格なんて、」

「あるさ」

見慣れない、感情の籠った赤い瞳が、私を見上げる。

「クトは、特にキミに悪印象を植え付けようとしていた。キミがクトを殺す時に躊躇わないように。」

「逆に考えれば、キミは、それでもしないと引き金を引けないと思っていたということだ」

「そんな、私は、」

「だって、キミだって皆を救おうとしたんだろう？」

「——」

……………私、は……………

——腕を、伸ばす。

「……………私も、やるわ」

これは、最初で最後の、『最高のハッピーエンド』のチャンス。

なら、誰かの笑顔の為に戦う、私たちにとつての、エンディングを目指そう。

——5人と1匹で、扉を押し開ける。

——
『終わり』が、『始まる』

共通ルート：第2話

sideほむら

——扉を開けた瞬間、冒瀆的としか言い表せない寒気が全身を包む。

黒い空。

草木一本生えない不毛の大地。

至る所に墓標の様に突き刺さる、古びた武具。

中央部には銀杯が鎮座し、赤黒い液体が溢れる。

杯に乗せられているのは、蛸の様な『ナニカ』。

そして、それに群がる、黒い影。

「……………ここ、まるで、お墓だね……………」

「クトにしてみれば、本当にそうなんでしょうね。彼女が殺めた人たちの

——そして、クト自身の」

まるで肯定するかのようには、使い魔が魔女に張り付いていた部位から赤黒い血が噴き出る。

人の胴ほどの太さのある触腕が断ち切られ、地に堕ちると溶け、地に染み込む。

「!? あれが、魔女を攻撃する使い魔」

「ああ。……………やっぱり違和感あるな」

多くの魔女の結界とは違い、明確に『死』を連想させる光景に怯む。

「——ここで怯えていても、何も変わらないわ。

行くわよ!!」

「それもそうね!」

周囲に大量のマスケット銃を浮かべて突っ込んだマミに合わせて、私も盾に収納しておいた対物ライフルを構える。

「援護射撃よろしく!」

「おい、病み上がりで無理するな!」

一歩出遅れてさやかと杏子が飛び出し、迎え撃ってくるだろう使い魔を処理しようと、スコープを覗いて――

「ティロ・ドツピエッタ!!」

「はあああああつっ!!」

「チツ、いくら何でもどうなってんだ?!」

魔弾が、斬撃が、槍の一閃が、使い魔を屠る。

だと言うのに、使い魔はこちらをチラとも見ない。一心不乱に魔女を攻撃する。

「それならそれで好都合。一方的に殲滅するまでよ。

まどか、これつけときなさい」

「きゃ!?!」

米軍基地からパクった特殊なイヤマフをまどかにつけさせると、使い魔の頭部に当たる部分に弾丸を撃ち込む。

泥の塊の様な物が飛び散るけれど、その穴は一瞬で埋まってしまふ。

「あの使い魔も規格外だね。通常の魔女の使い魔なら、魔女に成長している程の魔力が流れてる。戦力的には、あれ全部が魔女だと思っただ方がいい」

「くっ、どれだけいるのよ。

「マミ、さやか、杏子! 聞こえていたわね!」

「ええ! なら、レガール・ヴァスタリア!! からの——」

「リボンが広範囲の使い魔に巻きつき、——」

「——ティロ・ボレー!!」

大量の魔弾が降り注ぐ。

使い魔の集団を容赦なく抉り、その多くを消し飛ばす。

「よし！ だいたいの強さは掴んだわ！ これなら——」
 グヂュリ、という音がする。
 何事かと、そちらを見れば、

「?!?」

「ひっ?!」

魔女の頭部に、1つの眼球が浮かび上がる。

血涙を流しながら、私たちを順繰りに眺める、荒れた海のような碧い瞳。

「く、クトちゃん!! 分かる、私だよ!! 私たちは、あなたを——」

「——○○○——」

ギチギチと目玉が蠢き、

マミの方に、固定される。

「くくくつ!! 何がしたかったんだよ、コイツ?!」

「分からないわ。でも様子がおかしいわ!! 油断しないで!!」
「りよーk——」

パンツ!

くぐもった銃声になる。

でも私は撃つてないし、ママも発砲していない。

じゃあ、いったい誰が……?」

「……一体、どこから、」

「——さやか? おい、さやか?!」

杏子の悲鳴のような叫びが響く。

手近な使い魔に弾丸を叩き込みつつ、横目で見て、

——目を見開く程驚いた。

さやかはの身体は、マミへの返事を言いかけたまま止まっていた。
特有の色の違いこそあるけれど、私だから分かる。

あれは——

——さやか時間が、止ま……っている!?!



ゴポリ、と、使い魔ごと触腕が溶けた泥から、人影のようなナニカが立ち上がる。
手には、細長い棒状の物体。

「あれが原因ねっ!」

素早くレティクルの中心に合わせ、引き金を絞る。
轟音と共に鉛玉が発射され、直撃する。

《……………?》

「なっ!? 効いてない?!」

こちらを見ながら首を傾げる影。

ピチャピチャと泥を垂らしながら、今度は短い棒の先端を自身に向けると、
パァンツ!

「!? なっ?!」

「自分を撃つたの!?!」

ダメージは無いのか、平気そうな様子で両腕をダラリと垂らすと、

一瞬でスコープから姿が掻き消える。

「!? な、一体何処に、」

「——!? キャア!!」

「ママ?!」

銃口ごと向き直れば、強化された視力でも目で追いきれないほど早いスピードで、人影がママに襲い掛かる。

マスクेट銃を交互に撃つことで応戦しているけど、追いつけていない。

「くっ、レガー」

「■■■■■■■■■■??!」
 魔弾を潜り抜け、泥をまき散らしながら、古式の長銃と短銃から連続で弾丸が放たれる。

「!? ま、まさか——」

何かに気がついたらしいママが、リボンを自身に巻きつけて引つ張るといふ荒っぽい方法で銃撃を躲す。

「——あい!! ってえ?! ど、どうなって、」

「美樹さん! この人の相手は私がやるわ!! 貴女たちはクトをつ!!」

映画顔負けのガンカタを影相手に繰り広げながら、ハイスピードで戦場を移すママ。

「チツ、やつかいね!!」

さやかが無事に復帰したけれど、私たちのなかでトップクラスの火力を持ったママが離脱したのは痛い。

一体一体が魔女に匹敵するあの使い魔を倒すには、各個撃破するにしても多少なりとも時間がかかる。反撃してくるような様子は、ママと戦っている個体以外は無いけれど、数が尋常じゃない。

「っもっ!!」

盾の収納魔法を操作、種類問わず幾つもの無反動砲や対戦車榴弾砲を並べる。
時間を止め、その間に撃って――

《――■■■■》

「!? う、嘘でしょ?!」

マミと撃ち合っていた筈の影が、私に古式銃の銃口を向ける。

咄嗟に手に持っていたAT4をそちらに向けて撃つも、アツサリ迎撃される。

「どうなってるのよもっ?!」

《■■■■! ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!》

ミニミを引き抜き、フルオートの反動を強化された腕力で押さえ込みながら、一気に近づく。

恐ろしい事に、毎秒1.5発前後を吐き出す軽機関銃を相手にしているというのに、その超スピードを活用して一切被弾していないのだ。

こんなの、どうやって対処しろっていうのよ?!?!

パアンパアン!!

再度魔女の触腕が絡まり、使い魔を巻き込んで溶ける。

その数、3。

使い魔の半分以上がそれで消えるけど、あの溶けた跡からは、あの影のように強力な使い魔が現れるでしょうね。

「!? クトちゃん!? どうしてこんなことするの?!?」

「きつと、力付くでボクらを結界から追い出すつもりだね。あの使い魔の攻撃、かなり

セーブされてる」

「手加減されてるって事かしら?」

「そもそもあの魔力濃度なら、純粋なエネルギーとして爆発させるだけでこの空間にいる魔法少女を全員即死させられるよ」

「ええええええ?!」

「……その割には遠慮が無い気が、ああ。まだ憎まれたがっているのね」

その間に修復魔法で傷を塞ぐ。

完治させる程の隙は、無い。

泥を徐々に落としながら、銃による応酬が続く。

古式銃とマスケット銃が入り乱れ、何度も弾丸が掠る。

く、このままじゃジリ貧ね。

決定打が、無い……………

テイロ・ファイナーレは溜めが長過ぎるし、レガーレもスピード不足。

だからといって、応援が来るまで粘るのは無し。私のプライドが許さないっていう

のもあるけど、私の予想が正しければ、彼女相手に数の暴力は効果が薄い。

なら、一か八か——

1発の弾丸を頭部に撃ち、銃はいつも通り背後に投げ捨てる。

銃撃は屈んで回避され、長銃が向けられるの。

「……あの長針」

《■■■■?!!》
焦ったように長銃を縛るリボンを短銃で撃ち抜こうとするのを、銃弾で弾く。

彼女がリロードしている隙に再度距離を詰める。

マスケット銃の生成は、ない。

《■■■■■■■■?!!》

「ふっ!!」

ハイキックで盾にした腕ごと胴体を蹴り抜く。

大きく吹っ飛んだことで、今までの比じゃない程の泥が剥がれ、ツインテールが露わになる。

「……………一ファンとしては、サインをねだるべきかしら?」

《——キ■■。 ■れはわ■■■しの■■■フでもあり■■■?!!》

それがキツカケだったように、泥がボロボロと崩れる。

《■■■たくしと■■■まし■■■、折■■彼女の■■■アから■■放され■■と思っ■■らこんな状
で■■■■?!!。》

いつ■のこと、■つても■っ■方があ■■たいですわねエ。

——勿論、全力で抵抗は■せて■らい■■が》

短銃が垂直に挙げられ、影が吸い込まれる。

《——の■》

そして、自分を撃ち抜く。

ダメージは無く、パツと見では何をしたのか分からないでしょうね。

その間に完全に傷の修復を済ませ、ワンアクションでマスケツト銃を生成出来るように魔力塊として周りに浮かばせる。

《——さ、■りま■よう》

「……やっぱりもつたいないわね」

ゴウツと加速された動きで距離が詰められる。

短銃の銃身をマスケツト銃の銃身で抑え、もう片方の銃口を槍のようにつきだす。

当たり前のように避けられるのを、手の中でグリッブをクルリと回し、銃口で直接打つ。

《中■の発想■すわ。 でエ、もオ。

そ■だけで■、わた■しの■■は、》

ダアンツ!!

《!?!?!?!?》

親指で引き金を引き、魔弾が彼女の背中にめり込む。

「貴女の銃と違って、私のは魔力から直接創り出しているのよ。 多少の融通は利くわ」

《■き過ぎ■やあ■ません■と!?!?》

屈んでからのバックステップで距離を取ろうとしてるけど、いくらスピードがあつても、動きが分かっているなら狙うのは難しく無いわ!

待機させてたマスケット銃を全て展開、

「——これで、私の勝ちよ!!」

——一斉射撃!!

《ツ!!
ザ??ア■エエ??
■タタタ??帝!!!》

大地からボロボロの時計盤が現れ、その魔弾の大半を受け切る。

けれど、元々の劣化にトドメを刺されて崩壊し、貫通した弾が運悪く短銃を持つ右腕を貫く。

《……や■り、勝■とは■ませ■》

自身の武装を失い、あっさり降伏する。
その表情はどこか、最初から諦めているようで――

「……………ね。 今度会う機会があれば、ネコカフェに行きませんか？」

《……………い？》

ポカンとした表情。

少しして、クスクスと笑いだす。

《……………そうわね。 今、会があれば。

—— ■■■頼みますわ。 彼女も、 ■たくしと同じ ■、騙され ■い ■の ■か ■
「約束するわ。」

さようなら—— ■■■

手向けになるかわからないけど、

私の全力のテイロ・ファイナーレで、彼女を消し飛ばした。

Side杏子

《》
 「単調すぎるな!!」

メイスというか、ハンマーと言った方が正確だろう武器を振り下ろすのを防ぐ。
 弾き返し、槍の穂先で一閃——

——出来なかった。

「?! チツ! 重すぎんだろ……!!」

身体のカイ魔女の体当たりを無理に防いだ時みたいに、弾けない。
 しっかり受け止めたもんだから、受け流そうにも、バランスを傾けた瞬間潰されかねない。

「さて、どうするかな、つと?」

《》
 「????????」

アタシが今出せる全力の攻撃。これは簡単に片がつく——

ドスツと身体に突き刺さり——



ズルりと、槍が引き抜かれる。

「?!?! き、効いて、無い……………っ?!」

頭に生えてる角で突くつもりなのか、頭突いてくるのをなんとか受け流し、奴がこっちに振り向くまでの間に槍を創り直す。

「……………傷そのものは出来てるんだ。完全に効いてないわけじゃ無い。

斃せるまで連発するか? いや、あんな大技、いくら何でも対処されるか。 ん?

……………おい、おいおい、おいおいおい?!?! どうなってるんだよソレ?!?!」

いつの間にかメイスを握り直していた奴が、さつきと同じようにその武器を大きく振り被る。

違うのは——その武器が、紫電を纏っていること。

↑
「ヤベツ?!?!」
「ヤベツ?!?!」
↑
「?????????!」
↓

直撃にしたがって全力で逃げる。

奴は、柄の先を地面に突き刺し――

――バチバチバチバチバチバチバチツツツ
!!!!

まるで大木のように電撃が降り注ぎ、拡散する。

「ぐあっ………!!」

距離で威力が変わるのか、そこまでデカイダメージは受けてない。

でも、何発も喰らったら分からない。

至近距離なんて論外。

「だったらっ!!」

槍の柄を分解、多節棍に切り替える。

掬い上げる様に穂先を飛ばし、メイスを振り回して弾こうとするのを魔力を通して操り、上手い具命に躲させる。

さらにアタシもアイツの周りを駆けて、穂先だけじゃなく、棍でも打つ。

――

攻撃が当たらず、殆ど効いてないとはいえチマチマと攻撃され、イライラするのかなか動きがメチャクチャになる。

そして――

――ジャリツツ!!

――

メイスが周りに漂う鎖に絡まり、動きを阻害する。

強引に焼き切ろうとしたのか、鬱陶しい穂先ごと吹き飛ばそうとしたのか、メイスに

再度電気が流れ――

バチバチバチバチバチツツツ!!!

!?!?

■ ■ ■

〽

し

「……色々と残念過ぎんだろ。アダ名はバーサーカーで決まりだな。

パワーある

巻きついた鎖に通電、メイスから流れた電撃が奴を襲う。

効くかどうかは賭けだったけど、上手くいったな!

?????

水分を含んだ泥が電気で弾け、ポロポロと崩れ落ちる。

〽

■ ■ ■

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチツツツ!!!!

「……おい? 何やってる?」

ダメージを受けるのは分かっている筈なのに、更に電圧が上がる。

「つたく！ 何やってんだよ、アタシはよお!?!」
ただ、何となく。

何となく、泥に覆われてるコイツが、他人じゃないような気がして。

まるで自分自身が悲鳴をあげているようで、放っておけなかった。

穂先の返しで引っ掛け、引き剥がす。

「よしっ！ これで、——

《!! ■メツ!!》

——?!」

辺りに撒き散らされた泥がいつの間にか集まって、意思があるかの様に襲いかかる。

「このっ、」

さっきの一撃の比じゃない程の雷が堕ち、掻き消される。
飛び散った泥を正確に焼き焦がし、身に纏っていた泥すら蒸発した。

——そんなのを撃って、使用者が無事なワケがない。

「……………なんの、冗談だよ」

爆心地としか言いようのない場所の真ん中にポツンと立つ、先の膨らんだハンマーの
ようなメイスが、唯一の応えだった。

なぜか撃たずに更に距離を開ける使い魔。
近距離戦闘は苦手なのかしら？

一気に踏み込み、銃口を突きつけ—
キンッ

「……そういう訳でもないようね」

《……◆◆◆》

いつの間にか右手に握られていたナイフで、銃口を逸らされる。
力の向きに逆らわず、その力も利用して横に跳ぶ。

ここで初めて、相手の銃が動く。

一瞬で上がった銃口から弾が連続で吐き出される。

時間停止——は、ダメ。

「くっ!!」

今まで相手の攻撃を避けるのに能力を多用していた所為か、咄嗟に判断出来ず盾で受

け止める。

叩き込まれる衝撃を堪え、何とか相手を視界に入れる。

反動で暴れる銃からは泥が剥がれて、その銃身が露わになる。

銃の後上部に円柱―おそらくマガジン―がついている、珍しい形の銃。

……見たことない形ね。少なくとも自衛隊・米軍が使っている種類ではないし、安さに特化した不良品でもないようね。

スコーピオンのバレルの先端を盾の下に押し当て、引き金を引く。

こちらの反撃に素早く反応しサイドステップで躲かれるのが、銃そのものを投げつける。

《!?!》

グリップの底を打つける事で防いでる間に盾に手を入れ、新しくスコーピオンを引き抜く。

《!?!》

ナイフを腰周りに収刀した右手が、まるで困惑しているかのようマガジンに漂う。

その隙に投げ飛ばしたスコーピオンに飛びつき、ついでにマガジンも換える。

「?! ああのバカ!! 使い魔になんて武器持たせてんのよ?!?」

幸い、抜銃そのものが使い魔にとって思わずといったものだったからか、何故か元々入っていた弾を別のものに再装填していた。

『……あ、あれ? 異常流動が、収まった……う?』

「危険なのは弾丸みたいね。」

……どちらにせよ、喰らいたくはないけど」

弾丸の再装填の時、弾倉を変えるのではなく、銃身の根元で折って、そこから弾を1発入れていた。

大型ハンドガン並の大きさで、中折れ式の装填、尚且つ装填数は1。

私の知っている限り、該当するのは、一部のソードオフショットガン、グレネードランチャー、それと、

——コンテNDER
競技用拳銃。

競技用拳銃だとしたら、警戒するのは構造の単純さ故の高精度の精密射撃と、高い耐久性。

銃の種類によっては、それこそ大口徑ライフル弾が飛び出してきたもおかしくない。そんな銃の顎が、こちらを見据える。

「っ!!」

慌てて両手のサブマシンガンを投げつけ、伏せる。

——ツダアンツツ!!!

金属塊を2つ貫いて、死神の鎌が頭上を通り過ぎる。

……か、貫通したつてことは、散弾とか、スラッグじゃないわね。間違いなく、競技用拳銃。

弱点は、再装填に時間がかかること。

一気に勝負を付けようと、AT4を出し——

ガガガガガガガガガガガガガガガガツツ!!

「キャツ!!」

さ、サブマシンガンを忘れてたわ……

今の掃射でロケランは破損。撃ったら暴発するわね。

今の隙に相手はリロードを済ませているでしょうね。

分かっているだけで敵の武器は、競技用拳銃一丁、サブマシンガン一丁、ナイフ、後は正体不明の加速術。おそらく、時間系魔法。相手の実力を考えれば、まだ手札を

隠してる。

どの手を打つ？

サブマシンガン——繰り返しは時間だけで十分よ。

マグナム——サブマシンガン相手に撃ち負ける。

ショットガン——倍速回避↓コックキング中に拳銃でズドン、で負けるわね。

マシンガン——加速持ちにはショットガン以上に避けやすいでしょうね。

グレネードランチャー——論外。ショットガンと同じ運命を辿るわ。

ナイフか警棒での近接戦——練度からして、一瞬で負ける。

……そうだわ!! この手なら——

油断なくこちらに拳銃の銃口を向けたまま躍り寄る敵。

私の足元には、使用不可能のロケラン。

そして、

私の手には、手榴弾。

閃光でも煙幕でもなく、破片を撒き散らすマークIIグレネード。

親指でピンを弾き、ポイツと、足元に捨てる。



敵が再度加速する。

逃げるのを確認する前に、急いでその場に伏せる。

マークIIはその特性上、爆発より外殻が飛び散ることによる殺傷能力が優れている。近距離での回避は実質不可能。

だけど、私の足元には、金属製の盾が転がっている。

いざとなれば、一瞬だけ時間を止めて破片の軌道の隙間に潜り込めばいい——へ??



な、なんで、

——自分からこっちに来てるのよ?!?! しかもさつきより倍は早いし?!?!
コツン、と榴弾が地面に当たる音がするのと、使い魔が金属塊を踏み越えるのは同
時だった。

——ドツドツガアアアンツツ
!!!

……い、今の爆発は、一体………？

手榴弾は何度も使ったことがあるけど、あんな強い爆発は起きないはず。

焦げ臭い匂いに顔を顰めつつ、思わず瞑っていた目を開けると、視界は真っ黒。重い物がのしかかっている感じがしたから、退けると、――

「……………え？ えっ、え??」

そこにいたのは、血を流す、男の人。

魔法少女姿のクトが着ていたような、黒のロングコートは爆風の影響で見ると堪えないほどボロボロ。

所々、見覚えのある『泥』がスーツに付き、蠢いている。

「……この泥、使い魔の中身は人ってこと？」

それに……」

——この人とは何故か、初対面じゃない気がする。

ふと振り返ると、細かい金属ゴミと化した、AT4。

「……うっかりしていたわ。まだ中身のあるランチャーを捨てるなんて」

視線を落とす。

「……なんで、私を助けたのかしら？ 私は魔法少女。爆風で死ぬ可能性は少ないわ。境界から追い出すことを目的とするなら、貴方は逃げるべきだったはず」



——男の人は、応えず。

ただ疲れ切った顔の遺体が、転がるだけだった。

共通ルート：第5話

sideさやか

動画とかみたいなのに、身体を中心に剣を構える。

相手は、クトと同じくらい的身長。なのに、あたしの身長より大きな槍を片手で構えてる。

《……………》

余裕の表れか、手招きしてるし。

「——っ、はあああああッ!!」

一気に距離を詰める。

何故か反応しない使い魔に向けて、剣を振る。

よし、まずは一撃——

その間に使い魔は、追撃するでもなく、口元の泥を引き剥がしてる。
あたしは、眼中にないってわけ!!
そう怒鳴ろうとして、

《■??——フウ。》

《これで通じる?》

「!?!?」

うそ、なんで、なんで、

《驚くような点があった? あなたから見れば、わたしは初対面——いや、どうでしょうね。顔は知っているかもしれないわね》

——なんで、あたしと、

「——声が、同じなの?!?」

《あら、そんな些細な事で驚いていたの?》

さ、些細なことって……

《そんな事より、あなたにはやるべき事がある筈よ。

そう——

——わたしを、斃すという『運命』が!!》

バサツツ!!

背中をの泥を吹き飛ばし、悪魔のような翼が姿を表す。

「っ、」

《緩いわ。本気を出しなさい!》

上段に斬りかかるも、翼を一度飛ばたかせるだけで強烈な風が吹き荒れて、飛ばされないように堪えるので精一杯。

《その程度? いいえ。あなたはわたしではないけれど、わたしはあなたよ。それ

とも、ただの勘違いだったかしら?》

「っ、なめるなあッ!!」

両手の剣を、投げつける。
回転しながら迫った剣は、

《つまらないわね。　あまり巫山戯るようなら、潰すわよ》

当たる前に、1発の光弾で弾かれる。

……これじゃあ、どうしようもない。

なら考えろ。

ママさんならどうする？

杏子ならどうする？

ほむらならどうする？

——クトなら、どうする？

「——！ 試す価値は、ある!!」

右手に出した剣の柄を握りしめて、魔力を流す。

《……ふうん。 何か思いついたようね》

「うん。 降参するなら今だよっ!!」

《冗談！》

魔力を流す。

流し込んだ魔力は、もう完成している剣の内側を流れて、外側に溢れる。

外に出た魔力は、空中で固まって、新しい刀身を精製する。

——あたしの『剣を生み出す』魔法は、手に直接か、地面に生えるようにしか取り出

せない。

マミさんみたいに、空中にいつペンに出すことなんて出来ない。

クトみたいに、宙に浮かばせることなんて出来ない。

だったら――

《……成る程。 一種の蛇腹剣ね》

「あんたは見た感じ、早くて、武器（^機）を持つてゐるつてことは遠距離は苦手。 でもあたしに

は、遠距離武器は無い。 だったら、」

《リーチを長くした、と。

……くふっ、ははは、あはははははははははは！》

突然大笑いし始める使い魔。

《確かにわたしは早いわ。 でも遠距離戦は不得手では無い。 寧ろそつちがメインかしら。》

それにわたしは、力も強いし、近距離戦も得意よ？ 多少小細工を弄した所で、わた

しには勝てないわ》

「……簡単に言えばリアルチートじゃないですかヤダー」

……ダメだ、考えれば考えるほどドツボにハマる。

少なくともマトモにやりあったらマズイってことは断言出来る。

《……待ち草臥れた。そろそろこちらから行くわよ?》

「!!? も、もう当たって砕けろ!!」

真つ直ぐに空中を突進して、右手を振り下ろす使い魔。

なんとか防ごうと、両手で握る剣で受け止める、けど――

「うぐ、ぐぐぐぐ………」

《ほらほら、まだ片手よ? どうするのかしら?》

「ちつくしよー!!」

刃に直接触っているどころか、力までかかっているのに、そのまま押し切られそう

………ッ!

「う——ああああああああっ!!」

《お? いいわよ、その調子その調子》

剣を滑らせて、前に倒れこんでなんとか受け流す。地面に激突した手は、簡単に手首まで埋まって、どれだけの力が込められていたのか、暗に示してた。当然、蛇腹剣は壊れてた。

《それ、次よ!》

「?! うっ!!」

左手はさつきと同じ振り下ろしで、右手で横に薙ぎ払うように構えられる。

直撃は受けちゃいけない、だからって防ごうにも両手で受け止めてやっただし、避けるにも相手の動きが――

ギギイイインツツ!!

「?!? ぐあっ!」

片手づつに持った剣を盾にして、致命傷だけは防ぐ。

それでもあたしは吹っ飛ばされる。

「ま、まだまだ………っ!」

《まだまだ、ね。そろそろ手札が無くなってきた頃じゃなくて?》

剣を杖にして、立ち上がる。

どうすれば、どうすれば――

相手は慢心して、こっちの様子を見る。

……槍は、どこに行つたの？
気になって、辺りを見渡す。

刃毀れして、錆びて、黒い汚れがこびりついた剣やら刀やら槍が、まどかの言うとお
り、お墓みたいに突き立ってる。

あいつの持つてた、紅い槍は、無い。

槍が無いなら、あいつの武器は、あの身だけ。 なら、

「これなら、どうだッ!!」

弾幕なら!!

地に剣が突き立っているイメージをして架空の柄を握ると、すぐに投げつけるって動
きを、何度も繰り返す。

そこら中にモデルがあるんだから、ミスしようがない!!

《このわたしに弾幕戦？ あっははははは!!》

相手は防ぐことも弾くこともせず、剣を避け続ける。

「はああああああああ!!」

《单调、単純よ！》

弾幕というのは、こういうのをいうのよ!!》

剣の雨を潜り抜けながら、その両手から大きな紅い光弾が幾つも放たれる。

「え、ちよ、それなんてチート?!」

《あら、こんなのeasyよ?》

「基準がおかしい!!」

動きはそこまで早くないから、なんとか走って避ける。

追っかけてくるってわけでもないし、案外簡単かも——

《後方注意よ》

「前言撤回! どこが簡単だあ?!」

狭い空間を跳ねるゴムボールみたいに、ある程度の距離を進むと向きが突然変わる。

しかも変わる方向が、追っかけてきてるじゃなくてランダムっぽいから、尚更やりに

くい!

……これって、時間が経てば経つ程詰むやつじゃ。

「だ、誰か、助けて——」

あ、視界が真っ赤になって——

「——ティロ・ファイナーレ!!」

横からのレーザー砲が、紅い光弾を掻き消す。

「——今の弾幕、その翼……：貴女は『記録』にいなかったわよね。私の予想、外れたのかしら」

「マミさん!!」

とても頼りになる、1つ年上の先輩がライフルを構えて、そこにいた。

撃つては捨て、撃つて捨てで残りの光弾を処理すると、改めてあたしの隣に立つ。

「マミさん、あいつ、変なんです！ 私と声と同じで」

「そうなの？ やつぱり何かしらの共通点が……いやでも、もしそうだとしたら……」

《——来い》

マミさんが何か考え込んでいると、使い魔の手の光弾が伸び、槍になる。

「あら？ 随分流暢に話せるのね。 私が相手をした彼女は、随分喋りにくそうだった

わよ」

《そう。 それで、あなたはわたしを愉しませてくれるのかしら？》

「ええ」

……やつぱり、マミさんってすごいな。 あいつにあんな自信満々に——

『美樹さん。 ちよつといいかしら？』

『?! は、はい！』

急に、あいつと睨み合ってるマミさんから念話がある。

この距離なら直接の方が早いんじゃない？

『……他の子に念話で話しかけてみてくれないかしら』

『はい！ えっと——』

きつと、何か考えがあつてのことなんだろうな。

『キュウベえー。聞こえるー?』

.....

.....あ、あれ?

『キュウベえ、まどか?』

.....

『杏子? ほむら?!』

な、なんで返事が、

ま、まさか、みんな、

『だ、誰でもいいから返事をして!! まどか! ほむら! 杏子!』

「——うるさい! いきなり大声で呼ぶな!」

.....きょう、こ?

「無事だったの?!」

「どういう意味だよ!?!」

《……そんな。精霊に英霊だぞ?! なんで、こんな、》

なにやら驚いている使い魔を放って、マミさんが声を張り上げる。

「……もしかして。

ちようどよかったわ。 佐倉さん! 暁美さんに今のことを伝えて!!」

《ツ!! させるかツ!!》

慌てた様に槍が飛ぶけど、すぐに撃墜される。

「さ、美樹さん! やりましょう!!」

「はいっ!

っでも、あたしにはあいつに通用する攻撃が、

「大丈夫よ。

だって、彼女を斃す必要は無いんだから」

「? ?」

「そうよね?」

共通ルート：第6話

sideさやか

使い魔に槍を突きつけられた状態のまま、硬直するマミさん。

ライフルを撃つどころか、作り出してすらいない。

「ちよ、ちよつと待ってよマミさん！」

だってクトは魔女になってて、こいつは使い魔で、「

根拠ならあるわ。

——武装、能力、そして、声。

これらは、魔女の一部分と使い魔を代償に現れた、強化版の使い魔と私たちに共通する特徴よ。

そして彼らは、『記録』に描かれていたわ。あなたを除いて、ね。

最初はただの偶然だと思った。けど、その前提で周りを見渡した瞬間、それは確信に変わったわ。

——墓の様に突き立つ武器。

——首だけとなって、銀杯に乗せられた邪神。

……………この場所結界は、『記録』にある者たちの墓場にして、あなたが自身を罰する、処刑場。

だとすれば、墓の主でも、罪人でもない人物がいる事は有り得ない」

《……………くだらん》

槍がわずかに揺れ、タメるように魔力が籠る。

「……………くだらない？」

《そうだ、くだらん。》

例え私が違ったとしても、そうだとしても、

お前たちが私を斃さねばならない事に変わりは《

「否定はしないのね」

《……………だから、どうしたというのだ。私は何であれ、》

ハアと、マミさんが困ったようにため息を吐く。

「何で私たちがクトを斃さなきゃいけないのよ」

《……何を言っているの？ あなたの目の前にいるのが何か、分かっていないの？》
「何って、決まっているでしょ？」

——とつても強くて、思いやりがあつて、

そのクセ不器用な、私の相棒よ」

——エネルギーの収束が止まる。

分かりやすいくらいポカンとして、見えてる口もマヌケっぽく開いている。

《……何を、言つて、だつて、私は、》

「確かにあなたは、わざとではないとはいえ、大勢の人を死なせてしまった。 私たちも

怖い目に会ったし、疑いもしたわ。　　純粹に破壊と狂気を振りまく、魔女より恐ろしい
ナニカだと」

《そうだ。　　私は、人では無い!》

「あら、そんなこと言ったら私たちだって魔法少女よ」

《違う!!》

槍の柄を握り潰しながらの叫びは、どこか偉そうな雰囲気を纏った声は掠れて、もつと子供っぽくなった。

《魔法少女は人外なんかじゃない!!》

魂は、形が、質量がありながら、形の無いモノ。　　ソウルジエムを砕かれれば死ぬなんて、そんなもの、脳や心臓を抉ったら死ぬのと同じ。　　体の再生だって、一般人相手にだって効果がある。

だから、だから、》

言葉を探しながら、必死に否定する。

もう誰かのマネをする余裕なんてなくて、その言葉が本心からでたものだって分かる。

「……クト、帰りましょう？」

あなたなら、自力で魔女から戻れるでしょう」

《……》

コクンと、頷く。

よかった。これで、またみんなで一緒に——

「——でも私は、そっちにはいけない」

「!!!」
「？」

な、なんで?!

「クト、なんで来れないの?!」

【……………】は、私の処刑場。

私の罪を償う場所。

そして、嘗て私を受け入れてくれた連中正義が眠る場所でもある。

例えば私が私を赦しても、連中が私を赦さない」

クトの意識を示すかのように、離れたところにいて、ただ攻撃を受けているだけだった魔女の触手が殺到して、クトを？み込む。

本来の魂の持ち主を取り込んだからなのか、蛸に見えていた魔女の姿形が大きく変化する始める。

何処となく緑がかっていた触手は、タールで無理矢理スライムを作ったみたいな質感になって、

人でいう顎の部分からしか生えていなかった触手が、顔のパーツのある前面をのぞいて、覆い尽くす。

顔も、巨大な1つの眼球に埋まる。

sideほむら

……厄介な事になったわね。

変化を遂げた魔女の触手に銃弾を浴びせる。

さつきまでは使い魔の群れが相手だったのに、マミたちが説得に失敗してからは、積極的に攻撃してくるようになった。

相変わらず時間停止は意味をなさないし、ホント厄介ね。

「まったく、なにか『私に全部任せなさい』よ。よけい悪化してるじゃない」

「……いや、なんとなく分かるよ。」

アイツは、探してるんだよ」

「は？」

まどかを挟んだ隣で使い魔を薙ぎ払った杏子が、焦げた布の様な物を握り締めながら続ける。

「自分を救ってくれる、誰かを。

へたに力を持って、誰かが伸ばしてくれた腕を払っちゃったもんだから、半分くらいヤケになってんだろ。

こんなことしでかしたんだから、私はこんなヤツなんだって、自分で自分を信じてないんだ」

「……………だから、処刑場」

念話の応用でママたちの会話を聞いていたから、その単語が浮かぶ。

「……………そんなの、おかしいよ。

だって、クトちゃんのせいじゃないのに、自分を責めるなんて……………」

自己犠牲の精神の恐ろしさと美しさは、とてもよく分かる。

それでも、何度も救おうとした友達すら助けられてないのに、初回での挑戦なんて、無理だったんじゃない……………」

「——たく、魔女を真つ二つにしたら中からソウルジエムが出てきて復活！ とか、そういう愛と勇気が勝つストーリーにならないもんな。アイツだって、そういうのに憧れてただろうに」

……愛と勇気が勝つストーリー、ね。

……悪く、ないわね。

彼女が絶望する理由は、自身の能力や力で他者を殺してしまったことが原因だったは

ず。

かなり暴論だけど、逆に言えば、

彼女を斃せば、正気に戻せるかもしれない。

自らを悪者と名乗ったその望みは、自らの敗北。

制御不能な絶対的強者ゆえに、己を抑えてくれる誰かを求める^北。

そうであるなら——

「——予定を変えるわ。」

あの魔女は、斃しましょう」

「でもそれだとクトちゃんが、」

「大丈夫よ。きつと助けられるわ。」

……賭けになるけど」

『どういう事かしら?』

「彼女の願いを半分叶えるのよ。」

そんなに罰せられたければ、心行くまで叩くまでよ。

——ただし、死ぬことだけは、許さない」

「そんなことが出来るのかい?!

相手はあのクトだよ!」

「……なら、もつといい案があるかしら?」

「……………」

力無く、首を左右に振る。

「……ほむらちゃん。無茶だけは、しないでね。

ちゃんと、帰ってきてね!」

「……大丈夫よ、まどか」

フウワサと、髪を払う。

「——私は、私たちは、そんなに弱くないわ。

だって私たちは、」

不安げな表情のまどかから目を離して、コワレタ少女に向き直る。

永く忘れていた、最初の羨望を思い出す。

「——私たちは、正義魔法少女の味方だもの」

共通ルート：第7話

sideほむら

『正義の味方、ね。いい響きだわ』

『それで、あたしたちはどうすればいいのさ?』

「正気に返るまでシヨックを与え続ける。それだけよ」

「ハッ! アタシ好みのシンプルな答えだ。ゴチャゴチャ考えるのは後回しってか?」

「ええ。あれだけの頑固者、説得するにはコレが、手っ取り早くわ」

ノッてきたのか、周囲の使い魔を薙ぐテンポが上がり、サクツと殲滅し終える。

マミとさやかとも合流して、こちらの準備は完了。

「——行くわよっ!!」

時間を止める。

魔女の時間がしっかりと止まっていることを確認して、周囲に榴弾砲を展開。それら

時間、停止！

「——今度は、上手くいっただわね」

今回の使い魔は時間停止の影響を無効化することなく、完全に止まる。

巨大化させた槍を魔女に蹴り込む杏子を横目で確認しつつ、マグナム弾を雨霰と使い魔に撃ち込む。

——停止、解除。

《?!
■ ■
?????!
》

驚いたのか、僅かに揺れるも、すぐさま剣を振り、銃弾を防ぐ。 つて、どんな反応

速度よ?!

それでも流石に全弾は防ぎきれなかったようで、所々泥が抉れ、中身が見える。

——紫の服で身を包んだ、肌が。

背後の爆発は一旦傍に置いて、目の前の使い魔（小）の側頭部に50.A.Eを叩き込む。

《?!?!?!》
 ■■■■■!!

今度は当たり、使い魔の体勢が崩れる。よし、このままなら

「ほむらっ!!」

「ッ?!」

さやかかの剣の鋒から同じ形の刀身が連なって伸びて、鞭のようにしなりながら、私の背後に迫っていた使い魔を切りつける。

「へへ、後ろに注意！ってね」

「……助かったわ。ありがとう」

背中を預けながら、目前に自然体で佇む使い魔（小）にマグナムの銃口を向ける。

ダメージは無かったのか、泥が剥がれた跡は、無い。

「……」

チラリと見れば、杏子とマミも使い魔との激しい戦闘の真っ最中だった。援護は期待出来そうに無いわね。

「……なんか、こうやってほむらと共闘するのって、微妙に違和感あるなあ」

「行くわ!!」

「オツケー! うりやあああああああああ!!!」



????????????????

私
たちは、
ぶつかり
あった。

sideキユウベえ

——ドゴオツツ!!

「ひっ!?!」

……ボクらは、激化していく戦いを、ただ眺めていることしか出来ない。

丁度よく、岩からそのまま削り出したような斧のような大剣の陰に身を隠すことには成功したけど、例に漏れずボロボロで、魔法や銃弾が当たるごとに大きな音を立て、今にも壊れそうさ。

「……ねえキユウベえ。ほむらちゃんたち、大丈夫だよね?」

「……多分、命は無事だろうね」

音を探って、安全を確認してから外を覗く。

すぐ側で使い魔2人の斬撃をさやかが受け止め、ほむらが弾を撃つ。でも使い魔の方が技術が上なのか、さやかを相手取って尚銃撃を弾く余裕があるみたいだ。

少し離れた所でも、マスケツト銃と古式銃火繩銃が入り乱れ、鋭い爪を振り回す大量の使い魔を槍が薙ぐ。

その最奥に、血涙を流しながら、静かに戦闘を眺めている魔女が。

その醜悪な巨体を形造っている魔力量だけでもおそらくワルプルギスの夜に匹敵しているのに、更には未知の『魔術』があわさり、最早どれだけ強力な魔女になっているのか、検討もつかない。

意図してなのか偶然なのか、特に動く様子はない様子なのがせめてもの救いか。

「……でも、状況が悪い上に不利な事に間違いは無い。ここは一度引くべきだろうね」

「……………」

俯いてしまったまどかを放置して、周囲を警戒する。

通常のも強化版の使い魔もこっちを見ていないのを確認する。よし、誰もいないな。

さて、出口を探さないと――

「——ねえキュウベえ。私なら、どんな願いでも叶えられるんだよね」

……………は、い??

まさか、

「ダメだよまどか！ それじゃあ根本的な解決にはならない！ 魔女化を戻しても、すぐに逆戻りだ！」

「だったら、クトちゃんが死なせちゃったひとたち、みんなを蘇らせるって願いなら?！」

「それは——」

案としては、悪くは無い。

結果がどうであれ、本人たちの言葉であれば、クトを説得出来るかもしれない。

……………その故人が、唯の人間であるなら、だけど。

ただでさえ対象となる数が多いうえに、平行世界どこの話ではない、異界の住人ときた。

ハッキリ言えば、まどかの因果線の数でも叶え切れるかどうか怪しい。
仮に叶ったとしても、余りにも条理に反した願いだ。 皺絶寄せがどれ程のものになるか、想像出来ない。

「……それは、ダメだ。 不安要素が多過ぎるし、なにより、」

——ボクはもう、魔法少女を増やしたく無い。

「……でも、それじゃあ私はどうしたらいいの？」

みんなが傷付いて、苦しんでいるのに、私だけ隠れてるなんてできない!!」
「そんなのボクだって同じだよー!」

弾かれた弾や撥ねた泥が岩剣に当たる音をBGMに言い争う。

……まさか、ボインキユベータークが契約を断る側にまわるとはね、なんて事を頭の片隅で考えていると、視界の下の方で、何かが蠢いた気がした。

……いや、『気がした』じゃない。

ボクらが影だと思つてたこれって、『泥』じゃないか?!

「まどか! 急いでここから離れるんだつ!! 早くつ!!」

「へ? それってどういう……」

——きやあつ?!

さつきまで確かに地面があつたのに、急に足元が底無し沼になつたかの様に足が沈んでいく。

助けを求めようにも、あの激戦じやあ寧ろ彼女たちがやられる。

ど、どうすれば?!

「お、おちおお落ち着くんだ!! 圧力を分散すれば沈むスピードを抑えられる——キユツ?!!」

スポツと泥から引き抜かれる。

ほむらたちが間に合った、なんて訳ではなく、当然のように引き抜いたのはまどかだ。

「い、一体何を考えて、」

「——キユウベえだけでも、逃げて!!」

「キュツぷいつ!?」

そのまま、泥の外側まで投げ飛ばされる。

コントロールに失敗したのか、引金を引いたら確実に暴発しそうなほど劣化した対戦車ライフルの肩当てに激突する。

「くっつ! まどか!?」

「——間に合って、良かった……」

沼ではあり得ないスピードで沈み、もう肩まで吞まれている。

そして、彼女は、

「お願い、みんなを——」

「まどか!? まどかああああああ!!!」

——完全に、沈んでしまった。

共通ルート：第8話

sideまどか

……

………？　ここは、どこ………？

たしか、私は――

右も左も、上も下も無くなって、フワフワとした場所を漂う。

ひとりぼっちで、何も見えないくらい真っ暗な所なのに、自然と安心する。

「……ここは、どこなんだろう？」

「——キュウベえごと取り込んだと思ったんだがな。 所詮、模造品だったということか」

「!! クトちゃん——」

——つつつ?!!?」

じんわりと、小さな女の子が暗闇から浮き出てくる。

その体を、何本もの、白い、腕の骨が挿んで離さない。

「く、クト、ちゃん。 そ、それって、」

「? ああ。 概念的なものだから、本物じゃないよ。」

……………最も、いつそ本物だったらどれだけよかったか、て代物だがな」
クククと、片頬だけ釣り上げて嗤う。

【それで、ここが何処かだっけか？】

フアンタジーな答えとSFチックな答え、どっちがいい？】

「えっと、じゃあ、フアンタジーな方で」

【私の心を『世界』として映し出した場所だな】

「……………ここが、心？」

さらりと、なんでもない様に告げられた内容に驚く。

この、何もない場所が？

そんな、そんなの、寂しすぎるよ！

【これでもだいたい落ち着いたんだぞ？ なにせ、私の願いが漸く叶うんだ。

——これでやっと、死ねるんだ】

【そんなこと言わないでよ!!】

【……………はぁ】

ため息を吐いて、肩を竦める。

骨がたてる軽い音が鳴り止むのを待ってから、ゆっくりと、喋り出す。

【……………私はもう、疲れたんだ。

自分の力に。 自分の狂気に。

存在してはいけないモノが消える、たったそれだけのことで、何人もの報われない連中の怨みを晴らせるんだ。

……もう、いいだろう」

疲れ切った、いつも元気で何処か皮肉げなクトちゃんとは思えない表情の女の子が、そう零す。

「……だからさ。戻すから、ほむらたちに伝えてくれ。早く、結界から出るんだって」

「……分かった」

「そうか。よかった、安心し——」

「——ぜったいに、いや」

【……………は？】

……………状況、分かって言ってるのか??】

いきなり、叩きつけるような重荷が、私の全身にぶら下がるような感じがする。

【いますぐ全員半殺しでつまみ出してもいいんだぞ??】

「っ——大丈夫、だよ。」

クトちゃんは、そんなこと、しないもん」

【……………】

息も絶え絶えに、そう言うと、無言で私の喉元に槍が突きつけられる。

【……………何度だって、言ってるよ。」

私は、『クトウルフ』。時代人種問わず、問答無用で、人類の敵だ。

絶対的な悪だ。」

……分かったならもう、帰ってきてくれ」

——槍が引つ込められると、重荷が取れる。

それに、どこかに引つ張られるような感じがする。

「……ねえ、クトちゃん。

そんなというなら、ひとつ、きかせて」

「……………」

引き寄せられる感じが消える。　　いってことなのかな……………？

クトちゃんの顔を真っ直ぐに見つめて、

ずっと気になって、聞きたかった『それ』を、言った。

「…………クトちゃん。　　そんなというなら、なんで、

——泣いてるの??」

「……………は？ 泣いてる？」

「この、私が??」

心外だとも言いたげな反応で、目元を触るクトちゃん。

そこには、暗いなかでも輝く、澄んだ粒が。

「あれ？ 変だな。 なんで止まらないんだ？ なんで、なんで、——」

拭っても拭っても、涙は止まらなくて。

むしろ、どんどん溢れてくる。

涙だけだったのが、だんだん嗚咽もまぎってくる。

【そつ、そつだ！ やつと死ねるんだつ！ だからこれは、そう！

嬉し涙だ！ そうじゃなきや、

そうじゃなきやいけない!!】

「……………クトちゃん」

ビクツと揺れて、ゆっくりと、海の色をした瞳が、私を見据える。

その動きには、余裕さとか、大胆不敵さのない、

迷子の、怯えて、それでいて縋るような雰囲気だった。

「……………みんな、待ってる」

【もう何も言わないで!! 何も分かってないのに!!

あの時の私の絶望をツ!!

私がどれだけ後悔したのかを知らないのにツ!!】

「……………そうだね。 私は、なんにも知らない。 魔法少女の秘密だって、ついさつき知ったばかりだよ」

【ツ——なら尚更!! 私のことなんて、放っておいてよっ!!】

私はいちやいけなの!!

私は、なにかを壊すことしか出来ないの!!!】

「そんなことないよ」

【——え??】

驚いた様子の、なにを言われたのか分かってないような、少しまぬけっぽい顔が映る。

「だってクトちゃんは、私たちを助けてくれた。

さやかちゃんを魔女から戻して、

ママさんの命を救った」

【それは、私じゃなくても出来たことだし……………】

「そうかもしれない。

でも、やってくれたのは、他の誰でもない、クトちゃんだよ」

【……………それでも、このまま放っておいたら、私は『クトウルフ』に呑まれる。

そうだったら、全部、無かったことになるより酷いことになる」

「だったら私たちを頼ってよ！」

全部一人で抱え込まないで!!」

「そんなこと出来ない!! 私は、強過ぎるんだから。望んじやいなかったこの力は、世界そのものすら片手間で砕いちゃう。」

それなのに、それを誰かに受け止めてなんて、言えるわけないよ!!!」

「それでもだよ!!!」

「まどかが言わないでよ!!!」

宝具も魔法も、能力も天使も無いのに!! 気軽にそんなこと言わないでよ!!!」

——つ?!? ご、ごめ、」

「……よく分からないけど、そうだね。私には、クトちゃんを止める力はない」

「う、あ、あ、」

「……だから、私に出来ることは、これだけ」

「つ?!?!」

犬歯を剥き出しにして怒ったのは驚いたけど、すぐに悲しそうな顔になったクトちゃんを抱き締める。

ゴツゴツした骨があたって少し痛いけど、はつきりと、クトちゃんの、少し冷たい温もりを感じられる。

【い、一体、なにを、】

「今の私に出来ること。」

なにも知らない私じゃ、クトちゃんの悲しみを分かかってあげることが出来ない。なんの力もない私じゃ、クトちゃんの力を受け止めてあげることが出来ない。

だから、こうさせて？

私に出来るのは、クトちゃんを受け入れて、包み込んで、信じることだけだから。

それにね。 さつき人類の敵って言うってたけど、それは間違ってるよ」

【……………？】

小さな私の腕にもすっぽりと収まってしまふ女の子に、

1番伝えたかったことを、伝える。

「私も、ほむらちゃんも、

さやかちゃんも、杏子ちゃんも、

ママさんも、キユウベえも。

みんなみんな、クトちゃんの味方だよ」

【……うそだ。 だって、あれだけ怖がらせた。 あれだけ傷付けた！

恨んでないはずがない!! 怖れていないはずがない!!!

まどかは怖くないの?! 自分を一捻りで殺せる化け物が柵も檻も無しに目の前にいるんだよ?!」

「うん」

【なんで?!?】

「信じてるから」

【ツ——……でも、もう、遅いんだ】

ズリ、ズリ、と、クトちゃんが離れる。

妙な違和感を感じて見たら、

腕の骨が、何処かへ引き込む様に、クトちゃんを引っ張っていた。

【……私の能力が暴走した魔女が、本体である私を取り込もうとしている。 今の状況

だって、クトウルフ能カにこびりついた人間だったころの魂が、性懲りも無く足掻いた結果なんだ。

長くは持たない」

「そんな、そんなのつてないよ！

あんまりだよ!!」

必死に引つ張るも、踏ん張る場所が無くて、上手く引けない。　それどころか、私まで引き込まれる。

【手を離せ、まどか。

私と来ちゃいけない】

「やだ！　絶対離さない!!

それより、どうしたらクトを助けられるの?!」

【……………そうだなあ】

諦めきった目で、僅かな間、思案する。

「……………今現在展開している、私の魔術と魔法。何らかの方法で纏めて全部ブツ壊せば、ワンチャンあるかもな」

不可能だけどな、と締めくくる。

「なら大丈夫！ きつと、なんとかなる!!」

「……………無理だつて言つてんだろ。」

私の知る限り、実現可能なのはたった数人。そして、その全員を、私は殺したんだ」

そ、そんな……………

.....あれ？
クトちゃんが死なせちやった人たちの武器って、結界にあるんだよね？

「.....もしかして、魔女の結界にある？　クトちゃんを救う方法が」

【無理だ。あの武器は全て劣化して使えなくなってる。

.....例外としては、本人が握った場合は一部機能が戻r.....
ピタツとリリースする。】

「.....あ——いや、でも、まさか、んなご都合主義なんて、今更起こるわけが、」

「クトちゃん」

笑顔と泣き顔がぐつちやになったクトちゃんが、こつちをみる。
そして、

「——おかえり」

「……………私に、応える権利は、」

「あるよ。だから、

——行こう、クト」

——
1 発の銃声が、響き渡った。

——
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ
ゴ

!? な、何?!

この場所が急に揺れ始める。

「何が起こってるの?!」

「……究極の御都合主義だろ。 ったく、デウス・エクスマキナカラクリ仕掛けの神は私の専売特許だと思つてたんだがな」

肩を竦めて、また槍を取り出す。

「……まどか。 よく聞いてくれ。」

今からコイツを持って結界に戻るんだ。 私はここで私魔女を抑える。 この槍を、魔

女の乗ってる銀杯の根元に刺すんだ」

「えっ?!」

足元から光が溢れ出して、クトちゃんの顔が見えなくなる。

「クトちゃん!? クトちゃんも一緒に、」

「私は大丈夫だ。」

——なに、結果だろうとはいえ、私を処理しようとした奴に後押しされちゃ、私ももう一度くらい、夢を見てみようと思えるさ。

……それが嘗て憧れた相手なら、尚更、な]

光が私の全身を包んで、——

——気がついたら私は、結界の内側に戻っていた。

共通ルート：第9話

sideほむら

——左右から、まるで互いに引き寄せあっているように迫る双剣、それも3対を魔力を籠めたマグナム弾の銃撃で弾くと、背後から迫る刺突を絡め取って防ぐさやかに向けて放たれた矢を盾で防ぐ。

「こなくそおおおおつ!! とおりいやああああああつ!!」

「さやか、まだなの?! この使い魔、2体揃って銃撃が効きにくいから、あなたが頼りなのよ!!」

「そう言われても、さやかちゃんも大ピンチなもんでえっつ!!」

両方ともただ撃つだけじゃ平然と銃弾を剣で防ぐし! 私が今相手取ってるちっちゃい方は弾に魔力を付与しないと当たってもダメージ無いし!!

私は魔法を時間操作に全振りしてるから、やりにくいのに!!

それに、さつきから念話で呼び掛けてるのに、まどかとかキュウベえが応えないのも

つ。

「……さやか、」

「分かってる。デカイ方を引きつけなければいいんでしょう？」

「ええ」

「うし、それじゃもいつちよがんばりますかあ!!」

2本の軍刀を交差させて直剣の一撃を防いでいるさやかを背に、使い魔に真っ直ぐ突っ込む。

至近距離で散弾を叩き込めば――



使い魔もただでやられる訳では無いようで、周囲に何本もの剣が浮かび、その切先が私に向けられる。

でももう、今更止まれない。

この一瞬で、決める!!!

——まどか?!?

危険な場所に来てしまった、大切な友達を守ろうと注意を割いて——その手に持っているモノに、思わず二度見してしまう。

そ、その突撃槍は、

「——クトの槍?! どっからとつてきたの?!」

「クトちゃんに手渡されたの!」

「はあつ?! ちよつ、タイム! どゆこと?!」

ナイスよさやか、よく聞いてくれたわ!!

「それが、私もよく分かんなくて……」

あ、でも、この槍を魔女の乗ってる銀杯の根元に刺せばいいみたいだよ!」
「? ? ?」

ほむら、意味分かる?」

「さっぱりよ。」

——ただ、風向きが変わったことは分かるわ」

「——あら、随分と仲良しね」

「おいほむら?! ちょっと瞳孔開いてるけど大丈夫かよ!？」

途中、同じく使い魔と戦っていたマミたちと合流する。

……まどか?!

「ぶしゅー」

「ま、まどかあ?!」

こんなに顔を真っ赤にして、こんなに動悸が激しくなつて!

毒物反応に近いものがある気が——槍の影響!! クトの所為ね! おのれクトオ!!

「いや流石にそれは無い」

「——で、どういう状況よ?」

「それが——」

方法は不明だけれど、クトと接触出来たまどかが、クト本人から渡された突撃槍を持っていたこと。

まどか曰く、その槍を杯に刺せば、なんとかなるらしいことを、伝える。

「つまり……どうということだ？」

「そんなの私が聞きたいわよ。」

でも、ゆつくり考える時間は無いようね」

——視界の一部、空間に直接ノイズが幾つも走り、そこから強烈な錆の匂いが漂う。
やがて使い魔とは全く異なる『ナニカ』が、滲み出してくる。

「……魔女から魔力供給を受けてない。クトとは完全に無関係な存在だ！」

「みたいだな。アタシたちも襲われたよ」

「そんなに強くなかったから、囲まれなきや簡単に倒せるわ。一応気をつけてね」

あ、使い魔が見当たらないと思つたら、斃されてたのね……じゃなくて。

「なら任せていいかしら」

「ええ！」

それじゃ鹿目さん、クトをよろしくね」

「はいっ！」

——銃声が鳴り、鎖が擦れる音がする度に異形の叫びが響くのを背に走る。

行き先を塞ぐように魔女の触手が振り下ろされるけれど、優先的に触腕に潰されていく。

「……いける。いけるよ！ この調子なら、」

「……だといいわね——ッ!？」

——ドガガガガガガガガッ!!!

直感的に横っ飛びに跳ねると、翡翠色の鎖が鞭の様にしなりながら降り注ぎ、地面を
抉る。

また邪魔ね!!

「!! 結界に揺らぎ——それもアフォーゴモンが現れた時のものに近い。

間違いなく神話生物だ!」

チツ、最悪のタイミングで最悪の邪魔が現れたわね。

仕方ないわ。 なんとかやり過ぎさないと――

「ほむら！ まどか！ 行つて!!」

「!? さやか?!」

「さやかちゃん!!」

僅かに焦燥している間に、さやかが一人で飛び出してしまふ。

「無茶よ、戻りなさい!!」

「ツ、ヤダねっ!!」

鎖鞭に長く伸びた剣が絡み、一瞬でもぎ取られるもすぐさま新たに剣を現界させて構える。

「あたしはもう逃げない！ ただ目の前で起きることを眺めてるのはもういやだツ！

あたしはあたしらしく、シンプルに、

救い^{正義}を邪魔するコイツらを、たたっ切る!!」

「あーもう！ ボクだつてやつてやる！ 幸い魔術の跡は見えるから、不可視の攻撃が来たらボクの指示に従つて！」

無茶だわ！

敵は恐らくアフオーゴモン。 さやかの実力じゃ瞬殺されてしまう。

私が参戦しても勝てない相手なのに！

「さやか——」

「ツ——早く、行けえええええええ!! はああああああああ!!」

一閃を躲し、地面に突き刺さった鎖を足場に、神話生物に向けて駆け上がる。

くつ、こうなったら私に出来るのは、一刻も早くこのバカ騒ぎを終わらせることね!!

「まどか、飛ばすわよ。 しっかり掴まってて!!」

「う、うん!」

幅広大な大剣を適当に一振り見繕って、ちよつとオーバーな量のC4を下敷きにして蹴り倒す。

すぐさま起爆。 剣で爆風を受け、波に跳ね飛ばされたサーファアの様に宙を進む。

「きやあああああああああ?!?!? こ、こんなの、聞いてないよおおおおおおお

!!!」

「——よし、上手くいった……!!」

若干賭けだったけど——魔女の目の前に滑り込むことに成功する。

同時に、翼の生えた、人間を軽く数人？み込めそうなほど巨大な醜悪な顔面の蛇が複数体、ノイズと共に現れる。

「チッ、いい加減しつこいわよ!!」

まどかを優しく降ろすと、盾からM60マシンガンを引き摺り出して、腰だめに持つ。

「——さ、蜂の巣になりたいやつから来なさい!!」

sideまどか

——魔法の乗ってる銀杯に触れるまで走る。

近付いていくと力強く脈動する槍の先っぽを表面に押し付けて、力一杯押し込む。

まだ自分を許し切れてないのか、上手く刺さらないで、小さな傷しかつけられない。

「……ねえ、クトちゃん。

クトちゃんはさ、

——正義の味方に、なりたかったんだよね」
応えるみたいに、槍が一瞬、強く光る。

——『あらゆる絶望を、敵を、悲劇を壊す力が。最強の力が欲しい』
それが、『記録』にあった、クトちゃん原の最初点の願い。

「——なら、泣かないで。終わりになんて手を伸ばさないで。

これまでの希望を信じてきたその時間を、忘れないで、最後は笑顔でいてほしい。

——希望を抱く事は、その夢は、
間違いないかじゃ、ないんだから!!

——あなたが覚えている限り、あなたはひとりぼっちなんかじゃないんだから!!!
!!!」

だから、だから――

スルリと槍が杯に刺さると、ガラスが割れる音がする。
結界が金色にヒビ割れて、白い、淡い、温かいものが地面から溢れ出す。

「——あなたの夢見る理想郷を、叶えてよ!!
クト——!!!」

S t o r y t o t h e ” H e r o ”

ルート：第1話

s i d e ほむら

——目が醒めると、妙に見覚えのある天井。

……ここつて確か、マミの部屋、よね。

不思議と痛む節々を軋ませながら上体を起こすと、雑魚寝している部屋の主を始めとした4人＋1匹の姿が視界に入る。

……? なんで皆、ここに集まつて——

「……………そうだわ。　クト！」

いない。

咄嗟に時間を確認すると、あれは昨夜の出来事になっていた。

まさか、失敗したんじゃ——

「ソウルジェムの反応は、

……………？」

微風が頬を撫でる。

窓を確認すると、一箇所だけ、カーテンがたなびいている。

そっと近づいて、窓を開けると、

「……………クト？」

「……………」

未だ日が昇らない、明け方の空を眺める少女の姿があつた。

ベランダの柵に寄りかかる彼女の隣に立ち、同じように地平線を眺める。

……………日が昇りきるまで、後5分つてどこかしら。

「……………なんで、今回なんだよ」

しばらくして、ボソリと、口が開く。

「……………鍵は前回の時点で揃っていた。戦力も前回の方が潤沢で、準備も万全だった。なんで、なんで、彼奴らは死んだんだらうな」

——言葉と共に、皆から涙が溢れる。

「……………何が足りなかった？ 何が違った？

一騎当千の外人集団と、魔法少女4人に一般人1人、地球外生命体が1匹。

なんで私は助かってしまった？

なんで彼奴らが失敗した?！」

「クト……………」

鼻を吸り、涙を手で拭ってから、再度、口が開く。

「……………ほむらたちに言うのが間違っていることは分かっている。

彼奴らは失敗して、ほむらたちは成功した。結果は、変わらないし、問答したところ

で、死者は帰ってこない。ならすべきなのは、その結果を喜ぶことだ。分かって

る。

分かつ、てる……………ッ」

ベランダの手すりが悲鳴をあげ、小さな破碎音が鳴る。

隙間からは赤い液体が滲み、溝を伝って、手すりの無事な部分に赤い線を引く。

「……………でも、考えてしまっただ。

あの時、何をすべきだったのか？

何と言うべきだったか？

……………あの時、私は、

自身の死を、素直に受け入れるべきだったんじゃないか？」

「——そんなことは無いわ」

外見年齢相応に顔をくしゃくしゃにした少女が、振り返る。

「あなたがいたから、救われた人はいたはず。

あなたがいたから、助けられた命があつたはず。

絶望した記憶しか遺っていないなかった『記録』のなかでさえ、笑いあっていた記憶は、確かにあったのだから」

「でも私は、その全てを自分で壊した。」

「私が!! この手でっ!!!」

「……………はあ」

指輪として小さな手にあった、半分程濁っていた無色透明のソウルジエムをグリーンフィードで浄化してあげながら、

おそらく彼女がなんども聞いて、

そして、忘れてしまっただろう、その言葉を口にする。

「クト。」

——ありがとう。助けてくれて」

「……………なんで、そんなに優しいんだよ」

「あなたの気持ち、少し分かった気がしたから、かしら。」

私も、幾たびものやり直しの中で、だんだんとまどかとの心のすれ違いが広がっていった。言葉がずれていって、微笑んでくれることが減っていった。

だから、あなたが嫌われるために動いた時の、心の悲鳴は、想像出来る」

『——本当はこんなこと、したくない』

『——全てを話して、楽になりたい』

『——なんで、上手くないかないの。』

『私はあなたを、助けたいだけなのに』

マミと敵対し、さやかに嫌われ、まどかには信用されなくなってしまうた、そんなループに迷い込んでしまった、私の想い。

「……………」

「……………そういえば。」

私は、暁美ほむらよ」

「? ……なんのつもりだ?」

穢れを吸ったグリーンフィードをしまうと、右手を少女に差し出す。

「始めにあつた時、あなたがさっさと私の名前を言ったから、自己紹介し忘れてたことを思い出したのよ。」

——友達なのに、自己紹介無しなんて変でしよう?」

勇気を振り絞って、その2文字を言う。

……………まあ、自己紹介云々は最初の頃のループ時にまどかとかさやかから言われていたことだけだ。

少し顔が赤くなってる自覚があるから、少女の顔を見れずに目をそらせていて、反応が分からない。

ほむら、スベったかしら……………?」

「……………ふふ。

クククツククククク……………

——あっはっははははははは!!」

「……………?」

笑い声が、響く。

心の底から可笑しいと思っている、明るい声色の笑い声が。

「——それじゃあ、私はそろそろ部屋に戻るわ」

「ほいよー、私はコレ如何にかしてからにするわ。

……つたく、いろんな意味で後悔先に立たずだなこりや、どすつかない」

ひしやげ、乾いた血がこびりついた手すりにため息を吐くクトを置いて、窓ガラスをスライドし——

「ちよ、早くどいてよ！」

「無茶いな！ 上が重いんだよ！」

「煩いわよ！ これでも体重は減ってるんでsあうっ！」

「ぐべらっ!? ひ、ひしは舌は膈はんんだああ〜！」

「キュビヤアアア！ お、おお落ち——グフツ!!」

「……………はっ??」

下から、まどか、杏子、マミ、さやか、キュウベえが覗いていて、慌てて逃げようとして軽くカオスだった。

「……………あ、あなたたち、なんで、いつから、」

「な、なにも見てないよ?!」

ほむらがお礼言ったとことか、友達って言った瞬間に顔が赤くなってたとことか、ホント見てないから!!」

「さやかああああ?!?!」

パニックってまるっと全部喋ったさやかを、杏子がガンガン揺らす。

……………ふふ。つまり、私の恥ずかしい場面は全部見られたってことよね……………

?

「——そんなの、

皆サクツとやっちやうしかなないじゃない!!」

「オイマテほむら!! その『や』の部分の字は何だ?! 今スゲーやな予感がしたんだけど
?!?」

つか目のハイライト戻せえ!!」

「うふふ……」

どうしたのかしらまどか。 大丈夫よ?」

「どうしよう、ほむらちゃんの言ってること、本当だつて、思えない」

「ここで原作名台詞無駄打ちしちゃう?! 普通もつとシリアスな場面で使うセリフだよ
ね?! 今思いつきりギャグパートだよね?!」

「——るせエエエエ!! しかも色々とメタすぎるわアアアアアア!!!」

「「「「ぎゃーす!!」」」」

結局、下の部屋から床ドンされるまで、馬鹿騒ぎは続いた。

——その間、異形の少女から笑顔が絶えることは、無かった。

ルート：第2話

sideほむら

——空を覆う暗雲を睨む。

強く吹く風が、全体的にヒラヒラした魔法少女の衣装を靡かせる。

「……ついに、ここまで来たのね」

「感慨深そーだな。

……ま、そりゃそうか」

前には、前衛のさやかと杏子、クトが、

後ろに振り返れば、後衛のマミが、確かに、そこにいる。

今までではとても実現出来なかった、最高の状態。

不安要素すら限界まで減らした、最適な状況。

——いける。

今回こそ、ワルプルギスの夜を。

1人も欠けさせずに、倒す。

そして、この永い夜を、終わらせてみせる。

——雲が僅かに晴れると、頭に直接、舞台の幕が上がるイメージが叩き込まれる。

古風な紙に描かれた数字が、舞台の始まるまでの時間を、何処までも残酷に、正確に、刻む。

——バキボキと、手の骨を鳴らし、詠唱の長い魔術の下準備の呪文を小さく口ずさむ。

③

——両手槍が顕現し、柄の内側に潜んだ鎖が、僅かに擦れる音をたてる。

④

——盾を操作して、大量の榴弾砲をいつでも撃てるように並べる。

⑤

——刃を重ねた、特殊な剣を右手に携え、左手には只ひたすらに頑強にした軍刀を握る。

②

——周囲に大量のマスケット銃が浮かべ、更に未顕現の武装を魔力塊として展開する。

①

『——アハ、アハハハハハハ、アハハハハハハハハハハハハ』

上下逆さまに浮かぶ、伝説の魔女。

甲高い笑い声をあげながら、その暴風で巻き上げたビルや大型車両を撒き散らす。

——時間、停止っ!!

カチリと時間が止まり、片っ端から榴弾砲の引き金を引く。

神話生物との戦闘で誘導式の物は相当数消費してしまい、一々狙いをつけなければならぬ。
らない。

けれど、いつもより早いペースで榴弾が打ち上がっていく。

「……やっぱりあなたって、規格外よね」

呆れた目で、隣でトリガーハッピーしてる少女を見る。

「何を今更。」

……冗談ともかく、私もビックリだよ、ホント。クツケケケケ」

『私と同じような盾』を左手首につけたクトが、ため息半分に笑う。
それを聞きながら私は、つい先日の出来事を思い出すのだった。



——1週間前

「——能力の封印をしたい？ どういう事よ、クト」

対ワルプルギスの夜の作戦を練っている最中、思い出したように「あ、そーいえば」みたいなノリで言い出した内容は、『今ある能力を封じる』といったものだった。

「どうって、まんまそのままだけど？」

……今は問題ないが、私が私邪神である以上、何時狂気に吞まれるか分からないからな。

早いうちに片付けた方がいいだろう」

「あー……確かにそれはそうよね」

「でも、方法が分かんないんだよ。

こっちの魔術は一通り試したけどダメでな」

ヤレヤレと肩を竦める。

「……魔法で人間としての肉体を1から再構成するっていうのはどうだい？ 明確ない

メージがあれば出来るはずだよ」

と、キュウベえ。

「お、じゃちよっち試してみるか。

……むっ……むっ……」

ソウルジエムを手には、唸る。

「……イメージするのは、常に最高の私。

具体的には身長160くらい、BWHは90——」

「欲望タダ漏れじゃねーか?!」

スパーンツ！

ハリセンでツツコミが炸裂する。

……あと杏子？ 幾ら平常時はグリーンフシードの心配をする必要がなくなつたとはいえ、わざわざハリセンを魔力で編むことは無いでしょう。

「……あの調子じゃまず上手く行かなそうだね。 代案を考えるとするか」

「そういえば、なんで魔女になつた時に自我が保てたの？ あたしなんて記憶も無いんだけど」

それは私も気になるわね。

「イタタ……それが私にもよく分かんないんだよね。 想像としては、この肉体に私人間の魂が入つた時点で混ざつてた邪神私の魂の方だけが魔女化してたとか？」

「うっわ、私わたしでややこしい！」

ま、確かにちよつと違う気がするわね。

「んじや二重人格とか？」

「魂1つじゃん」

「じゃあそもそも魔女化してなかったとか！」

「その可能性も微レ存なのが怖いな」

「あれは間違い無く魔女の結界だったよ」

「そんなことよりおうどんたべたい」

「あ、私作れるよ」

「「MA☆JI☆DE!?!」」

あああ、話がマツハで脱線していくぅ……

あ、それとまどか、私の分も頼むわね。

「……ねえクト、封印系は一通り試したのよね？ その一通りっていうのは何処まで試したのかしら？」

「？ まあ旧支配者なら確実に抑えきるところか圧死するレベルまで試したけど」

「ブフオツ?!」

さらっと自殺試しました発言が出る。 だいぶマシになった(?) とはいえ、やっぱリクトとの会話は心臓に悪いわ……

「ふーん……」

——なら逆に、その封印を破れる邪神は？」

「そんなの聞いてどうするんだ?!

ええつと」

記憶を探りながらなのか、指を折りながらブツブツと幾つかの名前を上げる。

「ハスターメてセラエノ押し入ったり、クズ——……ゴm——……旧神2分の5殺しにして色々パチったモンも使ったから……」

私知ってる限りで、所謂ツートップは確定、人類絶対ぶつ殺すマン——はギリ無理か? ビツシユフニニクラス〇は潰したことがあるから無理、ニヤルでワンチャン、以上だな」

「……………ええ、旧神オーバーキルするクトウルフってなに?? それに外なる神も斃してるし」

【あんな過去の栄光に縋り付くことしか出来ない老害共なんぞに負けるかっ!! シュブは、うん。 ……色々タイミングが悪かった」

個人的に恨みでもあるのか、語気が荒くなる。 2分の5つて、どう考えてもやり過ぎでしょうに。

「……………うーん。

ね、美樹さん。 ちよつといい?」

「?… なんですか?」

何やら小声で相談するマミ。

さやかの色が僅かに青くなっただけど、何と言ったのかしら?

「やっぱり美樹さんもそう思うわよね。

……………ねえクト、試してみたい手があるんだけど」

「なんじやらほい??」

「それは、——」

——『アザトース』の封印式を試してみしてほしいのよ」

「ゴブフオバツツツ?!?!」

ぎ、気管にズトレードに”はいっ!!」

相当驚いたのか、啜っていたうどんの麺でむせた。

慌てて飲んだ水も変な所に入っ

たらしく、さらに七転八倒してるし。

少女悶絶中

「ゼフュー、ゼフュー、……」

で、アザトースの封印？ 専用のならあるけど、それがどうしたんだよ」

空間に浮かぶ赤黒い波紋から吐き出された、革張りの表紙の奇妙な本をパラパラめくりながらジト目で聞き返す。

「この前見た、貴女の魔女化した時の姿なんだけど……一時だけだったけど、その外見がクトウルフというよりも、アザトースに見えたのよ。」

それに、あくまで司祭のクトウルフが旧神を斃せるっていうのもおかしな話よ。ブライアン・ラムレイ系ならクトウルフは神話最強の邪神として扱われているし」

「またマイナーな設定を……」

まあ、なら力の本質は別にあるってことか。

——んじや、物は試しでやってみつか！」

指先の皮を噛み千切り、滲んだ血を頁に擦り付けると、半透明の黒い魔法陣が広がり、壁をすり抜ける。

「さて、さて。」

魔力は充分。SAN値、は無視。

ちと不安な点はあるけど、まあ、なんとかなるだろ。

………

——呟くように、細く息を吐く様に、呪文を唄う。

静かに染み渡るその音色には、なんの意味が込められていたのか。
どんな意図があつたのか。

——それを知るのは、ずっと、後のことだった。

精密に描かれた魔法陣が閃光を放ち始め、クトの立つ中心部に向けて集束して——
ダメだ、これ以上は眩しくて見ていられない！

「——もう目を開けていいぞ」
疲れた様子の子の声に従って目を開くと、輝きを失った魔法陣が本に吸い込まれていた。

その足元には、ヒビ割れた、充血したように赫い線が走るドス黒いソウルジェムのよ
うなものが。

「……上手くいったのかしら?」

「ママたちの予想が正しければな。こっち系統の呪文は手順が簡単なものが多いけ
ど、その分成功と失敗のラインが厳しいし、ミスった時の被害がエゲツないからな」

「うへえ」

流石に誰も手を出さず、クトがそのナニカを掴む。

「ふむむ………」

「………どう、かしら?」

回したり、ひっくり返したりして色々な角度から眺めていると、急に握り潰さんばか
りに力を込める。

次の瞬間、膨大な魔力が膨れ上がって――

「……あー、ビンゴだなこりゃ。

ここまで単純な話なら、もっと早く気付けよ私エ……………ウエエ……………」

私たちはまた、無限の武器の突き立つ地獄に立っていた。

…………orzしてる魔法少女姿のクトを、中心に。

——あれから、意気消沈して「リスカしてー」としか言わなくなったクトを
一度気絶させて叩き起こして
 強制的に再起動して、マミの部屋に戻った。

「それで結局、上手くいっただってことよね?！」

「みたいだな。 つつても100%完全に封印出来た訳じゃない。 回路やらがぐつちやになつて治癒に集中していた分を切除したって感じだな。

……あの弾丸の傷元通りに戻せるって、チート過ぎだろおい」

手の中で転がされている、黒いソウルジェムの形をしたナニカをチラリと横目で見る。

「つまり、もうあなたが狂うことはないのよね」

「自爆でこれ以上狂うことはないな」

「? 『これ以上は』?」

「……SAN値は寝れば回復するもんじゃないんだよ」

「」

だからいきなり死んだ魚の目になるのやめなさい。

「……で、聞きたいのはそんなことじゃないだろ、ほむら。読心よまなくても顔に出てるぞ」

「……………あなたの問題が解決したのは喜ばしいことだわ」

「そーだな。」

ちなみに今の私が呪いドス黒いソウルジェムのアイテム無しに魔法少女になっても戦力は低いぞ。

なんせクトウルフは物理特化だからな。ワルプルギス相手じゃ相性が悪い」

「……………何が言いたいのよ」

「……………」

ポリポリと頬を搔いて、困ったように小さくなった翼をはためかせて、頭を仰げ反らせて唸って、

「ハヨ言え。 3行」

「今の私は戦力外。」

故絞りカス使って能力の部分復活。

アイデア無いんで下さい」

「あ、ちゃんと3行で纏めるんだ。絶対4行いくと思ってたのに」

「」

銃口を向けて脅すと、危惧していた応えが返ってくる。

「能力を戻すって、じゃあ狂気はどうするのさ?!」

「だから部分復活なんだよ。経験則だけど、1割程度なら自力で抑えきれる。

それに、——」

言うかどうか一瞬逡巡して、

「——私の贖罪は、まだ終わってない。

戦うにも、世界を越えるにも、力の一端は必要だ。

……命1つ救えない、あやふやな『全能』最強なんかじゃない。

明確な『力』が」

「……………」

何処か痛々しい、真面目な顔でそう呟く。

その瞳の裏には、あの地獄が映ってる気がした。

「……なに、前みたいに自殺してそれで終いだとは考えないよ。

今度こそ私は、ハッピーエンドを掴むんだ」

「——分かったよ、クトちゃん。」

任せて！ さやかちゃん、マミさん！ 手伝って！

「おーし、頑張っちゃうぞー！」

ふんすと張り切ったまどかたちが、2人を引き連れて別の部屋に移る。

「…………あのメンツ、大丈夫だよな？ なんかすつげえ不安なんだけど？ やべえ早

まったか??」

「……………」

「?」

言いたいことは分かるわ。

中^{ママ}2^ミに夢^ま見る少女^まに悪^どノリ^かだものね。

……………うん。

「…………強く生きなさい。どんなオチでも、あなたはあなたよ」

「ヤメロオ、そんな目で私を見るなア!!」

「ああアあんまりだアアア!!」

大げさに嘆く幼女。

ま、散々梃子摺らされたんだから、これくらいは、ね？

「——おい、出来たぞー！」

……って、なにやってんの？」

2時間程で、まどかたちが帰ってきた。

なにやら書き込まれたノートを掲げて真っ先に部屋に入ったさやかが見たのは、

「……私、いつから虚^幸○ランサー^Eになったんだろ。 槍か？ クトウルフネタか？」

「チーン

「ちようど良かったわ、助けてちようだい。 どうすればいいのかわからないのよ?!」

トランプでボロ負けして灰になった杏子と、虚ろな目でメタ発言をするクト。

そして、私の傍に山と積み上げられたお菓子と物体X。 なんとかの猟犬用の犬笛とか、意味不明なモノを賭けられても困るんだけど！

「うわ、なにこの山？」

で、なにがあつたのさ?!

「……最初は杏子が暇潰しにトランプを出したのが始まりだったのよ」

「ほむほむ。 それでそれで？」

「……負け込んだ杏子が、『なんか賭けようぜ！ そっちの方がやる気出る』って

……」

「あつ（察し）。

オチは察したけど、それでどうなったの？」

「……1人勝ち、しまくっちゃったのよ」

「ワーオ。」

……取り敢えず、貰つといたら？

安全だけ確認して」

「分かったわ」

その後、クトから貰ったモノの山の約8割は本人に返却（強制）されたわ。「ティンダロスの手綱とか干将・莫耶とか洞爺湖とか、何考えてるのよ?!」とマミに叱られてたわね。

本人は涎垂れてたけど。

なお、「正しく使えば害無いどころか便利なのに」とはクト談。

「——で、どんな具合になったのよ？」

お説教から解放されたクトが突っ伏しているのを放置して、ノートの中身を覗き込

………なに、これ？

「ま、まどか、これ、は？」

「クトちゃんの魔法少女設定集！」

「どれどれ……………」

……………メアリー・スー全開だなオイ」

そこに書かれていたのは、どっからそんなネタが滲み出たのかと問い詰めたくなるよ
黒歴史化待った無しの内容。
うな設定集

「ていうか、なんで笑い方まで指定してるんだよ?! 『クツケケ』とかただの怪しい奴
じゃねえか!」

「え? かわいいじゃん」

「」

「……………本当に、あの『力』といい笑い方といい、よく受け入れたわね」

「まあ本人の笑い方が『ウエヒヒヒ』だからねえ。それにこれくらいじゃないと詰みかねない…………つと、こんなもんか？」

ワルプルギスの夜を発射された榴弾が囲う。

——停止、解除！

世界が色を取り戻すと、幾重にも重なった爆発がその巨体を吹き飛ばす。

「さやか！ 杏子！」

「おっけーお任せえっ!!」

「わーってる!!」

青と赤の魔法少女が距離を詰める。

反撃としてビル郡が落下してくる、が、

「させると思うか？」

クラスチエンジ
切り替え、バーサーカー!!」

黒と紫を基調としたものから、黒と一色の衣装に切り替わり、その小振りな骨翼が風を含む。

「——CREATE^ナク BARRIER^{II}テイ OF^ト NACH^の障TITH^壁!!」

呪文が唱えられると、巨大な半透明な壁が空を覆う。

落下するビルは勿論、ワルプルギスの暴風を壁が遮る事で宙に浮きっぱなしだったあらゆる人工物が墮とされる。

——さて。

「決着を、つけましょうか」

杏子から念話での合図と同時に、使い魔用程度にまで威力を抑えて設置したC4爆弾のスイッチを、押した。

ルート：第3話

sideほむら

——爆発でダウンしたワルプルギスに向けてガソリントankを突っ込ませて追撃する。

爆風が地面を抉り、その巨体が半分程埋まる。

『アハ、アハハハハハハハ！』

「っ！ マミ、今よ！」

「ええ！」

その埋まりかけのワルプルギスを、四方八方から伸びるリボンが絡んで抑える。

——ワルプルギスの夜は、撃墜しない限り常に浮き続ける。

私やマミの様な遠距離攻撃手段を持たないと、飛べる等一部の例外を除けば、攻撃すらままならない。

なら、ガリバーよろしく地面に縫い付けられればいい。そうすれば、大質量の押しつぶ

しは使えなくなるうえに、侵行を食い止める事だつて出来る。
リボンの拘束を破る可能性は、

「!? ちょ、早すぎよ!!」

「ハイハイ、ロードローラーだツツ!!」

早速突破仕掛けたワルプルギスを、ロードローラーを投げ付けて押し潰して抑え、更に衣装を黒一色から赤が混じったものに変化させ、槍の雨を降らせて縫いつける。

「よし、今だ!!」

「たああああああ!!」

「クケツッ! ラジヤラジヤつとオ!!」

動きが鈍り、無駄に巨大なと化した魔女に向けて、十字槍が、軍刀が突き刺さる。
更に無限の魔弾が降り注ぎ、巨体を構成する歯車が軋み、欠け、破損し、しまいには轟音を立てて碎け散る。

よし! これなら、勝てる!!

——だがそこは最強の魔女。そうは問屋がおろさない。
ワルプルギスの夜から嘖き出した触手が使い魔に変化する。
オマケに風が一気に強くなる。

……この、感じは。

——この、風は!!

「——ワルプルギスが本気を出し始めたわ！ 注意してっ!!」

何度も感じた、

ひっくり返った状態のワルプルギスの夜が、上下正しくなる反転した、第二形態！

いとも簡単に拘束を引きちぎり、超低空飛行のまま魔弾を降らせ始める。
くっ、やっぱり厳しい——

『アハハハハ——』

「——じゃあかあしいわ西洋版百鬼夜行お!!!」

風を斬る轟音と、爆音が発生すると共に、魔弾が迎撃される。

慌てて振り向けば、切先から煙を吐くランスを半分に折り、弾を籠める少女が。

キツと浮かぶ巨体を睨むと、怒声で指示を出し始める。

「さやか、杏子！ 奴が浮かべる瓦礫に飛び乗れ！ 足場になるし圧死も防げる！

「マミ！ 足を止めるな！ 弾は貫通重視！ テイロフィナは合図を待て！

ほむら！ 雑魚をやるぞ!!」

衣装に黄色を混ぜたクトが、マスケット銃を手に使い魔の群に突撃する。

「——っ！ ま、待ちなさい！」

慌ててサブマシンガンを片手に突っ込むと、ストックで使い魔を撲殺する姿が目映る。

「オラオラオラオラオラア!! どしたあ、私の影の方が断然根性あったぞ!!」

「ちよつとクト! 『計画』はどうしたのよ?!」

「問題なしッ! いまざつと、80、パーセントオツツ!!」

フルスイングで使い魔の首を吹っ飛ばす少女の背後にいた使い魔を撃ち抜く。

「さて、さて!

ド派手に行きますかあ!!」

s i d e
キユウベえ

——祈るように見つめるまどかの肩に乗ったまま、彼らの様子を伺う。

黒い塊と化している使い魔の大群を内側から減らす舞を。

瓦礫から瓦礫へと跳ぶすれ違いざまに、台風の目であるワルプルギスを斬りつける煌めきを。

降り注ぐ魔弾を的確に処理し、魔女の歯車を削る閃光を。

「……キユウベえ。

みんな、大丈夫だよね？ ちゃんと、帰ってくるよね？」

「……ああ。多分、

——いや、絶対大丈夫だ」

が、現実には、何処までも残酷だった。

——最初に綻びが生じたのは、意外にも杏子だった。

そもそもの話、超大型魔女であるワルプルギスの夜に対して人の扱う武器は、小さ過ぎる。

そして、二刀流での防御を主軸に立ち回るさやかと違い、只でさえ不安定な足場のなか、杏子は武器を巨大化させてダメージを与えることに集中していた。

それらの要因が不幸にも合わさり、足元を掬われた杏子が、強風に揉みくちやにされながら落下していく。

「?!?!?」
杏子ちゃん!!」

くっ、急いで念話を——

sideほむら

「クトー！」

「了解！ 伏せろ！！」

キュウベえからの念話を聞いてそれをクトに伝えたと、言われた通り急いで身を伏せる。

音でそのことを確かめたのか、ランスのマガジン部を掴んで引き金を、って、
「クツケケケケケケ！！ フルバースト！！」^{暴発砲}

わざと榴弾を暴発させることで、ランスの隙間から圧縮された爆風が周囲の使い魔を吹き飛ばし、さらに砲門が向いていた方角の敵は、文字通り消し飛んでいた。

——そう、丁度杏子が落ちてくる方角が。

「ほむら！ ゴー!!」

「分かったわ!!」

——時間、停止！

杏子の元には——

「……ちよつと高くないかしら？」

落下している途中で時間を止めたから、とても手が届かない。

さて、どうしようかしら。 また爆風を利用して飛ぶ？

………いえ、もつといい方法があるわね。

灰色の世界で、動きが完全に止まっている少女に触れる。

「——とお？ どったよほむら？」

「杏子のところまで打ち上げてほしいのよ」

「私はロケットエンジンか何かか?!」

文句を言いながらも、黒一色の衣装に変わったクトが突撃槍を地面と水平に構え、その刀身に乗る。

「——せえ——のお——!!」

おるうああああ!!!」

そのままフルスイング。

正確なコントロールで文字通り打ち出された私は、空中で止まっている杏子をキヤツチ、ビルの壁に着地すると、フックショットを外壁に撃ち込む。

「?! ほ、ほむら?!」

「注意なさい。いくら魔法少女でもあの高さで頭から落ちたら面倒よ」

具体的には、

頭部破損↓ソウルジエム使用不可↓運が悪ければその隙にソウルジエム破壊

で死にかねないわ。

それより、さやかかの援護に行かないと！

停止、解除！

『アハ、ハハハハハハ！ アツハハハハハハハハ！』

頭を上にしたワルプルギスが、高笑いを響かせながら、魔力弾を放出する。
つ、迎撃を――

――ブワツ!!!

「?! な、何が?!」

急に吹いた突風が魔力弾を押し流し、何にも当たらず地面に堕ちる。

弾かれるように骨翼の少女の方を見れば、その装いが完全に変わっていた。

黒一色のワンピースはフリルが散りばめられたドレスになり、所々青色のラインが入って、

スカートの部分は、前面に白い布が当てられ、大小様々な大きさの歯車の刺繍が施され、

そう、まさにその格好は、

「——チャージ完了!!」

さあ、夜明けの時間だ!!!」

——『ワルプルギスの夜』



——まどかが広げたページに書かれた『設定』。

その内容は、使いこなせば正しく『全能』とも言えるようなチートじみたものだった。

「……『理解・記憶した現象を、再現する能力』？

どゆ意味？」

「んつとね。何かいい案が無いかって考えている時に、あなたの結界での攻撃パターンを思い出したのよ」

「……私が留めておいてしまった死者の魂をベースに、使い魔を召喚した事を言っているのか？」

「……………ええ」

真面目なトーンになったクトの返答に気不味くなったらしいマミの言葉を、まどかが引き継ぐ。

「クトちゃんは、償いの為に、また色んな場所に行っちゃうんだよね？」

だから、こうしたの！

「……………『だから』？」

「赦せば、赦すほど——

『その人たちが力を貸してくれる』。これは、そんな力」

「……………」

「クトちゃんに残る力だと、クトちゃんの周りの狭い場所にしか干渉出来ないみたいだから、こんな風にしたんだけど……どうかな？」

可愛らしく首を傾げるまどかに対して、俯くクト。

表情が読めないわね。当然、どう思っているのか分からない。

「……………ク、ケけ、け……………」

……………?

唇の端から、僅かに笑い声のようなものが聞こえた気がしたような？

「……………ク、けけ……………」

「こ、こんなんで、いいかな……………」

「……………」

それは、肯定の言葉。

後ろを向いて悔やむことばかりしていた少女が、しっかりと前を向いて踏み出した、一歩目の足音だった。



——無風の中、ワルプルギスの夜を『再現』した少女が、浮かび上がる。

「——さあ。古くさい悲劇は閉幕だ。

これより上映するのは、ハッピーエンドの物語。抱腹絶倒、大団円で終わる喜劇！
幕を上げろ！ スポットライトではなく、プロジェクションマッピングの電源をつけろ！

そう、私が——

——この私こそが、喜劇の舞台装置なのだから!!!」

その言葉を合図に、追い風が吹く。

使い魔は全てカラフルな紙吹雪となり、

浮かぶ建造物は、面白おかしいマスコットに変えられ、重さを感じない動きで緩やかに着地する。

『アハ?! アハハハハハハハハハハハ!?!』

「残念ながら、バッドエンドを押し売りするアンタはクビ!

今この場を盛り上げる舞台は私!

——つーわけだ! 決めちまえ!!」

「ほむらちゃん!」

?!?!?!
ま、まどか?!!

デフォルメされたユニコーンの背に乗って連れてこられたのは、私が守ると誓った少女。

「なんのつもりよ?!」

「この舞台の『主人公』ヒーローヒロインは、私みたいなポツと出のバグオリ主じゃねえ!

だから、派手に決めてこい!!

私に、最高の喜劇を見せてくれ!」

抵抗するワルプルギスが魔力弾を放つても、即座に打ち上げ花火で迎撃し、1発たりとも地表に到達させない。

それどころか、色取り取りのナイフや歯車、フラフープがワルプルギスを滅多打ちにしている。

「——ほむらちゃん」

「……………まどか」

魔法少女ではない、私の大切な、友達が、歩み寄ってくる。

私の手にあつたのは、何の偶然か、

嘗て、まどかと一緒にワルプルギスを斃し、

——そして、まどかのソウルジェムを撃った銃。

まどかが、私の右手に手を重ねる。

「……………」

——2人でリボルバーを握り、トリガーに指をかける。

周りではマミが、杏子が、さやかが、

魔砲を、槍を、剣を構え、その全てがワルプルギスに向けられている。

「なにイイトコ2人占めしようとしてんのさー。あたしも混ぜてよね!」

「いいわね、こういうの。実は憧れてたのよ!」

「……………ま、偶にはいいだろ」

……………みんなで一緒に、か。

——人差し指に、力を加える。

音を置いていく速度で鉛弾が発射されると、砲弾が、劍群が、槍が、魔女に殺到する。その巨体に比べれば、あまりにもちっぽけで、

それでいて、闇夜に浮かぶ星のように、輝く一閃が、

——ワルプルギスの夜を、貫いた。

『——アハ、アハハ？ アツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ——』
ボロボロと歯車が零れ落ち、その巨体が小さくなっていく。
見上げるような巨体から、車両程度に、
トラック程度から、人間大に、

人形サイズに縮み、

グリーンフシードだけを痕跡に残し、

伝説の魔女は、この世界から、消えた。

「……………」

他のみんなが歓声をあげて沸き立つなか、私は、今はもう晴れた、魔女のいた空を見上げる。

「——よ。 どうした？」

「……………斃した、のよね。」

まどかを、護れたのよね」

「……………ああ。 そういうことか」

クトが私の手を持って、私の向いている方向を変えると、4人の少女が代わりに視界に入る。

「ほむらの願いは、たった今、今度こそ、完全に、叶えられた。」

——お疲れ。よく頑張ったな」

「あ——」

視界が涙で歪む。

もう何がなにやら分からなくなりながらも、

それでも、ずっと護りたかったものの温もりからだけは、手を離さなかった。

『とある少女の救済神話』

——ワルプルギスの夜を斃してから、一ヶ月。

ほむらが願いの内容を語ったり、重曹浄化の事実を広めるのにようつべに垢作ったら
ママがバーチャル面に吞まれたり、今更現れた他の地区の魔法少女との一件もあつたり
と、濃密な時間を過ごせた。

——でも、それも、今日まで。

「……………」

私以外、誰もいない、マンションの屋上。

縁に腰を下ろして足を投げ出してプラプラ揺らしながら、眼下に広がる夜の街並みを眺める。

——しばらくすると、小さな足音が聞こえてくる。

その足音の主は、私の真後ろまで歩いてくると、その場で止まる。

「……………クト」

「……………思ったより早かったな、キュウベえ」

立ち上がり、縫い付けてもらったポケットに手を突っ込みながら振り返る。

「……………」

「……………」

互いに見つめあつたまま、動かない。言葉すら発しない。

——少し強めに吹いた風が私の髪を揺らす。

流れるままに放つておいたのが収まる頃になつて、ようやく、キュウベえが口を開く。

「——考え直してくれないか。」

こんな時間、こんな場所に、ボク一人だけを呼び出したつてことは、そういうことな
んだらう?」

「ま、な」

首元から、翡翠の鎖で繋がった2つのソウルジエムを取り出す。

白いののは、『人間』としての私の魂。
黒いのは、『邪神』としての私の魂。

「……………それでも、私は行かなくちやいけない。あいつらの死を無意味なものにしたくないし、大切な妹に、私の夢を預けっぱなしだ」

脳裏に浮かぶのは、畏に気が付かずイキっていたバカな私でさえ姉と慕ってくれた、金髪の少女。

「……………クト、」

「……………んなシケた顔すんなよ。合わないっての。」

——それよりキュウベえ。 契約を果たしてもらおうよ」

今までずっと先送りにしてきた、願いを叶える権利を行使する。

「……………クト。 ボクにもうそんな力はない。 インキュベーターが地球から撤収した時点で、奇跡はなくなっているんだよ」

「知ってる。私を一体、何だと思っているんだ？ クツケケケ」
大分慣れてきた、というか諦めがついてきた笑い声が口の端から漏れる。

「じゃあ、こんなボクにどんな奇跡を願うのさ」

「なに、んな大層な願いじゃないさ。」

ただ、——」

僅かに黒が混じる白いソウルジエムはそのままに、黒いソウルジエムを鎖から引き千切り、魔術で創り出した殻に包むと、

——それを、キュウベえに放る。

「——あいつらが。」

『まどかたちが、幸せに生きられますように』。

それが、私の望む願い」

慌ててソウルジエムをキャッチするのを、見届ける。

「ハ、これは、」

「私の、邪神としてのソウルジエムだ。

……預かっていてほしい」

「預かってほしいって、キミ自身の魂だよ?!」

「だからこそ、だ」

狼狽するキュウベエをそのままに、ガンランスを留め金から外し、魔力をまわす。

「ソウルジエムがこの世界にある限り、私は死ねない。言うなれば命アの絞ンりカデストトだ。

……だから、いつか、必ず。

私の魂を受け取りに戻ってくる。約束だ。

私が、私を許した時に。必ず!」

く。
矛先を掲げると、膨大なエネルギーがその僅かな一点に集中、収束し、空間に穴が開く。

「クト!!」

「……………さよならだ」

骨翼を意識することで、随分と軽くなつた身体が浮かばせ、そのまま『穴』に向けて進む。

……出来ることなら、最後に、
あいつらに、会いたかつたな。

でも、それは出来ない。
会つてしまえば、この決心が鈍つて立ち上がれなくなる。

……だから、私は、
——
っ!?

り、後ろから、何かを投げつけられたのを察知。頭部の真横を通ったところで掴み取

——それが何なのかを把握した瞬間、頭が真っ白になる。
これ、は、——

「——あなたの覚悟は分かってる。止めたりはしないわ。

……約束、守りなさいよ。破ったら、それで撃つわよ」

——ベレッタM92FS。それも、かなり改造されているもの。

「……………ほむら!!!」

意識が復帰してすぐに振り返っても、そこには、誰も、いなかった。

ただ、屋上へと続く唯一の扉がある床には、確かに、水滴が垂れた跡があった。

「……………ああ、約束しよう。

私は、必ず!!

この世界に、帰って来る
!!!!!!」

そして、私は、

世界の裂け目へと、飛び込んだ。

——あれから、どれだけの世界を渡り歩いたんだろうか。

ある時は、魔法使い同士の戦争が確約された世界に、学校の生徒として入り。

ある時は、不老不死を求める老人を発端に生み出された兵器を回収してまわったり。

ある時は、シナリオ運命に叛逆する魔物を保護したり。

ある時は、遠い宇宙で、力の一方に属し、クソジジイに色々仕込まれ（意味浅）たり。

ある時は、3重の壁に囲まれた世界で、正義とは何かを考えさせられたり。

ある時は、人類同士と、その立ち位置にいたかもしれない生命体との三つ巴の戦争にちよつかいを出したり。

そして、

そして、
——

——墓が4つまで減った時。

気がついたら私は、始まりの世界の土を踏んでいた。

誰の模倣か、発動した遠見の術式で4組の主人公たちヒーローとヒロインを眺める。

——紅白の巫女にしばかれている、青髪の少年。

——金髪の魔法使いに振り回されている、自称根暗な武偵。

——早速吸血鬼姉妹の鬱を斬り捨てた、黒衣の剣士。

——今日も今日とて不幸を嘆く、特異な右手をもつ少年と、半生半死の少女。

……………やがて紅い霧が発生し、それを察知したメンバーが動き出したのを見て、私の原始の夢が動き出したのを感じ取る。

「始まった、か」

ふとそんな事をポツリと呟けば、何かを邪推したらしい妹がたじろいだ。

「ん？ どった？」

「……………顔に出たかしら？」

「読心術。その程度の思考なら大声で喋っているかのようによく分かるよ」

「……………貴女ならやりかねないわね」

「嘘です。読心などしたこともないしやり方も知らん」

「これは両方嘘だな。　　というか、自分の精神状態に関係なく冗談が出るって……………ま

あ便利っっちゃ便利だからいいか。

「……何の役に立つかわからない能力を集めるのが趣味だったと記憶しているけど？」

「それを言っっちゃあお終いだよ。感情が読み取れるのは事実だけどね」

「知ってるわよ。貴女と何年付き合っただと思ってる？」

「それもそうか」

一旦会話が途切れる。

が、この理想郷の創始者として、まだ言いたいことがあるみたいだな。

「……ところで、幻想郷の結界の異常は？」

おや、そつちが来たか。

「私がやった——いや、やっていることだけど？」

「……」

あれま、黙りこんじゃったよ。

てか黙った時に扇子で口元隠す癖如何にかしたら？ だから胡散臭いとか『永遠の1

7歳（笑）』とか言われるんだよ。

………私が言えた事じゃないけどさ。

「なに、適当なタイミングで戻しておくよ」

割と武力に全振りしちやってる私と違って、頭のいい妹が何やら考え始めたのを察して、適当なタイミングで異変が戻るよう、式に加えておく。

——さて、さあて。

それじゃあ、紡いでいくとしようか。

「さあ、4人の英雄達？この私をどうやって止める？」

救済への祈りの神話の終局を。
そして、

—— 私^英による、英雄^雄の為^伝の舞台を ——

|
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
: